

---

# 春夢槿花

貴水 玲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

春夢槿花

### 【Nコード】

N3172A

### 【作者名】

貴水 玲

### 【あらすじ】

家族を失い、敵である統の皇帝・劉閃長恭のもとに仕える瑚蝶。劉王を憎む一方で揺れ動いていく心。春風に舞う花びらのようにすれ違う思いが、やがて辿り着く場所は……？中華風架空王朝ロマンス。1/25更新！

## 序話

鳶が虚空を越える。

草の色もあせはじめた廟みやの国、晩秋の草海原。

空は黒煙が立ちこめるかのごとくいつこつに晴れる様子を見せず、草原に濃い影を落とす。

蝴蝶こちょうは、翡翠色の草原を踏みしめながら、肌色の城壁のそびえる宮殿へ向かっていた。

そこには彼女の家族がいる。

優しい父、母、兄弟たち。そして親族たち。廟王族の住む城だ。

三か月振りの再会に、蝴蝶の胸は躍っていた。馴染み親しむこの草の匂いを吸い込みたくて、侍女が止めるのも聞かず、わざわざ途中で先に馬車を降ろしてもらったのだ。はやる気持ちを抑え、蝴蝶は天の楼閣のごとき門をくぐり抜けた。

「門人さん？」

いつもそこに立っているはずの門番を大声で呼ぶ。

しかし、城門を過ぎても門番どころか女官たちも姿を見せない。

いぶかしみながら蝴蝶は城内へ入った。

内装も雰囲気もいつものまま。石膏石の柱、大理石の床。足音だけが不審に響く。

ふとかすかに足音らしきものが聞こえ、蝴蝶が安心しかけたその時、信じられない光景が蝴蝶の目に飛び込んだ。

扉の隙間から回廊に倒れ込んできたのは、血塗れの門番だった。

「ひっ……！！！」

叫ぼうとしたその時、幾多もの足音が聞こえてきた。重い足音。恐怖で揺らぐ視界の中に、甲冑姿の男達が映った。そして間もなく、数十の鈍い青銅の甲鎧が瑚蝶を取り囲み、矛先が向けられた。

ああ……。

足がすくんで声すら出ない。目にはじむ涙の意味を噛みしめながら、覚悟を決め、きつく瞼を閉じた時だった。

「やめろ」

若い、凜とした声が響いた。

「廟王家の姫君か」

兵を分けて現れた青年が、毅然とした声音で瑚蝶を凝視する。黒い戦装束に、漆黒の髪を結う朱色の綾紐がまぶしい。瑚蝶はゆつくりと、その青年を見上げた。そして、

「……てください」

震えながら、瑚蝶はか細いながらも声を絞り出した。

「ころ……して……ください」

この状況が何を意味するのか、瑚蝶は悟った。自分の国、わずかな間自分を包み込んでくれた国はもうないのだ。

家族は……いなくなったのだ。

だが、青年は兵を制したまま、そっと瑚蝶の方へ手を伸ばすと、

その髪をやにわに一房取った。

「……おとなしく言うことを聞けば、命は助けてやるが？」

耳元でそう囁かれて、瑚蝶の体中が熱くなった。そして、青年の手を容赦なく弾き返した。

再び瑚蝶に鋭利な矛先が向く。

「フフン」

手持ち無沙汰になったその手を見て、青年は鼻で嗤った。そして、瑚蝶に向けられた刃を制したまま、青年は瑚蝶を見下ろし口角を上げた。

「……気に入った」

そんな呟きを聞いたかと思うと、瑚蝶の体は軽々と青年に抱きかえられた。

「城に戻る！報を知らせに行く者は先に走って伝える。みやげを持って帰るとな！」

瑚蝶を抱えたまま、兵の間を従容とした足取りで進みながら、高らかに言い放った。

「お……おろして！ いやあ つー！」

必死で抵抗するが、とても相手の腕力にはかなわない。

「威勢がいいな。少しの辛抱だ、眠っておれ」

「あつ…」

穏やかな言葉とともにみぞおちに激痛が走り、やがて体の自由が  
きかなくなつた。

晩秋の頃二十日、廟、統とによつて攻め滅ぼされる。  
国の柱を失い国の民は南下、統の支配下となつた。

そのうち末姫は、統の皇太子（後の皇帝）劉閃長恭りゅうせんちやうきやうせいの傍らで、生  
涯仕えることになる。

## 【巻】 春 来

春風礼賛。

山からのおろしに、国中に咲き乱れた金陵花の花が、まるで天に導かれるように舞い上がる。

「瑚蝶！」

今日も自分を呼ぶ、高慢な声。

悠然と歩む足音が近づいて来るのを見計らって、瑚蝶は居室を出た。

「どういたしました？ 劉王」

背までの垂髪に金色のかんざし。朱を基調とした唐衣をまとった美女は優美に微笑んだ。

「朝からどこに隠れていた？ 俺に探させるとはいい度胸だな、瑚蝶」

そこに立っていたのは、漆黒の髪を朱の紐でまとめ上げ、青の長衣を羽織った統の皇帝劉閃王。気の弱い者ならば、目が合っただけで尻込みしてしまうほどの威圧感が漂う。

ひた、と見据える瞳は、奥の奥まで澄んだ輝きをたたえている。秀麗な筈の顔立ちは、いつもの通りの仏頂面だ。

「申し訳ございません。少しばかり池の方へ…。まさかご心配なさつてくれたのですか？ 劉王」

皮肉を交えながら、瑚蝶は艶麗な微笑みを見せた。

「逃げられては困るからな。いい加減、その仮面を取ったらどうだ」  
ふん、と鼻を鳴らし、劉王は棧へ寄りかかった。  
相手に冗談など無駄だ。それよりか、さらに皮肉が返ってくる。  
少し離れたところで、女官らが二人を見守っている。

そう三年前、ここへ瑚蝶が連れてこられた時から、二人は異常なまでの噛み合わなさを見せていた。

「お前もおなごなら、もう少し黙ってはられないのか」

何度そんなことを言われたか……。

遠巻きに息をひそめて見つめる女官らに、劉王が一瞥を送った。  
それに気付いて、彼女らは慌てて四方に散っていく。

「高みの見物…か」

「物好きが多いのですよ。貴方様のような峻厳な方ともなれば、弱点を見つけるのがいわば余興となっているではありませんか？」

「相変わらず口の減らぬ女だな」

軽く鼻で嗤って、劉王は棧から離れた。

「琴でもお弾きいたしましょうか」

「いや……」

瑚蝶に背を向けかけ、劉王は再度振り返った。

「野駆けに行く、つきあえ」

「は？」

問い返すと、もう一度言つのが疎ましくなったか、突然腕を伸ばしてきたかと思うと、いつ

ぞやのように劉王はひょいと瑚蝶を抱き上げた。

「き、きやあ！ りゅ……劉王！ ご冗談にも程があります！」  
そう訴えるが、相手は高らかと笑うだけだ。

「お前の慌てふためく姿も何年ぶりか。大人しくそうしておれ」

「劉王っ」

すたすたと、人一人抱き上げているとも思えぬ速さで、劉王は中門へと向かっていく。

粗暴さとたくましさを合わせ持つ王だ、女の蝴蝶一人抱えることなど朝飯前であろうが、蝴蝶にとっては何とも耐え難い。

あの時もそうだ。

三年前の、国を失くした晩秋の節。

目を覚ませば、そこに自分をさらった劉王がいた。状況を把握出来ずうつろたえる十六の娘に、王はこう言った。

『今日から俺が主人だ。心して仕えよ』

あの傲然とたたずんでいた姿。一年後には皇帝の座に就き、統は先代に劣らぬ発展を見せている。

時には峻厳にして沈着冷静。荒削りな部分を除けば、恥じることのない質実剛健な王。その王によって、突然の襲来の果て、家族を殺された。そして仇が主として君臨するこの梓宮しきゆうが蝴蝶の檻になった。

“隙を作った方が悪い”

もしなぜ、と問うならば、そう答えが返ってくるに違いない。今も昔も瑚蝶にとって決して心を許す相手ではないのだ。

「王！ どこへ行くこうとこののですかっ」

ぼかんとしてこちらを見ている女官や文官らの視線を気にしているのは瑚蝶だけであろう。

いつの間にか中門に到着し、そしてその側に、劉王の馬が繋がれて主人を待っていた。

「劉王！ お戯れもほどほどに……」

そう最後の試みで叫んだ瑚蝶を、劉王はひょいと馬の背に乗せた。そして自分も愛馬にまたがる。

「ただの野駆けだ。白高バイカオの南まで走るか」

劉王が馬の腹を蹴った。一声いなないて、馬は門を勢いよく抜けていく。

風を切るように黒馬は緑の敷かれた大地を疾駆する。

い、息が……。

劉王の性格そのままの走りに、瑚蝶は思わず劉王の胸にしがみついた。

吹きつける風は、地に立っている時より倍に冷たく瑚蝶に当たる。瑚蝶の長い髪も、風に従って後ろに流れていく。

「りゅ……劉王……！」

言葉もうまく繋がらない。今は顔を埋めているからわからないが、劉王はどうだろう。きっと涼しい顔をしているに違いないが……。

「どうだ！ 気持ちよかつ」

案の定、からかうような声で劉王は尋ねてくる。何も言えないのも口惜しいと、瑚蝶はありったけの声で返した。

「こちらには……息もままならないですわ……！」

「はははは！ お前の口も多少大人しくなるな！」

どこか嘲るような口振り、いたわりもない。さらに早くと、劉王は鞭を振るう。

気が遠くなりそうだ。

悔しいが、今は劉王の胸しか頼れるものはない。しかし皇帝が政務を放り野駆けに行くなど聞いたことがない。後で劉王お付きの誅易將軍あたりに小言を言われるだろうと、瑚蝶は思った。

統の都白高を遠目に南へ。延々と続く草原を駆けていく。  
やがて都も草原の彼方へ消えた。

どのくらい走ったであろうか。

いつの間にか、冷え切った瑚蝶の肩を劉王が抱いていた。

「 顔を上げる、瑚蝶」

劉王の声がやけに耳に届くと思って顔を上げた途端、思わず声が漏れた。

【貳】 金陵花

「金……稜花……」

一面、黄色い花が地面を埋め尽くし、そして花びらは後を絶たず空に舞い上がる。

「春だ。この花が咲くと、風が変わる」

穏やかな声で、舞い上がる金陵花を見つめる瑚蝶に劉王は言った。

「こんなに……」

「ああ、毎年ここだけは満開になる」

その美しさを、瑚蝶は食い入るように見つめ続けた。

劉王が馬を降り、そして瑚蝶を馬から降ろす。

「そんなに驚く光景か？」

ほとんど身動きせず一面の花畑に見惚れている瑚蝶に、劉王が苦笑まじりに問いかける。

「……お外に出して頂くことなんて、滅多にありませんもの」

「フフン、脱走でもすれば止めはしなかったぞ」

劉王が金陵花の中を歩き出す。瑚蝶もそれに続く。

少し小高くなった丘陵地で、劉王は足を止まらせた。

「見えるか、瑚蝶」

瑚蝶が劉王の隣りへ立つと、形の良い指が、ずいぶんと遠く離れた白高の都を指した。

「父の都だ」

その言葉に、瑚蝶は首を傾げた。

「今は貴方様のものでしよう、劉王」

「譲られただけだ。自分で陥落させなければ都も国もおもしろくない」

“私の国もですか”

出かかった言葉を、瑚蝶は喉の奥へと押しやった。

国のことを話す時の劉王は、みずみずしい生気が感じられる。思わず破顔したくなるほど、少年のような片鱗を示すときがある。

なぜか言えない。

いつもなら、知らぬ間に口で叩いているものを、なぜ考慮してしまうのか。

「……では、また新しくお創りになればいいことでしょうか」

「それで不祝儀を増やすのか？」

劉王は丘を下り始めた。

そして見晴らしのいいところを陣取ると、その場に寝転がる。

「仕方のないことでございます。あなた様が世迷いことを言う必要はないはずですよ」

「世迷いごと……か」

口元に笑みを浮かべて、頭の後ろで両手を組んだ劉王の隣りへ、瑚蝶は腰を下ろした。

「すべて劉王、貴方のもんです。この国も……金陵花も」

劉王の返答はない。

風に瑚蝶の冠の飾りが揺れた。

すると、思い起こしたように、劉王が起きあがった。

そして、蝴蝶に背を向けて座り直した。

「劉王？」

蝴蝶は肩越しに、劉王を覗き込んだ。

「花冠を作つてやる」

「は……」

劉王の手が金陵花を優しく摘み取る。そしてそれを、どこで覚え  
たか、器用に編み込んでいく。

「こつみえても器用なんだ」

啞然とする蝴蝶を尻目に、劉王の手は止まることなく次々と花を  
編み込んでいく。金陵花は次第に花冠の形を整えていく。

「どこで覚えたのですか？ 皇帝ともあるうお方が……」

驚き呆れる蝴蝶に、劉王は小さく笑った。

「お前の知らぬ昔のことさ」

劉王がこちらを振り返る。

そして手の中の花冠をそつと蝴蝶の髪へ載せた。

はらり、と二三枚の花びらが髪を滑り落ちた。

それが劉王の顔をかすめて、髪に結ばれる朱の紐にそつて後ろに  
飛んでいく。

そんな劉王か、花びらの美しさに見とれていた蝴蝶だったが、馬  
のいなく声にふと視線を移した。

振り返れば、一面の黄花の中に灰色の馬が一頭。その背には、青  
年らしき人物が乗っている。

それを見て、すぐさま劉王が立ち上がった。

「黎青！」

凜とした劉王の声が、相手の名を呼ぶ。その声に灰色の馬をこちらに近づけ、青年は馬の背から金陵花の中へ、ひらり、と降り立った。

青年の見事な長い銀髪が、風に揺れる。

スラリとした上背に、白い袍。優しく微笑んだ容姿は、女性と見紛うほど艶美で見とれてしまう程であるが、彼はれっきとした殿御である。

そして、統と並ぶ三大帝国の一つ、愾麟きりんの皇太子でもある。

「劉閃りゅうせん、このようなところで会うとは思いませんでしたよ。それに瑚蝶殿まで」

職務怠慢ですか、と劉王を見、続いて瑚蝶の姿に、黎青は少々驚き顔になった。

「黎青様、お久しゅうございます」

慣れ親しんだその麗顔に、瑚蝶は微笑んで一礼した。

「お前こそ。俺の領土まで来て何をしている？ 金陵花を見に……などとは言つまいな」

同じ目的は遠慮したい、と劉王は揶揄を飛ばす。

「それもありますが、僕はむしろ、この花の主に会いに来たのですけれどね」

金陵花を見ながら、黎青は肩をすくめて見せた。

「それで？ 今日はどんな説教だ？」

すかさず劉王が返す。

「失礼な。そんなに僕は説教じみた話しをしていますか？ まあ……

あなたの態度が改まれば、僕も少しは黙っていられるのでしょうか？」

「そう言われても身に覚えがないな。なんのことだ？」

不知装いを決め込む劉王を、恨めしい思いで黎青は睨み上げる。

「照れ隠しでございますよ。劉王様は恥ずかしがりやなのでござい  
ます、見かけによらず」

そんな黎青に、横から瑚蝶が一言添える。

「余計なことを言うな、瑚蝶」

「劉閃、女性に対して悪態をつくものではありませんよ。まったく、  
その口の悪さも相変わらず健在のようだ。これでは僕の小言も多く  
なります。一国の皇帝としての自覚をもう少し持つてくださらない  
と困りますよ」

少々厳粛な声音で、黎青が劉王を咎める。

「仕方がなかるう。お前のように紳士ではないからな。      ところ  
で、お父上に変わりはないか」

突然の話題転換に黎青は形のいい眉をひそめる。しかし劉王は、  
まったく彼方を見つめたままだ。

「……ええ。いつもあなたのような息子が欲しいとぼやいています  
よ」

「なんだ？ お前のような冷めた息子はだめか」

「僕は母似ですから」

「なるほど、扱いにくいというわけか」

くすりと劉王の口元から笑みが漏れる。瑚蝶は二人を後ろで見  
守っていた。

「……皇帝になれ、蠡青」

「何を唐突に」

「そして俺と相對してみろ。さすれば非難も存分に出来よう」  
表情を堅くした黎青だったが、すぐに和らげて苦笑交じりに返答  
する。

「ご冗談を。あなたと姻<sup>あぐれ</sup>榑の間に挟まれてこれ以上苦慮するのはま  
つぴらですよ。それを考えれば、僕にはまだ荷が重いです」

統、麒麟と隣接するもう一国の悪友の皇太子の名に、劉王は微笑  
した。

「そうか？」

「そうですね、おっと」銀髪と共に、黎青が瑚蝶を振り返った。

「まだ女性には初春の広野はきついものではありませんか？ すみませんね、気の利かない主人で。帰りは僕がお送りしましょう」

そう言っつて、おもむろに劉王を仰いだ。

「勝手にしろ。 ああ、そういえば……」

劉王も瑚蝶を振り返る。

「ここからだに近いな」

じつと劉王に見つめられて、瑚蝶はその言葉の意味を悟った。

もう少し行くと、ふと金陵花のときれる場所がある。

元、廟王国の領土。

「……行くか」

そう呟くように言っつて、劉王は素早く馬の背にまたがった。大きな手が、瑚蝶に差し出される。

さあ、と劉王の唇が動いたのを見て、瑚蝶はその手を取った。

「あつ……」

その刹那、馬に引き上げられた勢いで、金陵花の花冠が瑚蝶の髪から離れた。

名残惜しそうにそれを目で追う瑚蝶だが、劉王は遮るように馬の腹を蹴った。

「劉閃！」

突然の行動に、黎青が声を上げた。

「城に行つててくれ！ 誅易に言い訳を考えていなかったからな！」

柳眉を寄せた蠡青を一瞥したかしないか、劉王の馬は颯爽と走り去っていく。

「まったく困つた人だ……」

一人金陵花の丘にたたずみながら、黎青は静かに首を振った。

## 【参】 残 夢

荒野に佇む荒廃した城の片隅に、塚がある。

鬼簿のうちには、廟大君、そして親族の名が刻まれている。瑚蝶の家族である。

「よく覚えておいでですわね、劉王。取るに足りぬ小国のことなど……」

花を摘んでくれば良かったと思いながら、瑚蝶は塚の前で膝を折った。

「卑屈になったな、瑚蝶。その分では、俺は死んだ後もずっと恨まれることになりそうだ」

自分を嘲笑っているのかと思いついた劉王の顔は、ずいぶんと堅い表情だった。

なぜここに来ようなどと言ったのか、瑚蝶には劉王の意図が読めなかった。

「……もしあなた様のお父上が討たれたら、私の気持ちかわかるでしょう」

劉王に背を向けて、瑚蝶は棘を含んだ口調で言った。

「……国が墮ちる時などいつか必ず来ることだ。それも天命と思うだろう」

冷徹な答え。

瑚蝶は石盤に手を触れた。

「瑚蝶」

劉王が自分を呼んだ。それに振り向かず、瑚蝶は父の名を、母の名を指でなぞる。

「俺が憎いなら、討ってみろ。この喉笛を見事に突いてみる」

劉王の言葉が、瑚蝶の感情の片鱗に響いた。

『南にな』

十五の春、父が自分に言った。

『南の丘に金陵花という花が咲く。統にしか咲かない花だ。ここからもかすかに見えるだろう……あの花が咲くと春が来たとすぐにかる』

穏やかに、ゆっくり、瑚蝶の髪を優しく撫ぜながら大君は言った。  
『瑚蝶……』

自分の名を、愛おしそうに父は呼んだものだ。

『もし私たちが死んでも誰も恨むな。どんな死に方だったとしても、それが宿めなのだからな……』

父は悟っていたのかもしれない。

本当にその通りになった。家族の最期も見届けることができなかつた。

あの時、城を離れていたことを瑚蝶は悔やんでいた。病気がちだ

った瑚蝶を心配した両親の提案で、数人の侍女を連れ静養地に療養に行っていたのだ。

最後に一目……も叶わなかった。

目が覚めた後、劉王に何度も懇願したが、亡骸を見ることさえ聞き入れてもらえなかった。

突然王を失い混乱に陥った国民を、劉王は南下させ自分の配下に引き入れた。瑚蝶が生まれ育った大切な場所は、一つ残らず統に奪われてしまった。

残ったのは、行き場をなくした思慕と、抱えきれない憎しみ。

……出来ません、父上。

瑚蝶は己の唇を噛みしめた。

……きつと……私は……。

「戻るぞ」

劉王の声が瑚蝶を促す。

金陵花。

馬の背に乗る前に、瑚蝶はもう一度墓を振り返った。

父は金陵花の花が咲く国を創りたかったのだ。

……犠牲を払わずとも、和議をもってことを成せると信じていたのだ。

## 【四】 食客

「劉王 っ!」

城門をくぐると、一人の男が城の中から走り出てきた。

かなり体躯のいい大男だ。無精髭に強面の顔、誰が見ても後ずさりしてしまうような威然さがある。

「ごっ、ご無事でしたかっ！ 一体何処に行かれたのかと、私はひやひやして……」

「そうわめくな、誅易<sup>ちゅうい</sup>。俺は子供じゃないんだ」

武官に馬を繋いでおくように言い、劉王は誅易の巨体を退けて城内に向かっっていく。

しかしそれでも誅易がめげずに後を追ってくる。

「しかしですね、近頃<sup>そ</sup>祖が力をつけている様子。万一の用心に越したことはないですよ!」

中身は割と気の小さいところもある誅易である。

黎青の待っている客間までついて来そうな様子に、劉王はぴた、と足を止めた。

「誅易」

「はっはいつっ」

「俺の私用まで付き合っつもりか?」

鋭い瞳に睨まれて、誅易がぐっと思を呑み込む。

「も……申し訳ございません」

そう頭を垂れ、誅易が一步下がる。

「劉王、將軍の仰ることはもっともですわ」

蝴蝶がそう誅易に賛同するが、劉王はいつものごとく鼻であしら

った。

「誅易、たまには俺のことは忘れて療養でもしてきたらどうだ？ 暇なら幾らでもやる。真舟湖あたりは美女が多いと聞くぞ」

劉王がそれを遮るように言下に言う。だがここで引き下がる誅易ではなかった。

「何をおっしゃいます、自分のことよりもまずは陛下の王妃探しでございますよ！」

こういうときの誅易の表情は意気揚々としている。先王の時代より王朝に仕え今では劉王の傍仕えも兼任するこの男にとって、幼少の時分より見守ってきた天子は最早息男のような存在なのであろう。「陛下ももう二十四。そろそろ身を固めてもいい時期ですぞ。そしてお早く継嗣をもうけて頂かないと！ そのためによりすぐりの

「

「お前の目は節穴か」

「は？」

「隣に候補がいるだろう。これが殿御に見えるか？」

劉王が言う先に、瑚蝶。二、三回目をしばたかせて瑚蝶は悪戯っぽく笑う劉王を見上げた。

「いざとなったらこやつが何とかするだろう」

「劉王！」

誅易と瑚蝶が叫んだのは同時であった。

「はははははは……」

軽快な笑い声が王城の中に響き渡る。劉王は再び歩みを進め始めた。

「二、瑚蝶殿！ まさか本当にそのようなことはっ！」

「瑚蝶！ 早く来い！」

動揺の渦中の誅易に一礼し、瑚蝶は劉王を追った。

「よろしいのですか？」

そつと振り返って見ると、よほど衝撃を受けたのか、誅易はぽかんと回廊に立ち尽くしたままだ。

「ああ、あれで少しは矛先はお前に向く」

劉王が勝ち誇ったように喉の奥で笑う。

「……私はごめんです。それでしたら私も誅易將軍に賛成ですわ。劉王と添い遂げるのにふさわしい方をお見初めいたしましょう？」

瑚蝶も負けずとそう言い返す。

「……厄介だな」

「將軍がおっしゃりたいのは、お戯れも程々にして、本来の務めを第一にお考えになって頂きたいということですね。貴方はこの国の主なのでから」

「……やれやれ。皇帝とは肩身の狭い身の上だな。どこにいても休まる気がせん」

劉王がそう呟いたその時、足音に気付いたのか玉座の間の扉が開き、黎青が顔を出した。

「とくに庇い立てはしませんでしたよ、職務怠慢の皇帝閣下」

異国生まれの母親譲りの美貌で、黎青はにっこりと劉王に笑いかけた。

「そのようだな……まったく。友達甲斐のないやつめ」

黎青を一瞥し、玉座の間には入らず劉王はそのまま回廊を進んだ。その背中に瑚蝶は問いかける。

「どこへ？」

「俺はその部屋が嫌いだな、どうも辛気くさくて。まだ地下の方がましだ」

そう投げやりな返事を返して、劉王は中庭への階段を下りていく。瑚蝶と黎青もそれに続いた。

「邦昌、いるか」

どこを見てでもなく、劉王がそう呼ぶと、がさつと木の枝が揺れた。

その影から現れた一人の青年が、劉王の前で膝を折りくつと顔を持ち上げた。

「居眠りしていたわけでもなさそうだな」

そんな劉王の言葉に、青年はにや、と笑った。

黒曜石のような双眸が、甘さのある優男風の顔立ちに、鋭く野性的な印象を与えている。瞳と同じ黒髪は、無造作に後ろで劉王と同じ朱の紐でくくられていた。

年は、二十歳そこそこといったところだ。瞬きをする度に、時々あどけなさが顔色に出る。

「北の都からの風に呼ばれました。……陛下にとって損にはならぬかと」

そう言葉を紡いだ口元に、曰くあげな笑み。

「盛大な歓迎だったか？」

おそらく二人にしか理解し得ぬ会話。それほどでも、と邦昌は苦笑混じりに袍の袖をまくり名残を示す。

腕に一筋の血の滲む傷跡。十分に手当を施していないせいで、まだ生々しい痕跡を残している。

「血……？」

二人のやりとりを眺めていた蝴蝶だが、邦昌のその腕に目を留めた。そして駆け寄る。

「どうしたというのですか、これは！」

「ああ、大丈夫さ、こんなの舐めときゃ」

「治りません！」

隠すように袖を下ろしかけた邦昌の腕を、瑚蝶は素早く掴んで声を張り上げた。その剣幕に  
押されて、邦昌が面食らった表情になる。

「……誰ぞやの余計事が出たな」

ククク、と劉王が低く喉の奥で嗤う劉王を瑚蝶はきつと睨んだ。

「劉王！ 邦昌に今度は何をさせてきたのです！」

「……あのな、瑚蝶？」

苦笑しながら直輝が口を挟もうとするが、瑚蝶は聞く耳を持つ様子はない。ばつの悪い顔をした邦昌だが、当の牙をむけられている劉王は平然としている。

「お戯れにも程があると、言ったはずです。従者は切り捨てるための道具ではありません！ 些細な怪我一つでも命取りになることだつてあるのです！」

瑚蝶の辛辣な叱責にも劉王は否定も肯定もせず、静観しながらゆるりと口角を上げた。

「……なるほど、お前の矛先は常に俺に向くわけか。 よい、手

当をしてやれ」

「言われなくてもそういたします」

ぷいと顔を背けると、倉皇する邦昌の手を引っ張って瑚蝶は城内へ戻って行った。

その後ろ姿を見送りながら、劉王は声押し殺しながら笑う。

「ク……ククク。意外に猛禽の類だったようだな、あいつは」

その隣りで黎青が、深いため息をついた。そして剣呑を含めた声音で問う。

「 劉閃。どういうことです？ “ 北の都 ” とは「

先程の邦昌の言葉が黎青は気になっていた。” 北の都 ” が指し示すのは、おそらく穏やかな話題ではない。

「うん？ 亜奴にちよつとした使いを頼んだのだ。たいしたこと

はない」

「ほう……それであの怪我ですか。無断で国境越えでもすれば、あなるのですかね」

「……そう問い詰めるな」

「……そうしなければ、黙殺しかねませんからね、貴方は」

「……ふふ、気の置けない奴め」

瑚蝶の去って行った方角を見つめたまま、劉王が喉奥で嗤う。褒めているのかけなしているのか。

ふっ、と溜め息をついて黎青は青玉のような青い瞳を細めた。

「……嫌味に聞こえますよ、劉閃。 さて、そろそろお茶の時間にしませんか？ ご自慢の白茶茶を頂きながら、ゆっくり歓談でもしましょうか」

有無を言わさぬ迫を秘めた流麗な微笑で、黎青がそう促した。

## 【伍】 惑い

「　　いつてえーっつ！」

寝台に座る邦昌が、涙目で情けない声を出す。引っ込めかけたその腕をぐいと引き寄せて、瑚蝶は呆れ顔で白い包帯を巻いていく。

「そんな大きな声を出して、宮城に聞こえてしまいますわよ。そのくらいで何を。皇帝の隠密を務める男が」

「……」

邦昌が眉値を寄せながら、ぐつと息を呑んだのがわかった。

王宮の南の端にある離れを瑚蝶は自室として与えられていた。どんなに大声で叫ぼうとそう簡単に聞こえないことは、承知の上なのだが。

「……あのな、念のため言っておくけど、これのことはオレがただしくじっただけで」

「わかっています」

「へ？」

漫然とした表情で、邦昌は瑚蝶を見た。

「いいのですよ、あの方に何を言っても同じことなのだから。どんな空言を言っても、咎めの言葉は返ってこない……」

それが時にどんなに苦しみとして残るか。憤りを持ったか……。

何度、

何度あの喉笛を突いてやろうかと思っただけか。

幾度も幾度も、返ってくるのは涼しい眼差し。けれど、その瞳にいつからか安心を覚えるようになったのも事実だ。でも

「……お前さんも酔狂なこった」

無遠慮に瑚蝶の寝台に仰向けに寝転がって、邦昌は頭の後ろで両手を組んだ。そして天井を見つめながら、ふっと笑った。

「まあ、劉王に捨てられたらオレのどこに来ればいいさ。オレにとつては酔狂もいい機会だ」

「まあ、ふふ……」

薬草を濾紙に包みながら、邦昌の台詞に瑚蝶の口から思わず笑いがこぼれる。

「冗談だと思ってるだろ」

「あら、違うのですか？ まあ最近は、あなたの艶聞も聞かなくなりましたが。女官たちとずいぶん親しくなさっていた様子でしたのに」

邦昌が慌てたように身を起こした。苦い薬でも飲まされたようなその面持ちに、瑚蝶はわざとにっこりと微笑んで見せた。それを見て、

「……まったく厄介な姫さんだよ」

と食傷気味に、邦昌は重く息を吐き出した。城でも外でも、たいていの女は少し優しくすればすぐに靡くというのに、瑚蝶だけにはいつも取り合われず上から見下ろされている気がする。決して付け込む隙を与えない。十九、二十でこれほど自分を頑なに庇護する女も珍しい、と邦昌は半ば呆れていた。

「瑚蝶さまあー」

無駄か、と邦昌が寝台から降りようとした時、パタパタと忙しなく回廊を走る音とともに、一人の小柄な女官が瑚蝶の部屋に転がり込むようにして入ってきた。

そして一息ついた次の瞬間、寝台の邦昌を見て、こぼれ落ちそうな程大きく目を見開いた。

「ほ、邦昌様っ！ ななな何をなさっているのですっ 瑚蝶様の御部屋でっつ！ いやあっ！ 最低ですっつ！」

そう突然顔を赤らめて、甲高い声で叫ぶ。騒がしさは折り紙つきの、瑚蝶の侍女である。十五になったばかりの童女ではあるが、邦昌にはいつも何かと一人前に牙を剥く。

「おまえなあゝっ。なんでもかんでも勝手に悪い方へ結びつけるんじゃないねえ！」

「まさか邦昌様……っ、いけません、いけませんっ！」

「だからな……」

「だめですっ！ 瑚蝶様はいけませえーん！！」

桔久がぶんぶんと激しく首を横に振る。どうやら完全に誤解をしたらしい。

ちようど寢台から降りようとしていた、その状況が悪かった。

口を挟めば挟むほど暗転しそうな予感がして、邦昌は救いを求めるように天井を仰いだ。

「……桔久、邦昌の腕を見なさい」

そんな邦昌を見かねて、瑚蝶は助け舟を出した。

「え……腕？ まあ！ どうなさったのですか、この怪我！」

態度が一変、桔久が邦昌の左腕に勢いよく掴みかかる。

「い……っ、てえよっ！ 馬鹿力っ！」

「あ……申し訳ありませんっ！」

こめかみに皺を寄せた邦晶を見てぱつと手を放すと、桔久は瑚蝶の後ろへ隠れた。

「あら、女性に声を荒らげるなんて珍しいこと。普段は甘い顔をしているでしょうに」

「あなたになかなかオレの良さが伝わらないから、他で紛らわしてんのさ。さてと、そろそろ行くわ。食客の身で油を売ってちゃマズいからな。手当て、どうも」

寢台から降りて袖をおろすと瑚蝶に軽く目配せをして、邦昌は部屋を出て行った。

「まったく、あんなことばかり……。一体いつまで言い続ける気がしら」

「でもお、瑚蝶様。邦昌様は真っ直ぐな方ですから、ご冗談ともしら」

危惧しているような色を浮かべながら、おずおずと桔久が口を挟む。

「どうかしら……。邦昌は何でも冗談事に含めてしまう性質ですから。それより桔久、ずいぶん慌てているようだったけれど、何か用ではないの？」

「あ！ そうでした！ 兼聞様けんぶんがいらつしやってるんです。良質の綾が入ったので、薄布を織ってらしたそうです。ぜひ瑚蝶様にお会いしたいと」

「まあ、兼聞様が？」

「はい！ とつても素敵なお色で……。きつとお気に召しますわ。そうだ、ぜひ劉王様にも見ていただいて」

そこまで言って、はっとした表情で桔久が両手で口を押さえた。

“劉王”の名が出る度に、瑚蝶の心内は薄雲がかかるように曇る。それを知っているからだ。

「桔久、どうしてそう私と劉王を結びつけたがるのです？」

「す、すみません。で、でも劉王様はすばらしい方です！」

その声を高くした途端、桔久の顔がぱっと赤く染まった。

「桔久？」

「でっ、ですからその、国王として申し分のない方だと思いますし、とても魅力的な方だとわたしはずっと……。あっ、いえ！ その……。思わず本音が出たとはかりに桔久の顔色が青と赤とに交互に変わる。まるで百面相だ。

くるくるよく変わるこの表情が瑚蝶は好きでもあった。そして最後は蒼白顔になって慌て始めた。

「やだ！ わたし、何を口走って……。い、今何言いました!？」

「劉王を愛していると」

「ああああああ愛しているとは言ってますん！」  
「何を照れることがあります。劉王を好きならそれで構わないですよ。」

そう、一般論ではそれも不思議ではないのだろう。

劉王を慕う者は多い。宮中の女官達の口にのぼるのは、いつも劉王の話題だ。

その言葉や仕草一つ一つを取り上げて、皆一様に淡い思いを馳せ、ためいきなどついているのだ。

本来ならば憧憬的で、憎しみを向ける相手ではないということ  
は瑚蝶もわかっていた。

「そうではないんです」

桔久がうつむいた。そしておずおずと遠慮がちに瑚蝶に視線を上げた。

「……わたしはただ劉王様がお幸せならそれでいいと……それで、

その……思うのです」

「思いつて何を？」

「その……劉王様がお妃様を娶られるなら、瑚蝶様がいいな、と」  
上目遣いに、口籠もりながら桔久が言った。瑚蝶はわずかに目を見張った。

「桔久」

「すすすすすすみません！ 出すぎたことを！ 失礼しました！  
わ、わたし先に広間へ行ってまあす！」

勢いよく頭を下げると、瑚蝶の次の言葉も待たずに桔久は脱兎のごとく部屋から飛び出して行った。回廊を走っていくもつれたような足音は、あつという間に遠ざかっていった。

何を言い出すかと思ったら。

桔久の言動はともかく、あの慌て様を微笑ましく思い返しながら、  
蝴蝶は卓の上の薬箱の蓋を閉めた。

誅易將軍が聞いたら、卒倒するでしょうね。

奴隷に等しい身分の者と、一国の皇帝　など。なんと惨めな結  
末だろう。そう思うのは、片隅に僅かに残る王族としての自尊心か  
らだろうか。羽根を折られ、もう飛び立つことが出来ない籠の鳥に  
何の価値もありはしないのに。

籐で編まれた薬箱を棚に戻して、蝴蝶は自室を出た。

「あら……」

扉を開けた先、回廊とその向うに広がる庭園を隔てる棧に、邦昌  
が座っていた。思わず漏れた蝴蝶の声に、邦昌は庭園のほうからこ  
ちらに顔を向けた。

「邦昌。劉王のところに行っただけではなかったのですか？」

「二人で居室の方へ向かわれたようだが、今行くと“銀漢の貴公  
子”殿の詰問に合うと思っただけ。しばし休息。ところで桔久がす  
っとんで行ったけど、何かあったのか？」

「いいえ、なんでもありませんわ」

ゆるりと首を横に振って、蝴蝶は棧へ寄った。

柔らかい陽射しが降り注ぐ庭園には、春の風景が溢れていた。

一面に敷かれた眩しい新緑の絨毯には、傍食カタバミの黄色い色が散って  
いる。艶やかな緑葉の中の薄紅色の石楠花シクナゲの蕾は、徐々に開花を始  
めたようだ。蒼空に向かって大きく枝を広げ葉を揺らす針塊ハリエンジュも、じ  
きに白く甘い芳香をふりまく準備を始めるだろう。

「その傷は……どこで負ったのです？」

劉王の計らいで季節ごとに姿を変える内苑を眺めながら、蝴蝶は  
問い掛けた。

気泡のような光の玉が揺蕩うゆるやかな流れをつくる小川の上を、二羽の白い蝶が舞い踊っている。じゃれ合うように螺旋状に弧を描きながら、空へ。

答えのかわりか、邦昌が短く息をついた。蝴蝶は続ける。

「北の都と……そうおっしゃいましたわね？　ここから北を目指せば、やがて辿り着くは吉京陛下の治める西崦の国。しかしその弟君で在らせられる阿搏様は、劉王の無二のご心友。その配下を斬りつけるなどという物騒なことはなさらないでしょう。……そういえば、西崦の北部は今だ祖の国との燻りがあり無法地帯だとか。先の戦で勢力を失ったといえど、四大帝国と謳われていた時代には、祖こそが“北の都”に相応しい強国だったことでしょうね」

色香の漂う涼やかな目元を細めて視線を送れば、邦昌が惘然とした顔つきになって蝴蝶を見た。そして観念した様子で大きく溜め息をついた。

「わーっ たよ、わかりました。まったく勘のいい女だよ……さすが劉王の寵姫」

「誤解を招く呼び名はやめてください。それよりも……五日ほど姿を見かけないと思っていましたが、やはり祖へ密偵に？　何か不穏な動きでもあるのですか？」

「……ただの偵察さ。お前さんが気にすることじゃねえよ」

棧から下りて、邦昌が蝴蝶の隣りに立つ。まだ少年の余韻を残す細面の横顔を蝴蝶は見上げた。内苑に目線を注ぐその面持ちは、言葉とは裏腹にどこか憂慮の色が漂っているように見える。

「……戦になるのですか」

一抹の不安が蝴蝶の胸を過ぎった。

「……そういう世だろ。心配すんなって、そんな簡単に戦は起きんよ。三国の結束の強固さに、諸国は恐懼してる。負け戦と知って地雷を踏む馬鹿はいない。それに、いざそうなったところで劉王が黙

つて屈するわけがないって」

視線を伏せた瑚蝶を励ますように、笑みを含ませた声で邦昌は言った。しかし吐息をもらしながら、瑚蝶は静かに首を横に振った。

「そうでしょうか……近頃の陛下は目に余ります。供も連れず都へ下りたり、突然野駆けに行くなどと。あの回遊癖も困ったものです、誅易將軍に同情いたしますわ」

「……ただの戯れだと？」

「ほかにどう解釈するのです。あの方の酔狂ぶりは今に始まったことではございませんわ」

「あのお方は人一倍、自分に忠実なのさ」

「……どういうことですか？」

花の香りに乗せた微風が、二人のいる回廊を包み込む。穏やかな風の手が瑚蝶の長い黒髪に差し込んで、ふわりと後ろへなびかせていく。

「確固たる自らの意志で采配を揮うおつもりなのさ、位や権力で誤魔化すことなく。利己的な振る舞いはその一環だよ。それが先帝の訓示でもある」

「劉王のお父君の？」

邦昌が浅く頷く。少年の影を残した横顔に、ふっと大人びた微笑が広がる。

「『民の声から、見聞を広めよ』それが先帝が政の定石としていた言葉だ。霸道を良しとせず、権威に傲ることなく、常に民衆の為にと心を砕いておられた。時には憎まれ役も買って。例え非難され不肖者と罵られようと、結果でそれを覆すお方だった。先帝が即位した頃は、諸国間での争いが絶えなかったらしい。その中でも大国である麒麟と西嶮とは国境問題での揉め事が多発していた。あのお方もつれた三国間の関係を結び直したおかげで、今の安泰した統がある。何度も自らの足で回国し、武力に頼ることなく和を繋い

だんだ。『皇帝は臆病風に吹かれている。だからへつらうことしか出来ない』なんて言う奴らもいたけど、そうじゃない。度重なる戦で物資や兵をとられ困窮していた民の惨状を知っていたからだ。オレは小さな農村の生まれだけど、その武勇伝は聞こえてたよ。婆ちゃんからもよく聞かされた。オレの村が飢饉に喘いでいた時も、見捨てることなく手を差し伸べてくれた。その人のようになりたいと、オレは十七になったと同時に上京して武官試験を受けた。そして初めて皇帝の顔を知った。驚いたよ。だって、村に物資の支給があつた時、幼いオレに桃を差し出してくれた官吏と同じ顔をしてたんだから。先帝の回遊癖も相当だったみたいだぜ」

まるで知己の友の話をするように、邦昌の声も顔も綻んでいる。だが瑚蝶はそんな邦昌を静かな目で見上げていた。誰もが感心するような偉業を聞いていても、浮かんでくるのは疑惑であつた。

「だから劉王はそれに追従している？ 度々城を抜け出すのも、人々の声に耳を傾けるためだというのですか？」

「そうなんだろうよ。お父君もそうしてよく家臣を困らせていた」

「……素晴らしいお話ですけど、それでは矛盾していますわ」

「うん？」

「民のことを第一に考える良識のあるお方だったら、なぜ……奇襲をかけるなどという蛮行を？」

「瑚蝶」

はつとしたように表情を変え、邦昌の声の調子が低まる。それを避けるように、瑚蝶は邦昌から視線を外した。

「武力の行使を潔しとしないのなら、なぜ私の国を？」

声がわななく。消えない絶望感が、瑚蝶の四肢を走り抜けていく。

「……そういう世だろ。お前さんだってわかってるはずだ」

冷徹な邦昌の言葉が、突き刺さるように響く。

「だからといって気まぐれに人の命を奪うのですか？ 私の国は決して裕福ではありませんでした。父も華美を好む人ではありませんでしたし、贅沢三昧の暮らしでもありませんでした。慎ましく穏や

かに暮らしていければよかったです。けれどそんな小さな願いすら踏みにじられた。私たちがいつたい何をしたというのです？　そりゃあ大国に立てをつくよりも、小国から取り込んで私腹を肥やす方が簡単でしょう。けれどその一方で、すべてを失い絶望する者がいることをお考えにならなかつたのですか。それほど慈悲深い寛容なお方なでしたら。配下が安泰ならば、それでいいとでもいうのですか……！私にはただの欺瞞としか思えません」

「だが廟国民は路頭に迷うことはなく、統へ迎え入れられた。奴隷ではなく、同じ臣下として。それはあんたも知っているだろう」

「今までと同じ平穏な暮らしが手に入れば、人々は満足なのでしよう。でも私はどうなのです！　何を与えられても望むものはもう戻ってこない！　いつまで苦しめばいいの？　なぜ私だけ？　なぜこんなに空虚な気持ちで一杯なのです！」

一陣の疾風が内苑を吹きぬけた。大きく枝を広げた針塊の枝をさらい、激しく揺さぶって逃げていく。

はっとして蝴蝶は息を呑んだ。回廊に響いたのが自分の声だと気付いて、血の気がひくほど愕然とした。

## 【六】 矛盾

今のは？ 私は何を？

「瑚蝶さまあああつ」

混乱に陥りそうになった瑚蝶の耳に、桔久の呼ぶ声が響いた。女官服の裾を持ち上げて、回廊を走って来る。

「兼聞様がお待ちかねですよーっ！ 早く早く……ああつ、邦昌様っ！ また瑚蝶様に言い寄っておられるのですかっ」

瑚蝶の隣りに邦昌の姿を見とめて、桔久が立ち止まるやいなや両手を腰に眉を吊り上げた。

「はいはい、退散しますよ」

両手を上げ肩をすくめてみせると、邦昌はひらりと棧を飛び越え内苑に降りた。鮮やかな朱紐で結ばれた長い黒髪が、馬の尾のようになやかに波打ち、そして剽悍そうな眼差しが瑚蝶を振り仰いだ。

「たまにはそうやって、取り乱した方が体にはいいぜ。ああ、オレがどうして武官にならなかったのかって話は、後で聞かせてやるよ」

と白い歯をのぞかせると、俊敏な身のこなして小川を飛び越え、緑匂い立つ春景の向うに消えていった。

「邦昌様と何をお話になっていたのですか？ ……瑚蝶様？」

探るような目付きで桔久が瑚蝶の顔を覗き込む。その場に立ち尽くしていた瑚蝶は、瞬時に平静を呼び起こした。

「え？ ああ、いいえ……ただ庭を眺めていたのよ、花が咲き始めたから。さあ、行きましようか。兼聞様をお待たせしてしまっただわね」

先に歩き出し桔久を促す。腑に落ちないと言いたげに桔久は口元を曲げたが、「はい」と頷いて瑚蝶の後についた。

「いったい自分はどんな顔をしていたのだろう。ひどく醜かったに違いない。」

回廊を広間に向かって進みながら、瑚蝶は先程の醜態を恥じていた。

己の身の為だけの訴えであった。抑えきれなかった。一瞬頭の中が真っ白に染まった。

今だ飽和せぬ憎しみと怒りに、胸を食い破られるのではないかと思っただ。

広間に着くと、数人の女官を相手にしていた漢人兼聞あやひとが、瑚蝶の姿に深々と頭を下げた。

「瑚蝶様、お久しゅうございます」

安堵感を覚えずにはいられないその柔和な物腰に、瑚蝶の相好も自然と崩れた。

「兼聞様、お元気そうでご何よりです。最後にお目にかかったのは…  
…一昨年前の沫麦リエンチーの収穫の時期でしたわね」

差し出された瑚蝶の手を恭しく取って、豊かな銀髭をたずさえた老紳士はそうでしたな、と小刻みに頷いた。

「いやはや、不義理をして申し訳ありません。昨年は新たな染料を求め、方々足を伸ばしてお

りましてな。老足なりとも急いだつもりなのですが、見城が遅くなつてしまいました。御不承願います」

「こうして私のことを忘れずにおいでくださっただけでもうれしいですわ。さっそく見せてくださいな」

「ええ、もちろんでございます」

手を取ったまま、兼聞が瑚蝶を石膏石の卓へと導く。群がっていた女官たちが、左右に分かれて瑚蝶を招き入れた。

円卓の上には、鮮やかな朱色の綾の薄布が何枚か広げられていた。思わず瑚蝶は感嘆の溜め息を漏らした。

「まあ……なんて素敵な色なんでしょう」

眩しさに目を細める。同じ色に見えるが、少しずつ色が異なっているようだ。

「鮮やかさが薄れては失礼かと、取るものも取らず参上いたしましたまででございます」

瑚蝶の反応に満足したように、兼聞が微笑む。

漢人・兼聞の織る綾は、統の王侯貴族はもちろんのこと国外でも定評がある。それに加え温厚で誠実な人柄である兼聞には先帝も目をかけていたらしく、妃の身に付ける衣装はすべて兼聞に任されていたともいう。その由縁あつてか劉王も兼聞の城への出入りを容認していて、定期的に女達の無聊慰めにと色とりどりの薄布シヨールを携えて城を訪れるのであつた。

「わあ、素敵なお色ですね！ さすが兼聞様の綾ですわ。ねえ、瑚蝶様っ」

桔久が目を輝かせながら、はしゃぐ。瑚蝶はそつと、なめらかな綾布を手にとつた。

「身につけるにはもつたいなく思えますわね」

すると兼聞が首を横に振りながら微笑んだ。

「何をおっしゃいます。貴女様の為にと仰せを受け参つたのです。お気に召して頂けないとあれば、私目の首が飛びかねません」

「え？」

物騒な物言いに瑚蝶が小首を傾げた時、女官たちが小さな悲鳴を上げた。

「余計な口を叩くな、兼聞。これ以上風当たりが強くなつては困る」

凜、と磨ぎ澄んだ声が広間に響いた。開け放たれた広間の戸口から、従容とした足取りで劉王が歩んで来る。

「これはこれは、皇帝陛下」

兼聞が慇懃に頭を垂れた。その場にいた他の者たちも、皇帝の来室に畏まって辞儀をする。瑚蝶も腰を落とし、礼を表した。

「待ちくたびれたぞ、兼聞。貴殿に使いをやったのは、いつぞやのことであつたかな。西遥セイリョウの美女たちに心酔して任を忘れ、腑抜けにでもなつてしまったのかと思つたぞ」

自分の胸ほどの背丈の老輩の前で立ち止まり、優然と見下ろしながら劉王が含み笑う。

「ほほほほ、相変わらずの口振りですな、劉王。そのご麗顔は母君に生き写しでございますのに、なんとも惜しいことです。殿下の望みに叶うようと、老体に鞭打つて奔走しておりました」

兼聞の言い方は畏まつてはいるが、厳然とした重みはない。むしろ劉王とのやりとりを楽しんでいるようなおどけた雰囲気がある。劉王がフン、と鼻を鳴らす。

「お前の口も達者なことだ。まあ、よい。それより首尾を聞かせてもらおう」

「はい、御覧の通り」

鷹揚と頷いて、兼聞が右手を広げるようにして卓子を示した。卓の上を覆つ朱色を一瞥して、劉王は瑚蝶の手の綾布に目を留めた。

「ほう、見事だな」

素直な劉王の賞賛の言葉に、「有難うございます」と兼聞が頭を垂れる。

「これは……何か特別な染料を用いているのですか？兼聞様」

なにやら含蓄のある二人の様子に、瑚蝶は問い掛けた。兼聞が振り向く。

「はい。西遥にはこの大陸では見られぬ珍しい草花がございましてな。特に北部の寒冷地帯レンカにしか咲かない氷塊花エウカリウスという花は、それは見事な朱を映し出す染料になると聞きました。しかしこの花、雪下を苗床にしております。稀少な上に深い積雪を掘り起こして採取しなければならず、困難を極めました。ですがその甲斐もありましたな。不思議なことに空気に触れても色合いが変わらず、花の持つ本来の彩度を引き出すことが出来ました」

「これがその、氷塊花の色なのですね。なんて深みのある色でしょう」

一口に「朱色」というには言葉の足りない、不思議な色合いである。光の加減でその色相に変化が出るのだ。宵闇に沈む初夏の入り日のような紅くれないとも、ゆらゆらと淀む大気の中、徐々に色づき始める晩秋の朝焼けの淡い赤とも。

「統の色だ。朱が好きか、瑚蝶」

瑚蝶の隣りに立って、劉王が問うた。瑚蝶は少し不審に思いながら、浅く頷きを返した。

「……はい。陛下の見立ててくださるものも、だいたい朱色が多いですわ。お気付きになっていませんか？」

「さあ、そうだったか？」

劉王がとぼけた返答をする。兼聞が呆れた風を装って口を挟んだ。

「おやおや、素直ではありませんなあ。瑚蝶様には朱が似合うからと、わざわざ西遥王に親書を送り、レンカへの案内人まで手配されたのは、いったいどなたでしたか？」

瑚蝶は耳を疑った。

劉王が？ ……私のために？

「本当に首を落とされたいか、兼聞。それとも先に舌を抜こうか？」

兼聞を見据えながら、劉王が美声を低く響かせる。その表情が少し困窮して見えたのは、気のせいだろうか。

劉王はやにわに卓上から朱の薄布をすくいあげると、それをふわりと瑚蝶の肩にかけた。

「やはり似合うな、この色が」

かけ終わった手を除けて、劉王は囁くように言った。

いつもは峻厳な目元の表情が驚くほど穏やかな印象に変わったのに、瑚蝶の鼓動がふいに乱れる。

それを否定したい思いで、滑るような薄布の感触を抱き込むように両腕に通せば、女官たちから口々に溜め息が漏れた。

「ほほう、さすがお見立て通りでございますな」

兼聞はどこか得心顔だ。桔久も両手を胸の前で握りしめて、頬を紅潮させている。

急に気恥ずかしさを覚えて瑚蝶は俯いた。そこへ黎青が現れなければ、皆にその変化を気付かれてしまっていただろう。

「劉閃。貴方には縄が必要なようですね。邦昌を呼ぶと出て行ったときり、なかなか戻ってこないと思ったら……。おかしいと思っただんです、こういうことには無精の貴方が自ら行くなんて。信じた僕が馬鹿でした。金輪際信用しませんよ。僕は待たされるのが大嫌いなんです」

開け放たれた戸口に片手をついて、銀雪の髪の毛の貴公子は不愉快さ露わに一気に言い果たした。待たされた上に一緒にいる相手が瑚蝶というのが、さらに黎青の不機嫌を煽った。

「では縄抜けの練習をしなければな。失礼した、客人。舞い込んだ蝶を追いかけてつい、な」

戯言交じりに劉王が動いた。陽射しを集める戸口の方に歩いていく。視線を上げ、遠ざかる背中に瑚蝶は声を投げかけた。

「劉王」

決して溺れてはいけない、背中。

だが時々、向けられる言葉が真摯なものであると信じたくなって

しまうのは、まだこの世に希望をもっているからであるつか。

「……ありがとうございます」

わずかに振り返っただけで、劉王は黎青とともに戸口の向うへ消えた。

失うものはもう、ない。

すべては過去に埋もれてしまった。

空虚さは冷たく重い気持ちだが、すべてを失った蝴蝶を満たしてくれる。

優しさはそれを揺るがせ、瓦解させる。それが怖い。

ここへ来た頃は絶望と憎しみしか知らなかった。でも今では薄らぐ瞬間さえある、本心から 微笑んでいる自分がある。

何も得たくはないのだ……

だが求める気持ちが始めている。

なぜ？

小さく震え上がっているのになぜか疼く胸の内を隠すように、蝴蝶は薄布を抱き合わせた。

## 【七】 虚偽

「珊瑚殿、お話ししたいことがある」

誅易が突然珊瑚殿の部屋を訪れたのは、すべてのものが深い漆黒の闇に沈みきった夜半近くだった。

すでに髪に櫛を通し夜着に着替えていた珊瑚殿だったが、今夜は寝付けず、円形の格子窓から朧ろな月を眺めていた時であった。

いつもの重苦しい装甲姿ではなく、誅易は官吏たちが着る浅葱色のゆつたりとした寛衣姿で現れた。そのせいか、いつも巨体を取り巻いている近寄りがない威儀ある雰囲気は、幾分か和らいでみえる。

「夜分にご婦人の閨を訪れるなど失礼極まりない行為をお詫び申しあげます。ですが、少しばかりお時間をいただきたい」

冥夜にふさわしい儼かな調子で、誅易は一礼した。口周りに髭をたずさえないかめしい面立ちは、今夜はどこか悄然としていて気迫がない。何か思いつめている様子が窺えた。

「構いません。どうぞ、お入りになってくださいませ」

窓辺を離れ夜着の上に紫苑色の外套を羽織り、珊瑚殿は誅易を部屋の中へ招き入れた。卓子を勧めると、誅易は無骨に頭を下げ腰を下ろした。珊瑚殿も円卓を挟んで向かい側に座った。

「お話というのは、他ならぬ皇帝陛下のことです」

そうであることは、誅易の姿を見た時にすでに察しがついていた。珊瑚殿は誅易の次の言葉を待った。

「……何年になりますかな。貴女様がここへ来られて」

核心部には入らずに、誅易は瑚蝶に問うた。すぐには切り出せない迷いがあった。

「……三年になります」

思惑ありげな表情の誅易と視線を合わせながら、瑚蝶は答えた。誅易が小さく息をついた。

「もうそれほどになりますか……」

普段豪快な大声を響かせているとは思えないほど静まりきった口調で誅易は呟いた。誅易の心中を代弁するように瑚蝶は口を開いた。

「……將軍にしますれば、さぞ心休まらない存在でしたでしょう。当然でございます。本来ならば、このような寛容な処遇を受けるべき身ではありませんから」

それを聞いて誅易は吃驚したようだった。礼儀としてか、頭を横に振る。

「瑚蝶殿に非があるわけではありません。ええ、わかっているのです。しかし 正直申しますと疑問を持たずにはいられないのです。なぜ劉王は……瑚蝶殿をこの城へ縛り付けておくのか。 貴女にとって我々は敵同然、目の上の瘤ではないかと。今だ私にはあの方の真意はわかりかねます。ですが、そろそろ時期なのではないかと思ひましてな……」

言い淀んで、誅易は誤魔化すように咳払いをした。

今夜のことがもし劉王の耳に入ったら、逆鱗に触れるのは歴然。だが誅易もこれ以上我を折るのは躊躇われた。幾許の覚悟を胸に、その先を切り出した。

「瑚蝶殿を、解放すべきだと」

瑚蝶は黙って誅易の言葉を聞いていた。驚きはしなかった。「解放」と言えば聞こえはいいが、それはすなわち「追放」を意味する。

「実は此の度、陛下には内密に触れを出しました」

「……宮女公募のお触れでございますか」

「いかにも。劉王には幾度進言しても取り合われず、私も天子の裁断と隠忍しておりましたが……後宮を持たぬ皇帝など前代未聞。統の存続の為に後妃を立てる必要があると臣下一同に是認しております。それにもうすでに正妃候補にと目をかけている方がおりますな……入宮を待つばかりでございます。その為に」

“ 傾国の種になるものは取り去るべし ”

そう言いたいのだろう。誅易が拭いきれないもの。それは瑚蝶への不信感だ。いつか裏切り、皇帝の寝首を掻くやもしれない。

誅易だけではない。城の皆の眼差しの中にそういった翳りが潜んでいることを瑚蝶は気付いていた。

まったく衝撃を覚えなかったわけではない。だが誅易の胸裏は理解できた。

「……もとは拾われた命でございます、依存はありません。すぐにも城を出て行きましょう」

「……勝手をお許し頂きたい。ご安心を、南聖地方の懐湖に住まいをご用意いたします。懐湖は景観の良い温泉郷でございます。きつとお気に召して頂けるかと」

誅易は深々と頭を垂れた。その声は少し安堵感を含んだように思われる。見目は豪傑だが、誅易は人一倍篤実な人柄であることを瑚蝶は知っている。瑚蝶の是非を問わずとも押し進めてしまえば良いものを、それが出来ない生真面目な男なのだ。そして誰よりも劉王を敬っている。私利の為ではない。誅易の執る行動はすべて劉王の統の為を思っていることなのだ

「陛下には私が独断で出て行つたと、お伝えください。その方が、將軍に火の粉が飛ばずに済みましょう」

「かたじけない」

そう誅易がもう一度頭を下げた時だった。

がしゃん。

弾かれたように二人は顔を上げた。扉の向うで何かが割れたような大きな音がした。即座に誅易が立ち上がり、扉を開ける。

「桔久……」

瑚蝶は息を呑んだ。

開いた扉の先には、顔色を失った桔久が呆然と立ち尽くしていた。

「嫌っ！ 嫌です、納得できませんっ」

誅易が退室するやいなや、それまで拗ねた子供のように俯きながら必死に拳を握り締めていた桔久が、勢いよく顔を上げた。

両頬は紅く上気し、両目からは大粒の涙が一粒ずつ零れ落ちていく。

「どうして瑚蝶様が出て行かなければならないのですかっ！ ひどいです！ 理不尽です！ 誅易將軍なんかの命令なんて聞く必要ありません！」

嗚咽と憤りで声が震えている。どうやら一部始終扉の外で話を聞いていたらしい。いつもならこんな夜遅く起きている子ではないのに、なぜ部屋を訪れてきたのだろうか。

「桔久、泣かないでちょうだい。何も私は死ぬわけではないのよ」

桔久が両手で顔を覆ってわっと泣き出した。しゃくりあげるその肩を、瑚蝶は抱くようにして優しく撫でて宥める。

「理不尽なことではないのよ。むしろ將軍は氣遣ってくださったのだから……」

「いいえ、いいえ！ 將軍は瑚蝶様が皇帝陛下を暗殺するのではな

いかと思ってるのですよ！？ 瑚蝶様がそんなことするはずがありませんのに！」

だが桔久の溢れた感情はおさまりそうもない。とりあえず瑚蝶は寝台に座らせて落ち着かせることにした。

開けたままの丸窓から、夜風が流れ込んでくる。春になつたとはいえ、まだ夜更けの風は残冬の尖りを残したままだ。窓を閉め、瑚蝶は桔久の隣りに座った。

「……将軍がおっしゃることはごもつともだわ。私は喜んで承知するつもりよ」

自分の羽織っていた外套を、薄い夜着一枚の桔久の肩に掛けてやりながら瑚蝶は決意を伝える。桔久が両手の平から顔を浮かせ、赤い目で瑚蝶を見上げた。

「え？」

「私には帰る場所はない。身を寄せる場所も。今は与えられて生きているのよ。そうしなければ私には存在する価値がないのだから。それに私は厄介者にはなりたくないの」

「そんな……！ それは瑚蝶様が廟の姫君だったからですか？ だから選ぶ権利はないと？ でも瑚蝶様は瑚蝶様です！ 国人であるとかないとか、身分が高いとか低いとか、そんなことの前に貴女様というお人なのですよ！ わたしの兄が言っていました。人の奢りがあつてはいけない隔たりを生み粹の中に縛り付けるのだと……。人の価値があるないを決める権利なんて誰にもありません！ わたしは……わたしは瑚蝶様とお会いできて本当に幸せなのです。そんなこと……おっしゃらないでください！」

再び桔久の瞳に涙が溢れた。迷惑をかけまいとするように俯いて泣き声を殺す桔久に、瑚蝶は居たたまれない気持ちになる。

「……でもね、桔久。使命をまっとうするために、位を持って生まれてくる方もいるのよ。そしてその方を守る大義を持って生まれる方も。何も失わずに得ることができたらどんなにいいでしょう。でも人の世は一虚一実、そう寛容ではないのです。守る為には何かを犠牲にする必要がある。そうして人間の営為は成り立っているのです。將軍の御裁断は劉王を、国を思つてのこと。王に仕える身ならばわかるでしょう？ それにいずれは私の存在は邪魔なものとなるはず。それならば、私は悦服しなければ。私は……劉王の重荷になつてまでここに居るつもりはないのです」

そう。胸の内に宿る心火が消えない限り、刃を向けないという自信はない。凜然としたあの姿を見るたび、胸の奥がざわめく。蒼穹に突如霹靂が走つた時のように、心をさらわれそうになる。あの双極の紫電に。

「劉王様のため……ですか？」

すっかり泣き顔になった桔久がさがるように問い掛けてくる。瑚蝶は力なく微笑んだ。

「……そうね」

頑なに過去を守ろうとする心と対峙する感情。それが何かを暴く覚悟は自分にはない。凌駕される前に封印しなくてはならない。

「でも……劉王様きつと悲しみます！ 瑚蝶様がいなくなったら

……」

「どうして？ 元々私はあの方がお戯れで拾ってきたもの。意味などないのよ。玩具のひとつがなくなっただからといって、采配を揮うには何の支障もないでしょう。悲しむ必要なんて……どこにもないわ」

「そんなこと絶対にありません！ 劉王様は、瑚蝶様には心を許していらつしゃいます！ 感情を滅多に見せない御方ですが、瑚蝶様という時はとても穏やかな表情をしてらつしゃるんです。わたしその顔がとても好きで……玩具の一つと思っているのならば、このお部屋をお与えになるはずがありません！ だってこの離宮は」

「桔久」

桔久の泣訴を遮り、瑚蝶は声を差し入れた。

「あなたの気持ちはとてもうれしいわ。でも私はもう決めたのよ、ここを出て行くことを」

涙で潤んだ桔久の目が、みるみるうちに大きく開かれていく。そして大きく首を横に振ると、瑚蝶の夜着の袖にしがみついてきた。

「いや…… 嫌です！ だったら……だったらわたしも一緒に行く！ 瑚蝶様のいないお城なんてどうしたらいいか！ 瑚蝶様が出て行くなら、わたしも行きます！」

これには瑚蝶も困り果てた。袖にとり付いて泣きじゃくるその様子には、もう宥めなどききそうもない。

付いて来てくれたらどんなに心安いか。桔久は瑚蝶がこの城

へ来て間もなく官女としてこの梓宮しきやうに上がった。自分付きの侍女として共に過ごすようになり、すべてを失った瑚蝶には妹のような存在であった。別れるのは心寂しい、だが連れて行くわけにはいかない。桔久は以前、皇帝の後宮に仕えるのが最大の夢だと話していた。そのために官女になる決意をしたのだと。その無垢な願いを摘み取ることなど出来るはずがない。揺れ動く気持ちに、瑚蝶は重い錠を下ろした。

「いい加減にきなさい、桔久。いつまで泣いているつもり？」

すがりついていた桔久の手を振りほどき、突き放す。瞠目して桔久は瑚蝶を見た。

「私が出て行くくらいで取り乱していてどうするの。私はあなたの仮初めの主人。時が来れば出て行くのは当たり前のことでしょう」

「わ、私わたしは瑚蝶様に三年もお仕えしてきました！そして本当に心からお仕えしたいと思っただんです！これからもお側にいようと……決めたんです。瑚蝶様がいなければここにいる意味がありません！」

厳しい瑚蝶の声音に、桔久は声を引きつらせた。潤んだ双眸が狼狽を映し出している。だが瑚蝶は声色を崩さなかった。

「後宮に仕えることがあなたの使命ではないの？それともそんな安易に碎いてしまえるほど微温な心だったのかしら？そうならば今すぐ郷里へお帰りなさい。ここにあなたは必要ないわ。それに私にも」

「う、嘘です……わざとそんなことおっしゃっているんでしょう？」

そんな心無い言葉を貴女様が本気で言うはずがありません」

「……それは私を買いかぶりすぎよ」

「いいえ、いいえ！ わたしにはわかっています！ でも無駄です、わたしの気持ちは変わりません」

祈るように両手を握り締め、桔久は頑なに否定を繰り返す。そうすることで何とか瑚蝶を引き止めようとしているのだろう。けなげなその姿から、瑚蝶は目を反らした。

「私はあなたが思っているほど良女ではないわ。でも自分の身分を知るだけの分別はあるつもりよ。だから偽ってきた」

「……え？」

「従順な振りをしてきたのよ。あの方の隙をつくためにね。でも誅易將軍に見抜かれてしまった。だからこれでお終いなよ、お芝居は。殺されなかっただけありがたいわ、命は惜しいもの」

寝台から立ち上がって、瑚蝶は窓辺へ寄った。風が強まってきたのか、窓枠がかたかたと音をたてている。寝台から腰をあげた桔久の姿が、闇色の硝子窓に映った。

「何を……おっしゃっているんですか？ まさか劉王様のお命を……狙っていたというのですか？」

桔久の声から勢いが消えた。背を向けたまま瑚蝶は唇の赴くままに答えを返す。

「そうよ。当然でしょう、私は家族を殺されたのよ。その相手を許すなんてことが出来るはずがない」

「じゃあ……じゃあ偽りだったというのですか！？　今までわたしたちに見せてくれた笑顔もお言葉もすべて」

「……もう疲れたわ。だからちようどよかったのよ。ここは窮屈で仕方のない場所だったんだもの。例え一生自由にはなれないのだとしても、せめて一人になりたいわ。もうここにいる意味はないのだし。だからあなたは邪魔なだけなのよ」

感情もなくただ言い捨てるようにして、瑚蝶は振り返った。この部屋に来た時のように桔久はすっかり顔色を失い、呆然と瑚蝶を見つめていた。

「……からかって……いらっしやるんでしょう？　そうなんでしょうっ？」

「まだそんなことを？　……冗談で言うはずがないでしょう。最後だから本当のことを言うまでよ」

「そんな……っ。わたし納得できません！　だって」

「……さよならね、桔久」

「瑚蝶様！」

「さよなら」

その言葉は完全に「拒絶」を表すものだった。言葉を失い、桔久

はよろめきながら後ずさった。

「……っ」

いつもは朗らかさを振りまくその顔が悲嘆に歪んだ。嗚咽をせき止めるように口元を両手で覆うと、涙が両頬を伝い落ちる寸前に瑚蝶から顔を背け、桔久は部屋を飛び出して行った。

扉が開いた衝動で、戸口を照らす燭台の炎が波打つ。遠ざかっていく沓の音が耳に響いた時、悔恨の情が瑚蝶の胸中を埋め尽くした。

私は、なんてことを。

「桔久……っ」

扉の外へ出たが、桔久の姿がもうそこにあるはずはなかった。回廊の先には、松明の明かりでさえも呑みこまれそうな夜陰が、ただ口を開けているだけだった。

これでいいのよ。

辛い気持ちはあった。だが然るべき結末だと、そう自分に言い聞かせる。自分ひとりの犠牲で済むのならそれでいいのだと。

扉を閉めようと瑚蝶は部屋に戻りかけた。その時、布沓の裏に硬い感触が当たったのに不信感を抱き、足元を見た。

煌く破片がそこら中に散らばっていた。

冷たい回廊の上で、割れた鏡面の欠片が陽炎のように揺らぐ松明の炎に反射して、鈍い光を放っていた。

## 【八】翠玉の庭

朝陽が頂点に向かって昇り始めた頃、白高を見下ろせる丘を、一頭の黒馬が荒々しく疾走していた。

「はっ！！」

その背に跨る一人の青年は、それでも足りないというようにさらに速くと手綱を握る。

年の頃は二十歳ほど。短い黒髪に、まだ幼さが抜けきらない少年顔。真つ直ぐに正面を見据える意志の強そつな瞳だけが、妙に精悍な印象を与える。

屈強とは言い難い華奢な肢体に纏うのは、青い袍。蒼天よりも深く、綿津見よりも澄んだその色は「青嵐せいらん」と呼ばれる。北の大国、西嶺せいりょうの秘色である。秘色とは、天子とその眷属だけが身に付けることを許されている色彩のこと。額には同じ色の布地が巻かれている。春風に煽られ眩しい青をたなびかせながら、駿馬は颯爽と駆け抜けていく。霞を払い除けた空は目映いばかりの蒼色に彩られ、緑豊かな春の野辺と優しく調和する。

丘陵はやがて平原へと繋がる。延々と広がる常盤色の海原の向うに、まもなく巨大な城門が見えてきた。

「はあっ！！」

一層強く、青年は馬の腹を蹴り速度を上げた。

“明朝至急来られたし”という書状が統の王から届いたのは一昨日の晩のこと。

急な呼びたては珍しいことじゃない。それが取り立てて「急事」でないこともよく知っていた。だが従わなければどんな嫌味を落とされるか

まったく、高慢チキな国主だぜ。

知己の仲だというのを理由に、自分をからかって遊んでいるだけなのだ。だが何事においてもまだ対抗出来る相手ではない。

自覚している己をなんとも情けなく思いながら王城の門をくぐり抜けると、その先の広場で青年は手綱を強く引いた。

いななき声を上げて、馬が前足を振り上げてばたつかせた。両足を地に着け落ち着かせたところで、青年はひらりと背から降り立った。

袍の襟元をゆるめて、青年は広場の先にそびえ立つ広大な大保殿を見上げた。

外朝の中枢であるこの宮殿の中に、玉座は据えられている。万劫の綺羅と謳われる統の歴史を支えてきた証 「太平の治」と称される良政を施いた多くの王達が受け継ぎ、国の繁栄を繋いできた。そしてこの時世にその栄華を難なく引き継いだ男こそ、青年の無二の朋友であり、好敵手であった。

見てろよ、いつかぜってー、追いついてやる。

天に続いているかのごとく積み上げられた階の先を、青年は見据えた。新王が即位したり功績をあげる度に、この石段は積み上げられる。まさに天子とは、神と近きに座す者というわけだ。

いつまでも見上げるだけでは終わるものか。そう青年が再び意志を新たに持ち直した時、高台の上に人影が現れた。それに気付いて、青年の口元がにやり、と笑みを含む。

「……へえ。お出迎えとは珍しいこつた」

額に巻かれる青の先が風に舞い、頬を掠めた。  
それを払いのけ、青年は長い石段を登り始めた。

同じ時分、瑚蝶は扉を叩く音で目を覚ました。

「失礼いたします、瑚蝶様。　あら、まだお休みでしたか」

扉を開けたすらりと背の高い少女が、寝台から起き上がった瑚蝶を見て目を瞠った。だるさで重い体を起こし、瑚蝶は少女に尋ねた。

「……今何時かしら」

差し込む陽射しに、瑚蝶は目を細めた。いつもなら赤紫の薄明かりが滲んでいるはずの窓の外は、もうすっかり明るい。

「五つ刻でございますよ」

茶器の載ったお盆を寝台の脇の台に置きながら、少女が答える。  
見慣れない官女であった。顔は知っているものの、名前が思いっかなかつた。薄紅色の女官服は尚位しょういと呼ばれる、雑務を担当する一般的な官女のものだ。桔久と同じ位の少女であることだけはわかつた。

「そう……ずいぶん寝過ごしてしまったみたいね。ところであなた

は……」

「あ、申し訳ありません、名乗りもせず。わたくし、紅鈴こうれいと申します。今朝は桔久の代わりに朝湯をお持ちしました」

朝に似つかわしい清らかな笑顔を見せ、紅鈴は窓を開けにかかった。年は桔久とそれほど変わらないように見えるが、慣れた身のこなしが大人びた雰囲気を彼女に与えている。

統王朝の宮官試験は、文官試験に劣らぬ難関と言われている。宮官達を束ねる抄ひょう 官正（女官頭）は家柄云々よりも淑徳・才気を重んじており、「才女」の育成に力を注いでいるのだ。紅鈴はその模範的な例のように思えた。

いつの間にも眠ったのだろう。

鈍い痛みで覆われているこめかみを、瑚蝶はそつと指で押さえた。

「珍しいですわね、瑚蝶様が朝寝坊なんて。でもたまにはいいと思います。少しお疲れのように見えますわ」

「……でも紫芳しほうの間に香を焚くのを忘れてしまったわ。毎朝朝議の前に焚く慣わしなのに」

こめかみを押さえながら、瑚蝶は細く溜め息を吐いた。きっと劉王に擲揄を飛ばされるに違いない。白花の香を焚く仕事は、劉王から直々に仰せつかった瑚蝶の役目だ。

「あら、今朝は朝議はありませんでしたのよ。ご存じなのかと思っ  
ていましたわ。桔久が昨日そう申し伝えませんでした？」

黒子のある口元に手を添え、紅鈴が首を傾げる。

「いいえ …… 桔久は、今日はどうしたのかしら？」

毎朝、朝議の始まる半刻前には必ず桔久は瑚蝶を呼びに来る。そして二人で紫芳の間へ向かうのが常だ。そそっかしいところはあるが、桔久のひたむきさと真面目さを瑚蝶は買っていた。寝過ごすことは滅多にないにしろ、彼女が起こしに来るといふ安心感に身を委ねてしまっている節もあった。

「それが突然今日は仕事を代わって欲しいと頼まれて……。それに少し顔色が優れないようでしたので、抄官正しやくわんせいに許可を得て部屋で休ませておりますの。ご諒恕くださいませ」

「そう……」

桔久が仕事を放棄した日など、今までに一度もなかった。 原  
因はわかっている。

私が、傷つけたんだわ。

おそらく昨晚部屋を訪ねて来たのは、朝議の中止を伝えるためだったのだろう。

透き通った大粒の涙が、瑚蝶の脳裏を過ぎった。

必要な、嘘だった。

後悔はすぐにしたが、一晩たった今でもそれははっきりと肯定できる。そうでもしなければ、桔久を遠ざけることなど出来なかっただろう。

「あら？」

紅鈴が小さく声を発した。中央の卓に近付くと、そこに広げられていた白い手巾の中を長身を屈めて覗き込む。

「まあ、割れた鏡じゃありませんの、いったいどうしたのですか？……あら、これ見覚えがあるわ。桔久の物ではありませんか？」

「……え？」

「やっぱりそうだね、この裏面や柄の彫刻……。桔久の兄君が作ったものですわ。彼女の兄君は腕のいい彫物師なんですよ。今は衛都ドゥーに工房を構えているとか。これは先日彼女に贈られてきたものですわ。そういえば彼女、これを蝴蝶様に差上げようってうれしそうに話していましたわ。きつとお似合いになるからと」

もったいないですわね、と紅鈴が漏らす。

桔久。

そんな彼女の思いなど知る由もなかった。蝴蝶の脳裏を、董の花のようなかわいらしい笑顔が過ぎった。

きつと大事に鏡を腕に抱えて来たのだらう。蝴蝶がどんな反応をするのかを思い浮かべながら。だが鏡とともに、その純粋な気持ちは壊してしまった。

「片付けますわね、危ないですから」

紅鈴が破片を折り込みながら手巾を畳み始める。

「待つて」

素早く寝台を下り、瑚蝶は紅鈴の腕を引き止めた。瞠目して紅鈴が瑚蝶を見上げる。

「……このままにしておいて、私がやるわ」

「え、でも」

「いいのよ、私の不注意で割ってしまったのだけれど……せっかく桔久がくれた物だから」

瑚蝶の制止に従い、紅鈴が破片を包みかけていた手巾から手を離れた。引継いで包み終えると、瑚蝶はそれを蝶貝の螺旋細工の施された蓋付きの箱の中に収めた。

出来る限り修復して、出て行くときに持っていこうと瑚蝶は考えていた。

側にはいられないが、せめてもの思い出として

「扉を開けておいてもよろしいですか？ 今日の特にいいお天気ですね、雲ひとつありませんわ。翠苑すいえんが一層引き立ちますわね」

気にする様子もなく紅鈴は最後に部屋の扉を完全に開け放つと、額に手をかざしながら眩しそうに内苑を見た。

四方から綾布のように柔らかい春の陽射しが部屋に差し込む。扉の向うに広がる内苑は、爛漫と咲き誇る花々に彩られた春の宴。それはまるで額縁の中の一枚の絵のようだ。

「梓宮にはたくさんお庭がありますけれど、ここほど丹精を凝らした花園はありませんわ。特別なお庭ですからね」

「……特別？」

訊き返した瑚蝶を、入り口から紅鈴が振り返る。

「ええ。この離宮は翠遥宮すいようきゆうと呼ばれておりまして、輝公……先の皇帝陛下の正妃様の居室だったんです。翠妃様は花を愛でるのがお好きな方で、そのために輝公はこのお庭だけは花を絶やさぬようにと命じられたとか。それにどの季節でも存分に景色を楽しめるようにと前栽の配置はすべて計算されているそうですわ」

「先代のというと……劉王の、お母君？」

「ええ、そうです。奥深い愛情を感じるお話ですわね」

恍惚とした表情で溜め息をつき、紅鈴は再び内苑に目を戻す。

なぜ。

瑚蝶の脳裏に咄嗟に浮かんだのはその二文字であった。その事實は瑚蝶に動揺を与えるには十分であった。

翠妃については瑚蝶はほとんど何も知らない。劉王が話したからないことに関しては、暗黙のうちに緘口令が布かれるからだ。ただ劉王が幼い頃に亡くなったということだけは耳に挟んだことがあった。

「……ではここは、劉王にとってお母様と過ごした思い出の場所でもあるのね」

そんな大切な場所を、どうして与えたりしたのか　それもいつ自分の命を狙うかもわからない女に。

「現陛下もこのお庭には随分とお心を注いでいるようですわ。今もこうして美しい風景があるのは、その証でございますわね」

紅鈴の返答を聞きながら、夜着のまま引き寄せられるように瑚蝶は回廊の棧まで出た。

目の前に広がる、春夏秋冬廃れを知らず息づく庭。

春には長閑に千々の花々が戯れ

夏には深緑の木立が惜しみなく大空に葉を広がり

秋には各々の色に染まった落葉の絨毯が敷かれ

冬には銀雪が裸木を飾り、閑寂で包む。

当たり前のように見ていた景色が、それほど思いがこめられたものだったとは

劉王は何も、瑚蝶に教えてはくれなかったのだ  
それはとても大事なことのように思えた。

「そういえば先程、阿樽様あくれがお見えになりましたわ」

思い出したとばかりに、紅鈴があ、と声を上げた。挙げられた隣国の皇太子の名に、瑚蝶は思わず振り返った。

「阿樽様が？」

「はい。陛下とご一緒に煬心殿へ行かれましたが……なにやら険悪なご様子でしたわ」

紅鈴があからさまに眉をひそめる。その名を聞けば大抵の官女は体を竦めてしまうほど、「阿樽」は怖れられた存在だった。

また、あの方の気まぐれで呼ばれたのかしら……。

どうやら行かなければならないようだ。一方的に吠えられている、涼しい容貌が目には浮かぶ。

「……紅鈴、着替えを手伝ってくれるかしら。私も阿樽様にごあいさつに行かなくてはね」

でもこれで最後。こうして義務を果たすのも。なにもかも。もう二度と……会うことはなくなるのだから。

そう自分に言い聞かせて、瑚蝶は棧から離れた。

## 【九】 三色の籠

「おい、劉閃」

両腕の中に積みあげられていく書物の重みに、阿搏あくれの片眉が苛立ちを表すように大きく跳ね上がった。

「なんだ？」

天井まで届く書架に立てかけた梯子の中段から、淡泊な声音とともに劉王が振り向く。その涼やかな双眸には、一点の悪びれもない。

「……まさか、調べ物を手伝わせるためにオレを呼んだのか？」

奥底で煮え始めた憤りをとりあえず抑え込んで、阿搏は自分を見下ろす男を睨み上げる。

「そうだが、何か？」

至極当然というような即答をよこして、劉王は書架から厚みのある書物を抜き出しては阿搏の腕の中に落としていく。煙がたつように本の間から埃が舞いあがり顔面に吹き付ける。計十二冊分の重みはずしりと押し掛かり、阿搏の細腕が軋んだ。

「ぶつ……ふ、ざけんなーっ！！ オレは小間使いじゃねえっつ！  
！しかもこんな薄汚いところに連れ込みやがって！」

阿搏の怒号が石造りの書庫にこだまする。

内朝の奥に位置する煬心殿・府庫。王族教育や文官職所として使

用されるこの殿下が抱える書庫には、歴代の皇帝によって収集された数十万冊もの蔵書が納められている。

壁という壁を書架で塞ぎ詰めた室内は、仄暗く、普段締め切つてあるために乾いた埃のおいが充満している。唯一の明り取りである天窓から差し込む黄土色の光の帯には、細かな埃の粒子が無数に泳ぐ。書架から追い出された書物が散乱する床には、埃が堆積し、人の出入りが滅多にないことを物語っていた。

「そうわめくな。余計に埃が立つ」

だが降りてくるのはあくまで冷静な声音。それが余計に阿樽の不機嫌を煽る。思わず手の中の書物をばら撒いてやりたい衝動に駆られたが、ぐつとこらえて阿樽は沈みかけた腕をなんとか持ちこたえた。常日頃から抱いている劉王への対抗心が、つまらぬ意地を張らせてしまう。

「これが“至急”なのかよっ！！ どこが！？ あほっ！ 帰るぞ、オレはっ！ 今日中に片付けなきゃならねえ仕事があるんだ！ てめえの気まぐれに付き合ってるヒマはねーんだよっ！」

「ああ、そうだった。西嶮<sup>せいろん</sup>の第二皇子は、その顔に似合わぬ“うつけ”であつたな」

そう嫌味交じりに口の端を引き上げ、劉王は梯子から降りた。そして牙を剥いている阿樽の腕中から、積み上がる書物を軽々と引き受けた。

「先日も独断で単身敵地に乗り込み、賊を討ち取ったとか。破天荒で強運な弟君を持って幸せだな、吉京陛下<sup>ききやう</sup>は」

口元に笑みを含んだまま、劉王は踵を返す。銀糸の縫い取りが見事な藍色の袍の裾が翻る。

唐突な振りに、阿搏は思わず言葉に詰まる。忘れかけていた脇腹の傷が不用意に痛んだ。

「…………それは嫌味だよな？」

「……どうとでも。それよりも少し付き合え、せつかく来たのだからな。瓊仙<sup>けいせん</sup>」という花の資料を探している」

心許ない木製の簡素な卓子の上にどさりと書籍を降ろすと、耳に馴染んだ傲慢な調子で劉王が阿搏を促してくる。

黎青<sup>りせい</sup>のヤツ！

もう一人の悪友、柔和な仮面を被った麒麟<sup>きりん</sup>の皇太子を思い浮かべて、阿搏は空になった拳を握り締めた。

城下を荒らしていた賊討伐の話は、兄であり西嶮皇帝の吉京と近臣たち、そして黎青しか知らない極秘事項だ。なぜなら「それは武勇伝ではなく、ただの無鉄砲だ」と散々反感を食らい、民や他国の批判を怖れた重臣等に隠匿されてしまったからである。

だから、劉王には言うつもりはなかった。ああやって、嫌味で非難されるのがわかっていたからだ。それを承知で密告する可能性がある人物といえば…………黎青しかないだろう。

「……なんだよ、その花」

不機嫌を絵に描いたようなしなめつ面で、阿搏は卓のほうへ近付いた。足跡が残るくらい灰塵が積もった床は、歩くたびに鳴き声のような音を上げる。

「昔父が何かの文献で知って、苗を探させたことがあった花だ。西遙の花だったと思うが……どの書だったかすっかり忘れてしまっただけだ」

傍にあった椅子を引き寄せると埃を叩いてそれに座り、劉王は書物を広げ始めた。

「花あ？」意外な探し物に、阿樽は呆れた声を上げる。

「それなら黎青に聞けばいいだろう。あいつの母上は、西遙人だし……ていうか、そんなもの見つけてどうするんだ？ 急に花なんて気色悪いぞ」

甘さなど微塵も無い精悍な美貌からは、花という優美な響きは想像しがたい。ついに公務に疲れて童心に帰りたくなったか、と阿樽の目に憐憫の情が浮かび上がるうとしていた時、

「珊瑚蝶のいる、翠遙宮の庭にどうかと思ってな」

「珊瑚蝶？」

その名を聞いた途端、阿樽の声音から一気に険が抜け落ちた。それに気付いたか、劉王の口元に密かに喜色が滲んむ。

「こ、珊瑚蝶が欲しがっているのか？ そ、それなら仕方ないな、手伝ってやる。それでどんな花だっ」

急に態度を変え引き摺ってきた椅子に座ると、阿樽は卓子の上の本を無造作にめくり始めた。その表情はやけに真剣だ。だが横柄さ

はそのままでも、どこか浮き足立っているのがわかる。

“西嶺の暴れ馬”をそそのかすには、並大抵の人材では適わない。幼少の頃からの入魂の仲とはいえ、劉王や黎青でもいまだに難しいくらいだ。だがそんな阿搏の心を簡単に揺るがす存在が、この城に一人だけいた。

「……なんだよ、何が可笑しいんだよ」

腹を折ってククク、と笑い出した劉王に阿搏は口をへの字に曲げる。

「赤い……花だ。紫蘭シランのような形をしている。どこかに絵があるはずだ」

「そうか、紫蘭だな、わかった……って、だからなんで人の顔見て笑うんだよっ！」

「いや……ククク、愚直もある意味財産かと思ってな」

「はあ??」

いい余興だ、と肩を震わせる劉王に、阿搏は解せぬ顔。

恋とは人の人格まで変えてしまうものなのか。気付かぬのは本人ばかりだが。

「それ以上笑うなっ！不愉快だっ！意味わかんねーんだよっ」

ついには顔を紅潮させて阿搏が怒声を轟かせた時、割って入るように書庫の鉄製の扉が開く錆びた音が響いた。

「……まったく、騒がしい城ですね。せつかく人が熟睡していたというのに。奇襲を掛けられて飛び起きたような心地ですよ」

扉の間から怜悯な美貌を覗かせて、銀髪の青年が深い溜め息をついた。そして次の瞬間、あからさまに表情を歪めた。

「……いやはや、ひどい空気ですねえ。せつかくの貴重な書が台無しだ。たまには虫干しでもしないと、これでは宝の持ち腐れですよ。劉閃」

麒麟の象徴色である白の袍の袖で鼻を覆いながら、黎青はすっかり物置と化した書庫を見回した。

「黎青！ お前も来てたのか」

阿搏が瞠目して椅子から立ち上がった。それを見て、黎青が清冽な泉のような薄青色の瞳を冷やかに細める。

「昨晚、遅くまで<sup>ウエイチー</sup>囲碁をしましてね。そのまま隣の房に泊まったんですよ。今朝までぐーっすり眠っていたんですが、先程貴方の大声が聞こえてきたのでこうして起きる羽目になったというわけです」

「だ、だってそれはコイツが！ オレは悪くないぞ！ たいした用もないのに呼び出したコイツが悪いっ」

冷色を帯びた黎青の声色に、阿搏の声が上ずる。

象牙のようななめらかな肌には一点の赤みも差してはいず、いささか病的に見える。温雅なうわべを滅多に崩さぬ黎青だが、寝起きの機嫌だけはすこぶる悪い。何度か地雷を踏んだことのある阿搏に

とっては、“遭遇したくないもの、第一位”に相当するほどのものであった。

「どつちでもいいですよ、とにかく僕が不愉快な目覚めをしたことには変わりはないんですから。それに昨夜の勝負の結果にも得心がいきませんし」

その視線を、黎青はそのまま劉王に流す。「結局2勝3敗で、勝ちを持っていかれてしまいましたから」

「それはお前が寝てしまったからだろう」

組んだ脚の上で書物をめくりながら、間髪いれずに劉王が返す。

「なに？ 二人でずっと囲碁をやったわけ？ なんでオレも昨夜呼ばなかったんだよ。そのほうが来るのはラクだったのに」

わざわざ早起きする必要はなかったと難癖をつけ出した阿樽に、劉王が書をなぞっていた視線を上げた。

「お前と囲碁を？ フ、五分と座ってられるのか？」

「ぬあつ、なんだとっ！！ ばかにすんなっ」

「お前には心理戦は向いてない。なんせ三国一落ち着きがないからな」

劉王の不敵な笑いが、再び阿樽の利かん気を扇動する。それを承知で言葉を選ぶのだから、性質が悪いこと極まりない。そこに目覚めの悪さを引きずる黎青の、棘のある賛同が突き刺さる。

「僕もそう思いますよ、阿搏。貴方、昔から同じ場所にじっとしてられる性質ではないでしょう。よく城を抜け出しては、教育顧問の愁走海殿しゅうそうかいが業を煮やしていたではありませんか。学問の字も教える隙がないと。そんな貴方に、碁を打つ集中力があるとは思えませんがどね」

「う……」

黎青にまで言われては、さすがに立つ瀬がない。反論は諦め、払拭できない怒りの皺を鼻頭に寄せたまま、阿搏は再びすとんと椅子に腰を下ろした。

「だが」視線を手元に戻していた劉王が、見計らったように口を開く。

「帝王学で時間を潰すんだったら、囲碁をやれ。その方がお前には役にたつ」

含蓄のある凜とした響きに、阿搏の注意が引き付けられる。

「なんだよ、それ」

「敵の心中を読みながら石を打つ 終局までは囲う地の支配権は確定せぬ、侵略も奪取も免れることは出来ない。ただ相手の石を生かさず、そして境界を破られぬような守りを張るべく苦心しなければならぬ。石の死活は勝敗の行方を握り、そして打ち手は石の命運を握る。戦局における兵の統御と同じよ。統率者は戦いの鍵を握る、そして数多の人間の命もな。水火も辞さぬ姿勢も立派だが、やみくもに剣を振るうだけではやがて足元を掬われる。 わかるか、

阿搏。速断を避ける為にも、指揮官には戦略に長けた冷静かつ卓越した判断力が必要だ」

常時よりも大分饒舌なその様子は、いささか妙なものであった。劉王のどこか忠言めいた口調に、阿搏は思わず間に立っている黎青を仰いだ。だが黎青は、両腕を組んで黙ったまま劉王を見つめている。

「……なんで急にそんなこと言い出すんだ？ それにオレは指揮官じゃない。軍を動かすのは王である兄上だ」

「だが病弱な吉京殿が完全に采配を振るうのは困難。そうなれば、いずれ次席に座するお前に全権が委ねられることもある」

「ば、ばかを言うな！ 兄上は大丈夫だ！ オレが支える！ 今までもそうしてきたんだ、それが親父の遺言でもある。兄上の背中はおれが守る！」

興奮気味に立ち上がり、阿搏が卓子をばんと両手で叩いた。天窓から差し込む光の量が徐々に強くなってきた石室に、その音が反響する。

阿搏には両親がない。母親は阿搏が物心ついた頃に病で儂く逝った。そして父王も六年前、阿搏が十四の時に崩御した。次代皇帝として即位した6才上の兄・吉京は廉直で賢明、王としての素質は十分持ち合わせてはいた。だが幼少から病弱でその資性を十分に発揮することが出来ず、実質執政は父王の代の重臣達に助けられ補われていると言っても過言ではなかった。そのため阿搏は阿搏なりに、西嶮の深刻な問題でもある山賊狩りに精力的に乗り出しているのだ。

それは他でもない、たった一人の肉親のためであった。

「万が一の話だ、そう噛み付くな。だがもしそうなった時、今のまのお前では戦局に混乱を招く。確かに西嶺の国府軍は強靱で有能と名高い。だがどんな奇策も良兵も、昏君の前では使い物にならぬ導く者によってその価値は決まるものだ、覚えておけ」

まるで何かを示唆するような劉王の言葉の羅列に、立腹気味であった阿樽は困惑の色を浮かべる。

「なんなんだよ……いきなり、マジな話して」

「別に。もう少し大人になれということだ。 　　いつ強大な敵が現れるかわからんからな」

そこで劉王は会話を切ってしまった。溜飲の下がらぬ阿樽の鼻に、再び皺が集結し始める。

そこへ、今まで二人のやりとりを黙視していた黎青が動いた。劉王の前までつかと歩み寄ると、右手を腰、左手を卓子の上の書物を押さえるように置き、顔を覗き込んだ。

「やれやれ。僕はいつまで貴方の言葉遊びにつきあえばいいのですかね？」

劉王よりは高い、甘さを含んだ声が囁くように言う。銀系の髪が、肩からこぼれ落ちてしなやかに揺れた。

「貴方は父君同様に穩健派ですからね。確たる証拠が無い限り、憶測で物を言うのは避けたいでしょうが……僕はごまかせませんよ？　　北の風が強まっていることくらい、気付いています」

寛敞あるその響きとひたと見据える蒼穹の双眸には、静かな激昂をちらつかせていた。劉王の昏黒の瞳が、悠然とそれを見返す。

「……万が一の話だ、と言っただろう。早合点するな」

「……だから僕らを呼んだんでしょ。それとなく示唆するために。劉閃、一人で背負い込むのはやめてください。幾ら貴方とて、両手で抱えきれぬ荷物じゃない。それとも僕らを見くびっているのですか？」

“ 北の風 ” それは先の大戦で封じ込めたはずだった。今一度吹けば、再び大陸に混沌が訪れるであろう。

「なんだよ？ 何の話だ？」

阿搏の声に、黎青ははっとしたように両目をわずかに見開いた。劉王と視線が絡まる。その目が何を言いたいのか、黎青にはわかった。

「 それにもうひとつ。僕が気に掛かるのは瑚蝶殿のことです」

体勢を立て直し、溜め息一つをそつと落として黎青は話題を変えた。せつかく出した追求の手を、そう簡単に引っ込める気はなかった。

「いつまで彼女をこの城に留めておくつもりですか？」

「……やれやれ、またその話か」

「はぐらかさないください。廟王朝攻伐に対する情だというのなら、何もここに留め置かずとも良いでしょう。その攻伐の理由も未だに聞いてはいない気がします。彼女は　　いつ仮面を脱ぐとも限らない」

「あやつが俺を謀殺するとも言うのか？」

物騒な劉王の物言いに、黎青が目を据える。

「おい、黎青！　瑚蝶がそんなことするはずがないだろーが。お前もよく知ってるだろう」

阿樽が横から口を挟むが、黎青の神経は劉王に向いたままだ。

「万が一……ですよ。恭順を示すのは女性特有の処世術とも言えます。彼女は頭のいい女性だ。それくらい簡単なことでしょう」

「では俺は、それに現を抜かしている莫迦殿ということか」

「劉閃、僕は真面目に話してるんですよ」

自嘲の笑いをこぼした劉王に、黎青がぴしゃりと言い放つ。

「僕は疑問なのです。夜伽の相手をさせるわけでもない、下女として従わせるわけでもない。ただ貴方の大切な離宮に困っている理由はなんですか？　その答えを聞くまで、今日はここを動きませんよ」

恫喝を含んだ黎青の声音が、ゆっくりと三人を取り巻く空気の温度を下げていこうとしていた。

外の時間とは裏腹に黄昏色に沈む石室に、静寂が降りる。  
「やれやれ、と劉王は肩から息を吐き出した。」

その時誰も、扉の外に佇む人物がいることには気付いていなかった。

開いた鉄の扉の隙間から漏れ聞こえた会話に、瑚蝶は表情を凍らせていた。

そして足は自然と、書庫から遠のいていった。

## 【拾】 暗示

なぜ。

朱柱の一つに寄り掛かり、瑚蝶は乱れた呼吸を整えようと胸元を押さえた。

規則正しく朱柱の立ち並ぶ回廊には人気は無い。走り抜けた沓音の余韻が、静寂にゆるやかになじんでいく。

なぜ、逃げる必要が？

早鐘のように律動を繰り返す自分の胸に、瑚蝶は問い掛ける。

聞こえたのは黎青の声だった。いつもの柔らかな響きから一転した、峻厳な声色。

『いつまで彼女をこの城に留めておくつもりですか？』

それはずっと、頭の片隅に引つ掛かっていたことではなかったか。ずっと知りたかったことではなかったのか。なのになぜ、聞くのを躊躇ったのだろうか

何を聞くのが、怖いというの？

落ち着きを取り戻した息遣いと鼓動が重なる。胸元に手を置いたまま、瑚蝶はゆっくりと深呼吸をした。体中の神経の強張りが、解けていくような気がした。

もう、関係なくなるのよ……。

ただの奴隷だと言われようと、退屈凌ぎの玩具だと言われようと。

黎青は自分の存在を快く思っていない。典雅な物腰や溫柔な外面で接してくれてはいても、彼の氷青色の瞳が時々見せる懸念の表情に瑚蝶は気付いていた。

だがそれは当然のこと。おそらく黎青と瑚蝶の心中にある疑問は一致する。

なぜ、劉王は

回廊に差し込む春陽が、磨き上げられた大理石の床に支柱の影をつくる。何本も連なる直立不動の細長い陰影は、巨大な鉄格子のよう。胸元を押さえていた手を、瑚蝶はそっと下ろした。

「どうかいたしましたか？」

とにかくここを出ようと朱柱から手を離れた時、背後から唐突に声を掛けられた。近付いてくる足音に、瑚蝶は振り返った。

回廊に並ぶ執務室の扉のひとつから歩いてきたのは、見知らぬ少年だった。

細面の、品の漂う顔立ち。年は十六・七に見て取れる。肩まで切り揃えられ結わずに下ろした黒髪は、彼がまだ成人を迎えていないことを表している。

だがその身につけているのは、文官の礼服である白い袍。その上に床を引きずりそうな大きめの翡翠色の外套を羽織っている。真新しいその礼服姿のぎこちなさが、彼の若さを一層引き立てているように見えた。

「ご気分でもお悪いのです？」

聡明そうな黒い瞳が、瑚蝶を窺ってくる。気遣うその声は、まだ幼さが目立つ。だが意志の強そうな凜とした響きを含んでいた。

少年と向き合い、瑚蝶は一礼をして答えた。

「少し……急いで息が上がっただけです。ご心配には及びません。ありがとうございます」

そうして顔を上げた時、少年の腰帯に下がっている宝玉が目に入った。

翠色の佩玉　それは、上級官吏の象徴色。紫・翠・青は中央省庁の上位の者しか佩帯することを許されていない玉だ。しかも翠ともなれば、中央政府の省令……つまり各省の長官職の色である。

自分と同じかそれより下か　いずれにしても年端のない若者が簡単に身に付けられるわけのない代物である。驚きの余り瑚蝶がしばし見入っていると、少年は安堵したように相好を崩した。

「そうですか、なら良いのですが。けれど少々、お顔色が悪い様子。よろしければ、居舎までお送りしましょうか」

そう尋ねてきた少年の顔を、瑚蝶は思わず凝視した。

居舎、とは宮官達の宿舎のことだ。どうやら瑚蝶を女官と間違えているらしい。瑚蝶が身に纏う退紅色の唐衣を、女官服と勘違いしているのだろう。

宮城に仕える官吏の間では自分の存在は周知の事実。そう思っただけに少年の対応は意外だった。だが悪気は感じなかった。むしろその真摯な様子からは純粹な優しさを感じた。

「その御方は宮官ではないぞ、秘書省令殿」

何と言ったらしいものかと瑚蝶が思索していると、見計らっていたかのような間合いで低い美声が沈黙を拭った。

「西侍郎」

呼びなれた風に名を挙げ、少年が目を瞪る。

その視線の先　陽射しが溢れ出しそうな内苑へ繋がる戸口に、装甲姿の長身の男が立っていた。見覚えのある人物だった。

「その方が瑚蝶殿だ、東省令。申し訳ない、瑚蝶殿。この者はい先日、昇試に及第して秘書省令を拝命したばかりでして。それまで

白高の役所勤めの文官補佐でしたので、まだ宮廷官吏としては右も左もわからないひよっこなのですよ。御寛恕を」

かしゃり、と甲冑の擦れ合う音をきかせながら男は戸口から回廊へと足を踏み入れた。

劉王と引けを取らないすらりとした上背。その歩む動作ひとつひとつに、洗練された威風を感じさせる逞しい風采だ。鈍い光を放つ銀褐色の甲冑がさらに雄々しさを添える。

そしてその腰紐には、高位を示す青色の佩玉。

精悍さを絵にしたようなその男は、瑚蝶の前で立ち止まると慇懃に深々と頭を垂れた。

「これは西侍郎様、ご機嫌麗しゅうございます。いいえ、失礼などとは毛頭思っておりません。むしろお優しいお氣遣いに、感銘を受けておりましたわ」

瑚蝶はそれに、嫣然たる微笑みをもって返礼する。無精髭を生やした顎をさすりながら、西蓉洵は笑い出した。

「はははは、感銘！ 男冥利に尽きますな、こんな美女からお褒めの言葉を頂くとは。世間知らずも時には幸運を呼び込むのだな、東省令」

そして少年に向かって、にやりと齒を覗かせた。

兵部侍郎・西蓉洵。

国政の中枢である三省の一つ、尚書省六部の中でも朝廷の武官たちを取り仕切る兵部の次官、それが彼の肩書きだ。同時に二十六の若さながら、統の禁衛軍・絳平軍じやうへいぐんの副將軍でもある蓉洵は、文武両道の俊傑と武官達の間では憧憬的である。

「一言……いや貴方の場合、二言も三言も余計ですよ、西侍郎」

蓉洵の野次に少年の声色があからさまに曇る。先程の温良さとは一転、恨めしさを惜し気もなく載せた辛辣な視線を蓉洵に送る。蓉

洵が大げさに肩を竦めてみせた。

「おいおい、つれないではないか。お前が今日から出仕すると聞いて、わざわざ祝いの言葉を掛けに来てやったのだぞ」

「入朝一日目にして、一番見たくない顔なんですけれどね。どうせからかいに来たのでしょうか？ でも貴方の戯言はもう聞き飽きました。ですから速やかにお引取りを」

「そう目くじらをたてるな、小花<sup>シャオホワ</sup>。純情可憐がお前の売りなんだから。ほら、美女が首を傾げていらっしやるぞ。自己紹介をしたらどうだ」

蓉洵の指摘に、少年ははっとした様子で表情を引きしめた。そして瑚蝶に向き直ると、一度咳払いをしてからぴんと背筋を伸ばした。「先程は失礼を致しました。本日付でこの煬心殿・府庫及び秘書官の監督に就任いたしました、東鳳仙<sup>とうほうせん</sup>と申します。以後お見知りおきの程を」

この三年で、瑚蝶自身随分と統の仕組みや内部事情には精通したと喋っている。

東鳳仙 その名は知らずとも、「東氏」の姓を戴く者となれば、出自はすぐに見当がついた。そしてこの二人が密接に結びついた間柄であることも。

「まあ、東夷候<sup>とういこう</sup>のご嫡男が入朝なさるとは、風の便りで聞いてはおりました。まさかこのようなお若い方とは驚きましたわ。お幾つですの？」

瑚蝶の感嘆の声に、鳳仙は少し強張った微笑を浮かべた。

「十七になりました。父がいるから、というわけではありません。それに私の属する秘書省は、西鄭候<sup>せいていこう</sup>が長を務める殿下省の配下。尚書省令の父とは直接の関係はありませんので」

東夷、西鄭、南聖、北呈 都のある白高を中央府とし、統は四地方に分割されている。そしてそれぞれの領土の実質上の覇権は、その地の名を持つ「四候」と呼ばれる諸侯の手に委ねられている。

四候は国政の中樞である三省と禁衛軍の長を務め、歴代皇帝補佐として朝廷では皇帝に次ぐ位階である。特に現四候は「四獅子」と称される勇将で、先代皇帝の親友でもあった。そしてその後裔達も、中央官庁の高位の官に据えられている。

「親父はいたくお前がお気に入りでな、東夷候に頭を下げてでも手元に欲しいなどと言っていたぞ。今頃小躍りしているだろうよ。瑚蝶殿、こやつはこれでも齡十三で文官試験を首席及第した不世出の秀才でしてね。今回の省令推挙は、父上の後ろ盾なくとも当然の結果と私はみています」

蓉洵がそう口を添えた。その眼差しは、まるで実の弟を見ているように優しい。鳳仙が気恥ずかしさを誤魔化すように、視線を逸らしてこほんと咳払いをした。

「ところで西侍郎、副將軍でもある貴方がいつまでこんなところで油を売っているつもりです？ 將軍にどやされますよ」

「おお、そうだった」

何か思い出したように、蓉洵が瑚蝶に向き直った。

「瑚蝶殿、先程誅易將軍が探しておられました。申し訳ない、すっかりお伝えするのが遅れて」

「誅易將軍が……ですか？」

「ええ。見かけたら居室へお戻りになって欲しいと伝えるように言われました。なにやら性急の用事があるそうで」

急用？

それが何かは、考えずとも見当がついた。

「あら、何かしら？」小首を傾げる装いをして、それから瑚蝶は蓉洵へ頷きを見せた。

「わかりました。すぐに戻ることいたしますわ。では東省令、私はこれで」

退出の礼を示した瑚蝶に、鳳仙は丁重な返礼をしながら言った。

「鳳仙、とお呼びください。その呼び名はまだ私には重過ぎます故」

生真面目そうなまつすぐなその双眸は、不思議と心引かれるものがある。思わず瑚蝶は解顔した。

「わかりました、鳳仙様。また お会いしましょう」  
そう告げて、瑚蝶はその場を後にした。

「なあ、どう思う？」

瑚蝶が煬心殿を出て行ったのを見届けて、蓉洵が声を低めて言った。

鳳仙は一回り年の上の幼なじみを見上げた。

「なにがですか？」

「瑚蝶殿さ。どう思った？」

煬心殿の入り口を見つめたまま、蓉洵が聞いてくる。いつもは半笑いを浮かべているその顔は、どこか超然として冷やかに思えた。

「美しい方、だと思えます。あの方が、廟王の姫君なのです。陛下がお救いになった」

「おっと、それ以上は言うなよ。その先は、皇帝と四候しか知らない極秘事項だから。もちろん彼女も知らない」

鳳仙の言葉の続きを掬い取り、蓉洵がしつ、と口元に人差し指を当ててみせた。鳳仙は浅く息をついた。

「……それを私たちが知っているのもどうかと思いますかね」

「仕方ねえだろ、偶然聞いちゃったもんは。なーに、黙ってりゃええんじやよ。気付かれやせんわい」

「……訛り、出てますよ」

「うー!? おっと! いかん、いかん。お前と話していると気が緩む」

鳳仙の指摘に、蓉洵は口元を押さえて瞬時に辺りを見回す。年の差と同じく一回りほど違う体躯の大男が慌てる様子に、鳳仙の口から再び溜め息が出る。

「時々不自然ですよ、貴方の標準語は。潔く田舎者だと認めればい

いのこ」

「じゃかあしいつ。わしが辺境の方言なんぞ使つとつたら、威信丸つぶれじゃろが。ここでは「都人」で通つとるん……だからな。余計なことは言うなよ」

相変わらず体裁ばかり気にする男だ、と思いながら、「はいはい」と鳳仙は口先だけの返事を返し、

「じゃあ私は房に戻ります。まだ荷物の整理が出来ていないので」  
蓉洵へ形だけの礼をして、踵を返した。その背中を蓉洵の声が引き止める。

「それよりも、早く城のことを覚える。府庫のお守はあつてないよ  
うな仕事だが、そうゆっくり大好きな書物を吟味している暇はない  
かもしれんぞ」

一歩進み出したところで、鳳仙は仕方なしに幼なじみを振り返った。  
「どういうことです？」

「今回の出世の理由は、及第のみではないということよ。知ってる  
か？ 征討軍が呼び戻された。合流次第、我が絳平軍と合同訓練を  
開始する。南藍世なんらんせいも、征討軍に加わることになった」

「それは」  
「まだ、なんともいえんがな。我々が耳にしたあの話に、通じるや  
もしれん」

「物騒ですね。では彼女を守らなくては」  
曇りのない真率さを映す鳳仙の貌かまに、蓉洵は小さく微笑した。

「案ずるな。陛下はちゃんとお考えだろう。ところで、困暮の誘い  
は来たか？」

「いいえ。なぜです？」  
「フフ、お前の役目はその時決まるのさ」

深遠な笑みを浮かべ、蓉洵は煬心殿の入り口に目を向けた。遅め  
の出仕にやってきた官吏達がぞろぞろと入ってくるのが見えた。や  
つと城が動き出す時間だ。

「若輩者と罵られぬよう、せいぜい奮励しろよ。親父殿の鼻をあか

してやれ」

鳳仙の髪に手を伸ばし、挨拶代わりに睿洵はくしゃりとそれを撫でた。

繻子のような細い髪は乱れることはなかったが、鳳仙は迷惑そうに面相を歪めた。そして挑むように相手を見上げた。

「言われなくとも」

一瞥を交わし、二人は同時に背を向けた。

## 【拾壹】 離夜

『出立は明朝 日の出前に、天和門へお出で下さいませ』

誅易ちゅういの勸告を受けたその夜、瑚蝶こちやうは自室で荷造りをしていた。

荷物はわずかだった。両手で持ち上げられるくらいの長持一つで済んでしまった。

誅易にもそう言われている。必要な物はもう、懐湖の住まいに用意されているということだった。この身一つでも構わないということだ。

仮初の暮らしを与えられていた瑚蝶にとって、それはとても皮肉なことに思えた。

それでも常時使用していた日用品の類を入れ、最後に割れた鏡の入っている籐の箱を収めた。

結局桔久とは話が出来ないままになってしまった。

でもその方がいいのだろう。別れの挨拶などしたところで、何の意味があるのか。

ここで出会ったものはすべて置いて行く、思い出もすべて。最初からそう納得していたはずだ。

長持の蓋を閉め、錠をかける。決して外れないように、固く。

呆気なく準備は完了してしまった。三年の長い日々を仕舞うのは本当に一瞬であった。

この部屋ともお別れね。

美しい庭とも。そう思うと惜しいような気持ちになって、瑚蝶は回廊へ出た。

松明の灯火で浮き上がる闇色の庭園は、日中のような華やかさはないが落ち着いた風致がある。花々もその身を休め、安息に浸っているのだろう。

人も自然物も同じように、安寧の時が必要なのだ。そうでなくては、いつか知らぬ間に我を忘れてしまつやもしれない。

もうすぐ夜半ほどであろうか。

後何刻かの後には、もうすべてが思い浮かべることしか出来なくなる。そしていつか、思い出すことすら出来なくなるのだろう。自分存在も、砂の城が風化していくように消えていくのだ。

それなら

ふと蝴蝶は思い立つ。

もう一度見たいものがあつた。

梓宮しげみやうには幾つかの庭園がある。

その中には、許可なしに立ち入れない特別な禁苑も存在する。

最後に、一目だけ。

最後の夜が白む前に。

室内に戻り卓子の上の燭台を取ると、蝴蝶はある場所に向かつた。

その禁苑は、後宮のある西内朝にある。

ここにはいずれ后妃達の住居となる「四の宮」と呼ばれる四つの宮殿がある。

その四の宮の奥に位置する正妃の居住区、紅紫宮こうむらさきみやうの奥へと蝴蝶は進んでいた。

深黒の閑寂に、沓音が高く響く。手に持つ燭台の灯りだけが、唯

一の光源であった。

西内朝は未だ主達を迎えられぬまま、無人の城となっている。空の宮殿の警護は、経費の削減も兼ねて随分前に廃止された。それ故、こうして入り込むのは難なきことであった。

本来ならば、この場所に足を踏み入れることは禁じられている。だがもう一度見たいと思うものは、この宮殿の奥にあった。

しばらく歩いて行くと壁が途切れ、苑を見渡せる回廊に出る。

その付近は、蝴蝶の期待通り仄かに青白い光が滲んでいた。近付いていくうちに、漆黒の闇が少しずつ薄らいでいくのがわかった。そして開けた空間に出た時、蝴蝶の前に幻想的な光景が現れた。

そこは一面、光を纏う花の咲く湖だった。

幻燈のような銀睡蓮ぎんすいれんの花が、常闇を映す湖面に無限に浮かんでいる。

白い花びらは青銀色の柔らかな霞に包まれ、月が落とした雫のように淡く輝いていた。

それは現の夢幻。

薄らかな光の被膜は闇夜に重なり、水苑全体を青白く浮かび上がらせている。その中央、水上に浮かぶ離宮へ続く回廊は、揺蕩う銀波に縁取られ、地上の天河のごとく湖上を跨ぐ。

湖のほとりにある方金の櫓へと、蝴蝶は回廊を降りた。石造りの櫓の欄干にもたれるように腰掛けて、蝴蝶は水上の星霜をぼんやりと眺めた。

「きれい……」

おのずと唇から感嘆の声がもれる。

月華を受けて、銀睡蓮は発光する。清廉なまでに、凄艶なまでに。これほど強い生の輝きがこの儂げな花のどこに宿っているのか。

この場所を教えてくれたのは、劉王だった。そしてこの花が

短い春の夜にしか咲かないということも。

だがそんなことも今思い出すと物悲しく感じた。

次の春、劉王は新しく迎えた妃とこのまほろばのように美しい銀閣を眺めるのだろう。回廊の先にある水上の離宮は正妃の閨房である。あの場所へ立ち入れるのは、正妃となる女性と、夫である王のみ。

夢想の楼閣で睦言を囁き、甘美な抱擁を交わす相手は……どんな姫君であろうか。

その時私はどこにいて、何を思うのだろう

欄干に腕を置き、瑚蝶は顔を伏せた。

今朝。

劉王は黎青の詰問に、なんと答えたのだろうか。

いや、考えずとも答えなど当にわかっているはずだ。

なのに、逃げた。怖かったのだ。あの唇から聞くのが。残酷な言葉に己を崩されるのが。

己の内に呪縛のように張り巡らせた何十本もの糸は、知らぬ間に擦り切れ、今にも途切れそうになっていることに瑚蝶は気付いた。

寂幕の降りた心を掻き乱すわずかな期待。

いったい何に？ その正体は、わからない。

だが何度捨てても生まれてしまう、苦しみを生むだけの  
脆弱な波動。 脆く

決めたのよ。

伏せたまま、両腕を抱え込むように瑚蝶は身を竦めた。髪に挿し

た金の蝶の簪が、しゅらりと音をたてた。

いつか、いつかこの手で仇をと。

何不自由ないここでの暮らしは、瑚蝶の決意を何度も鈍らせた。だが今もまだこの胸の中にある。月華のように密やかなれど、失われることなくそれは瑚蝶の暗澹たる前途を照らしてきた。

だが、そんなものは“希望”などではない。

そんなものを糧にして、生きたいとは思わない。

だが 他にどうしろというのだろう。

水はねの音が、時々微かに耳に届く。

それ以外は完全なる静夜であつた。

両腕に顔を埋めたまま、瑚蝶は己の息遣いを聞いていた。このまま静寂に抱かれていれば、無に還ることが出来るような気がした。そうしてどれくらいたっただろうか。

深淵に落ちかけた瑚蝶の意識を揺らす声があつた。

「咲き揃つたか」

はつとして瑚蝶は顔を上げた。

櫓の石柱にもたれるようにして、劉王が立っていた。雲間を縫つて途切れ途切れに差し込む月光が、劉王の麗姿を映し出す。青銀の光輝を称える水面に向けられていた鼻梁の通つた端正な横顔が、ゆつくりと瑚蝶に向く。

「こんな処で転寝か？ 春とはいえ、まだ夜風は冷たい。涼を求めるにはいささか早いぞ」

揶揄を載せた低声に問われて、瑚蝶は即座に立ち上がり、羽織つていた薄布を抱き寄せた。

「陛下。申し訳ありません、勝手に」

早々に立ち去ろうとした瑚蝶を、劉王の一声がやんわりと引き止める。

「構わん。此処は俺がお前に教えた場所だ。好きなだけ眺めていればいい。なにせ、この景観も暫時の命だ」

欄干へ両手を掛け、劉王は湖を見渡す。いつもは冠の中へ結い上げている黒髪は、今は綾紐で結い上げられ背に流している。簡素な袍を纏うその後ろ姿を、瑚蝶は見つめた。

「無人の宮殿には惜しい庭だな」

誰に向けた皮肉なのか、劉王が鼻で嗤う。

『それは、貴方様が后妃を迎えればよいことでございますわ』

いつもならそう返しているだろう。だが今夜はともその応酬を続ける気にはなれなかった。

「どうした、いつもの勢いがこないな」

沈黙を答えに選んだ瑚蝶を、劉王が振り返る。瑚蝶は小さく首を横に振った。

「そろそろ退屈してきたか。ならば、慰め種を見繕わねばなるまいな。じき銀睡蓮も終わる。では　あの部屋に移るといっのはどうだ？」

「…………え？」

劉王が一瞥を投げたのは、水上に浮かぶ白亜の離宮。幽光の連延の向うにあるそれは、まるで幻影のように美しい。

「…………冗談がすぎますわ、劉王」

唐突なその発言に、思わず苦笑が誘われる。

「冗談？　フ、いつもそう取られてしまうな」

闇夜と揃いの双黒が、瑚蝶と対峙する。涼やかな夜風が二人の間を通り過ぎ、湖上の光華を揺らしていく。不用意に左胸の芯が跳ねた。

「では、どういう意味だというのですか」

劉王の空言は聞き慣れている。浮かんでは消える泡沫ほどの重みしかないことも。

だが今宵はひどく揺さぶられてしまいそうな心地がした。

「そのままの意だ。他意などない」

短い劉王の返答には、いつものような含み笑いはない。感情の読み取れない声だった。

「それは “そのままの意” 悟れる意は一つしかない。

「それは、私に妾妃になれということですか？ 形だけの妃に据えると？ …… お戯れにも限度がございます。これ以上、私を惨めにするおつもりですか？」

あからさまに瑚蝶の声が震えた。劉王の手が欄干から離れる。

「何がお前を惨めにするというのだ？ この城で、そのような恥辱を受けた覚えでも？」

一步、一步、劉王は瑚蝶へ歩み寄る。言い知れぬ緊迫感を瑚蝶は肌で感じた。それでもその場を動かさずに、相手を迎えうつ。

「何が？ 忘れたとは言わせませんわ。貴方が私から何を奪ったか。私の家族に何をしたか……！」

躊躇いもなく、瑚蝶は語調を荒げた。劉王と向き合う度に、昔日の残影が瑚蝶の目の前に甦る。過去の亡霊が急ぎ立てているように

「それが、お前の拘りか」

瑚蝶の面前で歩みを止め、劉王が小さく溜め息をついた。寂寞と相俟って、それは無情に瑚蝶の耳に響いた。目睫の間でぶつかる黒曜の瞳は、三年前の運命の日を髣髴とさせる。

「その枷を与えたのは、貴方です。あの日から、私の運命は変わってしまった。でも私は それに屈したくはないのです」

真つ直ぐに劉王を見据えて、瑚蝶はきっぱりとそう言い放った。

皇帝を面罵することがどれ程の罪に値するか、それを知らぬわけではない。最後の夜、だからであろうか。今ならすべての思いを披瀝

しても構わないと思った。劉王がすつと目を細めた。

「人の宿命は如何程でも変わる。それに順応していくのは悪いことではない」

「それが捻じ曲げられたものだとしてもですか？ 仮初めの平安に安住出来るほど、私は愚かではありません」

「……なぜそこまで頑なになる」

詰るように、劉王が問う。その肩越しに水上の離殿が浮かび上がる。至福を約束するその場所は、白い靄の向こうに今にも消え入りそうに見えた。

「この三年、ひと時たりともお前に安息はなかったというのか」

劉王がもう一度問いかけてくる。

「それは」

「虎視眈々と、脱却の機会を窺っていたとでもいうのか？ 皆の目を欺こうと？」

矢継ぎ早な責め句が、瑚蝶の次の言葉を奪った。冷然と投げつけられたその声音は、苛立ちを含むように刺々しい。

「お前はそんなに、俺が憎いか」

水面に映る月が揺らいだ。

視線が絡み合う。劉王がもう一步、動いた。目線を捕らわれたまま、瑚蝶は足を引きずるようにして一步退く。

「桔久が」

唐突に劉王がその名を口にした。抑揚を抑えたその響きが間近に迫る。

「伏せているそうだな。仲違いとは珍しい。お前が、出て行く気だと漏らしていたそうだが」

「何の……お話です？」

「惚けるな」

作り笑いを見せようとした瑚蝶を、劉王は隙を与えず制する。

「ここからは、出しはしないぞ。 誅易に何を吹き込まれた？」

「何のことです。意味が」

にじり寄る劉王から逃れようと、瑚蝶はさらに後ずさる。だが、欄干に行き当たり逃げ道をなくした。すかさず劉王が瑚蝶の身体を挟み込むようにして、欄干に両手をついた。

「この城を出ることは許さぬ」

低音の美声が、瑚蝶の耳朶をくすぐる。至近に迫る劉王の体温に耐えられず、瑚蝶は思わず顔を背けて抵抗する。

「どい……てください」

「馬鹿な考えは捨てるんだな」

「なぜです？ なぜ私に拘るのですか？ 私一人捨て置いても、統に何の弊害があるでしょう。もう解放してください！ 私はいつまで籠の鳥ですか……！」

劉王の胸を両手で押し戻すようにして、睨みつける。  
端正な口元が、わずかに持ち上がったのを瑚蝶は見た。

「永遠にだ」

容赦ない抑圧の言葉が瑚蝶に振り下ろされる。愕然と目を瞠った瑚蝶から、劉王の威圧がゆっくりと離れた。

「俺の傍を離れることは、許さぬ。覚えておけ」

一言で国中を跪かせるその唇が、倣岸な戒めを瑚蝶の前に突き立てる。感情を排したかのような冷たい眼差しが、瑚蝶から離れた。玄色の髪を翻し、劉王の背中が遠ざかっていく。

月が翳り、水苑にもう一重漆黒の帳が降ろされる。月光が退き、最盛を極める銀睡蓮の輝きも弱々しくくすんでいく。元来の玄夜が、すべてを飲み込もうとしていた。

花びらが一枚一枚零れ落ちていくように、なくなっていけばいい。

胸に押し当てるように、瑚蝶は両手を握り締めた。  
例えようのないこの痛みは、いったい何？

瑚蝶の頬を、一筋の涙が伝い落ちた。

## 【拾貳】 出立

眠れぬ夜が黎明を連れて来る前に、瑚蝶は居室を出た。

荷物は誅易が寄越したらしい使いの男がすでに持つて行った。後にはもう残していくものばかりを一通り眺め、瑚蝶は静かに部屋の扉を閉めた。

朝末またきの微風が、別れの挨拶を送るように瑚蝶の艶やかな髪を掬う。真夜中の時分よりも薄らいだとはいえ、外はまだ闇色を留めていた。足元を照らす明かりが欲しいところだったが、人目につく危険性を考えて何も持たずに天和門へ向かった。

天和門は武翔殿の裏手に位置する通用門だ。普段は閉め切られている為、人の出入りも警備もない。密事に使うのにはまさにうってつけである。懐湖に向かうには随分と遠回りになるのだが、誅易がこの門を選んだ大きな理由はそれであろう。

人気のない宮城は、まるで巨大なだけの石の塊のように思えた。壮麗さも荘厳さも、今は深い眠りの最中である。回廊を幾つか抜けて、やがて天和門へと辿り着いた。

部屋を出た時よりも辺りは夜明け色に近付いていた。朝靄の立ち始めた門の付近に、一台の馬車がひっそりと停まっていた。荷台に幌のついた、立派とは言い難い簡素な物だ。物資を運ぶ為の荷馬車であろう。

御者台にいる男が、瑚蝶の方へ松明を掲げた。そして瑚蝶の姿を確認すると、背後の荷台の幌を少し持ち上げ、中に向かって何やら告げた。

肌寒さを感じたのか、御者台に繋がれている馬が足踏みをしながら軽く身震いをした。

瑚蝶が少し離れた場所で見守っていると、荷台の後部の幌が持ち上げられ、誰かが降り立った。

薄闇を切るように颯爽と歩んで来たのは、誅易ではなかった。

「お待ちしていました」

丁寧極まりないその口調。甘さを帯びた柔和なその響きは、内にある辛辣さを容易く隠匿してしまう不実な布帛。

驚きはしなかった。むしろ出来すぎているくらいに、その登場は自然に思えた。

「ここからは、僕がお送りいたします」

愾麟の皇太子　　黎青は瑚蝶にそう告げて、促すようにその長い銀髪を翻した。

「驚かれましたか？　まさか僕がこの一件に関与していたとは」

長持一つがあるだけの閑散とした幌馬車の中、向い合つて座る黎青が瑚蝶に尋ねた。

門を抜け、馬車は有明の広野をゆっくりと走り出した。

道が悪いせいで、思いのほか馬車は揺れた。物思いにふけて一晩を明かしたせいも倦怠感の広がりがつつある瑚蝶の身体には、わずかな揺れも骨にまで響くようだった。

「誅易殿を差し向けたのは、僕です」

瑚蝶は安価な荷馬車の似つかわしくない、品性のある顔立ちを見つめた。

「かねてより後宮のことに關して、彼はひどく腐心しているようでしたからね。示唆するのは簡単でした。ですが、誅易殿ではすぐに足がつく。あの方は見た目ほどの豪傑ではない。廉直で生真面目すぎる。家臣としては非常に重宝出来る存在でしょうが、謀事には向きません。わずかでも挙動不審な節があれば、劉閃に気付かれてしまふ。なのでこの先はすべて僕に一任して頂きました。これから貴女を懷湖の住いへ送り届けます」

義務的に説明を並べて、黎青は馬車の揺れに柳眉をひそめた。

「申し訳ありません、こんなものしか用意出来なくて。極力人目につかないようにしたかったので」

「いいえ」極力柔らかく、瑚蝶は言った。

「私を送り届けて、黎青様もお役目御免というわけですわね」

黎青がわずかに視線を下げた。

「僕を非情だとお思いでしょう。貴女の憤りは、ごもつともです」

瑚蝶は軽く首を左右に揺すった。

「そのようには思っておりません。すべて、劉王の為になさったことなのでしょ」

「……………そうだとしても、彼を欺いていることにもかわりはない」

徐々に夜明けの色が滲み始めた幌にもたれるようにして、黎青は己を恥じるように自嘲を漏らした。「けれど、劉閃の貴女への執心は目に余るように思えたのです」

車輪の軋む音が規則正しい馬の蹄の音に重なる。揺れも収まり、漸く馬車は一定の速度で進んでいく。

「それは私を監視するためでございます。刃を抜かぬようにと」「ふふ、妥当な答えですね。でも自分を愛しているから、とお考えには？」

瑚蝶の返答を予想していたかのように、挑発的に黎青は問いかける。ゆっくり瞬いて、瑚蝶は黎青の碧色の双眸に微笑みかけた。

「そのようなことは、決してありません」

『永遠にだ』

劉王の声が甦る。

あれが甘美な囁きだとしたら、愛とは一方的に相手を束縛するだけのものにすぎない。捕らわれの身と何が変わるのであるのか？それは随分と滑稽で愚かな感情に思えた。

変わった女だ。<sup>ひと</sup>

笑みさえ浮かべてはつきりと否定した瑚蝶に、黎青は少し憮然とした。

女というものは従順を武器に贅を尽くす打算的な存在だと思っていた。それは内面云々よりも外面を着飾ることばかりに夢中になっている妹達や、次期国王の肩書きにつられて言い寄ってくる欲心深い女性たちを見てきたからかもしれない。

だが瑚蝶はどうだ。何もかも与えられ何不自由ない暮らしを保障されても、毅然とした姿勢を崩さない。皇帝の傍という特異な立場にありながら媚びようとせず、恭順を示す風でもない。選ぶ言葉はこちらの意に添うように、そして優婉な微笑みで真意を包む。そうさせるのは、元王族としての矜持なのだろうか。

「随分と恬淡ですね」

黎青は思わず苦笑した。多少、嫌味を含めたつもりであった。だが瑚蝶はそれをものともせず、穏やかな微笑みで切り返す。

「杞憂ですわ、黎青様。劉王の花嫁の座など、考えも及ばぬことです。国王の評判をおとしめるような真似をするつもりはありませんわ」

「……こちらの心中をよくお察しだ。しかし疲れませんか？ 聞き分けのいい振りを続けるのは」

「聞き分け？」薄く紅を引いた唇が、わずかに弓月を形どる。

「処世術でございましょう？ 女人特有の」

どこかで聞いた台詞に、黎青ははっとする。

「聞いておられたのですか」

書庫での会話。

肯定するように、瑚蝶は目線を伏せた。長い睫毛が、瞳の表情を隠す。

「そうでしたか……では正直に申しませう。貴女のご存在は僕にとって大憂なのです。いつか傾国の種になるのではないかと立ち上がり、黎青は荷台の後部へ近付いた。そして出入り口であ

る垂れ幕を半ば開いた。

差し込んできた暁の眩耀に、蝴蝶は目を細めた。

東の間のうちに、帳の向うは旦日あしたを迎えていた。夜の名残を払拭した早辰の光が、馬車が通ってきた長い白砂利の道に、両側に広がる金稜花の咲く緑土に惜しみなく降り注ぐ。

城以外で迎える朝は、蝴蝶にとつて久しぶりであった。その道の先にもう王宮の姿はない。かわりに地平線に見えるのは、溢れ出す金砂のような明光だった。

朝陽を受けてその眩しさを露にしていく金稜花が思い出を呼ぶ。

金稜花の花冠を　劉王が編んでくれたのはいつだっただろうか。

ほんの数日前のこと、だがもう懐かしささえ感じるようだった。

「我等三国の結束は永劫揺るぎなきもの。今は亡き、二国の先王達と父はそう誓いを交わしたそうです。願わくばそうあって欲しい、僕は思っています。劉閃は僕らの先に立つべき人だ。ゆくゆくは三国の旗を束ねる器になれる。だが貴女を傍らに置くようになって危惧が生まれた。　恋情は、時に人を墮落させる。どんな誉れ高い人間にでもそれは起こり得る。僕は女に現を抜かすあの人など見たくはない。僕を　・・・がっかりさせてほしくないのです」

振り返った黎青の髪が、暁光を受けて鋼のように細くたなびいて輝く。

「・・・それは随分、傲慢な意見ではありませんか？」

「ええ、わかつています。ですが阿搏にとつても僕にとつても、劉閃はこの上ない目標なのです」

淡然と保っていた表情を黎青は初めて和らげた。

「申し訳ありません。身勝手を、お許しください。どうも僕は劉閃や阿搏のこととなると、物事の見境がなくなるようです」

唯一無二の大切な友。

王族としてこの世に生を受けたことを黎青は「不運」と考えていた。

幼年より身分の違いから同じ年頃の友人も出来ず、人々は自分を

見る度面を伏せて通り過ぎた。腫れ物に触るように、誰もが遠巻きに黎青と接した。王宮とは邪佞・横虐のはびこる不穏な世、誰を信用してよいのかわからない。次第にそう思うようになった。

だからこそ、同じ境涯にある二人の皇子は唯一信じられる存在であった。彼らと供に歩んできた年月が、どれほど心の糧になったことか。一生を賭して報いるべき、と決めるに値する存在なのだ。

それを聞いて瑚蝶は微笑を零した。

「才智溢れる黎青様でも、弱点はございますのね。でもそれは重きを置く場所が違っただけですわ。何が大切か、何が重要か。それは皆異なります。だからあらぬ齟齬も、生まれるのです。すべては劉王を大切に思うが故、私が黎青様でも同じ事をしたかもしれません。羨ましいですわ、とは口にしなかった。まるで同情を誘いたいが為の発言に思えたから。」

「………ありがとうございます」

朝風のように清々しい声で黎青は礼を告げた。そして再び少し堅い表情を引き戻した。

「だから僕はいらぬことまで拘ってしまうのですね。劉閃が貴女に特別な感情を抱いているのは確かです。あの人に恋焦がれる女性が多い。しかし浮いた話は今まで一度も聞こえてきたことがない。そんな男が母上の離宮に女性を囲うなど前代未聞です。そう思わないほうがおかしい」

ばさりと幕を下ろし、黎青は再び瑚蝶の向かいに腰を落ち着けた。

劉王が、私を？

一度も考えつかなかったわけではない。だがそれは、瑚蝶が意識的に頭の隅へ隅へと追いやっていった事柄であった。訳もなく沈んでいく気持ちに、気付かないようにするためであった。

だからって、どうだというの？

もう二度と会うことはないのに。考えるだけでもう無駄なこと。やっとなんか自由になれるのに。

振り払うことが出来ず、劉王の顔ばかりがちらついて仕方がない。

「しかし、それをただの恋情と片付けてしまふにはいささか腑に落ちないのです。あの人は……何か重大なことを隠している」  
黎青が再び切り出した。

「重大なこと？」

意味がわからず、瑚蝶は黎青の言葉をなぞった。黎青が浅く頷く。  
「あの人は一人で何でも背負い込む悪い癖があるんです。僕が何度問いただしたところで折れる性格ではない。今朝だつてそうです。結局貴女のこととはうまくはぐらかされてしまった。だがどうして話を濁す必要があるのか、僕には疑問なのです」

御者台の方から「森に入ります」という声が聞こえた。その声に引き寄せられたように瞬時に朝陽が遮られ、薄闇が馬車内に押し寄せる。その変化に瞬刻気を取られたが、二人は同時にお互いへと意識を戻した。

「ずっと気になっていたことがあるのです。廟王……貴女のお父上についてです」

「え？」

まさか黎青の口から聞くとは思ってもみなかった名に、瑚蝶は瞬きすら忘れそうになった。

「私の……父様？」

もう二度と、音にならない言葉だと思っていた。

そつと口にしたその二文字が、鐘の音のように瑚蝶の耳に反響した。引き寄せられた哀切と思慕が、鮮明に穏やかな面差しを脳裏に象つていく。

黎青は覚悟を決めたように深く息を吐いた。

「これは、今更言うべきことではないのかもしれませんが。けれど貴女には、知る権利がある。小国とはいえ、廟国は治世の行き届いた国と評判でした。先代統王は廟王の篤実な人柄を誰よりも買っていた。真相は定かではありませんが、両国は正式な和親書の調印式を執り行う予定でした。僕が聞く限りでは、二国の間に争いの火種はないように思えました」

「黎青様。 いったい、何を」

動揺が走り抜けた。何を言われたのかわからず、頭の中が真っ白に染まりそうになる。絶望が浮かびあがりそうになる前に、もう一度確かめようと瑚蝶が口を開きかけた時、

「うわあああっ！！」

御者台から突如悲鳴が上がり、耳をつんざくような馬の否鳴き声が轟いた。

【拾参】 畏

重なるように馬車の両側から複数の喚声が上がった。馬車は激しく揺れ、そして突然止まった。

「きゃあつ」

「瑚蝶殿！」

急停止したはずみを食って倒れこみそうになった瑚蝶を、黎青が素早く受け止めた。

「ひいいいっ！！」

もう一度聞こえた御者の叫び声に二人は弾かれたように顔を上げた。何かが切り裂かれたような音がしたかと思うと赤い飛沫が幌に飛び散り、そしてどさりと地面に落ちる音がした。

「ひっ……！！」

思わず瑚蝶は両手で口元を覆った。悲鳴が喉元で凍りつく。全身に戦慄が走り抜けた。

「いったい何が

思考回路が追いつかない。今身動きがとれる感情は言い知れぬ恐怖だけだった。

刀剣の切っ先が次々に幌に突き刺さる。荷台を覆うその覆いが四方から切り裂かれていく。垂れ幕が取り払われ、髭面の男が荷台に乗り上げてきた。

「いたぞ！！」

寂のある大声を後ろに響かせ伸びた髭の中からややと齒を覗かせると、男は腰から太刀を抜いた。

貪欲そうな鈍い光を見せた太い刃に、黎青の腕の中にいた瑚蝶の身体は反射的に硬直する。男が大腿で近付く。そして大きく太刀を振りかざした。

殺される……！！

目を閉じることすら出来ずにそう覚悟した刹那、黎青の体温が離れた。剽悍な動きで腰帯に下がっていた太刀をスラリと抜き、男の懐に飛び込む。

瞬く間の出来事だった。

男が太刀を振り下ろすより先に、黎青の細い鋭利な刃が男の腹を切り裂いていた。

「ぐ……あつ……っ」

振り上げられた男の手から太刀がこぼれ落ちた。白目を剥いた男の膝が折れ、そして前のめりに倒れた。

「 瑚蝶殿、ここを動かないで下さい」

座り込んだ姿勢のまま、瑚蝶は畏怖を込めて黎青の背中を見上げた。静かな闘気がその後ろ姿を取り巻いていた。ことされた男に一瞥もくれず汚れを払うように白銀の刃を上下に一振りして、黎青は男の死体を飛び越え馬車の外へ降り立った。

待ち構えていた男達が即座に取り囲む。黎青に向かって鋭い刃先が向けられた。

一、二、三、四……その数は七。

どの男も体格がよく、薄汚い短衣を纏っている。そしてどの目も、久々の食料にありつこうとする猛獣のように耽耽と黎青を狙っていた。

「 何者。何が目的だ」

剣鉞で円を描くように男たちをなぞりながら、黎青は鋭く問う。

答えはない。だがあからさまな殺気を突きつけられているのは肌で感じた。寸分の隙も与えぬように、黎青は男達全員を睥睨し意識を集中させる。

賊か？ こんな早朝の森で？

妙であった。

この森はさして深くはない。抜ければすぐに街もある。周囲には

切り立った山もなく、緑土や田畑が続く見通しのいい田園地帯だ。それにこの道は、今や閉鎖された天和門へ続く一本道、滅多に通行する者はいない。凶事を働こうと潜むにしては、随分と要領が悪いのではないか。

初めから、待ち伏せていた？ だが、何の為に？

「もう一度問う。何が目的でこのような狼藉を？」

だが男達は、へへへと下卑た薄ら笑いを浮かべるだけだ。黎青は嫌悪を示すべく眉根を寄せ、更に視線を据えていく。

その双眸がひとたび凍気を纏えば、白皙の美貌から溫柔さは掻き消える。激しい情念を閉じ込めた二つの氷晶に、凄絶な鬼迫が宿り始める。

「いいでしょう、答える気がないのなら結構。ですが行く手を塞がれるのは大変迷惑です。退く気がないのでしたら、排除するまで」

その言葉を嚙矢がわりに黎青は右手の太刀を持ち直し、眼前に水平に構えた。

「掛かれ!!」

男の一人が叫んだ。賛同の咆哮を響かせて、黎青の目の前の男が切りかかる。

だが遅い。

左足を軸にして踏み出した黎青の白刃が一寸先に見事な半円を描いた。まるで疾風。その細腕からは想像出来ぬ、強靭さであった。鮮血が刃筋に沿って後ろに飛ぶ。その飛沫は背後で身構えていた男の顔面に飛び散った。胸を割かれた目の前の男が血だまりを作って倒れるより早く、黎青は敏捷な動きで身体を半回転させ背後の男の懐に飛び込む。

「多勢に無勢だと……読みが甘いですよ。僕はこれも寧猛種でしてね。一度火がつくと容赦を知らない性質なので、普段は抑えているんですが」

男の太い喉下にびたりとその犀利な刃を押し当て、妙に安定感の

ある低声で囁く。

“目を愉しませる美貌は母譲り、内なる猛然さは父譲り　見事な間の子よ”

そう黎青を称したのは劉王の父。笑壺に入るほどそれは傑作だったらしい。

「それでも多少僕にも慈悲の心はありますよ　今は持ち合わせていませんが。あいにくでしたね」

意図的に黎青は表情を和らげた。そして一気に男の首筋に沿って太刀を引き、そのまま腹部に突き刺した。串刺しになった男が傾倒してくる前に黎青は太刀を引き抜いた。そしてくずおれた男をかわし、再び剣を構える。

瞬く間にひらめいた殺刃を目の当たりにして、残りの男達がひるんだのを黎青は見取った。

少し距離を取るべきか。

切り裂かれた幌馬車が一瞬視界に入る。残り五人、片付けるのは難儀なことではない。だが一度には無理だ。その間に策に窮して瑚蝶を人質に取られては厄介、それでは身動きが取れなくなる。

これ以上足止めされては面倒だ。

悟られぬように注意深く敵を引きつけながら、黎青は少しずつ馬車から男たちを引き離し始めた。

黎青様………！

外で太刀のかち合う音がする度、瑚蝶の身体は大きく震えた。

単身で飛び出した黎青の身を案じるものの、身体の力がすっかり抜けて立ち上がれない。

いったい何が起こったというのか。

家族を失ってから外界との繋がりを遮断されていた瑚蝶にとって、この事態はひどく衝撃的であった。

冷静さはすっかり抜け落ち、狼狽することがやつとの状態だった。一歩城の外に出れば自分は赤子のように無防備で無力だと、思い知らされたようだった。

黎青様を助けなければ……。

先ほどの太刀捌きを見れば蠡青の剣の腕が抜きん出ていることは亮然だ。だが聞こえる声や足音から推測しても、相手は一人二人ではないだろう。いくら明敏犀利な黎青といえども苦戦するかもしれない。

何か武器を

助太刀には到底及ばなくても、ここでただ怯えてじっとしているのは躊躇われた。

もう“籠”の中にはないのだ。自分の身は自分で守ることを覚えなければならぬのだ。

少し離れたところにうつ伏せに倒れている男の死体が目に入る。その傍に大ぶりな太刀が放り出されている。だが瑚蝶の腕では扱える代物ではない。さらに辺りを見回しながら、荷車の前部隅に転がっている長持に気付いた。

あの中に護身用の小刀を入れたはずだ。

それを思い出し、瑚蝶は衣が汚れるのも気にせず長持へと力の抜けた両手、両膝を使って這っていく。

そして蓋に掛かった錠に手を伸ばした時だった。

血飛沫が染めた帳の向う、御者台に影が揺らめき立った。不気味な気配を感じ、はっとして瑚蝶は顔を上げた。

帳がゆっくりと持ち上がり、男が現れた。

いや 男、というには不確かな格好であった。

闇夜のような漆黒の外套で全身を包み、顔には仮面をつけている。外套を頭巾のように頭から被って体形を隠しているために男女の区

別はつかない。その下に潜むのが本当に人であるのか、それすらも定かではない気がした。まるで冥府から彷徨い出た亡霊なりのような態であった。

「だ……れ……?」

二つ開いた細い楕円形の窪みを蝴蝶は恐々と見上げた。あたかも深い洞窟のようにその穴の奥は見えない。だが視線がかち合っている感覚があった。奇人は無言のまま、帳の中へ蝴蝶へと近づく。

立ちはだかるその威圧感や上背からして、男だと蝴蝶は直感的に悟った。押し寄せた恐怖が逃げると急き立てる。咄嗟に立ち上がるうと動いた蝴蝶に男の腕が伸びた。

「きゃ……!!」

片手で乱暴に口を覆われ悲鳴を奪われる。もう片方の手が蝴蝶の胸部に回り動きを封じた。

いや!!

両手で振り払おうともがくがまるでびくともしない。歴然とした力の差であった。

誰か……!!

引き摺られていく両足に渾身の力を込める。どうにか振りほどこうと身を擦る。蝴蝶の必死の抵抗に苛立ちを感じたか、仮面の下からくもった舌打ちが聞こえた。だがそれを聞いた直後、重い鈍痛が腹部を突き抜けた。

……け……て……

無情にも目の前が翳んでいく。

落ちていく寸前、ぼんやりと仇であるあの男の驕慢な笑みが蝴蝶の意識の中を掠めた。

だがそれが誰かを悟る前に、意識は暗闇の中に沈んでいった。

【拾四】 隠 匿

同刻、朝影遙かに大地に行き渡り、国中の金稜花が輝き出した頃。目覚めたばかりの梓宮は、官吏達の日常業務の忙しなさとは別にわかたに沸き立っていた。

「申し訳ありません……！ わたしが、わたしがちゃんと付いていれば……！」

朝議を終えた劉王の前に、少女は泣きじゃくりながら崩れ落ちた。蝴蝶がいなくなったことに真つ先に気付いたのは桔久であった。

一昨日前のこともあり気まずさを覚えながらもいつもの務め、朝議の前に紫芳の間に香を焚くために、明け方桔久は蝴蝶を呼びに翠遙宮へと向かった。だが部屋はもぬけの空。探し回ったが蝴蝶はおらず、途方にくれて泣き喚いているところを他の女官が気付き誅易に報告した。そして朝議の終わるのを待って、劉王の前に通されたというわけだ。

皇帝の御前であるのにも関わらず激しく泣き伏す桔久の姿に、紫芳の間にいた朝臣達が何事かと顔を見合わせる。

劉王が含蓄ある一瞥を誅易に送る。その意図を諒解し、誅易は皆を部屋の外へと促した。

「西侍郎、貴殿は残ってくれ」

皆と同じく退室しようとしていた兵部次席・西せいようじゅう蓉洵は、劉王に呼び止められ戸口で振り返った。

「え？ あ、はい……」

惘然とした様子で、蓉洵が誅易を見る。反応に困ったように、誅易は視線をわずかに泳がせた。四人を残し、紫芳の間の扉が閉められた。その音を聞いて桔久が顔を上げた。しかし次々に込み上げては溢れていく涙をせき止められず、しゃくりあげるばかりだ。懸命に止まぬ涙を拭っている様子を顔色一つ変えずに眺め、次いで劉王は誅易に視点を移した。

「どう思う？ 誅易」

早朝でも曇りない凜とした声にそう振られて、誅易は少し考え込む素振りを見せる。そしてさも厳しい顔付きで献言した。「私が思いますに、最近瑚蝶殿は少し情緒不安定だったように見受けられました。その所為でよからぬ考えに辿り着いたのやもしれませぬ。実は物資運搬用の馬車が一台見当たらないのです。もしや士官の誰ぞやと通じて逃亡の画策をしていたのでは……あくまで私の私見ですが。馬車の行方については目下搜索中でございます」

虚言うそであった。

搜索などするわけがない。行き先は重々存知しているのだから。これが劉王に対しての最初で最後の背信行為となることを願いながら、誅易は芝居がかった硬い表情を保っていた。

「嘘です！！」

だが事は円滑にはいかなかった。突然勢いよく顔を上げ、泣き腫らした顔で桔久が反論した。

「逃亡なんて言いがかりです！ 誅易將軍が瑚蝶様に出て行くようにと命じたのです！ 瑚蝶様の御意志ではありません！」

「なっ……突然何を言う！ 立場をわきまえぬかっ」

声が裏返りそうになりながら、誅易は桔久を鋭く叱責する。しかし桔久は臆することなく食い下がる。

「主人の名誉が汚されるのを黙って聞いているわけにはいきません！ それにわたし聞いていました！ 瑚蝶様と將軍が話されているのを」

不味い。

思わぬ刺客の登場に誅易の額に冷や汗が浮かぶ。これ以上喋られたら総てがふいになる。助勢を求めて部下である蓉洵を見遣るが、彼は「何で俺がここに」と言いたげな顔で遠巻きに眺めているだけだった。

「それはまことか？ 誅易」

静まり返った劉王の声音が誅易を突く。冷やりとした手が首元に

差し込まれた時のような寒気が誅易の背に這い上がった。凜と張った涼しげな目元に動きを封じられて、今にも自白してしまいそうだった。

「わ、私にはそのような覚えは。心配で尋ねたことはございましたが。しかしこの一件は注意を怠った私にも責任があります。瑚蝶殿の変化に気付いていたにも関わらず、それを黙視していたことは事実。申し訳ありません」

ともかくここは詫びを入れるのが得策、と誅易が首を垂れようとした時、「ほう」と劉王が片眉をかすかに上げた。

「己の失態を認めるとは随分と殊勝なことだな、誅易。ではそれに腹をたてた俺が何を命じたところで異議はなかるうな？」

「え？ は、はっ！ その所存でございます」

「先刻、士官の中に手ほどきをした者がいる、と言ったな」

「は……？ はあ」

「では全士官に当たり、その者をはじめ出せ。今日中にだ。瑚蝶は戦利品として連れ帰ったもの。まだ用途はある、みすみす逃すわけにはいかぬ」

「ぜ、全……！？ お、お言葉ですが現在城に出仕している士官だけでもその数は数百、とても私一人では」

「異存があるのか？」

劉王の涼やかな目元に愉悦の色が浮かぶ。

「あ、ありません。こ、心得ました」

唸るように誅易はがくりと頭を垂れた。見抜かれている、と気付いたのはその時であった。取ったつもりがまたもや一本取られたようだ。まるで碁を打つように、劉王はじわりじわりと攻めてくる。目先の利益を確保することに気を取られているうちにその間隙をつかれ、いつの間にか形勢を覆されてしまうのだ。それが劉王の詰問の手であるということに、誅易は毎回目論見が破綻してから気付くのであった。

「軍の面倒は優秀な部下に任せるが良い。そうだろう、西侍郎？」

唐突な振りに蓉洵は面食らう。

そういうことか。

劉王の意図がなんとなく読めた気がした。どうやら誅易を追い込む作戦のようだ、と。

納得しかけていると、便宜を求めるような恨みがましい誅易の目付きとぶつかった。だが権威の重きを考慮すれば、蓉洵の中で忠義を向ける方向はすでに明らかであった。

「陛下の命とあらば、御意に。ご安心の程を、將軍。遠征軍の到着もまだですし、平常訓練でしたら一日くらい私がみても問題はないでしょう」

理知的な微笑みをもって蓉洵は誅易に向かって頷いて見せた。劉王がくすりと笑う。

「だそうだ、頼もしいな。これで後顧の憂いなく己の任務に従事出来るであろう。早速取り掛かったらどうだ？」

「……お、仰せのままに」

こうして無益な犯人探しを命じられ、誅易はその巨体を丸めながらやむなく紫芳の間を後にした。

「さて」

誅易が出て行くのを見届けて、劉王は座り込んだまま唇を噛みしめて俯く桔久の前で膝を折った。

「桔久といったな。お前はそれほどまでに蝴蝶が好きか」

突然眼前に迫った劉王の秀麗な顔に、桔久ははちきれんばかりに目を見開いた。

「は、はい……！ わ、私は一生あの方にお仕えする気持ちであります」

「だがもう、二度と戻らぬやもしれんぞ。此度の失踪が亜奴自らの意思であるならな」

「そ、そのようなことは決してありません！ すべて將軍のはかりごとにございますー！」

思わず声を高くした桔久だったがそこは皇帝の面前、自分の犯し

た失態に急に青ざめて両手で口を覆った。

「も、申し訳ありませんっ！！」

再び両目に涙を溜めて、桔久はがたがたと震え出す。今にも失神しそうなその顔色に、劉王は失笑を漏らした。

「そう怖れずともよい、取って食いそうにでも見えるか？ 安心しろ、まだそれほど餓えてはおらん。それよりも先刻の話を聞こうか。誅易と瑚蝶が何を話していたと？」

思いがけず穏やかに問われて、桔久は慌てて零れ落ちた涙を官女服の袖で拭った。

「は、はい。すべてを聞いたわけではないのですが………將軍は、瑚蝶様を解放すべきだとおっしゃっていました。そのために別の住いを用意したとか、それから、后妃を迎える準備がどうか」「なるほど」桔久の話に浅く頷いて劉王は後ろに立っている蓉洵に声を投げた。

「西侍郎。女一人が安穩と暮らせるような土地といえば、貴殿ならば何所を思い浮かべる？」

「またもや急な振りに、顎の無精髭をさすりながら蓉洵は双龍の天井画を仰ぐ。

「………そうですねえ、見つからぬように隠すとしたら山奥でしょうか。そうなると東夷地方の輝陽か、南聖地方の懐湖辺りですかね。懐湖は素封家の子女が訪れることで名高い温泉郷。寡婦となり单身移り住む者も多いと聞きます。女人の一人住いには慣れた土地かと」

「まったくの思いつきで蓉洵が挙げた土地の名に、劉王の口元がゆるりと綻んだ。

「懐湖ならば、どんなに遅い馬車でも半日ほどか」

「あの………」

若干震えを帯びた声で桔久が切り出した。

「非礼を承知で………申し上げます。瑚蝶様を引き止められなかったのはわたしの罪です。どんな罰でも受けます。このまま、

わたしを切り捨てても構いません！　ですがどうか、瑚蝶様を連れ戻してくださいませ……！　確かに瑚蝶様にとって、今の境遇は心許ないものかもしれません。けれどあの方にはもう他にいく場所などないのです。それは陛下がよくご存じのはず。それにこの一年ほどでやっと、あの方は本当の笑顔を見せてくださるようになったのです。もう二度と失わせないでくださいませ。わたしは瑚蝶様の悲しい顔は見たくはないのです。それが陛下の義務でございます。罪は　消えることはありません。ですがわたしは、瑚蝶様の心の枷を軽くすることが出来るのは陛下ではないかと思うのです」

懇願するような目で真つ直ぐに劉王を見上げながら、桔久は言い切った。

覚悟を決めたその表情は、先程の怯えを一掃した毅然たるものであった。

まさに極刑必至の訴えであった。

玉座に近付いただけでも重刑に値するこの時世に、よもや眼前で皇帝に諫言するとは。学のない貧しい農民でもそんな馬鹿な真似はしないであろうと言えるほどの、愚の骨頂。

重鎮の嫡子でありある程度の権力を約束されている身の蓉洵といえども、桔久のその剣幕には啞然とさせられた。

「随分と惚れられたものだな、亜奴も」だが劉王はそれを叱責する様子はなく、喉の奥で笑いを噛み殺している。

「　だが、見つけたところで素直に戻るかな？　俺はあれからは憎まれ口しか聞いたことが無いぞ」

「いいえ！　だって瑚蝶様は出て行くのは陛下の重荷になりたくないからだ、そうおっしゃっていました。憎んでいるだけの相手にそんな心配りなど出来ません！」

懸命に首を横に振る桔久の力説に劉王は「……………そうかと短く答え、立ち上がった。

「責任を感じているか？」

不安そうに自分を仰ぐ桔久を見下ろして、劉王は訊いた。大きな

両目に一瞬畏れの色が過ぎつたが、固唾を飲んで桔久ははい、と呟くように言った。

「ではこの先、翠遙宮の管理はお前に一任しよう。その主人も含めてだ。次からは鎖でもつけて繋いでおくんだな。よいか？ わかったらもう行くがよい」

思わぬ言葉に桔久は一瞬呆然とする。だが劉王が自分の意を解してくれたのだと悟り、

「は、はい……！」

とこぼれそうなほどの満面の笑顔で力強く頷いた。

「初めからお気付きだったのでしよう、將軍が関与していることに桔久も立ち去った室内で、蓉洵は少し大げさに溜め息をついた。

「面白いほど顔に出るからな」

厳肅さの滲み出る紫の衣装が振り返る。だがその衣を纏う男の口元にはくだけた笑み。

「では初めから問い糺してもよかったのでは？」

「ふ、面目を損じるような問いには口を割るまい。あれでも禁軍指揮官として名望ある身だからな。だがこの一計、誅易の専断とは言い難い」

「それは 將軍に示唆した者がいるということですか？」

是を示すように劉王は口角を引き上げてみせる。さして深刻そうでない余裕漂うその素振りを、蓉洵は怪訝そうに眺めた。

飄々としおつて。

何度となく対話をして読めぬ若僧だ、と蓉洵は胸中で毒づく。

年の差は二歳なれど泰然自若とした挙止や言動は時折妙に鼻持ちならない。それに加え身丈も己とさほど変わらないというのがかわいげがない。見下ろせる位置にいるのなら「小童が」と罵れたものを。それは単なる“ひがみ”なのであるが。

蓉洵が朝廷で確固たる地位を築き上げることが出来たのは、背後に四宰の一人で西鄭地方領主の父が控えているからではない。壮拳

と呼ばれる統の官吏登用試験では「七光」は通用しない。名家出身といえども実力を示せなければ最終試である殿試に辿り着くのは至難の技、華々しい経歴を手襷掛けすることは出来ないというわけだ。それ故蓉洵には、刻苦なくして世襲君臨した国王などには劣らぬ才器であるという自負があつた。

「そう悠長に構えているばかりでは、手に入るものも入らなくなりますよ。困うだけでは女性の心は留まりませんからね」

嫌味のつもりで蓉洵は同じ目線の高さの男に言った。

劉王の有能さは認めている。だが身魂投げ打って尽くすべき存在であるのか、それはまだ見極め途中だ。完全に忠義を預けるには時期尚早、そう思っていた。

「貴殿は瑚蝶の存在を疎ましくは思わないのか」  
「それは」

瑚蝶のことは杞憂ではある。だが蓉洵の場合は他臣とは少し観点が違っていた。

なぜ劉王が瑚蝶に拘りを見せるのか、その“事情”を知っているからだ。

だがそれを劉王に告げるつもりはなかった。とりたてて国政に何事も影響がなければ、皇帝の艶聞で片付けられる事項であるからだ。何より面倒事にはなるべく黙殺したいというのが蓉洵の正直な気持ちであつた。

「私が口出することではないでしょう。………決めるのは、貴方様ご自身でしょうから。それよりも早めに手を打ったほうがよいのでは？ 將軍の降伏を待つよりも、早馬でも放ったほうが手っ取り早いと思います」

いかがいたしますか、と蓉洵が提言する。女一人己の力で手にいれられんようでは甲斐性者と呼ばべんと思つてはいたが、“臣下としての義理はきっちり果たす”それが蓉洵の方針だ。だがしばしの沈黙の後劉王はゆるやかに首を横に振り、

「いや それよりも、貴殿には他に頼みたいことがある」

蓉洵の対抗意識を煽るような、強かな笑みを呈示した。

迂闊だった。

門をくぐるやいなや、黎青は馬を捨て置き梓宮内へと向かった。己への苛立ちが募る。

なぜあの男達が囷だと気付かなかったのか。狙いは瑚蝶だということに

男達を馬車から引き離そうとしたことがそもそも間違いだっただ。黎青を馬車から遠ざける、それが敵の目論見だったのだから。

だがなぜ、瑚蝶殿を攫う必要があるのだ？

苦渋の表情を浮かべながら、黎青は外朝の殿下への石段を昇って行った。

「見て、黎青様よ」

常時のように颯爽と現れた隣国の貴公子の姿に、女官達が騒ぎ出す。だがその姿を見とめるやいなや、皆一様にぎよっとした顔つきになった。

その出で立ち、いつもの玉姿からは想像出来ないほど不自然であった。

星河を閉じ込めたような美しい銀の髪は乱れ、明け方の明るい昊に似た青磁色の長袍の裾は泥まみれである。そしてその上品な袍の上には、点々と飛び散る赤い染み。加えて修羅の如き気迫が宿る陰相に圧倒されて、皆放心したように回廊を突き抜けて内朝の方へ向かっていく背中を見送った。

内朝の入り口に位置する皇帝が常政を執る場所である貴宝殿きほうてんを抜け、黎青は木蓮の咲く庭院に降り立った。

「邦昌！！」

首をめぐらし、城の食客の姿を探す。大抵邦昌はこの庭院の木上を好んで身を潜めているはずだった。だが返事はない。

「いないのか、邦昌！！」

邦昌であればこうした事態には手馴れているはず、賊徒の居場所を突き止めることくらい難なきことであるう。そう踏んで黎青は取敢えず梓宮に戻ってきたのであった。

だが庭院に生い茂る常緑の大樹からは一向に返答がある様子はない。かわりにたわわに枝に揺れる木蓮が馥郁とした香りを振りまいていたが、酔い痴れる余裕が今の黎青にあるはずもなかった。

ここではないのか。

脳裏に梓宮の見取り図を広げる。幼少より自宮のように親しむこの城のことは大体黎青の頭の中には入っていた。そして見当をつけ、別の庭に向かうべく引き返そうとした時だった。

「どうした、黎青？ 随分と早いお出ましたな」  
はっとして黎青は背後を顧みた。

古代紫の龍袍に金欄の帯という正装に身を固めた劉王が、貴宝殿の内から歩んで来る。

「劉閃、邦昌は何処です」  
庭院への階段の手前で立ち止まり、劉王は詰め寄った黎青を眺め下ろした。

「何事だ、一体。酷い格好だぞ、野盗にでも襲われたか？」

「そんなことより、邦昌は何処です！」

只ならぬ黎青の剣幕に、劉王の後ろにいた蓉洵が顔を覗かせた。そして異状に気付き、口を開く。

「公子、酷い怪我をしておられる」

蓉洵の指摘に黎青は己の左腕に目を向けた。左腕は血まみれだった。二の腕部分の布地は裂け、深い傷口が開いている。傷口から流れ出た血は固まりかけて赤黒く変色し始めていた。

斬りつけられたことなどすっかり忘れていた。途端に痛みが舞い戻り、黎青は息を詰めた。

「邦昌は今出払っている。それより傷の手当てが先決だろう。一体、何があった」

黎青は親友を仰ぎ見た。

冷静さを欠いていた頭に、理性がおりてくる。それに順じて悪辣な閃きが滑り込んできた。

このまま、言わずにおくのだ、と。

珊瑚蝶を見捨てたからといって、何の損害があるのか。

どうせ排除しようとしていたのだ。深憂は消え、むしろ都合なのではないか。このまま何事もなかったかのように日々が流れていくことが、何よりの望みなのだ

「……………いえ」

俯きがちに黎青は頭を横に振った。

卑劣なこととわかっている、だが。

「何も。山犬を、四、五匹殺しただけです」

胸の奥で揺れていた天秤が傾いた音を、黎青は聞いた気がした。

【拾伍】 陰謀と呵責

薄暗い場所で瑚蝶は目を覚ました。

雨漏りのような水音がする。かすかに動いた指先に、冷たい何か  
が落ちた。

寒い。

意識とともに塞き止められていた身体中の感覚が溶け出したよう  
に戻ってくる。その途端に全身に痺れのような震えが走った。

身体を起こそうとするが、予測なく気を失ったせいか力の入れ方  
がわからない。助けを求める声の代わりに、指先を一本一本確かめ  
るように動かしていく。ざらざらとした感触が手の皮膚に触れた。  
どうやら麻のようなもので出来た敷物の上に横たえられているよう  
だった。

冷え切った唇に己の息の温かさが触れる。震えるその吐息を、唯一  
聞こえる水滴の間隔に重なるようにしてゆっくりと整えていく。

ここは、どこ……？

横倒れになったまま、瑚蝶は目だけを周囲に走らせた。

夕闇が降りたような薄暗い空間。雨の降った後のようなじつとり  
とした冷たい空気が淀み、床の石畳は濡れて暗がりでも不気味に黒光  
っている。家具のようなものは視界の範囲内では何も見当たらない。  
見えるのは、立ち塞がる床と同じ石の壁だけだった。

背後の石壁越しに足音が聞こえてきた。

四方に反響し幾重にも重なりながら、その音は徐々に近付いてく  
る。やがて足音はすぐ近くで止まった。扉の開く軋んだ音。そして  
靴音が入ってくる。背後からやってきた規則正しい歩行音は、  
瑚蝶の顔の前に来て止まった。黒い外套に覆い隠された足元から、  
ゆっくりと瑚蝶は視線を上に向けていった。

視線が辿り着いた先にあったのは、瑚蝶が気を失う前に見た仮面  
だった。洞のような二つ並んだ楕円の穴が、瑚蝶を見下ろしている。

震える唇を蝴蝶は小さく開いた。

「だ………れ」

水滴が連続して石畳に落ちた。

仮面の奇人は無言で蝴蝶を見下ろしている。ただ静かに、人ではなく闇そのもののように。

「だ、れなの………？」

佇むだけのその恐怖に耐え切れず、蝴蝶は玄色の奇人にもう一度問い掛けた。だが仮面の下からはなんの返答もない。答えを拒むように背を向けると奇人は部屋の隅へ歩んで行き、壁際に座り込んでしまった。そしてそのまま蹲り、微動だにしなくなった。

漸く強張りの解けてきた体を、蝴蝶は少しずつ起こし始めた。

辺りを見回す。そこはまさに牢獄と呼べる場所であった。板を貼り合せた扉以外に窓もなく今が昼なのか夜なのかもわからない。

「ここはどこなの？」

疑問を口にしても答えはない。

「貴方はいったい誰なの？」

だが根気強く蝴蝶は続けた。謎に包まれた今の状況を少しでも解明せねばならないと思った。

「どうして………私をここへ？ 馬車を襲ったのは貴方の一味の仕業なの？」

己の声だけが虚しく石壁に消えていく。嘆息し、蝴蝶は目を伏せた。

黎青様………。

まさか彼もどこかに捕らわれているのだろうか。それを確かめようと蝴蝶が再び口を開こうとした時、壁の向うから複数の足音が鳴り響いてきた。そして再び扉が開いた。

「おや、起きていたかい」

蝴蝶に向かって松明の灯が差し出された。眩しさに怪訝に細めた視界の中、灯りを持って入ってきた二人の男の間から一人の女が現れた。

松明の炎に、金糸の牡丹の織り込まれた派手な繻子地の着物姿が浮かび上がる。ふくよかな体つきの中年頃の女だった。首や腕を飾る華麗な宝飾品の音を纏わりつかせながら珊瑚蝶の前に進み出て、女は膝を折った。

「どれどれ、ちゃんと顔をお見せ」

珊瑚蝶の顎を女の手が無遠慮に掴み、上を向かせる。

「なるほどこれは上等だね。これならば祖王もお喜びになるだろう」  
紅を塗りすぎてはれぼったくなった紅い唇を満足そうに歪めて、女はしゃがれた声で笑った。目元に朱を差し黒紅で大きく縁取られた双眸が珊瑚蝶を眺め回し、弓月型に細められる。素肌が見えないほど白粉をはたいたその丸い顔は、笑うたびに深い皺の跡が刻まれる。過剰なほどに飾り立てたその姿は、美しいとは言い難い妖気が漂っていた。

「お前は母親によく似ているよ。あの女は身分は卑しかったが器量だけはよかつたからねえ。それだけは有難いことだったね」

血塗れたように女の唇が光る。顎を捉えられたまま、珊瑚蝶は女を凝然と見上げた。

「なぜ……母を」

「ほほほほ、知っているとも。アタシの大嫌いな男の妻だからね。

お前のこともよく知っているよ、珊瑚蝶」

まるで以前のからの知り合いのような口振り。だが珊瑚蝶には思い当たる節はまったくなかった。

「貴女は……いったい誰？」

それを聞くと女は急に笑うのをやめ、冷めた顔つきになった。

「……兄さんはやはりアタシのことを話さなかったんだね。どこまでも性悪な男だ。アタシはお前の実の叔母だつていうのに、お前が生まれたことすら知らされなかった」

叔母？

珊瑚蝶は駭然と目を瞪るしかなかった。父に兄弟がいることなど聞いたことがなかったからだ。

「アタシの名は朱麗しゅれい。お前の父親とは血を分けた兄妹さ。もつとも不仲だったから、そう言うのも虫唾が走るけどねえ」

温度を排した冷えた声音に瑚蝶は混乱する。脳裏に悲惨な過去の場面が甦る。

「だったら……. . . . . だったらどうして」

「今まで名乗り出なかったかって？ アタシはねえ、あの男が大嫌いだっただんだよ。だからあの男やその家族がどうなるうとどうでもよかつたんだ。死んでくれて逆に清々したくらいさ」

肉付きのいい肩を小刻みに震わせて朱麗がせせら笑う。信じ難いその言葉に、瑚蝶の四肢に戦慄が走った。しかしそれは惧れではなく憤りだった。引き裂かれる思いがして瑚蝶は叫んだ。

「なぜ……. . . . . ! なぜそんな酷いことを!!」

「なぜ？ ぬくぬくと育つたお前にはわからないだろう。お前の父親の仕打ちでアタシがどんなに苦労したか……. . . . . !」

かっと思を向くと、朱麗は瑚蝶の顎から手を振り払い乱暴に突き飛ばした。

「自分が王位に就くと、邪魔だとばかりに和睦の為と称しアタシを祖の高官の元へ無理矢理嫁がせたのさ！ 内乱や敗戦の余波でアタシ達が困窮した時も手を差し伸べてはくれなかつた！ 昔からそうさ。要領がよくて狡猾で、賢君の仮面を被り人を欺くのは巧妙で。思いやりの欠片もない男だったよ。アタシはいいように捨て駒にされたのさ！」

朱麗が立ち上がる。麻の敷物に両手をついて体を支えながら、瑚蝶は朱麗を見据えた。

「……. . . . . なんだい、その目は。反抗的だね」

「父は……. . . . . 父はそんな無慈悲ではありません！ 誰よりも家族や民を愛し、砕心していました！ 父を侮辱しないで！」

感情に任せて声を張り上げるのは劉王の前でもほとんどなかつた。少なくとも、劉王は両親のことを瑚蝶の前で愚弄することはなかつたからだ。だが今目の前で肉親だと告げた女は、易々と父を侮蔑し

た。天涯孤独の身の上でなかったなどという喜びなど、微塵も生まれてこなかった。

「ふん！ 偉そうな口を訊くんじゃないよ！ 自分の置かれた状況がわかっていないようだね」

鋭く咎め、朱麗は鼻頭にきつく皺を寄せた。

「なぜ私を捕らえる必要が？ これが……父への意趣返しだとしても言うの？」

「そんなちっぽけなことじゃない。アタシはね、兄がせしめた自分の財産を取り戻したいだけさ」

「財産？」

両側に赤々と燃える松明が、女の邪悪な笑顔を浮かび上がらせる。「廟を取り戻すのさ。祖王の力を借りてね。兄が死んだんだから、あの場所も城もアタシのものになるのが道理だろう？」

「父も母も……皆殺されたのよ。血のつながりがあるというなら弔おうという気持ちはないの！？」

「言っただろう、どうだっていいんだよそんなこと。兄が死んだという報せを聞いた時、やっと恵まれないアタシに好機が訪れたと思っただね。それなのに、統王は宣撫工作してあっさり領民ごと総てをかっさらっていつちまった。そしてお前もね。だから取り返すんじゃないか。祖王様がお力をお貸しくださるんだ」

「え……？」

「お前だって統王が憎いんだろう？ 形見を取り戻したいとは思わないかい？ そのために協力しておくれ。祖王様の後宮に入るだけでいいんだよ。そうすれば統王はお前を取り戻す為に取引に応じるだろう」

後宮 それはつまり祖王の妾妃になれということだ。取引

それは統に対しての宣戦布告にも値する。

祖王は大陸の最北の一領主に封じられ権力を奪われたと聞いている。領土を与えたのは三国の恩情からだ。なのにその恩恵の裏で未だに捲土重来を密かに目論んでいるというのか。そしてその引き金を引

けというのか

「私利私欲のために争いを起こそうというの？ 私を 利用する  
為に故意に放っておいたというの？」

そんな魂胆で自分をここに連れてきたのかと、瑚蝶は愕然とした。  
我欲にまみれた女の声も顔もひどくおぞましく感じた。

「そんなことをして取り戻しても、父上は喜ばない！ 誰もそんな  
こと望まないわ！」

滑稽にも思える朱麗の造り込まれた顔を瑚蝶は睨みつけた。だが  
朱麗は驕慢な笑い声で瑚蝶の糾弾を一蹴した。

「お前の父の為じゃない。アタシの為さ。是が非でも協力してもら  
うよ。……安心おし、お前ならすぐ気にいられるよ。あ  
お方は若い娘に目がないからねえ」

喉の奥でくつくつと笑い、朱麗は両側に直立したままの男達に手  
の平を返す合図を送った。男達が扉まで下がっていく。

「いいかい、出発は明日の夜だ。逃げ出そうとしても無駄だよ、こ  
こは山奥だからね。後で見張りを寄越すから、それまで見ておいで

邦昌

邦昌？

瑚蝶が振り返ると、部屋の隅に蹲っていた黒い影がゆらりと立  
ち上がったのは同時だった。

そんな……まさか

「こつちへおいで、邦昌」

呼ばれるまま朱麗の方へ歩んでいくその姿を、瑚蝶は瞬きも忘れ  
て追いかけた。仮面の奇人が朱麗の隣に立つ。自分の額の高さにあ  
るその肩に朱麗は馴れ馴れしく手を置いた。

「お前のことはこの子が逐一報告してくれていたよ。随分と統王に  
かわいがられていたそうじゃないか。機が熟すのを待った甲斐があ  
ったってもんだねえ。お前は極上の取引材料になるよ」

寄り添う二人の姿に、拒絶反応が沸き起こり瑚蝶は必死に首を横に振った。

「うそ・・・うそでしょう？ 邦昌がこんなところにいるはず」

「あはははは！ 何もかも手はず通りだよ・・・ねえ、かわいいたタシの息子。さあ、仮面をとってご挨拶おし。お姫様には礼儀を示さなきゃいけないからね」

朱麗の言葉に、黒衣の下から伸びた手がその身に纏う外套を引き剥がした。その下には男物の同色の短衣。肩から外套が滑り落ちた時、その腕に巻かれた白い包帯が露になった。

まさか、そんな

その包帯には見覚えがあった。

身体から剥がした玄衣を石畳へと落とした手が顔を覆う仮面を掴み、ゆっくりと上に引き上げていく。

そして瑚蝶の目に残酷な答えが映し出された。

徐々に激しさを増していく雨音を、黎青はわずかに開いた部戸越しにぼんやりと聞いていた。

正午を迎えた頃から澄み切った碧霄は黒雲で淀み、雷声をともなう驟雨に変わった。日の光を遮られて辺りは瞬く間に翳が落ち、休息のために与えられた梓宮内の客房にはすでに燭台に炎が明々と灯されていた。

身体は鉛の枷を付けられたように重くだるく感じた。空で唸る春雷でさえも手当てを施した右腕に響くほど、ひどい疲労感が身体中に瀰漫していた。劉王が用意させた紺青の寛衣の袖の上から、黎青は疼く傷跡を押さえた。

何を後悔している？

これでいいのだ、と己に言い聞かせ続けてどれほど時が経ったで

あろう。気付けば葩の先は、墮涙の如く絶え間なしに雨垂れが落ちるほど濡れそぼっていた。

随分と長い時間をこうしてただ窓辺に座って過ごしていたことに黎青は気付いた。その怠惰さを縛り上げ罵りたい苛立ちを覚える。

自らの決断を受け止めれないのが不思議だった。

どんなに酷薄な判断に到っても、今まで一度足りとも後悔の念など持ったことはなかった。人を切り捨てることへの罪責感など、持つだけ無駄だと知っているからだ。ましてや憔悴して無気力になることなど。荷が降りたという安堵からなのだろうか、それとも良心の呵責なのか

たった一人の女だ。どうなるうとこちらの預かり知るところじゃない。

蝴蝶の存在は“悪腫”のようなものであつたはずだ。災禍を引き寄せないうちに早めに取り除くのが常套手段、例えば人道的でなかつたとしても国命には変えられない。

だが実のところ、蝴蝶自身を疎んじていたわけではなかつた。

容姿もさることながら彼女の気立てやその拳止は、王族の出であるだけのことはあつて群を抜く優艶さであると黎青は認めていた。

だが美女に現を抜かし滅びた王朝は数多ある。劉王がそんな暗愚ではないことはわかつてはいるが、三国が肩を連ね一致して治世を維持する為にはわずかであろうと危険因子は排除せねばならないと考えていた。

時には残酷な判断をも下さねばならない。国を背負う者には私利を優先する資格はあつてはならないのだ。

だがどうして頭から離れない!!

苛立ちを振り切るように黎青は卓子から立ち上がった。

劉王と蝴蝶、二人が寄り添う姿に平安を覚えることも確かにあつた。だから余計なのかもしれない。そして、居場所の見当がついていることもその理由の一つに違いなかつた。

斬り殺した男達の腕には、ある印があつた。十文字の彫り物、

それは張蛾一族が施すという文身だ。

先の大戦の後で行き場をなくし、賊徒に身をやつした祖の残党達は近隣諸国で残虐行為を繰り返すようになった。中でも安嶺山にはびこる張蛾一族の残忍さは脅威であった。西嶺筆頭による討伐で被害は著減したが、今だその潜伏数は把握できていない。祖の再建を企てているという巷説もあり、西嶺の討伐軍の司令塔である阿樽はやきもきしているようであった。

張蛾と他の賊とを区別する特徴を教示してくれたのは阿樽だ。一族の者達はその証として、どちらかの腕に文身をする慣わしがあるのだという。黥面や獣のように歯を削る者もあり、他者への威嚇を示しているのだと。

安嶺山には邪口洞という深い洞穴が存在する。根城があるとすればあの付近であろう。今から発てば夜更けまでには辿り着ける。ならば

ここに閉じこもっていても、不本意な胸の揺れに翻弄されるだけだ。救い出し、懐湖に送り届ければそれで済む。

先程の迷いなど嘘のように消えていた。卓上に置かれた太刀を執り腰帯に差し込むと、黎青は房を出た。

だがそれ以上進むことは出来なかった。

「何処へ行く？ 黎青」

回廊を覆う激しい雨声の間からその声は現れた。

まるで黎青の動向を読んでいたかのように、雨の吹き込む回廊の丹柱にもたれて劉王が待ち構えていた。

「劉………閃」

停滞した時の中で二人は向かい合った。

雷鳴が轟き、一陣の閃光が空の淀みを切り裂くように走り抜けた。気炎を揚げるように、一層激しく雨音が騒ぎ出した。

## 【拾六】 理由

「なぜ？」

火の気が失せ、暗澹とした冷気が再び蔓延した石室の隅に向かつて瑚蝶は問い掛けた。

そう訊くより他はなかった。その答えこそが瑚蝶のあらゆる惑いを解く鍵だった。

「なぜなの？ なぜ貴方が賊徒などに。劉王の腹心の貴方が、私を拉致するなど」

言いたいことは波の応酬のように次々に押し寄せてくる。だが石室の隅で先程のように座り込んだ青年は顔すら上げない。再び纏った部屋中の陰影を集めたような黒衣に抱かれるようにして、じつと蹲っている。

「なぜなの？ 邦昌」

その名を口にしたくはなかった。麻の敷物の繊維を耑り取るように、瑚蝶は両手を握り締めた。

“この子はね、お前を監視させる為に梓宮に送ったのさ”

朱麗の歪んだ笑い声が脳裏にこびりついている。

朱麗に何を言われようと最後の最後まで持ち続けていた瑚蝶の淡い期待は、仮面を取り払った瞬間に裏切られた。その下から現れたのは、紛れもなく毎日のように梓宮の庭で言葉を交わし親しみすら覚えていた男 邦昌だった。

騙していたというの？

今まで見せた笑顔も交わした言葉も、不義の臣であることを隠すための虚偽だったというのか。同じ場所で過ごした日々の中、その心は常に劉王に、いや梓宮に背いていたというのか。この三年間ず

つと、この日のためだけに。

瑚蝶の中で戸惑いと疑問の波が失意の渦へと変わっていく。

「いったい何度味わえばいいの？」

絶望は心に宿る優しい思い出をすべて闇へ沈めようとする。身体の内側を削り落とされていくような苦しさに、瑚蝶の内にある激しい怒りが急ぎ立たされた時、

「……すまない」

それを察知したかのように消え入りそうな呟きが聞こえた。

「すまない、瑚蝶」

黒衣から顔が起き上がった。その顔にはもう仮面はない。真実の姿だけが映し出されていた。口元からはいつもの軽薄な笑みは一掃され、気概に満ちていた黒い双眸は生気を失ったようにくすんで見えた。

「なにが……なにがすまないなの！ ちゃんと答えて！」

あの人の言ったことは本当なの？ 最初から裏切るつもりで私に近付いたの？

瑚蝶は声を張り上げた。肯定するように邦昌はわずかに面を伏せた。そして沈んだ弱々しい声で答えた。

「本当だよ。オレは祖王の許から遣わされたんだ。……偵諜として」

水滴の音は相変わらず続いていた。超然とした傍観者のように乱れることなく、一定に。

身体中の力が足元に向かって少しずつ抜けていくのを瑚蝶は感じた。

「じゃああの女は」

「……ああ、あなたの父上の妹というのは本当さ。麗深公れいしんこう主、しゅ廟ではそう呼ばれていたらしい。そして、オレの母親だ」

最後に抑揚のない笑みを落として、邦昌は片手で顔を覆った。「つまりあんたとは血縁者つてわけだ、はは、は……」

感情の抜けた邦昌の笑声に瑚蝶ははっとする。

従兄弟同士。

故意に断ち切られていたといってもいい繋がりか二人の間には流れているということになるのだ。邦昌自身をではなく、その内は見えない血流を意識するように瑚蝶は邦昌を見た。

「あの女には「血の繋がり」なんてどうでもいいことだけだな。あいつにとつての要所は、息子だろうが兄だろうが利用出来るかどうかでことだけだ」

憎しみの混じる低声で邦昌は吐き捨てた。その響きはまるで他人に対するように冷然としていた。

「どうして祖に加担など？ 私や劉王、皆を欺いてまで。それが何を意図するかわかっているの？」

「貴方も権力が欲しいの？ 血を流してまで、何かを犠牲にしてまでそんなに汚れた名誉が欲しいというの？ 先帝の恩に報いる為に梓宮に来たと私に言ったのも嘘」

「………違う!!」

身を乗り出して鋭く遮った邦昌に、瑚蝶はびくりと震えた。

「仕方が……ないんだっ！ あの子の………淋茗のためだ………！ そうでなかったら、誰があんな鬼畜のような女に従うか………!!」

悲調な叫びが、逃げ道を見つけれられず壁で弾け石室内に降り注ぐ。こんなに取り乱した邦昌を見るのは瑚蝶は初めてだった。

「………淋茗とは誰なの？」

「淋茗は」視線を背け溢れる感情をせき止めようとするように、邦昌は口元を押さえた。

いつも飄々として何事も俊敏にこなし、何食わぬ顔で食客を気取っていたとは思えないほど邦昌は動揺していた。今まで外すことを許されなかった仮面が、どれほど完固に不完全な内面を覆い隠していたか思っていたのか思い知るほどに。

「淋茗は オレの妹だ。祖王の後宮に取り込まれている。あの女

が、自分の名利と引き換えに無理矢理放り込んだんだ……！  
あの女にとって、子供はただの道具。必要な時に利用する為……その為に生んだんだ」

口元を覆っていた邦昌の手が拳に変わる。塞き止めた激情を握りつぶすかの如くその手に力が込められていく。

「オレは……祖で生まれた。生まれてすぐに農民の夫婦に預けられ、小さな農村で育った。朱麗はオレを捨てたんだ。初めから自分で育てる気なんてなかったのさ。そしてオレが五才の時、妹が生まれた。あいつは妹まで……捨てた。でも養父たちは妹も引き取ってくれたんだ。本当の家族として……オレ達を迎えてくれた。でも次第に内乱が激化して新たに課された重税で生活は苦しくなって、オレ達は国を捨てて統に逃げた。前にお前に言ったことは嘘じゃない。先帝から受けた恩義に報いようとオレは士官になるつもりだった。あの日……あの女が妹を連れ去れに来たりしなければ」

それは目の前が暗闇で覆われた瞬間だった。助けを乞い泣き叫ぶ妹の声は今も邦昌の耳に残っている。

“ 妹を助けたかったら、母さんの言うことを聞くんだよ ”

実の娘をまるで家畜のように祖王に売り、母と名乗る魔物は実の息子に取引を持ちかけてきた。

邦昌に選択権などあるはずもなかった。だから取ったのだ。そのどす黒い貪欲な手を。

祖王の息のかかった張蛾一族に身を投じ、命じられるままに凶行を繰り返してきた。文身を施さなかったのはせめてもの抵抗だ。罪責の念から仮面を下ろし街や村を襲い、人を殺し、財貨を奪った。数え切れないほど、手を汚してきた。

挺身と引き換えに妹を救えるのなら　その為だけに。

「……今年で妹は十五になる」

今までは「幼さ」が妹を守る盾だった。だがもうそれも通用しないだろう。

祖では女は十五で成人となる。比類なき好色家である祖王がそれを見逃すはずはない。

「汚させるわけにはいかないんだ」

なんとしても守らねば。そのためには、身代わりが要るのだ

「すまない、瑚蝶。すまない」

拳を胸元に押し付けて、邦昌は何度もそう繰り返した。夜に怯える子供のように震える声で。

紡ぐ言葉を見つけれられず、瑚蝶はただ邦昌を見つめていた。胸が詰まる思いがしていた。

「おい、交代だ」

その時突然扉が開き、若い男の声が割り入った。中に入ってきた覆面の男が顎をしゃくって邦昌を促す。

面を伏せたまま静かに立ち上がり、邦昌は壁際を離れた。染み付いた穢れのようにその身に巻きつく黒衣が、瑚蝶の目の前で翻る。

「邦昌！」

だが瑚蝶の呼び声は、邦昌の背中を引き止めることは出来なかった。

二人の心を切り離すように、石室の扉が音をたてて閉まった。

浅い眠りを何度か繰り返し、瑚蝶はゆっくりと麻敷きから身を起こした。

停滞した静寂と闇は相変わらず部屋中に充満していた。体温を奪う寒さも和らぐことはない。

ここに連れて来られてから、いったいどのくらいの時間がたったのだろう。

救いの手を期待してなどいないが、このままだ流れていくだけの時間に耐えるだけなどまるで責め苦のように思えた。

見張りの男は入ってきてから一度も口を開かない。邦昌のいた場所に胡座を掻いて陣取り、ただ寡黙に下を向いて座り込んでいる。大ぶりの布で覆面をしているためその容貌は定かではない。暫く動かないことから察するに、眠ってしまったているのかもしれない。

今なら逃げ出せる。

瑚蝶は石室の扉を見た。だが動く気にはなれなかった。

そのまま飛び出したとして、どこに逃げる？ もう行く場所などありはしないのに。

桔久………。

妹のような存在だった少女の笑顔が浮かぶ。

そして浮かぶなりその笑顔はたちまち千々に咲き乱れる花びらへ姿を変え、やがて夢想のように美しい翠遙宮を呼び起こす。その庭園を思い浮かべれば香気さえも鮮明に甦ってくるようであった。「檻」であったはずの場所は、今の瑚蝶にとって唯一の居場所でもあったのだ。

三年前、頑なにすべてを拒み隙さえあれば逃げ出そうとしていた自分が知ったら、羞恥に身を震わせ嘆くであろう。怨讐を忘れたかと。

“俺が憎いか？”

逃亡はいつも未遂に終わった。どこへ隠れようと劉王はいつも瑚蝶を探し当て、そして驕慢に囁いた。含み笑う声が耳朶に触れるたび、雪辱感に身を裂かれる思いがした。

ばかだわ………。

あの城で「守られていた」のだと気付いたなんて。家族を見捨てた肉親よりも憎いはずの敵の懐で。

だがもう遅い。すがりつくには遅すぎるのだ。

明日が来れば自分の運命はまた大きく変わる。そうやって命運とはいっても瑚蝶を翻弄し、凌駕していくのだ。抗えない力を以って。

いったい何ができるだろう、この二本の手で。  
諦めて流されていくだけ？ それとも、

瑚蝶は自分の手の平を見つめた。守られることに甘んじていたその頼りない手を。

そこに映し出される答えを求めるように。

## 【拾七】 別路

「ふふふ……うまくことが運びそうだねえ」

幕張りのされた洞窟の一室で玻璃の酒杯をあおりながら、朱麗は歡喜の余韻に浸っていた。

室内はまるで素封家の屋敷のように、売れば一財産になりそうな様々な調度品が所狭しと並んでいる。見事な龍の細工の彫られた長椅子で、朱麗は酌をさせている若い男に半身もたれながらゆったりと息をついた。

「長かつたよ、この数十年。やっとアタシに幸運が巡ってきた。アタシを邪見にしてきた兄さんも消えて祖王も意のままになれば、すべてがアタシのもんだ。ああ、嬉しい。こんなに嬉しいことってあるかい？」

飲み干した杯を催促をかけるように掲げ、ねえ、と朱麗は隣りに寄り添う体躯のいい男に同意を求めぬ。

「兄さんも、アタシに逆らわなきゃ長生きできたかもしれないのね。男っていうのは馬鹿な生き物だよ。沽券を守ろうとする志だけは常に立派だかね。だがアタシみたいな従順さがなくていけない。

まあ、単純で操り易いのが利点でもあるけれど」

“色狂い”と民衆からも蔑まれるほど好色な初老の男を思い浮かべて朱麗は哄笑する。国や王権を失い只の一領主に封じられてもその情欲だけは衰えず、祖王は後宮を作り愛妾を囲っている。その多くは朱麗が集めた女達である。見目のいい若い女を差し出すのと引き換えに、朱麗の暮らしは約束されてきた。祖王の重鎮だった夫を亡くして、それが彼女の考え出した生活水準を保つための懐柔策であった。

赤い液体を男が杯の中へなみなみと注いでいく。その酒を喉に流し込んで、朱麗は奥へと声を投げた。

「用意は出来たかい？」

奥の帳が開き、押し出されるように少女が進み出てきた。

双鬢を残し四色の宝珠を散りばめた豪華な簪で艶めく黒髪を結い上げ、襟切りが大きく開いた蒼翠色の唐衣に身を包んだ美女の姿に、朱麗は満悦の様子で大きく頷いた。

「上出来だ、祖の貴色がよく似合うじゃないか。もつと嬉しそうな顔をおしよ。これから贅沢な暮らしが待っているんだから。ほら、その簪は王からお前にと直々に頂いたものなんだよ。素晴らしいだろう？ その富裕にお前はこれの先与れるんだよ」

そんな朱麗に、珊瑚色の紅を薄く引き伸ばした目元を蝴蝶はきつく細めた。

「佞者に誇れる富などありはしないわ。すべて掠奪によって得た物でしょう。民衆の畏敬を受ける存在である王が………恥ずべき愚行だわ」

「畏敬？ そんなもの、幾らあつたつて肥やしにはならないだろう。

さつさとこの子を籠にお乗せ！ そろそろ出発するよ」

帳の脇に控えていた鯨面をした男に朱麗は急に声を低め命じる。

男は頷くと蝴蝶の腕を掴んで入り口である垂れ幕まで引きずっていき、強引にその向うに押し出した。

「ふふふふ……あの御方は気の強い娘もお好きだよ。加えてあの容姿なら、極上の献上品だ。すぐに侍寝の仰せがくるだろう」

酔いがまわりだらしく寝椅子に肥えた肉身を投げ出した姿勢のまま、朱麗は干した杯を揺らす。すかさず男が杯に異国の美酒を注ぎこむ。その手馴れた間合いに感心して、榻背代わりに背を預けているその男を朱麗は見上げた。

「おやあんた……いい男じゃないか。いつから一族にいた？ 見かけない顔だねえ」

「……つい十日ほど前からです、令夫人」

無精髭をたずさえた口元を、男は緩慢に持ち上げる。目深に巻いた頭布のせいで、その表情はよく見えない。しかと見るべく、朱麗は布を押し上げた。

「へえ、賊にしとくにはもつたないくらいだね。どうだい、アタシのところへ来ないかい？　ちょうど馬丁が足りなくて」

言いかけて朱麗は一度大きくしゃくりあげた。

「おや、おかしいねえ……まだ三杯も飲んでいないってのに、もう酔いがまわってきたようだよ……」

自覚するやいなや、朱麗の焦点が彷徨い始める。二三度小さく痙攣した手から酒杯が滑り落ち、寝椅子の縁に当たって絨毯の上に転がった。飛び散った赤い液体が、血溜りのように広がっていく。

布を掴んでいた手が男の額から滑り落ち、朱麗の首がぐりと折れた。

「……恐れいます」

もはや聞こえはせぬだろう耳元で恭しく告げ、男は今度はあからさまに口角を引き上げた。

男に腕を掴まれたまま洞窟の外に連れ出された瑚蝶を迎えたのは、何十本という松明の灯りだった。

辺りにはぼんやりと浮かぶ月光をも遮るかの如き高木の群れがひしめき合っている。どうやら山奥というのは本当らしい。そしてその一面闇色の世界の中で、冥夜にも勝る底気味の悪い気配が蠢いていた。

洞窟の入り口を取り囲む人影の群集。素早く目を走らせただけでもその数は計り知れない。粘着質な無数の視線が絡みついてきたのを瑚蝶は悪寒で感知した。灯火の下、静止した人影さえも忍び寄ってくるような錯覚を覚えて瑚蝶の足が引ける。

その中から歩み出てきたのは邦昌だった。

「駕籠に乗せる。夫人の合図で出立する」

瑚蝶と目を合わせることなく、邦昌は冷徹に男に命じた。邦昌が

目線を流した先に、人一人入るほどの大きさの方形の竹駕籠が置かれている。側面である部分は細い竹を間をすかして組んであり、駕籠というより檻のような仕様だ。前後から昇かいて運ぶのであろう、上部には長い木材が一本括り付けられている。

腕を掴まれたまま黥面の男に乱暴に背を押され、瑚蝶は駕籠の中に倒れこんだ。

「きゃ………！」

頑丈な鉄の錠が下ろされる。

瑚蝶の悲鳴に、男達が下劣な笑声を上げた。強固な覆いなどない竹籠を隔てて、男達の気配がにじり寄ってくる。色欲を映す爛々とした複数の眼睛が着飾って一層清艶を増した瑚蝶の姿を嘗め回す。深く開いた胸元を隠すように瑚蝶は両腕を抱き込んだ。

「退け。その女は祖王への貢物だ」

邦昌に睨まれ、男達の野次が止まる。檻の上から覆いを降ろされ、瑚蝶は暗闇に落とされた。

「密偵をたてる」

指示を下し始める邦昌の少しくぐもった声が聞こえる。違和感を覚える、まるで別人のような辛辣な響き。

怖い。

暗闇の中で瑚蝶は両手を握り締めた。

平静でいようと思うほど、恐怖を実感する。考えないように抑えこんでも、触覚を用いて察知できるほど明確に。

“この手で何が出来るのか” 閉じ込められている間考えでも、両手を組み合わせさせて祈ることくらいしか思いつきはしなかった。

『いかなる時も肅として居を正し、また毅然とあれ。我々は常に民の見本でなければならぬ』

生前廟王は、時折厳しいことを瑚蝶に教えた。刻み付けられたその教訓は今も生きている。だが感情が理性を凌駕しつくす瞬間が、どうにも出来ない気持ちというものがあるということを、すべてを

失つて瑚蝶は知った。

お父様……。

なぜ父は朱麗のことを自分に話さなかったのだろうか。二人の間に何があったというのか。

瑚蝶を見る朱麗の目には姪に対する愛情など見当たらなかった。

あたかも「物」を見るように冷たかった。そうして今、その叔母の陰謀の渦中にいる

助けは、来ない。

瑚蝶は両手を組み合わせた。

そして間近に迫る望みのない未来から目を逸らすように、瑚蝶は  
瞼を閉ざした。

「先に下山する者は馬の調達後、所定の場所で待て。そのまま慶頂けいぎやうへ走る者は、保護の要請を」

松明の群れに向かって邦昌は声を響き渡らせた。それに従い、数人の男達が移動を始め出す。

一時的に張蛾の統率権を譲渡されている朱麗の命を伝えるのが邦昌の役割だ。張蛾はその多くがもと祖の禁軍の兵士、落ちぶれて破落戸と化した今も祖王の支配下にある。

なぜならば、祖王にとって張蛾は貴重な財政源でもあるからだ。

国難ともいえる規模の残虐な略奪行為は、すべて祖王の指揮の元に行われていた。辺境の地に大人しく封じられている振りしながら三国干渉の網を掻い潜り、悪辣な暴徒を放っているのだ。小さな村や街から傷を負わせ、少しずつ侵食していく。そうして機会を待っている。もう一度、覇権を手にする為に

何もかもすべてを知りながら、その陰謀の傍にいる。度外視していいわけではない。葛藤は常に胸裏の片隅から絶えず邦昌を揺すぶる。

「夫人の号令で出発する」

洞窟を背後に、邦昌は夜陰の中で光る残忍さの染み付いた男達の目を見渡した。

その直後、洞窟の奥から足音が響いてきた。朱麗にしては端然としたその歩行音に、邦昌は剣呑に目を細める。

現れたのは長身の男だった。目深に巻いた頭布のせいで顔の判別はし難いが、朱麗の酌をしていた者だと邦昌は気付く。

「夫人はどうした？」

そう尋ねて、邦晶は男の腰に下がる太刀に目を留めた。鞘や柄に金細工の施された一見して上等だとわかる代物だ。

みすばらしい服装には随分と不釣合いなその得物に邦晶が警戒を呼び起こした時、男は手にぶら下げていた陶器製の酒瓶をからかうように揺らしてみせた。

「夫人は先程ご入眠なさったところですよ」

「何？ 貴様、何者だ。その覆いを取れ！」

無精髭の間から、男が薄く歯を覗かせた。そして酒瓶を持つ手を振り上げ、詰め寄ろうとした邦昌の前で地面に叩きつけた。

乾いた音をたてて空の酒瓶が地面で破裂した。粉々に砕け散るその様に邦昌が気を取られた一瞬の間のことだった。

男は鞘から剣を抜き、邦昌の喉笛に切っ先を突きつけた。咄嗟に腰に帯びた剣柄に手をかけた体勢のまま、邦昌は息を呑んだ。喉を突き破られるかと思っただほどの強靱な動きだった。

「まさか、こんなところで貴殿に会うとはな」

張りのある雄勁な響き。邦昌の表情が固まる。

「どこぞからの流れ者かと常々思っていたが、祖朝の犬だったとは。まさに忠と不実は髪一重だな」

剣先で動きを封じたまま、男は片手で頭布を少し押し上げた。

「西………蓉洵！！」

二人を取り囲むようにして集結する野盗らが一斉に武器を抜いた。漆黒と灯火の色が溶け合った赤褐色の空間に、緊迫感が立ち込める。「どつしてここが」

齒を噛み締めた邦昌に、蓉洵はほくそ笑む。

「甘く見ないでもらいたい。どこに隠れようと追尾の目は光っているんだ。　　そうでしょう、太子」

蓉洵がそう呼びかけた。背後に気配を感じた時にはすでに、冷たく無機質な感触が邦昌の首筋に当てられていた。

「　　そうそう、それがオレの愉しみなんだよ」

いつの間にか邦昌の背後に覆面をした男が立っていた。蓉洵や一族の巨漢達と比べれば小柄な上背。小振りな小刀を邦昌の首筋に這わせ、囁きかけるように相づちを返す。

「てめえ、討伐軍の一味かつー！」

どこからか声が上がった。その言葉が血気にはやる男達の静止を破る契機となった。

明々と燃える松明を打ち捨て、気炎を上げた匪徒達は武器を振りかざして二人の闖入者を標的と定め、そして飛び掛った。

短刀を退き、覆面の男は佩帯していた直刀を引き抜いた。間隙を突いて蓉洵の刃をかわし、邦昌は男達の中へ紛れ込む。それに短く舌打ちして、蓉洵は襲い掛かる敵に構えを正した。

繰り出される大斧や戟を鮮やかに打ち返し二口の白刃が燦然と閃く。容赦なく仕掛けられる攻撃を、お互いの背を守るように二人はかわしていく。

「　　いいですか、殿下。活路を開いたらすぐに退散しますからね」  
背中を合わせに立ち、周囲を牽制しながら蓉洵が言う。

「わかってるよ！　だが、この人数に二人つてのはかなりきついで」  
覆面の男がぶつきらぼうに返す。だがその声に嬉々とした色があるのに、蓉洵は口調を強める。

「穏便に、というのが陛下のご意向です。　　ほどほどにお願いしますよ」

「ち………わかったよ。まったく無茶なご意向だぜ」

そう舌打ちが聞こえるやいなや背中への気配が離れた。

副將軍の俺がなんでこんなことを………。

嘆きたいのは山々だが、連なる敵を前にそんな余裕など無い。後で時間外手当を請求することを念頭に据え、蓉洵は振り下ろされた刃を打ち返した。

刹鬼と恐れられる三十人以上の豪傑がたつた二人の男に刃先も触れられず斬り倒されていくのを、邦昌は離れた場所で目の当たりにしていた。

あの男は

剣捌きは荒いながらも猛然たる勢いで強刃を繰り出す覆面の男に、邦昌ははつとする。

蓉洵の腕がたつのは当然だ。彼は統の禁軍副將軍、文武に優れる英傑。だがそれに劣らぬ激しい気精を見せる立ち回りにまさか、という思いが過ぎる。

「その覆いを払え！」

邦昌は咄嗟に鋭く声を飛ばした。

男に弾き返された得物の一つが偶然に側頭部分の布を切り裂いた。こめかみの部分にうつすらと血が滲む。ち、と疎ましげに呟いて男は自らその覆いを引き剥がした。

下から現れたのは、まだ成人を迎えたほどの血気横溢とした少年の顔だった。

「お前は……西嶺の……!!」

邦昌の予測が確信に変わったのと同時に、動揺を含む響動が起こった。

賊徒討伐軍の司令塔的な存在であるその顔には、一族の誰もが覚えがあった。

「よう、元気か？　ちよつと見ない間にまた威勢を取り戻したな。やっぱり灸を据えなきゃなんねえわけだ」

わずかに口元に笑みを浮かべ、猛々しい闘志を映した揃いの黒い眼鏡で少年　阿搏は自分より遙かに体躯のいい敵を見据えた。地表で火の粉を上げる松明の炎が、阿搏の纏う志気を髣髴とさせる。

「殿下！ 瑚蝶殿を！」

斬り返す合間を縫って投げられた蓉洵の声に、阿樽は頷く。道を塞ぐ男達を剣ではなく体術で蹴散らし、瑚蝶のいる檻の前へ滑り込むと掩蓋を取り払った。

暗闇に希望が差し込んだのを瑚蝶は見た。

「阿樽様……！」

聞こえていた声に間違いは無かった。祈るように組み合わせていた両手から力が抜ける。

鞘を外し刀身をおさめると、柄を下にして阿樽は太刀を振り上げた。そして勢いよく垂直に振り下ろす。

檻にかかっていた鉄の錠がいとも容易く外れ落ちた。

「へへ、細工をしといた。待ってな、すぐに助ける」

悪戯好きの子供のように破顔一笑し、阿樽は立ち上がった。だが振り向き様、胸元に抜き身を突きつけられる。

「邦昌」

呆れたように阿樽は剣を握る青年と向かい合った。

「そういうわけにはいかない。こっちにも事情があるんだ」

礼節を欠いたその物言いに、阿樽の顔付きに徐々に陰しさが増す。「瑚蝶を祖のごうつくじじいに売り飛ばす計画のことか？ ふざけ

んな。悖逆罪だけでも極刑必至だが、二度死ぬ羽目になるぞ。お前・

……一体何やってんだよ」

いつも親友の背後に控えていたはずの青年の変貌は、阿樽にとっても心外だった。二人の友人と同様慣れ親しんだ存在であったからだろう。

邦昌の剣の柄がぎり、と軋んだ。

「貴方にはわからない。わかるものか」

排他的な一言を邦昌が叩きつける。鋭い刃を伝って向けられているのは、あからさまな拒絶だった。

「阿樽様！」

馬蹄の音に阿樽と邦昌は首を巡らせた。

黒馬が前足を振りかざす。反射的に邦昌は後ろに跳躍した。二人の間に馬体を滑り込ませ、蓉洵が降り立つ。

「お早く！ 瑚蝶様と先にお行き下さい！」

それは阿搏の馬だった。潜入する前に、繁みの中に繋いでおいたのだ。

檻の中から這い出した瑚蝶を立ち上がらせ、阿搏は素早く馬上にあがった。

「瑚蝶！」

伸ばされた腕を瑚蝶は取った。細身の割に屈強な阿搏の腕に引き上げられ、その背中にしがみ付く。阿搏が手綱を引き、馬が走り出した。

くそ………！！

懐から小刀を取り出そうとして、邦昌は手を止めた。空を掴んだその手をだらりと下ろす。

無駄だ。

辺りには、二人に倒された一族の男達の体が累々と転がっている。地べたに生えた炎の手は今だ絶えず燃烧を続けていた。残った者達はまだ戦意を示そうとしていたが、邦昌はそれを制止する。

阻喪とした周囲の士気を一瞥して、蓉洵は短く指笛を吹いた。洞窟付近の山林の中から一頭の馬が走ってくる。

「安心しろ」

自分の横でぴたりと止まった馬の鼻筋を撫でて、蓉洵は邦昌に言った。

「殺してはいない、急所は外したつもりだ。それが陛下のご命令だ、捕縛はせぬ。だが」

剣を鞘におさめ、蓉洵は馬の手綱を引く。そして森厳な武将の顔付きになる。

「覚えておかれよ。逃げ場はないぞ」

立つ瀬が違えばもう二度と交わることはない

首を背け、蓉洵は馬の背を跨ぐと颯爽と暗夜の中に姿を消した。

男達を制したまま、邦晶は遠ざかる蹄の音を聞いていた。

もう後には引けない

あれほど激しかった揺すぶりは、今やもう微弱な波動でしかなかった。

夜空を流れる一片の雲陰が月影を晦まし、消え入りそうな朧月を包み込んだ。

【拾八】 旭陽の丘

長い長い時間に思えた。

阿搏の背にしがみついたまま眠っていた瑚蝶は、瞼を下ろした視界が白んでいくのを感じて目を醒ました。

微睡む意識を、激しく地面を蹴って走る馬蹄の音が割いた。耳元で吹きすさぶ風の鳴く声が、その駿足を物語る。

青草の茂る海原を二頭の馬は駆け抜けていた。

東に見える山の裾の方からは、夜陰を押し上げて白日が覗き始めていた。まだ微弱な暁の光芒が、指標のように一筋一筋と伸び始めている。

後ろから追って来るもう一つの馬蹄の音を聞きながら、手綱を握る阿搏の後姿を瑚蝶は見上げた。

山を降りた頃は氣遣って「大丈夫か」「寒くないか」としきりに話し掛けてきた阿搏だったが、やがて瑚蝶の言葉が途絶えがちになったのに気付いたらしく言葉を切った。その後一気に気が抜けたのか、そのまま瑚蝶は深い眠りに落ちてしまったのだった。

短時間でも馬上で過ごすのは乗馬になれない体には辛いものがある。体に貼り付く蒼碧色の薄手の唐衣は、冷たい風に馴染んで纏う意味をなくしてしまっただかのようにだ。だが阿搏の背中中の温もりがそれを忘れさせてくれた。

「瑚蝶、起きているのか？」

前を向いたまま阿搏が尋ねる。抱きつくようにして寄り掛かっていた体を、瑚蝶は僅かに起こした。

「はい。……申し訳ありません、私」

「いいんだ、構わん。これからお前を梓宮に送り届けるが、ちよつと寄り道してもいいか？」

「はい。……」

梓宮。

阿搏と蓉洵が助けに来た時点で、劉王の斟酌だとすぐにわかった。もちろん城に戻されることも想定内にあった。

どんな顔で会えばいいの？

瑚蝶は自問する。どんな罰も覚悟しなければいけない。それを与えるあの涼しい双眸を、真っ直ぐに見上げることが出来るだろうか。後どのくらいで着いてしまうのだろう。捨て去ったはずの、あの壮麗な牢獄へ

訊けずに阿搏の背に額を凭れていると、阿搏が強く手綱を引いた。一声嘶いて、馬は失速しやがて止まった。

「降りられるか？ 瑚蝶」

少し首を後ろに反らし、阿搏が伺ってくる。瑚蝶は浅く頷いた。

隣りに並んで止まった馬から蓉洵が降り立った。さあ、と促され瑚蝶は蓉洵の手を借り、黒馬の背から降りた。

地面を踏んだ布沓の裏に柔らかい感触が当たった。

金稜花。

開花して二、三日で儂く散る春花の敷き詰められた原野に瑚蝶は立っていた。見渡す限り一面。都に近付くにつれこの花が地を覆う密度は濃くなっていく。もう白高の近くに来ているのだと瑚蝶は悟った。

「あちらへ」

蓉洵が少し高台になっている方角を差した。

頂上に一頭の白い馬が止まっている。馬具が取り付けられているが、その背には誰もいない。

あの馬は。

瑚蝶は蓉洵を振り仰ぐ。小さく頷いて、微笑を浮かべた蓉洵の口元が「さあ」と動く。

朝風にさらさらと金稜花が靡く。足元に広がる金色の波の中を、瑚蝶はゆっくりと丘の方へ近付いていった。

勾配を昇ってくる瑚蝶を見て、白馬が耳をぴくりと動かした。そして喚起を促すように短く鳴いた。

蝴蝶は両足を止めた。

高台の向こう側、下りの勾配の方から人影が現れた。丘の上まで来て馬の傍で立ち止まり、顔を寄せてきた白馬の鼻先を優しく撫でる。背に垂れる、朱色の髪紐で束ねただけの黒髪が朝風に揺れた。

「遅かったな」

朝陽を集める丘の上から、男が顔を上げた。

黄玉の如く眩耀なる花と清澄な神気に満ちた天との間に立つその姿を、一瞬幻かと蝴蝶は見紛う。

「……………劉王、いつから……………ここに？」

切れ長の双黒が、ふ、と和らいだ。

「さあ、いつからであろうな。随分待ったのは確かだ」

静謐な美声が蝴蝶の耳元を流れていく。それが揶揄であるのか本音なのか読み取ることは出来なかったが、責めているように聞こえた。

「お礼を……………言うべきなのでしょうが」

助けられた、のだ。

諦めかけていたあの時、確かに光が溢れるのを感じたのだ。

見捨てられると思っていた。仕方ないとも。

しかも隣国の皇太子である阿搏と統国禁軍の名武官と名高い蓉洵を使役し、自分一人のためにあんな演出までさせて

それを思うと、詰りたい気持ちも大いにあった。

「お前次第なのではないか？ それは」

明けていく空をに劉王は目を向けた。

「お前が何を考えているのか、俺にはわからぬ。何をすれば喜ぶのかも、何をしたら傷つくのかも 誠のところはわからぬ。だから問うことにした」

そして再び蝴蝶へ向き直り、左手を差し出した。

「もう一度、この手を取るか否かを」

自分の方へと向けられた手の平を呆然と蝴蝶は見つめ、そして劉王を見つめた。劉王は続ける。

「いつまで籠の鳥かと、そう言ったな。籠の中に戻るかそれとも自由を得るか、それはお前が決める。俺はその決断に口出しはすまい」  
「どうして……?」

矛盾している、と蝴蝶は思わずにはいられなかった。

「貴方は言ったわ。 “ 永遠に ” だと。私に自由はないと。なのになぜ訊くの?」

銀睡蓮の庭で、そう言った。蝴蝶の心を打ち砕く刃のような言葉を。

常に自意を固持する男が、こんな殊勝な態度をとるということが信じ難かった。

今も傍にあつたはずの名誉も幸福も憚らず蹂躪してきた敵へ、蝴蝶は潤んだ瞳を向けた。だが劉王は目を奪われるほど穏やかに微笑んだ。

「金稜花の花言葉を知っているか?」

蝴蝶は首を横に振る。

「 “ 心意 ” という。そこには二つ、意味がある」

鮮烈な光輝を連れて朝陽が上昇していく。晨暉を戴く夢のように儂い黄金の大地が覚醒を遂げていく。

「この花が咲く場所は、嘗て戦場だった。戦火で荒れ果てた地に平和の芽吹きを願って花を植えたのは、我が国の始祖である王と民達だ。金稜花は安寧の象徴でもある。そして人々の心と天子の心を繋ぐという大意を持っている。民の “ 真意 ” と天子の “ 宸意 ” 、どちらが欠けても真の泰平は来ぬ。それを繋ぐ役割を担うのが、皇帝だ」

足元に咲く花を、屈みこんで劉王は一輪摘み取った。

「 戴冠の儀の後、 “ 授花 ” という儀式がある。臣下より金稜花を賜るといふ儀だ。王にとって金稜花は冠と等しい価値がある。花は民の心の代物 ならばこの花の下では、俺とお前は対等でなければならぬ。さあ、選べ」

花と共に突き出された劉王の手に蝴蝶は戸惑う。

選べという割に、その口調は依然として傲慢で強圧的なままだ。だが笑みを取り払った劉王の表情はやけに真摯だった。

自由になれる………？

その手を取らなければ。瑚蝶の視界に映る一輪の花が笑うように揺れた。

「どうした。お前の 望む答えを言えばいい」

劉王が高台を降り、瑚蝶の前に立った。動揺が伝わりそうなその距離が瑚蝶を焦らせる。

どうして迷っているの？

簡単なこと。差し出されたその手を拒めばいい。たとえ離れたとしても憎しみが消えるわけではない。あの手の中にいたお陰で、今日がある。けれど、傍に居続ければ永久に苦しい思いに苛まれるだろう。それよりは寧日を送ることが出来るはずだ

「心配するな」

宥めるような声音が瑚蝶の耳朵に降りる。

「どこへ行くこうと不自由な生活が出来るよう保障はする。放り出したりはせん」

まるで結果を知っているかのような言い方。苦しいほど熱い気持ちに瑚蝶の喉元に込み上げた。

憎まれ口以外に、劉王から優しさを感じる言葉など数えるほども掛けられたことなどない。なのにこれほど突き放されたような気持ちになったことなどなかった。

簡単に手を離されることを知ると、優しい言葉さえ刃のように胸を抉る。なんて 心とは支離滅裂なものであるつか。

「それが せり上がる熱で言葉を見失う前にと、瑚蝶は問い掛ける。

「貴方のお気持ちですか？ ……用済みになったから、放逐するということですか？」

「……そうではない」

劉王は溜め息混じりに首を振る。ちくちくと内側から刺すように

疼く左胸を蝴蝶は己の手で押さえつけた。

「だったら……！！ 貴方の本当のお心も示してください。私たちが対等であるべきなら。この花の前で」

民の心と王の心、金稜花の花園はその二つが向き合う場所。それならば、ただ答えを求められるのは不公平だ。蝴蝶の主張に、劉王は冷涼な目元をわずかに伏せた。

「俺の気持ちを押し付けることは出来ぬ。強いてまで留め置くべきではないのだろうと、思ったからこそ問うている。民の行く末を俺は預かる身だ。だが 心まで独占は出来ぬ。厚顔無恥に踏み込む領域ではない。父も、俺にそう教えた」

指に挟んだ一輪の金稜花に、劉王は小さく笑いかける。愛しいものにするように。そしてふと真顔になって視線を上げた。

「だが、もしもお前の中に少しでも迷う気持ちがあるのなら もう一度、この手を取れ。傲慢かもしれぬが、俺はそう望む」

大気が大きく震えたのを感じ取った気がした。

今の言葉は本当に劉王の言葉だろうか。その唇が紡いだものだろうか。

劉王の声の表情は変わることはない。愛のさざめきのように甘くもなく、いつもの戯弄のようにも取れる。

だがそれがこの男なのだ。これが統率者として完全無欠を誇る男の精一杯の“素直さ”なのかもしれない。そんな風に庇護してしまうのは、傍にいたがために生まれた情からであろうか。

「お前が戻らねば、翠遙宮は廃宮にシなくてはならぬ。あれはお前にやったものだ」

気まずさを感じたのかまるで言い草のように、劉王が離宮の話を持ち出す。美しい庭、紅紫咲き乱れる泡沫の夢……確かにあの場所には、安らぎがあった。

「……貴方は、ずるいですわ」

左胸に置いていた手を蝴蝶は離した。増していく疼きはもう、片手で押さえつけられるほど微弱ではなくなっている。

「私の気持ちを知っていて、いつも掻き乱すんだわ」

そして疾風のように通り過ぎては、心を見失わせていく。気付けば蝴蝶の手の中に、可憐な一輪の花が咲いていた。

「やはり、似合わんな」

劉王が唐突に言った。いつの間にか不敵な笑みを携えて見下ろしている男を蝴蝶は仰ぐ。

「そんな暗い色の衣は。言っただろ、お前には朱が一番似合う」

この気持ちを何と言おう。

朝陽の宿るような温もりに満ちて、孤独な夜闇の中に在るように哀しい 相反する二つの気持ち。

答えは今、出さなくてもいいのではないかと思った。もう少しだけ探したままで、いたいと。

髪を結び上げていた宝珠の簪を蝴蝶は引き抜いた。足元の花の中にそのくすんだ黄金がぱたりと落ちる。

支えをなくした美しい黒髪が蝴蝶の両肩に舞い降りた。

瞬いた双眸から、一筋の熱いものが頬を伝っていく。それを隠すように、恵風が蝴蝶の黒髪を優しく掬い取っていった。

「ちっ、馬鹿馬鹿しい」

高台で向かい合う二人の姿から目を背け、阿樽が不満げに舌を鳴らした。

「最後はいつもあの野郎に掻っ攫われる。なんでオレがこんな」

“ 損な役回り ” と続けようとして、阿樽は口ごもる。何が損

なのか、よくわからなかつたからだ。

「陛下は殿下の力量を信頼されて任されたのですよ。賊討伐に対する熱意を誰よりもご存じだから」

再び馬の背に跨った蓉洵がそう執り成そうとするが、阿搏の溜飲は解消されない。

「あいつの、そういうところがむかつくんだった」

寝入り端だろうが起き抜けだろうが是非を問わず呼び出し、厄介事を押し付けてくる。火中の栗を拾うのはいつも阿搏の役割で、当人は玉座から一しきり説明をよこすだけだ。確かに統の皇帝の座は大陸随一の権威がある。その一声が活殺自在の権を握るとまで言われるほどだ。だが、友人でなかつたら今頃とつくに絞め殺している和阿搏は思う。

だがその厄介事は大抵が、血気盛んな阿搏にとっては格好の憂さ晴らしの手段であつた。まるで阿搏の張り詰めた精神状態を見切っているかのように、時宜に適つた要請なのだ。だから尚更いけ好かないのかもしれない。結局言いなりになっている己にも腹は立つのだが。

胸がやける。

珊瑚蝶と劉王が肩を並べているのを見ると、間を割いてやりたい衝動に駆られる。生来気の長い方ではないが、たちまち苛立ちが湧き上がってくるのだ。その感情の正体に阿搏は気付いていない。

「オレは帰るぞ。役目は果たしたからなつ。やらねばならんことは山のようにあるんだ」

聞こえよがしに大声で言い、阿搏は愛馬の馬首を返した。これ以上、正体不明の渦巻きに掻き乱されるのはご免だった。

「はあっつ！」荒く息を吐き出すと、阿搏は馬の脇腹を蹴った。たちまち駿馬は黄金の花園の向うへと遠ざかつて行った。

「……俺も戻るとするか」

剥き出しの感情が浮き彫りになつたその背中を、やれやれと蓉洵は見送つた。

高台の方を一瞥し、ぼろきれ同然の己の姿に視線を落とす。

「こんな姿を部下達が見たら何と言っただろうか。品格も威信も台無しである。」

「二割増請求だな……………」

青雲の伸びていく空に嘆きを預け、蓉洵も城の方角へと向かった。

「瑚蝶さま……………っ!!」

馨しい花々の香りに包まれた翠遙宮の回廊を一人の少女が駆けて来る。

女官服の裾を持ち上げるのも忘れて何度も転びそうになりながら腕を伸ばしてくるその姿に、瑚蝶は両手を広げた。

「瑚蝶さまあつ!!」

胸に飛び込んで来るなり、少女は声をあげて泣き出した。しゃくりあげる肩を、震える背中を瑚蝶は愛しむように優しく撫でていく。

「桔久……………」

触れ合う体から、確かな体温が伝わってくる。

そのぬくもりの心地よさに、瑚蝶は目を閉じた。

【拾八】 旭陽の丘（後書き）

この回で前半部は終了となります。

ここまでお付き合いくださった読者様方、本当にありがとうございました。  
ます。

後半部もよろしくお願い致します！

【幕間】 心に吹く風（前書き）

後半前のちょっとした幕間の小話です。

【幕間】 心に吹く風

「ねえ桔久。宮官達と揉め事があつたというのは本当？」

やにわに瑚蝶に尋ねられて、桔久は茶器に注いでいた湯を足元に零しそうになつた。

「えっ。そんな噂が流れているんですか？」

存じませんでした、と驚いた顔を取り繕つて桔久は振り返つたが、初めの声がひっくり返つたのを瑚蝶が聞き逃すはずはなかつた。

「桔久・・・・・・・・・・」

「は・・・・・・・・・・はいっ！」

低まつた瑚蝶の声音に、桔久はとつさに目を瞑り姿勢を正した。

瑚蝶が柔らかい溜め息を漏らした。

「・・・・・・・・・・貴女、私のことで何か言われたのではないの？ 私がここに戻つてきたことで」

咎められると思つた桔久は、そつと目を開いた。叱るところか申し訳なさそうな暗い表情の主人を見て、慌てて首を横に振る。

「いいえ、いいえ！ そうではありません！ 確かにちよつと口論はしましたが・・・・・・・・・・よくあることです。些細なことです。だから心配なさらなくてください！」

つとめて明るく振舞つと、桔久は茶の準備へ戻つた。

危ない、危ない。

瑚蝶のいる卓に背を向けて作業をしながら、桔久はそつと溜め息をつく。

風聞とは怖いものだ。隠しておきたいことも瞬く間に知れ渡つてしまう。女官頭の抄宮正にお叱りを受け、内密に事を終えたはずだつたのに、まさか瑚蝶の耳に入つてしまつたなんて。

「そう・・・・・・・・・・ならいいのだけれど」

貴女がそう言うなら、と瑚蝶はそれ以上追求はせず刺繍の続きを始めた。横目でその様子を盗み見て、桔久は安堵する。

蝴蝶が梓宮に戻ってから三日が過ぎた。

なぜ城を出たのか　そのことについては桔久は一切蝴蝶を責めなかった。本当は言いたいことも訊きたいことも山のようにあった。だが蝴蝶の腕がしつかりと自分を抱きとめた時、蝴蝶も自分と同じ気持ちでいたのだとわかったのだ。それで十分だった。

白茶茶の香りがふわりと立ちのぼった。頃合だ、と桔久が茶器を椀へ傾けた時、

「　いい香りだな」

整った美声に桔久ははつと顔を上げた。

「劉王」

刺繍の手を止めて、蝴蝶が卓子から立ち上がる。

戸口から、そのままいいと蝴蝶に穏やかに目を細め、そして劉王は桔久に言った。

「俺にも淹れてくれぬか」

「はっ、はい！　喜んで！」

桔久の背中に甘い痺れが走った。扉を離れ、劉王は蝴蝶の向かいの卓子に座った。

　　やっぱり、今日も！

胸の中に次々に大輪の薔薇が咲き乱れるような舞い上がった気分になる。だが自然な拳止を心がけながら桔久は素早く二人分の茶を淹れ、蓮の形をした砂糖菓子をいくつか菓器に載せた。そして卓に運ぶと扉まで下がり、跪拝の礼をとった。

「では、わたくしはこれで」

扉を閉め退散しようとした桔久に、劉王が声を投げた。

「桔久」

「は、はい！」

急に呼ばれ、耳の中に心臓があるのかと思うほど鼓動が飛び跳ねた。

「扉は開けておいてくれ。閉めておくには　もつたいない景色だ」  
光の降る翠苑を見遣り、劉王の端正な顔がふ、と和らいだ。

「わ、わかりました」

どれほど今の自分の顔が赤いか意識せぬようにして両開きの扉を開放すると、桔久はそそくさと部屋を後にした。

ああ、びつくりした！

早足で回廊を進みながら、桔久は胸を撫で下ろす。

でも今日もいらしたわ！

瑚蝶が梓宮に戻ってから、劉王は毎日瑚蝶の部屋にやって来るようになった。今日で三日目。以前はこんな頻繁に訪れたことはなかった。

変わったのはそれだけではない。あれほど尖った態度ばかり見せていた瑚蝶が、劉王の来室をすんなり受け入れたのだ。戸惑う様子はあるものの、劉王を見る眼差しはずいぶん優しくなったように思えた。

それは桔久にとって天にも昇るほど嬉しいことであった。

もうあんなこと言わせないんだから。

三日前、瑚蝶が戻った晩のことが甦る。本当は口論程度の喧嘩ではなかった。そのせいで翌日から同輩達の態度がよそよしくなっていた。騒ぎを起こしたことは反省してはいるが、相手に謝るつもりは今もなかった。

瑚蝶様のことをあんな風に言うなんて、許せない。

翠遙宮を出て、居舎のある西内朝への回廊に出た。一度自室へ戻るつもりだった。

その時、「きゃあ」と騒ぎたてる声が回廊の先から聞こえた。同じ薄紅の衣を着た尚位の女官らがかたまつて、黄色い声を上げている。桔久はとっさに近くの朱柱の陰に隠れた。

また官吏を見て騒いでるんだわ。おめでたい人たち。

この回廊からは外朝の殿下がよく見える。官吏達が出仕する時間になるとああして隠れて見物に来るのだ。

一度出仕になれば離職が受理されない限り、宮官達は城の外に出ることはない。桔久達下位の宮官は、上位の者達のように内朝や外

朝に出て官吏と接する機会もない。だからこうしてお気に入りの官吏を決め、遠巻きに眺めてはしゃぐことが余興の一つなのであった。高揚していた気持ちが急に下がっていくのを桔久は感じた。だが自分には関係ない、そう言い聞かせて、遠回りになるが別の回廊へと進んだ。

わたしは、忙しいんだもの。

しばらく進んでいくと、後宮である四の宮と紅紫宮の近くに差し掛かった。騒がしさに桔久は色彩豊かな連なる殿下を見遣った。

色とりどりの衣の階級の異なる宮官達が、忙しなく往来を繰り返している。いつもは無人の宮殿が今日は見違えるように華やかだった。

「始まったんだわ……」

ぼつりと桔久は呟いた。先日宮女募集の触れが城下におりたことは、宮官達の間でも騒がれていた。そのため、後宮に主人達を迎える準備がとうとう始まったのだ。

嫌だな……

複雑な思いで、桔久は四の宮の奥に位置する紅紫宮を見上げた。

花の香りを含んだ春風が、回廊を吹き抜けた。

毅然と立ち並ぶ朱塗りの柱と優美な曲線を描く濃緑色の甍、劉王の正妃となる婦人が住まう気高き宮殿。他の女官達が官吏を追うのに夢中になっているように、桔久はここから麗しいこの宮殿を見上げるのが何よりも好きだった。

もしも、劉王が蝴蝶様をお選び下さったら

そんなことを考えては、溜め息に掻き消され。

『妃の座でも狙って戻ってきたのでしょうか。卑しいこと』

先達の尚位が漏らしたあの一言を思い出し、桔久は唇を固く引き結んだ。

「あら、あなた何なさってるの？」

回廊に立ち尽くしていた桔久の横で、控えめな足音が立ち止まった。はつと我に返って振り向けば、山吹色の衣を着た同年頃の少女が呆れた様子で立っていた。それは、桔久より一つ上の階位である上尚位の美芳びほうであった。

「まさか、羨ましくて見学にいらしたのかしら？」

時には見事な琵琶も爪弾く白く細い手を口元に当て、美芳が棘のある一言をよこす。宮官試験を上位で通過し上尚位に上がった美芳は、家柄もそこそ良いせいか少し気位が高く常に人を小馬鹿にした態度をとる。

「こちらは大忙しよ。私たちみな、新しい主人を迎える準備で・・・ああ、あなたには関係なかったわね。あなたにはもう主人がいらつしやるんですもの。こんなところで呑気に見物しているのかしら？　また逃げられないように見張っていた方がいいんじゃないの？」

鈴の音のような優しい声音が、高慢な笑いに変わる。桔久は美芳を睨み上げた。

「瑚蝶様を侮辱しないで。許さないわよ！」

桔久の威勢に、衣の袖で顔を隠すようにして、美芳が恐ろしげに首を小刻みに横に振った。

「おお、怖い。鈴珪りんけい姐さんのように髪を引っ掻かれたらたまらないわ。すごい騒ぎだったわねえ、この間は。あなた、気狂ったのかと思っただわよ。どうしてあんなに怒ったのかしら」

「それは姐シエが瑚蝶様を侮辱するようなことを言ったからよ！　自分の主人を蔑ろにされて怒らない方がおかしいわ！」

「ふふふ、誇れる主人ならね。あなたと私たちは違うのよ、桔久。私たちはこれから陛下の嬪妃にお仕えするの。でもあなたは、この先も後宮の外」

踏み出しかけた足を、桔久は引き戻した。

何百という劉王の妃が決まれば、尚位や上尚位の宮官らはその婦人たちに仕えることになる。先程の少女たちもそうだ。だが瑚蝶の

侍女である桔久は、華麗を競う姫君の集うこの宮には上がることは出来ない。何よりも夢見ていたこの場所に

それが桔久と彼女たちの大きな違いであった。

「さつさとお行きなさいな。ここはあなたのいる場所ではなくてよ」  
美芳の辛辣な言葉に突き飛ばされるように、桔久は踵を返して走り出した。

回廊を抜け、向かう当ても定めずひた走る。西内朝を出てしまっていることにも気付かず。

悔しさが身体中を駆け巡った。震える唇をきつく噛み締める。鼻の先をつん、とした痛みが突き抜けた。そうして足ももつれ、やがて息も途絶えがちになった桔久が辿り着いたのは、白色と淡紅色の花が満開に咲き誇る内苑だった。

一陣の温風が吹き抜けた。木々が騒ぎ、二色の花弁が次々に舞い散る。絶え間なく季節はずれの雪のように宙を舞い、やがて地面をその色で埋め尽くしていく。

その光景があまりに美しく、桔久は自然と泣き声を上げていた。ここが何処であるかなどどうでもよかった。

とにかく悲しくて、苦しくて。立ち尽くしたまま桔久は声を張り上げて泣いた。

風が遊ぶ花びらの中、誰にも届かぬ嘆きは虚しく空に吸い込まれていく。梓宮に来て、初めて孤独を感じていた。

そうして空を仰ぐのが辛くなると、やがて小さく膝を抱えて蹲って溢れる涙を飲みこんだ。

風がやみ、一しきり踊った花びらが静かに桔久の周囲に舞い降りていく。少女の嗚咽だけが、静寂の降りた庭院に残る。いつ尽きるか知れぬその悲しみを、小さく可憐な花をつけた枝々が穏やかに見守っていた。

そうして暫らく時が過ぎ泣き声がおさまった頃、蹲る桔久の背に問い掛ける者があった。

「どうされましたか？」

伏せていた涙に濡れた面を桔久は浮かせた。

「あの、ご気分でも……お悪いのですか？」

控えめに案ずるその声を、疎ましげに思いながら桔久は振り返った。

「あ……」

振り向いた泣き顔の桔久を見て、背後にいた少年は少しばかり目を見張った。それは桔久も同じだった。

佇んでいたのは、十六、七と見える少年だった。薄青色の袍の上にゆつたりとした翡翠色の外套を羽織っている。肩にかかるくせのない黒髪が縁取るその顔は、少女のように整っていた。

誰……？

官吏だろうか。それにしても随分と若いような気がする。官女服の袖でぐいと顔を拭って桔久は立ち上がった。

「ご心配なく。塵が……目に入っただけです」

「でも」礼をして立ち去ろうとすれば、少年にすかさず呼び止められた。

「でも、声が聞こえました」

その無神経な引き止めに、桔久は呆気にとられた。

「……急に背後から女性に声をかけるなんて失礼ですわよ。それにもしもわたしが泣いていたとしたら、何も訊かず立ち去るのが礼儀ではありませんか？」

赤い目を吊り上げ少し憤慨している顔色を見せれば、少年は真顔で言った。

「いいえ、そ知らぬ振りなど出来ません。泣いている女性を放っておくのは、禁苑の桃を盗むのより罪深いと、父が言っていました」

「は……桃……？」

少年が真面目な面持ちでこくりと頷く。彼の父親がどうしてそんな話をしたのかはわからないが、それは今の桔久にとって大層お節介な助言であった。それを一字一句違えず詩の暗誦をするかの如く鵜呑みにしている少年もどうかと思うのだが。

「はい。ここは李花の庭院ですよ」

少年の品格漂う横顔を追いながら、桔久は上を仰いだ。純白と淡く緋色に色づくこの天蓋は、李の花であった。

「梓宮の李は花の散るのが遅いんです。あと半月ほど、ご覧になりますよ。美しいでしょう」

風がなくとも舞い散る花びらは、胸に染み入る優しい色をしている。掴んだ途端に消えてなくなってしまうそうだ。桔久の目頭がまたじんわりと熱くなった。

「余計なことかもしれませんが……よかつたら私に打ち明けてみませんか？ 話して楽になるということも、時にはありますよ」

少年の眼差しがあまりにも優しく綺麗で、桔久は思わず目を逸らした。子供のように大声で泣き喚いたことが急に恥ずかしくなった。

「……悔しかったの、酷いことを言われて」

「どんな？」

そよ風のように心地のいい少年の声が先を促す。誘われるまま、

桔久は胸の内を言葉に換えていく。

「わたしのお仕える方を、悪く言ったわ。あんなにお姿もお心も清らかで美しい方は他に在りはしないのに……卑しい身分だと。あの方を知っている人はそんなことは言わない。でもわかってくれない人もいるわ。だからわたし、その人と」

「……言い争いになった？」

「ええ……でもそれだけじゃないわ。顔を引つ掻いたし、髪の毛も何本か抜いちゃったの。だって許せなくて、何も知らないのに。でもみんな怖がって、急によそよそしくなったわ」

陰でひそひそと囁かれ、視線を逸らされる。なるべく意に介さぬようにと心がけてはいても、寂しさは拭いきれない。

「それで」少年の差し出した手の平を、白い花びらがふわりと掠めた。

「それでああなたは、後悔をしているんですか？」

「え？」

「その方と仲違いをしてしまったことを、後悔しているんですか？」

「……いいえ、してないわ」

少年の問いに、桔久はきっぱりと頭を振った。

「なら、いいじゃありませんか。あなたは正しいと思うことを貫いたんだ」

屈託無く破顔してみせた少年に、え、と桔久は問い返す。

「正しいと思うことを成し遂げるのは、案外勇気のいることだと私は思います。そのせいで、人を傷つけたり大事なものをなくしたりすることも……ありますから。でも素敵だと思います。大事な人のために勇気を出したあなたは、本当に大切なんですね、その方が」

波打っていた心の水面に、急に風が訪れた。先までささくれ立っていた場所に、少年の言葉が染み渡っていく。同時にくすぐりたい気持ちも徐々に込み上げた。

昇ってくるその疼きに、桔久は笑みを零した。

「……おかしな人。まるで老師みたい。あなた、まさか偉い官吏なの？」

腰に帯びた翠の佩玉を外套で隠し、少年はとんでもないと否定する。

「只の一府庫番です。書が好きなので、楽しいですが」

そう、と答えつつ、桔久は内心安堵する。もしも高位の官吏だったらこんな風に気安く言葉を交わすなど言語道断、あつてはならぬことだからだ。それにそんなお偉方が自分のような下位の者を案ずるわけがないと桔久は納得した。

「……ありがとう。ちょっと元気が出たみたい。不思議ね、初めて会った人に励まされるなんて」

正しいことは自分で決める、例え周りと違つたとしても。確かに後宮は夢だった。けれど、今蝴蝶に付いていきたいという気持ちも事実なのだ。

少年の励ましが爽やかな風を起こし、心の錆を掬い取ってくれたような気がした。

「じゃあわたし、戻るわ。あ……………ねえ、あなたの名前を聞いてもいい？」

「……………名前？ 鳳……………小鳳シャオフォンとお呼びください。お

役に立ったなら幸いです。ではお気をつけて」

「わたしは桔久よ、ありがとう小鳳。じゃあ、また」

笑顔で領き衣の裾を翻すと、桔久は走り出そうとした。だがすぐに立ち止まって、もう一度おずおずと少年を振り返る。

「……………あの、ここはどこなのかしら。翠遙宮に行くには、どうしたらいい？」

薄紅の李花のように両頬を染めた桔久を見て、少年は笑った。

## 【拾九】 腹案

「おのれ……！ あの若僧め！」

わななく声で喚き散らし、朱麗は卓上の茶器一式を薙ぎ払った。幾つもの乾いた音が石床で弾けた。辺りには青磁の茶器だけなく、様々な破片が無残に散らばっている。飾り棚や卓に陳列していた調度品の類は手当たり次第に破壊され、品のいい家財の並ぶその部屋はすっかり風流さを殺がれてしまっていた。

「何もかもすっかり台無しじゃないかつ！ 本当なら今頃とうに慶頂入りしていたっていうのに……！ よくも、よくもこのあたしを馬鹿にしてくれたねっ！」

乱れて頬や額に貼りついた髪もそのままに、朱麗は目覚めた時の惨状を思い出し肥えた身体を怒りで震わせた。

朱麗が目を覚まし表に飛び出した時にはもう、事態は收拾していた。残忍凶悪で名を馳せた徒党らの失態を知り、朱麗は怒り狂った。だがここで地団駄を踏んでいても埒が明かない。そこで一旦山を降り、慶頂への道途にある小さな街へ身を寄せた。ここには祖王と交誼のある商人がおり、街のはずれにある屋敷の一室を隠処として提供してくれていた。

「よりによつて統王の犬なんて……！ 邦昌、お前どこでしくじったんだい！」

気を乱した金切り声に、邦昌はかけ離れた温度差の窓辺から振り向いた。そして残骸の中で落ち着き無く右往左往する母親を睨み付けるように目を細めた。

「そんなへまはしていない。だがあの方なら……僅かな手掛かりでも見落としはしないだろう」

そう深読みすべきだった。馬車を襲撃し瑚蝶を連れ去った後、邦昌は一度馬車まで戻った。時間稼ぎに差し向けた張蛾の男達が一人残らず斬り殺されていたのを見た時、憂慮はした。賢明な黎青なら

ば、残された些細な情報から勘案して劉王に暗示することも容易いであろうと。そう察していたならもつと迅速に行動すべきであった。「この一件が祖王に露見したら、あたしの立場はどうなるんだい！  
……いや、そんな枝葉はどうでもいいことだよ。西嶺の皇太子が絡んでくるとなると、ぐずぐずはしていられない。あいつは張蛾を目の敵にしているからね」

西嶺の討伐軍が動き出せばそれは明らかかな脅威になる。この一件に阿樽が介入しているとなれば、間もなく一掃の為の包囲網が張られる可能性もある。

「そろそろ頃合かもしれないねえ……火種を放り込むには」爪を噛みながら、朱麗は低く呟いた。

逆らうようにして流れ始めている大きな気流があることを朱麗は知っていた。それが罫とくろを巻いて確実に大きくなっていることも。

「息子や」

急に声を丸くして朱麗は邦昌に呼び掛けた。

「祖王の元へ早馬の手配をおし。それから」

朱麗の紅い口元が醜く歪んだ。蛇のように細めた目に貪欲そうな愉悦が浮かびあがる。

「何としてでも蝴蝶を連れて来るんだ。あの子には多大な利用価値があるからね……今度は逃がすんじゃないよ」

参りましたね。

風に立ち向かいながら、夕闇の迫る青海原を駆ける馬の背で黎青は独り言ちた。

金稜花の原をとくに過ぎ、延々なる緑萌える大地を馬足は蹴り急ぐ。背後の景色の中から遠のいた梓宮での出来事を思い起こして、黎青

の口元に苦笑が滲んだ。

瑚蝶が戻ったとの報せを受け、黎青は二の腕に疼く傷を連れたま  
ま梓宮を訪れた。瑚蝶へ謝罪するためであった。

勿論そうすることに葛藤がなかったわけではない。だが、少な  
らず自分に非があることを黎青自身認めていた。それ故じつとはし  
ていられなかったのである。時には冷酷な決断も是とする一方で、  
時には潔く矜持を捨てる律儀さを併せ持つ男　それが黎青であっ  
た。

『申し訳ありません。貴女を危険に晒したのは僕の責任です』

劉王の同席のもと、黎青は瑚蝶の前で深々と頭を下げた。次期国  
王として生を受けかしくされることを常とする身にとって、自ら過  
ちを認めることがどんなに屈辱的な行為かを黎青は理解していた。  
軽率に判断するべきではないということも。

『面をあげてくださいまし、黎青様』

だが柔らかい響きに揺すられて青眼を開いた黎青が見たのは、自  
分の前に跪座する瑚蝶の姿だった。

『急にどうなさったんですの？　わたくし、こうして無事ですよ』

その微笑みの清らかさに眩暈がしそうになった。

同時に適わない、と思ったのだ。

黎青の立場を慮って跪いた瑚蝶の花のような笑顔にも、それを見  
守る劉王の春の陽射しを模したような穏やかな眼差しにも。

結局、僕のしたことは無駄だったということか。

もしくは二人の関係の助長に繋がるただのお節介だったのか。二  
人の間に流れる空気が以前と少し違っていることに黎青は気付いて  
いた。

何にしる、もう僕の出る幕ではありませんね。

諦めの境地に落ち着いている自分に、黎青は失笑した。あれほど  
剣呑していたのが嘘のように、妙に開放的な気分だった。

苛烈なまでに鮮やかな夕暉が焦がし始めた青草の先に、やがて目指す茶壁の壮大な城が姿をみせた。西嶮の皇城、牙凰城がおうじょう。それを見止めて黎青は気を入れ替えた。

それよりも問題はこちらですね。

『阿搏の様子を見て来てくれぬか』

帰り際、劉王が黎青に言った。理由は述べなかったが、黎青は二つ返事で承諾した。ちょうど現皇帝で阿搏の兄である吉京より暮の誘いを受けていたため、訪問の口実はあった。

黎青の乗る馬が城に近付いていくと、聳え立つ緋色の門がゆつくりと開き始めた。

そのまま門を走り抜け、正殿前の横街へと黎青は馬を乗り入れた。

【貳拾】 綻 び

「なんだ、急に来るなんて気味が悪いな」

客房に通されて数分もしないうちに現れた阿樽は、窓辺に立つ黎青の顔を見るなり開口一番不機嫌さを露に皮肉を放った。

「なんですか、その言い草は。せっかく訪ねて来た友人に対して」  
「思いもよらぬ歓迎の文句に、数多の姫君達から麗しの君と呼ばれる黎青の目元が冷気を帯びていく。それに気付いて、気まずそうに阿樽は頭を掻いた。」

「冗談だよ、冗談！ で？ 今日はなんだってんだよ」

「生憎ですが、今日は吉京陛下にお目通りをお願いしたく伺ったんですよ。以前対局をご所望でしたので」

「はあ？ 兄上と暮を？ じゃあオレを訪ねて来たわけじゃないんじゃないかねーか」

「なんだ、とわずかに残念そうな顔色を見せて溜め息を吐き出した阿樽に、黎青は微笑した。」

「なら丁度いい。オレも兄上のところに行くところだったからな、一緒に来ればいい」

突慳貪に言うなり、阿樽は踵を返して歩き出した。その後が続いて黎青も部屋を出た。

「 聞きましたよ、貴方の奮闘振り」

夕陽を受ける回廊に影を並べて進みながら、黎青は言った。

「ああ………劉閃から？」

「いえ、瑚蝶殿から」

「瑚蝶が？ いつ会ったんだ」瞬時に阿樽が切り返す。

露骨なほど素直な反応に、黎青は笑いを噛み殺した。

「一昨日ですよ。見事な応戦振りだったと、おっしゃっていました。無茶はしなかったようですね、安心しました」

「………当たり前だろ、オレだって子供じゃないんだ」

そう言いつつ阿搏が口を尖らせる。だが目的の部屋の扉の前に辿り着くと、その口元をきりと一筋に引き結んだ。

扉の両脇に控える兵士達が阿搏に敬礼を見せ、荘厳な執務室の扉を開いていく。完全に開くのを待たず歩を進め出した阿搏に従って黎青も入室した。

「失礼します、兄上」

引き締まった阿搏の一声に、室内にいた数人の視線が浮き上がった。

中にいたのは吉京だけではなかった。

「阿搏」

阿搏の来室に拝礼した数人の近臣達の間から、吉京が進み出る。自分に対して礼の姿勢をとった弟をやりわりと差し止め、そしてその背後にいる青年を見ておやと目を瞠った。

「これはこれは、皇太子殿下ではありませんか。ご来城とは知らず、お出迎えもせず」

「ご尊顔を拝し幸甚に存じます、皇帝陛下。弟君より手厚いご歓待頂きました故、お気になされずに。私こそ、何の報せもなく参内しご無礼を」

「何を言いますか。阿搏の知音である貴方を無礼だと罵るなど、滅相もないこと。こちらが罰せられかねません」

黎青の慇懃な礼に、吉京は柔和に微笑んだ。奢りの欠片もないその笑顔に、相変わらず毒気のない人だと黎青は思った。

今年二十六になる吉京は、血気盛んな阿搏とは対極的な温厚な氣質である。先帝の崩御後二十二の若さで皇帝の座に就き、心肝を以って西嶮の発展に努めてきた。だが胸の病を患うせいで病床の出入りを繰り返す吉京の体調は不安定で、その顔色もすぐれない。西嶮の秘色である青藍の常服に身を包んだその姿は、どこか儂げで英気に欠ける。

「兄上、体調はいかがですか」

阿搏がそう伺えば、吉京は子供にするように阿搏の髪を撫でた。

「毎回私の顔を見るたび不安そうな顔をしないでくれ。お前は心配性だな」

自分より幾分か上背のある兄を阿樽は見上げた。線の細い兄を見ていると、やはり病弱だった母親と重なって気掛かりになってしまふ。髪から離れたひどく細いその手に目をあて、阿樽の心は複雑な思いに沈む。そんな阿樽の気持ちを読み取ってか、吉京は付け加えた。

「そんな容易く倒れたりせぬ。自分の具合の程は心得ているつもりだ、無理はしないさ。今そのようなことになれば、国民は勿論のことと私自身も困る。それにお前という、何より心強い片腕がいることだしな」

掛け値なしの吉京の言葉に、阿樽は素直に嬉しくなる。そして何より気丈に振舞う兄を誇らしくも感じた。

際立つ才華はないが吉京の国王としての才気は充分に発揮されており、何よりその篤実な人柄は深く国民に愛され国政は安定しているのだ。即位した頃の周囲の危惧を、吉京は徐々にではあるが覆ってきた。

「兄上、黎青と暮の約束を？」

顔が緩みそうなのを誤魔化すために、阿樽は話題を変えた。ああ、と吉京が頷く。

「そうでしたね、私からお手合わせをと申し出ましたね。ですが、申し訳ありません黎青殿。お相手願いたいのは山々なのですが、少々立て込んでおります」

背後に立ち並ぶ家臣達を一瞥して、吉京はすまなそうに黎青を見た。

「何かあったのですか？」

宰相の列氏れっしや重鎮達の顔を見合わせる様子に、阿樽は不穏な気配を察知する。吉京が僅かに視線を泳がせた。

「陛下」

低いしわがれ声が吉京の背後から上がった。

重臣達の間から、背中の曲がった老臣がそろそろと進み出る。

「阿樽様の耳にも、お入れするべきでは？」

豊かな銀鬚をたずさえた好々爺といった風体の老人の進言に、吉京は肩で息をついた。

「……そうだな、愁先生しゅうせいの言う通り、そうするべきかもしれない」

「何ですか？ 何があったというのですか？」

阿樽は固い面持ちの兄と、かなり高齢と見える老臣 愁走海しゅうそうかいを交互に見遣る。

「では、私は外へ」

場の空気を察知した黎青が直ちに退室を申し出る。

「いいえ」だが、吉京の眼差しがそれを制止した。

「黎青様にもお聞き頂きたい。我が国だけの問題ではありませんかぬ」

その深遠な響きに、黎青は青水晶の双眸をひそめた。

「不穏な動きがございます」厳かに愁走海が切り出した。阿樽がすぐに問い返す。

「それはなんだ？」

「買身です」

「ばいしん？」

「秘密裏に行われている兵士の競売です。戦闘能力に値をつけ、売買するというものです。元は表立った奴隷売買市場だったようですが、いつ頃からか闇取引に転じたようです」

「いったい何の為に？」

「おそらく目的は機密情報の入手かと」

「……つまり、我が国の兵士の中に自らを金で売り、外部と款を通じている者がいると？」

阿樽の勘の鋭さに感心したか、愁走海の白い束になった眉毛がぴくりと動いた。

「その可能性も否定できぬということですよ。明確なことはまだわか

りませぬ。ただ高額な財貨を差し出されれば、自らの意志で取引に身を投じる者も少なくはないでしょう。先日捕縛された盗賊団の中に、辺境軍府の防備兵が数名おりましてな……尋問の末、闇取引に関わったことを自供いたしました。高額報酬の代わりに請け負ったと」

辺境の関門の防備兵ということは、中央軍府より正式に統率権を譲与された地方軍將の配下にある雇兵である。西嶮では府兵制では賄いきれない辺境警備は、臨機の方法として傭兵制度で補っている。言うなれば彼らは只の門番ではあるが、防衛要衝である砦を守るという重要な役割を担う。万が一、悖逆を企てる何者かに買収されるような事態が起きれば

「すぐに摘発を。しらみ潰しに調べればすぐにわかる。兄上、オレに任せてください」

焦燥感に捕らわれ、急いた口調で阿樽は提言した。

「駄目だ。確証なしで動くわけにはいかない。まずは穩便に調査を進めるのが得策だろう」

「そんな悠長なことを言っている暇がありますか！ もし事実なら……情報漏洩だけでは済まなくなる。国の存続に関わる問題ですよ！」

そう息巻く阿樽にも、吉京は落ち着き払った言容を崩さず、否と首を横に振った。

「今やみくもに摘発を行えば、兵士らの反感を買う。内部での綻びこそ破綻への要因になる。今はまだ、様子を見るべきだ」

「忠義に背く輩など、切り捨ててしまえばいい！ 不穩要素は今取り除くべきだ！ 事が起こってからでは遅い」

「阿樽」

鋭い一喝ではなかった。だがその戒めの響きは確実に阿樽の言葉を止めた。

「落ち着きなさい。まだ何か起きると決まったわけではないのだ。無茶な制圧をしてもし民に危害が及ぶようなことが起きたらどうす

る　我々が優先すべきは民の平穩の維持だ。不安を煽り揺すぶることではない。それはお前も望むことであろう」

　　違う、そうじゃない。

阿樽はきつく拳を握り締めた。そして兄の二の句を振り切るように踵を返した。

「阿樽！」

執務室を飛び出していった阿樽を黎青は追いかけた。

「阿樽！」

明らかに殺気立ったその背中めがけ、黎青は声を張り上げる。だ  
がまるで取り合わず、阿樽は回廊をひたすら突き進んでいく。

「阿樽様っ」

背後からの声に黎青は執務室の扉を振り返った。遅れて部屋から  
出て来たのは愁走海であった。

「お待ちください、皇子！」

老体に鞭打ち歩を早めながら訴えかける愁走海の声にも、阿樽は  
立ち止まる気配はない。それを見兼ねて、黎青は阿樽に追いつきそ  
の行く手を塞いだ。

「止まりなさい、阿樽」

立ちはだかる黎青の前に、阿樽はやむを得ず足を止めた。愁走海  
の荒い息遣いが阿樽の背後に辿り着く。

「無茶はいけませぬぞ、阿樽様。吉京様のご意向に背くような行動  
はお慎み下さるよう」

「わかつている！！」

感情の荒ぶりが露呈した血走った目で、阿樽は振り返り様愁走海  
を睨みつけた。老木の如き深い皺に埋もれた老翁の小さな双眸は、  
肅然と怖じることなく阿樽をとらえている。

「わかつておりませぬ。そのような憤慨しきったお気持ちで、何を  
理解できるというのです。冷静におなりください」

「冷静だっ！？　裏切り者が増長していくのを看過しろというの  
か！」

黄昏が広がった回廊に、阿搏の怒号が幾重にも重なって響く。嘆きを表すように、愁走海は長大息をついた。

「お父上の遺言を覚えておられるか」

「忘れるわけがないだろう！ 兄上を守れと、その役に立てと。その言葉にオレは従ってきた。兄上の胸背に降り懸る災禍も負担もすべてオレが排除する。そのためならばこの命も惜しくはない……」

「お父上は御身を犠牲にすることなど望んではおりませぬ」

「構わない！ オレはっ……兄上を失いたくないだけだ……」

それが生きるすべて。国よりも、民よりも、何よりもたつた一人の肉親である兄を失いたくない。それが阿搏を突き動かしているすべてであった。

それ故、自分なりの方法で「裏」を片付けることに阿搏は専念してきた。

山賊討伐もその一つであった。だが中庸かつ平和主義の吉京は滅多なことで軍の可動を許可しない。だが独断では軍隊は動かせない。阿搏が選んだのは、暗々裏に処理することであった。

それは傍から見れば無茶以外の何でもない行為だった。敵陣に単独で飛び込んでいく。だが皇子を危険に晒していると知りつつも、上層部は止む無く黙認していた。危険を顧みない阿搏の勇猛さが、国の危険因子を確実に減らしていることは明らかだったからだ。

武術、剣術の面においては阿搏は才能を発揮した。容赦なく懐に飛び込んでいく強靱な精神は、軍師をも怯ませる。まるで狂気に駆られたように剣を振るい敵を切り裂くその姿は、鬼神が宿るかのようであった。

「阿搏様……」

一度決意を固めたら覆さない阿搏の狷介さを、先帝の代より教育顧問を務める老英はよく理解していた。それが諸刃の剣だということも。悲愴な思いで阿搏を見つめる黎青にとってもそれは同じだった。

「……一人にしてくれ」

それ以上の言葉を拒絶するように、阿樽は二人の間をすり抜けた。そして回廊に満ちた闇に向かって、一人消えていった。

してやられた。

武翔殿にある自室で、誅易は絶え間なく溜め息を繰り返していた。恰幅のいい巨体を丸めるようにして机案につく様子は、禁軍を取仕切る豪傑とは思えぬほど消沈している。

なぜこうなるのだ……。

手元に散らばる名冊を、誅易は虚ろな目で眺めた。

宮女募集の触れが功を奏し、すぐに数百の妃候補が集まった。地方より送られてきた候補者らの名を連ねた名冊を見て誅易は満悦していた。つい数日前のことである。後宮では嬪妃達を迎え入れる準備が始まり、そしてついに誅易の念願が果たされる日が来た。

列を連ねて後宮入りした妃候補は美女揃いだった。これには城中央が一時沸いた。これから数ヶ月彼女達は嬪妃に相応しい才覚と品性を養うために後宮教育を受けることになる。だがどうも様子がおかしいと、宮女達に説明を施しに行った抄宮正が慌てた様子で誅易の元へやって来た。聞くところによると、明日より行われる講義の教書を渡された候補者達は皆一様に首を傾げ、口々に「宮女の募集ではないのか」と訊いてくるのだというのだ。

宮妓とは宮廷で開かれる宴席で歌舞音曲、詩歌管絃の技芸を披露する女性達のことだ、色街の娼妓的な役割も含む。だが近世、統の王宮ではそのような慣習はなくなっていた。

それに疑念を抱き、抄宮正が改めて候補者達数人の面談を行ったところ、予見外の事実が判明した。

なんと五百余の華やかな美女達は皆、あらゆる州の都や街の妓楼よりやって来た娼妓であったのだ。

これにはさすがの誅易も憚然とし、直ちに各地に宮女候補選定の為に派遣されていた役人達を糾弾した。だが彼らは「知らなかった」と言い張り首を横に振るばかり。

確かに審査の基準は甘かった。

女なら構わぬと急くままにかき集めた節もある。悠長に選んでい  
る猶予などなかったのだ。事を急がねば劉王に先手を取られ兼ねな  
い 誅易はそう危惧したのである。

だがまさかこのような事態に陥るなど、どう予期出来たであろう。  
極めつけ、劉王はこの綺羅を纏う集団を眺め、悠揚と言い放った  
のだ。

『官吏達の劳いの為に、後宮を開こうと思ってな。いい気晴らしに  
なるだろう。俺一人ではこれだけの人数の相手は到底出来ぬからな  
お前もどうだ、誅易？』

あろうことか、劉王は後宮を妓楼に仕立てようとしていたのだ。

ああ、なんということだ。

後ろめたい思いもあり、蝴蝶が戻ったことに関しては誅易は口を  
噤むことにした。だが兼ねてからの深憂であった后妃問題だけは、  
何としても完遂するという初志を貫くつもりであった。それがい  
よいよという所で破綻するとは

「將軍」

一人誅易が頭を抱え煩悶していると、部屋の扉を叩く者があつた。  
顔を出したのは蓉洵だった。

「昨日に引き続き今日も兵舎にお出でにならないので、皆どうした  
ものかと心配していますよ。 まだ塞いでおられるのですか？

辛艱が絶えませんか」

どこか笑いを含んだような蓉洵の口振りに、誅易の額にかすかに  
青筋が立つ。おそらく此度のことは兵舎で笑い種になっているので  
あろう。冷やかしの目に晒されるのは真っ平だった。

「う、煩い！！ 遠征軍の到着も遅延しているのだ、平常訓練くら  
いお主の監督で充分だろう！ 私は忙しいのだっ」

常人ならば震え上がりそうなほどの激烈な怒声を飛ばし、誅易は  
机上にある物が浮き上がるほど強く岩のような両拳を叩きつけた。

その衝撃を食って舞い落ちた名冊の一枚を拾い上げ、蓉洵は涼や

かに眺めた。

「私も見てみたかったですねえ、その美女の群れを。さぞかし良い眺めだったでしょう」

蓉洵の軽い揶揄に低く唸りその手から名冊を引つ手繰ると、誅易は掌中でそれを握り潰した。

宮女達の素性が割れた後、直ちに後宮は閉鎖された。つい二日前のことである。

由緒正しき正統な後宮を、色街なぞに貶められるわけがない。皇帝の衣食住に関し断定権を持つ内侍甫ないじほうである誅易の苦渋の決断だった。

「なぜあのようなことになるのだ……。劉王に示唆され根回しをした者がいるに違いない。そうに違いないのだ、おのれ……。！」

憤怒の色が濃くなっていく誅易の面相に、蓉洵はぎくりと首を竦めた。さりげなく話の矛先を逸らそうと皮肉を放つ。

「……。触書を間違ったのでは？」

「馬鹿を申すでない！！一字一句幾度となく確認したわ！娼妓の娼の字も出ておらん！……。恐らくは妓楼に馴染み深い者が関与しているのだろう。官吏の中には色街狂いも多い。探し出し、嚴重に処罰してくれるわ！」

再び誅易の拳が机上を打った。

「はあ……。しかし、そこまでしなくとも」

「何を言っておる！統の存続に関わる一大事であるぞ！お主も宰相殿の嫡子ならば少しは焦慮せぬかつ！……。そういえば、妙なことがあった」

「……。妙なこと？」

訊き返す蓉洵の目を、誅易が捕らえた。

「娼妓達の出所を調べた所、西鄭州の大都、漣城れんじょうの赤燈籠街あかとろうがひに集中しておったのだ。赤燈籠といえ言わずと知れた大妓楼街。国内で最大規模を誇ると聞く。……。確か、西鄭候の困う妓楼が大

半を占めておるらしいな」

蓉洵の脳裏に、「拙い」という文字が駆け抜けた。だが、誅易は視線を外さぬまま続けた。

「……………」ということはお主も自由に出入りは可能なのであるうな？」

ゆらりと誅易の巨体が机案から立ち上がる。全身からはあからさまな怒気が立ちのぼっていた。それを感じ取り、蓉洵は脱出体勢に入った。

「あ、そうでした。兵部尚書殿から仰せがあったのを忘れていました。さて急がねば。では私はこれにて失礼致します」

詰問が来る前に先手を放ち、蓉洵はくるりと踵を返した。すぐさま誅易の呼声が飛ぶ。

「待て！ まだ終わっておらんぞ、誰が退出を許したっ！ そそも私もお主の上官であるうがっ！」

振り返り、蓉洵は誅易に一笑を送った。

「催尚書は融通の効かないお方なのです、ご存じでしょう。その点將軍は思いやり深い寛大な方だと私は知っております。ですのでまた後ほど。では失礼致します」

「西蓉洵！！」

誅易の烈火の如き咆哮が轟く前に、蓉洵は早々と扉の外に消えた。その直後、後を追って誅易が回廊へ飛び出したが、すでにその姿は何処にもなかった。

『面白いものが見れるぞ』

劉王のその一言が気になって、瑚蝶は梓宮内のある庭院へと向か

っていた。

府庫や文官らの職房のある煬心殿の裏手、王族の廟所である東内朝への途次にその壺庭はある。

手入れの行き届いた他の庭院と違い、人目に触れる機会の少ないこの小さな庭を訪れる者は滅多にいない。出入りするといえは書を携えた博覧な官吏達くらいであった。

だがこの時節、忘れ去られがちなこの庭では李花が咲き匂い、一時の花の宴を楽しむことが出来る。それ故、ほんの僅かな間ではあるが、この李花の苑は人々の記憶の中に春の風物詩として甦るのであった。

穏やかな春日に抱かれる煬心殿の回廊を経て庭院へ辿り着いた瑚蝶の耳に、聞き覚えのある鈴音のような声が聞こえてきた。

「ねえ、これはどういう意味なの？」

庭へ降りようとしていた足を戻し、丹柱の陰を伝いながら瑚蝶は庭の中を伺った。

紅白の絨毯の敷き詰められた花降る園の片隅の李下に、石の長椅子がある。そこに一人の少年と少女が寄り添うように座っているのが見えた。

桔久？

少女は桔久であった。隣りに座る白い官吏服姿の少年が膝の上に広げている書物を二人は覗き込んでいる。時々顔を上げ笑い合うその様子がなんとも微笑ましくて、瑚蝶は唐衣の袖で緩む口元を押さえた。

桔久ったら……。

そういうことだったのかと瑚蝶は納得した。劉王が瑚蝶の居室を訪ねて来ると、お茶を淹れてすぐにそそくさといなくなるので不思議に思っていたのだが

劉王は余暇をこの煬心殿で過ごすことが多い。おそらくこの場面に行き会ったに違いない。

暫らく柱の陰で二人の様子を見守っていた瑚蝶だったが、ここで

出て行くのは余りに無粋だとそのまま引き返すことにした。

だがその時、ふと顔を上げた少年と間合い悪く目が合ってしまった。

少年が弓にでも弾かれたように立ち上がった。

「どうしたの？」

その膝から地に敷かれた花びらの中へ振り落された書物を拾い上げ、桔久が少年を見上げた。そして少年が凝然と立ち尽くしたまま見つめている方向へ顔を向け、あつと声を上げた。

「こ、瑚蝶様っ！！」

桔久の手の中から書物が滑り落ちた。

よほどの衝撃だったらしく呆然と立ち尽くす二人いる庭へ瑚蝶は降り立った。

「ごめんなさい、驚かすつもりではなかったのだけど」

散つてもなお大地を美しく彩る花の欠片を踏み散らさないようにと気遣いながら、瑚蝶は二人へ近付いた。桔久が両手を握り締めて、激しく首を横に振る。

「いいい、いいえ！！ わっわたしこそ黙ってこんな所まで出歩いて………申し訳ありませんっ！ あの、これはですね、ええと………」

顔をこころろ変えてあたふたと弁明する桔久に、瑚蝶はくすくすと笑った。

「咎めているわけではないのよ、桔久。近頃晴れやかだったわけがわかったわ。それにしてもいつの間に………ねえ、鳳仙様？」  
悪戯っぽく小首を傾げて見遣れば、固まりきった少年、東鳳仙の顔色にぱつと朱が差した。

「こ、瑚蝶様ご無沙汰しておりました。ええとこの度は、その堅苦しい挨拶を持ち出そうとして失敗し、鳳仙は困惑顔で口籠った。

「お二人はお知り合いなのですか………」

瑚蝶と鳳仙を交互に見比べながら桔久が意外そうに目を瞠る。

「ええ、以前一度ご挨拶させて頂きましたわね。確か鳳仙様が秘書省の」

「あ、あのっ！」

説明しようとした瑚蝶の言葉の続きを拒むように、唐突に鳳仙が声を割り入れた。

「わ、私が桔久殿を誘ったのです。諸子学説や思想に興味がお有りとのことでしたので、よ、読み易い書のご紹介を」

慌てきつた鳳仙の口調に、瑚蝶は少々驚いて両目を数度瞬いた。

はつと我に返った鳳仙は、倉皇するのにもままならなくなったか更に顔を赤らめて下を向いた。濡れ羽色の髪が肩から滑り落ち、俯いた顔を隠す帳を作る。

「そうなんです、小鳳はとつても博識なんです。色んな書を読んでいて……だから色々教えてもらってるんです」

桔久の声の調子がぱつと明るくなる。足元から再び拾い上げた書を胸に抱いたその表情は、愛らしい花の綻びのようだ。

小鳳？

桔久が口にした気軽なその呼び名で、瑚蝶は鳳仙の胸の内を悟った。

“秘書省令”という肩書きの話も鳳仙は持ち出さなかつた。

位は時に人を遠ざける。まして異例の出世を遂げたとはいえ鳳仙はまだ十七歳だ。真意で向き合いたい相手の前では、尚更重荷になるのである。

何の柵もない在りのままの自分を見て欲しい　鳳仙のささやかな願いを汲んで瑚蝶は話を合わせた。

「文官の中でも殊更優秀だと聞いていますわ、鳳仙様は。よかつたわね、桔久。でもくれぐれも鳳仙様の御勤めのご迷惑にならないようにね」

瑚蝶の言葉を聞いて、桔久は零れんばかりの笑顔で頷いた。

「はい！　ありがとうございます！」

二人は顔を見合わせて、安堵感を確かめ合うように笑いあった。  
「あつ、いけない！ そろそろ正午ですよ。昼餉の用意をしに戻らないと！ ありがとう、小鳳。また今度教えてね」  
はつとして蒼昊を見上げた桔久は胸に抱いていた書を鳳仙に渡し、瑚蝶に礼をとつて慌てて駆け出して行つた。まるで春風に追われるように。

「桔久殿は貴女様のお話ばかりされるのですよ」  
遠ざかっていく薄紅の衣を見送りながら、鳳仙が言った。

「本当に、貴女様をお慕いしているのですね」  
帰城した日に「もう何処にも行かないで」と涙声で何度も繰り返した桔久の顔が甦る。あれ程に綺麗な泪を見たのは初めてだと瑚蝶は思った。

「私は幸せ者ですわね、本当に……」

何もかも失つた、そう思っていた。けれど得たものも確かにある。淀んだ心の水を、桔久の泪は浄化してくれた。

「……貴女が、戻られてよかつた」  
「え？」

戯れ流れる陽風に、李花の木々が漣のように揺れた。真摯に見つめてくる鳳仙の双眸は、澄み切つた真っ直ぐなその心根を表すかのようであつた。瑚蝶は目を伏せた。

「……蓉洵様からお聞きになつたのですね。本当によかつたのか、今でもまだわからないのです。私はやはりここにゐるべきではないのではと」

今までのように穏やかな日々に染まり安寧の中にあつても、瑚蝶の気持ちは揺れ動いていた。だが口に出せば今日も明日も崩れ落ちてなくなつてしまふそうで、胸にしまひ込んでいる。

「劉王は何も……私に訊きませでした。ただ戻つて来ないかと。私はそれに甘んじてしまいました」

言わねばならぬことは数え切れぬほどあつたのだ。朱麗のこと、邦昌のこと。だが劉王は何一つ訊いては来なかつた。毎日のように

茶を喫しに訪れるようになったのは、こちらから口を割るのを待っているからかと思っただが、話題に載せるようなことは一度もなかった。それに瑚蝶は安堵もしたが、そこはかとなしに罪の意識も感じていた。

「貴女に戻って欲しい、それが陛下の真のお心だと思います。

いつもは皇帝という鎧の奥に封じた　どうか察してさしあげてくださいませ」

「察する………?」

「陛下は　ずっと待っておられるのです。貴女の心の蟠りが解けるのを」

「それはどういふ　」

言いかけた瑚蝶の言葉の続きを攫うように、一際強く風が吹き抜けた。

疾風の唸り声に、梢が騒ぎ出す。

「………雨になるかもしれませんね」

流れを早めた雲が過ぎっていく空を見上げて、鳳仙が呟いた。

花卉が李苑を舞い踊る。

風に包まれて昇っていく春の雪の行方を追って、瑚蝶も天穹を見上げた。

【式拾貳】 迷執の果て

「酷くなってきたようですね」

蔀窓の外を覗き込みながら、桔久が嘆息交じりに呟いた。

夕闇迫り始めた頃から降り出した雨は一向に止む気配はなく、夜半過ぎた今になって雨足を強めていた。

風に煽られ蔀ががたと揺すぶられる音に、蝴蝶は刺繍の手を止めて顔を上げた。

「窓、閉めますね。雨が吹き込んできちゃう。まるで嵐みたい」

蔀を降ろすと、咆哮する風と地に突き刺さるような雨音に桔久は不安そうに身を竦めた。扉や窓が軋んだ音を立てるたびに視線を揺らし落ち着かない様子の桔久に、蝴蝶は微笑みかけた。

「大丈夫よ。明日の朝にはおさまるわ、きつと」

「で、でも、雷とか鳴らないでしょうか」

両手を胸の前で握り締め、桔久は蝴蝶の傍へ寄った。空に一閃光が入っただけで悲鳴を上げて逃げ出すほど、桔久は雷が嫌いだ。まるで幽霊にでも遭遇したかのように強張った顔をしている。主人の手前、懸命に恐怖を堪えている姿はなんともいじらしい。

「じゃあ今夜はここで休みなさいな。この風では居舎に行くまでに灯りが吹き消されてしまうわ」

蝴蝶の提言に、桔久の表情が安堵に緩んだ。いつもはもっと早く退出しているのだが、いつ顔を出すやも知れぬ雷牙への恐怖に今夜は足を踏み出せずにいたことを蝴蝶はわかっていた。

「……いいんですか？」

「ええ。途中で雷が鳴ったりしたら、大変ですものね。先に休みなさいな、私はこの刺繍をもう少し進めておくわ」

「ありがとうございます！でも、先に休ませていただくわけにはいきません。蝴蝶様を待ってますわ。あ、もうすぐ完成なのですね」

瞳を輝かせ、桔久が瑚蝶の手元の刺繍布を覗き込む。そして純白の手巾の上に咲く紅い牡丹を見て、ほうと溜め息をついた。

「素敵！ 瑚蝶様は本当に何でもお出来になるのですね。珪香様けいが、きつとお喜びになりますわ！」

「そうだといいのだけれど。でもお誕生日の贈物には、ちよつと粗末じゃないかしら」

布に針を刺しながら瑚蝶は思う。

明後日、劉王は愾麟を訪問することになっている。黎青の末妹、珪香の誕生日の祝宴に出席する為だ。

珪香は今年で十歳になる。殊の外劉王に懐いている彼女は、参宴の打診を黎青にせがんだらしい。先日招待状を携え訪城した流麗かつ聡明な兄君は、どこか複雑そうな面持ちでそう告げた。

その珪香への祝品に刺繍をしてくれないかと、瑚蝶は劉王より直々に仰せつかったのだ。だがこんな手製の手巾が姫君の贈物に相應しいのかと、瑚蝶は案じていた。一国の姫君の祝事となれば、絢爛豪華な祝いの品が山を築くが如く届くであろう。どう考えても見劣りするではないか。

だがそれが珪香との約束なのだ和刘王は言った。

「そんなことありません！ こんなに美しい刺繍が出来る方なんて滅多におりませんもの！ 絶対に喜ばれますわ」

保証いたします、と豪語する桔久に瑚蝶はありがとう、と笑って針を進めた。だが指先が冷たくなってきたのを感じて、冴えた部屋の空気を見上げた。

「……今夜は少し冷えるわね」

「あ、では湯婆たんぼをお持ちしましょう。お風邪を召しては大変ですから。確か隣りの房に 用意してきますね！」

「雨で廊が濡れているでしょうから、気をつけて」

扉に向かってぱつと走り出した桔久の背に注意を喚起し、瑚蝶は刺繍布に視線を戻した。あと二枚牡丹の葉を施せば、完成だ。どうやら明日には仕上げることが出来そうである。翡翠色の糸を通した

針を蝴蝶が布に刺そうとした、まさにその時であった。

「きゃっ！」

引き攀った短い桔久の悲鳴に、蝴蝶は面を上げた。

立ち尽くす桔久の前で、嵐を招き入れるようにゆっくりと朱色の二枚戸が開いた。風雨の哭き叫ぶ声が部屋に雪崩れ込んで来る。開放された扉の先に、一人の青年が立っていた。

冥暗の中じつとりと濡れそぼったその姿は、まるで墓場から彷徨い出た死者のようであった。

「ほ、邦昌……様？」

確信が持てぬ様子で青年を見上げながら、桔久が一步後退る。無理もなかった。全身ずぶ濡れて、憔悴しきったように青白い顔をした青年は、嘗ての快活な邦昌とは別人のようだった。

桔久がもう一步後ろに足を退いた。雨水を滴らせて立ち尽くす青年の目に、静かな狂気が走つたのを蝴蝶は見た。

「桔久！ 離れて！」

卓子から立ち上がり、蝴蝶は叫んだ。

振り返りかけた桔久に青年の腕が伸びる。

「きゃあっ！」

悲鳴を上げた桔久の口元を濡れた手で覆い、邦昌は自分の胸の前に強引に引き寄せた。そしてその腕を素早く桔久の首元に回し、上を向かせて締め上げる。

「桔久！！」

駆け寄ろうとした蝴蝶の視界を、鈍い煌きが過ぎった。

「動くな」

腕を振り払おうと抗う桔久の眼前に、短剣の切っ先が突きつけられる。

見開かれた桔久の両目が、驚愕に戦慄いた。

「お前もだ、蝴蝶 動いたら、こいつの首を掻っ切る」

剣先を今度は桔久の首筋に押し当て、邦昌が非情な宣告をする。

今にも刃を引きそうな張り詰めた邦昌の様子が、蝴蝶の焦燥感を煽

る。

「やめて!! 何を考えているの、邦昌! 相手は桔久よ! 貴方、一体どこから」

「..... オレを誰だと思ってる? この城の食客だったんだぜ。どこの警護が手薄かくらい頭に入ってる。二、三人沈めてきたが」

「わかっているの? こんなことをして只では」

「済まない? は、こんな嵐の夜に、誰がたった一人の侵入者に気付くと?」

くつくつと邦昌が喉の奥で嗤った。

「.....何が望みなのか? お願ひ、桔久を離して」

気丈に、瑚蝶は邦昌を見据えた。心臓の鼓動が、徐々に高くなっていく。

「オレと一緒に来い、瑚蝶。それですべて解決する」

「.....朱麗に命じられたのね」

「どうでもいいだろう、そんなことはないぞ。否めば、この女の命はないぞ」

邦昌の声音が凄味を帯びていく。桔久の表情が苦痛に歪む。反射的に瑚蝶は叫んだ。

「やめて! 例え私が行っても解決などしないわ! すべてが露呈して争いが起きる.....! 血を流すために従えというの?」

血塗れた欲望に染まり続ける手で妹を救い出し、どうするというのが!? 罪の跡は消えずに一生涯方に付き纏うわ!」

「もう遅い!」邦昌の睨が鋭く吊り上る。

「汚濁した血がオレには流れてる。重科にまみれ、我欲を糧に寄生するあの女のな.....! 生れ落ちた時からオレは罪人なんだよ。他に何を怖れることがある? あの子は何も知らない.....せめてあの子だけは幸せにしてやらなければ 淋茗を取り戻し、あの女も祖王も葬り去ってやる!! 罪はすべてオレが背負っていく.....!!」

「それが貴方に残された道なの？ 邦昌……！！ 家族を奪い合うことが」

「家族？ あの女にそんな人間らしい感情があると思うのか！ 実の兄すら手に掛けた女だぞ！！」

え………？

一瞬、蝴蝶の脳裏が暗闇に染まった。呼吸すら奪われた気がした。邦昌の放った言葉をすぐに理解することは出来なかった。愕然とする蝴蝶に向かって邦昌が再び鋭い声を飛ばした。

「さあ、選べ蝴蝶！ お前に与えられた選択は二つしかない」

桔久を羽交い絞めにしたまま、回廊へ、荒れ狂う闇の方へ邦昌は下がっていく。

屋内に雨が吹き込む。

戸口の両脇に置かれた燭台の炎の一つが、力尽きたように掻き消えた。

「 本当に殺すぞ」

薄闇で、桔久の首筋にぴたりと当てられた短刀の刃が残酷な光を映した。

邦昌は本気だ。

桔久を傷つけるわけにはいかない………。

乾いた唇を蝴蝶は引き結んだ。

そして覚悟を決め、邦昌へ近付こうとしたが、

「だめです！ 蝴蝶様………っ！」

苦しげな息の下、桔久が声を絞り出すように叫び、邦昌の腕に噛み付いた。

「っ！ こ………の………！！」

僅かに顔を歪め目を剥くと、邦昌は容赦なく桔久を殴り飛ばした。

「あっ！」

濡れた床に桔久の華奢な身体が叩きつけられた。

「桔久っ！」

うつ伏せに倒れたまま、桔久は動かない。もう片方の燭台が倒れ

たと同時に蝴蝶は枯久に駆け寄った。

だが届く寸前で邦昌に阻まれた。床へ仰向けに引き倒され、邦昌の重みが蝴蝶の上に押し掛かった。拮抗しようとした手は敢え無く封じられ、頭の両脇で床に押し付けられた。

二つの荒い息遣いが交互に響く。

布越しに、床の冷たさが背中中に滲んでくる。蝴蝶の身体の芯が恐怖に震えた。

「いつそ」

乱れた呼吸を押し込めて、邦昌が力ない声で呟いた。自分を見下ろす虚ろな目は、何も映っていないようだった。

「……いつそ、お前を殺した方がいいのかもしれない。こんな思いで生きていくなら。こうしている内に、淋茗はあの男に汚されてしまっているかもしれない。わずかな希望にすぎるより……淋茗も、あの女も、お前も殺して、オレも死ねばいい」  
身じろぎ一つ出来ず、蝴蝶はただ邦昌が落とす言葉を受け止めるしかなかった。

「もう………終わりにしたいんだ」

邦昌の声が震えた。

「もう 何もかも………」

震えはやがて、哀咽になった。生気の抜けた二つの硝子玉から落ちた一粒の雫が、蝴蝶の頬を濡らした。

涙………?

「もう」

哀切に満ちた両眼から、紅涙が滴る。蝴蝶の両手を戒めていた邦昌の冷たい手が、今度は蝴蝶の首元に絡みついた。二本の凶器に、次第に力が込められていく。

「邦………っ」

気道を塞がれて、蝴蝶は声を詰まらせた。息が出来ない。

振りほどこうとするが、歴然たる力の差の前には無意味だった。ぎりぎりと容赦なく締め付けられ、満身の力が抜けていく。

ドクドクという激しい鼓動の音が耳元で鳴り響く。意識が混濁し、目の前が揺らいだ。

い……や……

叫びは届かない。身体中の感覚が一つずつ破壊されていくように、何も考えられなくなっていく。

すべての音が止み、意識が遠のきかけたその時だった。

「ぐ……」

突如邦昌が、両目をかっと思開いた。瑚蝶の首に食い込んでいた両手が解けた。咽喉に空気が雪崩れ込み、瑚蝶は激しくむせ返った。息苦しさに喘ぐ瑚蝶の前で、邦昌の身体がぐらりと前のめりに傾く。その背後に立つ男が、背に突き刺した青白い輝きをゆっくりと引き抜いた。闇の中で、血塗れた白銀の刃がぬらりと光る。

「そいつに、触れることは許さぬ」

凜と尖った低声が、轟然たる雨音を排するように響いた。

寸でのところで肘をつき崩れ落ちるのを止めた邦昌が、苦痛に歪んだ蒼白顔で後ろを振り返る。

「劉……王」

不規則に呼吸を乱しながら、邦昌は引き攣った薄笑みを作った。

「なんで……ここに」

零下に達した凍てつく眼光が邦昌を見下ろす。瞼の開閉すら見せぬまま、劉王は形の良い唇を単調に動かした。

「気付かぬと思ったか？　ここは俺の城だ」

ゆらりと邦昌が立ち上がった。

片手で押さえつけている腹部から滴る液体が、床に黒く溜まっていく。両足で支えるのがやっとというような前傾姿勢で、邦昌は劉王を睨み上げた。冷厳たる劉王の眼差しが、ひたとそれを見据えた。「一度は信頼を預けた股肱といえども、俺の物を傷つけることは許さぬ。お前は俺のやり方を、熟知しているはずだぞ、邦昌」

「……はっ！　つくづく王様向きだよ、あんたは……」

「！」

血の気を失い戦慄く唇を邦昌はきつく噛み締めた。そして視線を劉王の背後に滑らせる。回廊を走る複数の足音が近づいてきていた。小さく舌打ちを響かせ、邦昌はよろめきながら劉王の脇をすり抜けた。

目睫の間に一瞥が交わされる。“ 永別 ” という言葉の代わりに

「陛下!!!」

松明を掲げた武官達が駆け込んで来たのは、邦昌が棧から昏黒の嵐の中へと身を躍らせた直後だった。

「 追え。傷を負っている、そう遠くへは行けまい」

劉王の指示を受け、軽装甲をした数人の武官達が散っていく。

床に座り込んだまま、慌しい光景を瑚蝶はただ呆然と見送っていた。刻印のように脳裏に焼きついた様々な出来事が交錯して、正気を失いそうだった。

「瑚蝶」

武官に剣を渡し、劉王は瑚蝶の前で膝を折った。

松明の明りが青白い瑚蝶の顔を照らし出す。痛々しい痕の残る細い首に眉を顰め、劉王は手を伸ばす。

「もう大丈夫だ、安心しろ」

瑚蝶の頬に貼りついた髪をそっと払い、劉王は囁くように言った。大きな手の平が、瑚蝶の冷たい頬を包み込む。その温かさに安慮感が溢れ出し、思わず涙が零れた。

「桔久………桔久が」

冷たい床に横たわったまま動かない桔久の姿に、最悪の事態を想像して瑚蝶の心が急ぐ。だが立ち上がることにすら出来そうになかった。必死に自制を効かせようとしているのに、涙がとめどなく頬を伝っていく。

「大丈夫だ、手当てをさせる」

劉王の肩越しに、二人の官吏が桔久を抱え起こしたのが見えた。操り主を失った人形のようにぐったりとした桔久の身体を、抱き上

げて運んでいく。

「・・・・・・・・案ずるな。気を失っているだけだ」

頬から離れた劉王の手が、瑚蝶の涙を掬い取る。

「よか・・・・・・・・っ」

眩いた途端、ぐらりと視界が傾いだ。

「・・・・・・・・蝶」

劉王の呼び声が遠のいていく。鼓膜を叩く雨音も、風の咆哮も、  
かろうじて保っていた意識を手放し、瑚蝶は押し寄せてきた混沌  
の波に身を委ねた。

【貳拾參】 真実

リン・・・・・・・・

掠れた鈴音のような幽かな音に誘われるように、瑚蝶は瞼を上げた。

リン・・・・・・・・

瞬きを一つする度、答えを返すように音は鳴る。耳元で、遠くで闇色の視界の中に、色が浮かび上がっていく。蝋燭の炎と、天井から垂れ下がる薄雲のような白い帳が、微風の囁きに揺れている。辺りは静まり返っていた。

やがて天幕の裾がふわりと大きく舞い上がり、人影が現れた。

「気が付いたか」

鈴の音より凜と澄んだ静謐な声が降りてくる。寝台が僅かに軋んだ。

「・・・・・・・・気分はどうだ。暫く気を失っていた。安心しろ、嵐は去った」

掠めるようにそっと、微かな温もりが頬に触れた。月影のように穏やかな双黒に見つめられ、瑚蝶の意識は覚醒した。

「劉王・・・・・・・・ここは？」

横たわったまま瑚蝶は問い、視線を彷徨わせる。部屋にしつらえられた家財も、天幕の向こうの丸窓から見える景色も、自室のものとは違う。どこか別の場所だということだけは察しがついた。

「あの場所に置いておくわけにもいかぬと思った矢先、難を逃れ、丁度良く空いたこの臥室（や）を思い出してな」

含みのある言葉に、瑚蝶はまさかと身体を起こした。

丸窓の外に広がる風景には見覚えがあった。

猛威を振るっていた嵐は外景から嘘のように消え果てていた。風の凩いだ湖面には、まるで夜空から零れ落ちた星宿のように朧げな光が無数に漂っている。それらは湖上を揺蕩い、戯れながら、溜め息のように小さな囁き合いを繰り返しているのであった。

リン・・・・・・・・リン・・・・・・・・

「銀睡蓮・・・・・・・・？」

夢のように儂く美しい水上の星霜を見た夜を、瑚蝶は思い出した。そして玄夜の幽寂の中にひっそりと佇む離宮のことも。劉王の正妃が住まう筈の美しい閨房を

「あれは、夜光虫だ。銀睡蓮が終わった後に、ほんの一時ここに宿る」

水苑に浮遊する彷徨者たちを劉王が眺め遣る。

「どうして・・・・・・・・ここへ。ここは私のいるべき場所ではありませんわ。もう心配要りません。私は 桔久のところへ」

急に落ち着かない心地になって、瑚蝶は寝台を降りようとした。

だが動くとした瑚蝶を阻むように、劉王が身を乗り出した。

「案ずる必要はない。手当てが済んで、今眠っている。お前も怪我人なんだ、今夜一晩くらい大人しくしている」

目の前を塞がれ萎縮した瑚蝶の首筋に、そっと劉王が触れた。

首にはいつの間にか包帯巾が巻かれていた。よほど酷く痕が残っていたのである。その白い布を、劉王が労わるような手付きでそっと擦る。なぞ

「・・・・・・・・邦晶は」

どうなったのか、と瑚蝶が言い終える前に、劉王が微かに首を横に揺すった。

「取り逃がした。だがあの傷でどこまで落ち延びられるか。どんなに強靱な精神力を以ってしても、そう長くはもたぬだろう」

失命している可能性が高い、劉王はそう言いたいのだ。あのおび

ただし血量をみれば容易に想像出来ることであつた。

劉王が突き立てた剣は、邦昌の腹部を貫通していた。嘗て「片腕」として傍らに置いていた腹心に、劉王は容赦なく制裁を加えたのだ。瑚蝶じゅたんを、救うために

「劉王」

言わねばならぬことがあつた。例えもう取り返しがつかなくとも、邦昌が背信した理由の中に己の存在があることを、瑚蝶は認めていた。

「黙っていたことがございます。私と邦昌は」

覚悟を決めて切り出した瑚蝶の唇に、劉王は人差し指を押し当てその告白を差し止めた。

「……何も言う必要はない。全部わかっている」

目を睜つた瑚蝶の唇の呪縛を解き、劉王は寝台から立ち上がった。丸窓の前で歩みを止めた紫紺色の寛衣の後姿に、深遠な気配を瑚蝶は感じた。

「劉王……私は、何か間違いを犯していたのでは？」

邦昌の言葉が頭を離れない。

『実の兄すら手に掛けた女だぞ！！』

あれはどういう意味なの？

大きな波が押し寄せて来るのを待つような、不安と懼れが巻き起こる。

この目で見たことが真実ではないと？

この胸に抱き続けてきた思いは……誤りだったと？

「劉王、お願い、答えてください……！」

劉王は振り返らない。答えを躊躇っているように、拒んでいるように。それは拷問のように、瑚蝶の胸をしめつける。

「貴方は狡いですわ……大切なことは何もおっしゃらない

！ お願いです！！ 本当のことを……… 真実を話して！」  
哀咽に訴え、瑚蝶は寝台の上で崩れ落ちた。なぜ泣いているのか  
わからなかった。なぜこんなに悲しいのかも。

「瑚蝶」

劉王の沓音が近付く。そして寝台の前で、膝を折る衣擦れの音が  
した。

「泣くな。俺は お前の父上と約束をしたのだ」

寝台に伏せたまますすり泣く瑚蝶の顔を、劉王の手が掬い上げた。  
「お前を守り、幸せにすると」

濡れた瞳から零れ落ちる真珠粒のような涙を、劉王の指が掬い取  
る。

「今、何て………？ どうして、父上が」

声が震えた。涙のせいではない。動揺を超越した激しい騷擾が瑚  
蝶の心を支配していく。劉王が静かに睫を伏せた。

「瑚蝶。俺はお前に嘘をついてきた。それが最良の方法だと思った  
からだ、お前を救う。だが、結局お前を苦しめることになった  
のなら、俺は間違っていたのだろう……… すまない」

『すまない』

その一言が瑚蝶の胸の奥に突き刺さり、鼓動を掻き乱した。劉王  
の相貌を見上げることが精一杯だった。だが心は渴き喘ぐように次  
の言葉を待っていた。とてつもなく大きな鉄槌が振り下ろされると  
知っていたながら

「三年前のあの日に……… 関係があるのでしよう？ 貴方は  
一度も、あの日のことを私に話してはくれなかった。私を利用する  
こともなく、何も言わず家族の墓を建て、あの場所には一切手を触  
れずにいる……… なぜです？ 力で奪い取ったならば、貴方  
の好きにすればいい。ずっと 疑問は感じていました」

でも訊けなかった。真実が他にあつたとしても、真つ直ぐ向き合  
える自信がなかった。運命を呪い憎しみにに寄り掛かっている方が、  
生きる理由を持たたからだ。絶つことを拒まれた命を繋ぐことに必

死だった。でも今は違う　いつまでも逃げているわけにはいかないのだ。

「真実を知りたいのです、劉王　私は、どうして今ここにいますか」

蝴蝶の涙を拭う、劉王の手が止まった。一度閉じられた瞼が再び開いた時、劉王の双眸は真つ直ぐに蝴蝶を見つめていた。

「お前の父上が、　そして俺がそう望んだからだ。これから話すことをどう捉えるか、それはお前の自由だ。だが、有りのまます話そう……お前が望むなら」

リン……

ふいに耳元で夜光虫の音が弾けた。水苑に集う儂い魂を持つ幽光は、まるで昇天を待つ葬列のように見えた。

「あの日、俺は廟王に見えるはずだった。和議の調印書を受け取る為に」

和議……？

妙な響きだった。廟は大陸の中でも零細規模の小国だったのだ。

大国統との間で対等に和議を取り交すのは不可能に近い。ならば意味するのは、“従属”でしかないだろう。

「和議を申し入れたのは、俺の父だ。父は廟王の統治手腕と、その篤実な人柄を見込んで属国にと望んでいた。それは同時に、廟を外敵から守護する役割も果たすと考えた。病床の父からその任を受け、俺は廟王の元へ使者を送った。だが、廟王の返答は“否”」

次期国王からの直々の親書を、廟王は真つ向から跳ね除けた。高潔で誇り高き真実の王の姿がその答えにはあった。

「会ってみたくなった。“俺は恥なり”と惧れもせず廉直な生き方をするその男に。そして自ら出向いた。だが俺の訪問を表敬するどころか、初めは門前払いを食った。頑固者だったな、お前の父上は。だが俺も自棄になった。最早交渉の事などどうでもよかった

が、興味に駆られて。何度目かに扉は開き、何度か共議を重ね、王の廉潔さと真率さに俺は打たれた。まるで父のようなその度量にもそしてある時、王が言ったのだ。『娘に金稜花の花園を造ってやりたい。それが出来るか』と」

劉王の目元がかすかに和らいだ。瑚蝶の明眸から、再び涙が伝い落ちていく。

「是」と俺は答えた。廟王は笑って頷いた。それが答えだった。そしてあの日が来た。瑚蝶、なぜあの日だったかわかるか」

「あの日は……療養先から城へ戻るはずだった」

劉王の問いに、瑚蝶は溢れ返りそんな寂寥を飲み込んだ。温かく迎えてくれるはずだった家族の笑顔が一つ、一つ甦る。

「……そうだ。娘に会ってはくれぬかと、廟王は言った。響心に応じ、俺は城へ向かったのだ。だが、待っていたのは変わり果てた王の姿だった」

不自然に開きかけた城の門を抜けた途端、血生臭い臭いと血海が広がっていた。女官も兵士も無残に斬り殺され、折り重なるように死体の山が続いていた。

「皇后を庇うようにして倒れていた廟王はもう、虫の息だった。身体中には無数の刺し傷があった。だが王は気丈にも意識を保っていたのだ。まるで俺の訪れを待つように。そして事切れる直前、銀の簪とお前のことを託した」

「かん、ざし？」

「黄梅の紋の彫られた簪だ。廟王家の直系の公主に、降嫁の際に与えられる物だと後で知った。お前以外にその資格を有し、そして王に対し毒心を持つ者の簪だ。お前には他に姉妹はいない、だが王には妹がいた」

ああ……。

瑚蝶は両手で顔を覆った。

朱麗……！

「父上が握りしめていた簪は」

「もっ」

耐え切れずに瑚蝶は、劉王の言葉の続きを奪い取った。

「もっ……十分です」

寝台の端まで後退り、瑚蝶は涙で濡れた震える両手を見た。

「貴方は何もかも知っていたのですね……朱麗のこと。朱麗が何をしようとしているのかも。なのに私は、守られているとも知らずに……貴方を憎み続けてきた。何も罪のない貴方を復讐を胸に生きてきた。正しいことだと思っていた。

胸に巢食う黒い感情は、清らかな正義の象徴だと信じていた。

「私は貴方を殺していたかもしれない！もしかしたらこの手で……！贖うことの出来ない罪です。どうか今すぐここで私を殺してください！！」

「瑚蝶！」

何もかもが浅ましく思えて叫んだ途端、腕を強く引かれ瑚蝶は劉王の胸の中へと倒れ込んだ。劉王の腕が瑚蝶の細い腰を、華奢な背をきつく抱きすくめる。

「俺は責めているのではない。何も告げなかったのは俺の一存だ。黎青も誅易も、皆このことは知らぬ。欺きだと言われても仕方のないことだ。だが理由が必要だったのだ、お前を繋ぎとめておく。それが憎しみだとしても、お前に生きる意味が与えられるならばそれでよかった。それでもせねば、お前は王達の後を追っていたであろう」

「陛下、腕を」

「“皇帝”という位がなければ、俺はもつと愚直になれたかも知れない。王位は多くの美德を俺に与えた。だがそれは国土に泰平を敷き民に心を砕く代償でしかない。個人的な感情を持ち込むことは許されぬ、持たざる者なのだ。このような回り道をしなくては、隠れ蓑なくしては大切な物を守ること出来ない」

戸惑いに突き動かされたじろいだ瑚蝶の耳朵に、劉王の熱い吐息が降りかかる。脈打つ鼓動の音は、一体どちらのものであるうか。

「邪魔していたのは位だけではない。どこかで怖れていた。真実を話すことで、お前を失うのではないかと。だが、お前を縛り付けて苦しめていたのならば、俺は父上との約束を果たすことは出来ないだろう」

ふいに触れ合っていた体温が離れた。どちらからともなく見つめ合う。月光のない夜が濃い影を落とす劉王の表情は、どこか儂げで悲哀に満ちていた。隠微な面しか触れたことのない劉王の、それは初めて見る顔であった。

「どうして……貴方がそんな顔をなさるの？」

寂しげに劉王が微笑した。

「あの日、本当ならお前とは別の出会い方をするはずだった。もう一步、俺の到着が早ければと、今でも悔やんでいる。さすればお前は俺に笑顔を見せてくれただろうかと 俺を慕うようになってくれたのかと、言葉を交わす度に思っていた」

髪を梳く劉王の指が瑚蝶の首筋に降りる。とくん、と左胸が鳴った。

「瑚蝶、お前に問いたい。お前の心の中にあるのは 今でも俺への憎しみだけなのか。それを何かが凌駕する可能性はないのか」

鳴り響く鼓動が体温を上げていく。冷たい刃のような言葉しか生み出すことはないと思っていた唇が声、この優しい響きを奏でているのか。

「劉王、私は 私は貴方に酷いことを」

何度感情をぶつけただろう。

その度に、どれほど傷つけたのだろう。今更、何が言えるというのか。泣いて詫びることで己の無力さを罵ることしか出来ない。嗚咽が込み上げ真っ直ぐに見上げられなくなって、瑚蝶は俯いた。

「この宮が何故空なのだと思う？ それは俺の気紛れだとも？ 何の為にこの水苑教えたのだと？ 一時の慰めか？ ……  
・そうではない」

顎を捉えた指先に促され、再び瑚蝶は顔を上げた。鼻先が触れそ

うなほど、劉王の顔が近くにあった。

「愛している。心の底から」

幻のような響きが瑚蝶の鼓膜を打った。今まで感じたことのない疼きのような緩慢な痺れが、四肢を走り抜けた。額を触れ合わせ、劉王がもう一度囁く。

「一人の男として、お前を愛している」

瑚蝶は目を閉じた。零れ落ちた涙粒が、夜露のように光る。粛々と、夜の静寂に夢のような低い美声が溶けていく。

「何故泣くんか？ 失望したか？ 取るに足りない男だと」

言葉にならない。言葉では足りないのかもしれない。

涙に色があればいいのに。

そうすれば、この胸の思いを伝えることができるのに。

額に、頬に、頬に触れるだけの劉王の口づけが落とされていく。自分の思いと向き合うために、瑚蝶は目を開けた。

「傍にいてくれ。例え、今夜だけでもいい 俺の傍に」

そして唇に 啄ばむような優しい接吻が降りる。

瑚蝶はかすかに身体を震わせた。だが抗わなかった。抗う気がないことに、瑚蝶自身気付いていた。

劉王の腕に引き寄せられ、ゆっくりと寝台の上に横たえられていく。

密着する体の体温が溶け合っていくように一つになる。

押し寄せる甘美な小波のように、薄紗の帳が夜風にそよいでいた。

【式拾四】 想 愛

『 愛している 』

眩暈がした。

幾度となく耳元で囁き繰り返される言葉は、まるで至高の美酒の  
ような甘い痺れを瑚蝶に与え、身体の奥底の熱を呼び起こした。

愛撫する劉王の手の感触や、ついはむように降りる優しい口づけ  
が、鼓動の速度を上げていく。

迷いや不安は甘美の波が攫っていった。残ったのは、飾り気のな  
い小さな感情。ずっと怖れて目を逸らしていた、けれどいつしか育  
まれていた

愛しさ。

重なる温もりを放したくないと思った。劉王の背に瑚蝶はそつと  
両腕を伸ばした。

頬を伝う涙の意味は、以前とは異なっていた。

瑚蝶が目を覚ました時、隣に劉王の姿はなかった。

すでに冷たくなった床は、無人になつて随分と時を刻んだことを表していた。

昨夜のことはすべて夢であつたのであろうか。  
優しく包み込むように広がっていた夜闇がもたらした

そんな思いが過ぎる。温もりを探すように、瑚蝶はそつと敷布を指でなぞつた。

だが覚えている。触れた指先の感覚も、意識が落ちる間際まで内耳を震わせていた低い美声も。

「……………」

そしてなにより、体の奥でかすかに燻る痛みが幻と片付けるなど教えていた。

ゆつくりと息を吐き出し身を起せば、寝台を覆うように下がる天蓋布の向こうの明るみに目が眩んだ。

開け放たれた丸窓の向うには、陽を浴びて煌めきを放つ湖水が広がっている。

白く細い足を寝台から降ろし、瑚蝶は唯一身を覆う薄絹の衣の裾を引きずりながら窓辺へ寄つた。

夜光虫の淡い光珠はもうどこにも見当たらなかつた。湖面には、眩しいほど青い睡蓮の葉が揺揺と浮かんでいる。

「 瑚蝶様」

遠慮気味な声音に呼ばれ、瑚蝶ははつとして後ろを振り返つた。

水上に浮かぶ離宮の入り口に、小柄な少女が立っていた。両手を拱いて、身体を縮めるようにして俯いている。

「 桔久……………」

具合はいいのかと駆け寄ろうとして、瑚蝶は彼女の纏う女官服に気付いた。

いつもの退紅色ではなく、桔久が纏うのは“深朱”と呼ばれる赤を基調とした特殊な装いだっただ。

それは、数多の妾妃ではなく正統な王妃に仕える侍女のみに与えられる、皇帝から直々に下賜されるといふ装束

「瑚蝶様」

両手を握り締めたまま、桔久がすつと顔を上げた。大きな瞳が真っ直ぐに瑚蝶をとらえ、そしてたちまち満面の笑みを零した。

「わたし、夢みたいなんです。でも夢じゃないですよね」

子供のように走り寄ってきた桔久を瑚蝶は抱きとめた。

「陛下がお選びになったのは、誰よりも気高く心優しく、美しいこの一羽の蝶だと」

桔久は泣いてるようであった。抱きとめた腕越しに小さな震えが伝わってくる。

「……劉王が、それを？」

腕の中でこくりと桔久が頷いた。

「抄宮正が……陛下から預かったと。これを召してこちらへ行きなさいと言われました」

『愛している』

とくん、と心音が跳ねた。

あの言葉は偽りではないのかと、酔い痴れる気持ちの中で思っていた。睦言に身体中が満たされても、どこか哀しくて

「私は……ここにいてもいいのかしら」

どうか幻ではないようにと、気付けば願っていた。

「あの方の側に　いてもいいのかしら」

頑なに行き惑う感情を閉じ込めてきた鎧は、壊れてしまった。粉々に、劉王が壊してしまった。

身を守る術を失って、初めて気付いた。

「瑚蝶様」

顔を起こした桔久は、落ちてきた己の物ではない小さな雫を頬で受け止め、主人に手を伸ばした。

「大丈夫ですわ……瑚蝶様」

そしてそつと、長い睫が送り出した涙の粒を指で拭う。

本当は最初から、愛していたのかもしれない。

尊大で豪胆無比な、けれども高潔で大様なるあの男を

「……夢を見たわ」

涙が温かかった。懸命に涙を拭おうとする桔久に、瑚蝶は微笑んだ。

「家族の夢よ……金稜花の咲く丘に父様や母様たちがいたわ。みんな、笑っていたの。幸せそうに。……生きていた頃のように」

もういいんだよ、そう言っている気がした。

二度と戻らない時間。愛する者たちへの思慕は今だ消えない。

悲しいほど、切なくて苦しい。

けれど、今が悲しいほど幸せだと思えた。

こんなに幸福な朝を迎えたのは久しぶりだった。

「得心出来ませぬ」

思わず誅易は卓子から立ち上がった。

「穩便にとはどういうことでしょうか！ 災厄となるやもしれぬ芽を、放置するおつもりなのですか？」

上層部の官吏達が立ち去り、紫芳の間にいるのは劉王と誅易、そして西蓉洵の三人だけだった。

常例の朝議を終えた後、劉王は二人を残し人払いをした。誅易が献言すべきことがあると申し出た故である。

そのこととは勿論、昨夜の事件のことであつた。

「そうではない。今すぐ取り立てて騒ぐことはないという意味だ。幸い大事には至らなかつたのだからな」

見下ろすように立ち上がった巨体を、劉王は卓についたまま冷静な眼差しで睨み据えた。

「何を呑気に！ 城に祖の間者が潜んでいたのですぞ……それも皇帝の側近として！ おのれ食客め……！ 草の根を分けてでも探し出し、斬刑にすべきです！」

湯気が立つような激昂を露に誅易が拳を震わせる。だが劉王の冷やかな目元は変わらない。

「取り逃しはしたが、あの傷では到底助からんだろう。だが万一逃げ果せたというのなら、幾ら網を張ったところで掛かるまい。邦昌はそういう奴よ」

搜索は一晩続いたが、結局邦昌は見つからなかつた。嵐の助けもあり、地表の血痕は洗われてしまった為に手掛かりはない。

腹を割かれ遁走するのは困難に違いない。だが邦昌は一介の武官では太刀打ち出来ぬほど武術に長けた青年だった。禁軍に欲しいとさえ誅易は思っていたのである。万一は十二分に考えられた。

「陛下、私事と片付けるには不安要素が多すぎます。背後に祖の影があるとするば、これは謀反にも等しい事態でございますぞ！ 先の戦で破れ領土と覇権を剥奪したとはいえ、かつて彼の国は三帝国と並ぶ大国。残党討伐を繰り返せども脅威を拭いきれぬ現状はご存知のはず！ 妙な動きを見せる前に掣肘を加える必要があります。皇帝を見下ろす位置に立っていることなど度外視したまま力説する誅易から、劉王はついと視線を外し、

「 どう思う？ 西侍郎」

誅易の傍らに、げんなりした面相で佇む蓉洵へと流した。

気まずい間合いで介入を許されて、蓉洵の片眉がぴくりと跳ね上がった。それを誤魔化すように、こほんと一つ咳払いをする。

「 ええと……はい。將軍のおっしゃることはもつともですが、確かにまだ動く時機ではないやもしれません。下手に制裁を加えれば反動が起きます。遠征軍も帰還しておりません。迂闊に戦端を開くような真似は避けるべきかと。それに此度の一件は、あくまで瑚蝶殿の誘拐が目的であったようですし、一概に祖王の差し金とも」

そう進言しつつ蓉洵が横を見遣れば、禁軍総大将の強面がわなわなと震えていた。

「それも妙な話ではないかつ！ なぜ瑚蝶殿を狙うのだ！ もしや瑚蝶殿も何か関係が 　　そういえばあの後姿が見えませぬが」

「誅易、これで終いだ」

研ぎ澄まされた刃の切っ先のごとく、鋭い一声が誅易の言葉を塞ぎ止めた。

「現段階ではもう談義の余地はない。瑚蝶も無事なのだ、此度はこれで良い」

「し……しかし！」

なぜ瑚蝶が無事だから良いのか？

誅易にはその意図が掴めなかった。  
当惑気味の上司を見兼ねて、蓉洵がそれとなく口を入れた。

「瑚蝶殿の安全が確保出来たならば、陛下にとって損失はない  
ということですか」

「は？」

意を汲み取れず、動きを止める誅易。クク、と劉王が笑った。

「そつだ忘れていたぞ、誅易。一つ朗報があった」

「ろ、朗報にございますか」

「そつだ。俺も漸く、妻を娶ろうと決めたぞ」

「……は？」

予想だにしない「朗報」に誅易は啞然とした。

「西内朝もあのままでは宝の持ち腐れだ」

卓の上で頬杖をつき、劉王が緩く口角を上げる。「お前には苦勞  
の掛け通しだった。そろそろ孝行せねばと思つてな」

「陛下……ど、どうということでございますか」

先日空になったばかりの後宮を誅易は思い起こした。口腔の中に  
今にも、あの時飲んだ苦い汁が甦つてきそうになる。

希望は完全に絶たれたと思つていた。なのに、『妻を娶る』とは  
どうしたことか。物の怪にばかされたように呆けた顔でばかんとし  
ている誅易を、面白そうに劉王は眺めた。

「皇帝である俺が身を固めねば民に示しがつかぬだろう。お前にも  
再四言われていい加減、耳が痛くなった」

「は、はあ……大変喜ばしいことではございますが、なぜ唐突に……  
…お、お相手は一体」

あいて、と口の中で呟いて、劉王は卓から立ち上がった。そして  
幾分か己よりも身丈のある大男を見遣る。

「水苑の離宮にもう居るぞ。昨夜連れて行った。そろそろ目を覚ま  
した頃かな？」

「ま、まさか」

思い当たるような人物は一人しかいなかった。最も恐れていた名  
が思い浮かんだ時、先に劉王が言った。

「瑚蝶を正妃に迎える。その他の賓妃は不要だ、妻は一人でいい」

「し、しかし陛下!」

「なんだ?」

事もなげにそう告知した劉王に怒鳴りかけそうになって、誅易は  
声量をおさえた。

「しかし瑚蝶殿は……少なからず陛下を憎んでいるのでは」

「それならそれでいいと、俺は思うのだ」

卓を離れ、劉王は窓辺に立った。

「俺にしてやれることは、このくらいしかないからな」

「なぜ……なぜそこまでして瑚蝶殿を」

背を向けたまま、劉王がわずかに首を後ろへ向けた。

「愛している、それだけではだめか」

あまりに真つ直ぐな言葉に、誅易は絶句した。

だがすんなりと胸に落ちてくる言葉だった。

危ういほど単純な、真実。皇帝という重厚な鎧の下の、唯の男の  
姿を誅易は垣間見た気がした。

「陛下、万人に祝福される保証はございませんぞ」

「恋路に障害はつきもの、だろう」

軽い答えとともに劉王は振り返る。

いつものように飄々と、何食わぬ顔で。

「参りましたな……」

もはや嘆息するしか、誅易に出来る術はないように思えた。

「いやはや、見ものでしたな。先程の將軍の様子は」

紫芳の間を出て貴宝殿から西内朝の方角へ回廊を進む劉王に追いつくと、その背に蓉洵は呼びかけた。

「……薄情な参謀だな。慰撫役を蹴って、上官は置き去りか？」

歩を休め、劉王が振り向いた。口元にはやはり、皮肉めいた笑みが浮かんでいる。

「生憎、私の慰めでは役に立たぬでしょう。しかし　こちらも呆気にとられましたよ」

嫌味を含めながら、夜着の上に紫紺の寛衣という軽装の劉王を蓉洵は眺め下ろした。髪は朱紐で後ろで軽く結わえただけ、まさに起き抜けという出で立ちである。

「『愛している』なんて、開き直るとは思ってませんでした。これが広まれば大変なことになりますな。城の者は皆、瑚蝶殿を側に置くのは恵顧と思っております故」

「ふ……見直したか？」

「まあ……そうですね」

花の香りに乗せた柔らかい風が吹き抜けた。

蓉洵が近付いたのを見計らって、劉王は再び回廊を辿り始める。数歩下がった位置から蓉洵も続いた。

「以前、お主が言っていただろう　困うだけではだめだと。飛び立たれぬ内に引き止めてみた」

そういえば、と蓉洵は思い当たる。

間に受けていたのか、と思わず口元が緩んだ。

「言った甲斐がありましたな。しかし、よろしかったのですか。將軍に真の事を伝えずに」

「……瑚蝶のことか」

後一角曲がればこの回廊は真つ直ぐに西内朝へ続いていく。どこまで供をすべきかと思案しながら、蓉洵はええ、と返した。

「お主、どこまで知っている？」

歩調を弛めることなく、劉王が問うた。

咎める響きではなかった。

むしろ存知の上、というような余裕があった。

「三年前、お忍びで陛下が当家を訪問された時です。父達と貴方の会話を聞いておりました」

率直に蓉洵は述べた。隠すつもりはなかった。折を見て明かすつもりでいたのだ。

妙な嫌疑を掛けられては出世にひびく。ならば暴露してしまえ、というのが実のところなのだが。

「そうか、だから瑚蝶に対して寛容だったのだな」

「いえ……そういうわけでは」

「フフン、お主は中庸な男よ。親父殿に似て」

「……女性に辛く当たるのは私の流儀に反する、それだけですよ」

父親を引き合いに出されて蓉洵の声に不快さが混じったのに気付いたか、劉王がふ、と短く笑った。

「戦いは避けたい」

「瑚蝶殿の、為に？」

「ああ 自分を狙っているとはいえ、実の叔母の謀が公になれば、あやつは自責の念に駆られて自害しかねん」

「すべては愛しい姫君の為、ですか。凄惨惚れ込みようですな、敬服いたしますよ。 そうですねば瑚蝶殿が城に来て間もなく、ご自

分の近衛隊を突然解散しましたな。あれも事実の漏洩を防ぐ為でし

よう。廟国が滅んだあの日、彼らは貴方と供にいた。側近にも友にも真実を告げず、一心に守り続けたその信念……私には真似出来ません」

劉王の返答はない。蓉洵は続けた。

「しかし、なぜ元廟王朝の姫君が、実の兄を殺めるなどという非道な真似を？」

内苑の緑樹で戯れる小鳥のさえずりにふと視線を上げ、劉王は立ち止まった。

「……以前、廟王は朱麗の存在を危惧していたことがあった。祖王の重鎮に転嫁した実の妹のことを。あれは私を怨んでいる。もし家族に危険が迫った時は、手を貸して欲しいと」

「廟王はああなることを予測していたと？　そこまで強い私怨とは一体」

「……廟王は多くを語らなかった。だが結果として事は起こってしまった。国を陥落させるつもりではなかったにしろ、惨い有様だった」

「それで国ごと手中に収めて保守しようとお考えになったわけですね。もし祖が絡むのならば、安易に手出しは出来ぬようにと」

羽音と響かせて、二羽の小鳥が枝を離れた。宙を回りながら、蒼空へと飛翔していく。劉王はそれをどこか遠い目で見上げる。

「……しかるべき時が来たら、あの地の行く先は瑚蝶の好きにさせるつもりでいた」

長閑な陽気に合わせるように、劉王はゆっくりと歩みを再開した。

それはつまり、始めから侵略する気などなかったというわけだ。

何もかも、瑚蝶の為に。

最後には誅易が黙り込んだのは今蓉洵と同じように、劉王の少ない言葉の中にその揺るぎない想いを見たからなのだろう。

「欲のないお方だ」

「欲しい物は領土ではなかったからな」

「……」

やがて二つ目の角を曲がったところで、蓉洵は歩を止めた。

「……はいはい。まったく嫌味の通じない人だ。では私はここで失礼致しますよ、野暮はいたしません。ですが、このお話はまた改めて。懸念すべき事項ではありません故。それから　ふっきれたとはいえ今後も振る舞いには重々注意していただきたいと、付け加えておきます」

これ以上側には当てられかねんと判断し、蓉洵は早々と一礼する。容赦なく針を含んだ助言を添えて。

「主の前だというのに遠慮がない男だ。そういうところも親父殿譲りだな」

「えーおほん。では未来の正妃殿に宜しくお伝えを」

「心得た。式には招待する」

戯言なのか、本気なのか。

切れ長の精悍な目元で一瞥を投げ、劉王はその場を行き過ぎていった。

はてさて、近頃どうも歩み寄りすぎだな。

遠のいていく劉王の後ろ姿を見送りながら、蓉洵は己の行状を振り返る。

犬馬の労をも厭わぬ姿勢など見せたつもりはないのだが、いつの間にかいいように使われている気がしてならない。

まだまだ忠義を尽くすべきかは見極められていないはずなのであるが。

それは己の失態か、相手の手腕か。

しかし、これから騒がしくなりそうだな……。

なるべく関わらないようにしよう、そう強く自身に言い聞かせ蓉洵は兵舎へ向かうべく踵を返した。

「西侍郎!..!」

その時、正面から転がるように駆けて来る青年に蓉洵は気が付いた。

「たっ、大変です! 西侍郎……!..!」

息も絶え絶えに、青年はよろめきながら蓉洵の前で止まった。膝に手をつけて荒い呼吸を繰り返すその姿を、蓉洵は呆れて見下ろした。

「騒々しいぞ、瑛朋<sup>えいほう</sup>。回廊をばたばた走るなど何度言ったらわかる。

お前も官吏のはしくれなら一度で学習しろ」

「申し訳ありません、しかし……! それどころではないのです!」

上司らしく小言を吐いた蓉洵に、兵部官吏である瑛朋は紅潮した顔を向けた。

「さ、先ほど成庚<sup>せいこう</sup>からの伝馬があつたと……!」

「……成庚? 遠征軍の駐屯地の一つか。何の報せだ」

「それが」

大きく唾を飲み込み、切迫した表情で瑛朋は切り出した。

「西嶺の軍勢に奇襲を掛けられ、成庚の関が陥落したと」

【貳拾四】 想 愛（後書き）

更新・修正がままならず申し訳ありません。集中して進めていく予定です。

遅くなりましたが、今年も宜しくお願いいたします

【式拾五】 慕情

「無様ななりだねえ、邦昌」

混濁し朦朧とする意識の中、身躯に蔓延する激痛を突き破るように、鼓動の音が耳元で鳴り響く。

「能無しぶりは父親に瓜二つだよ。今後愚生と名乗るにしたら、足りないくらいだ、まったく見込み外れだよ。しかしまあ、その傷でよく生きて帰れたものだね」

愉悦を載せた声が嘲笑う。

梓宮を脱出し、傷を抱えて兵の常時訓練に利用されている人工林を邦昌は走り抜けた。その先では、朱麗の命で監視役として随行してきた二人の男が馬を繋いで待っていた。男達に助けられ、邦昌は朱麗のいる昆杜こんとという街の外れにある館に運び込まれたのであった。表口から中に入った時にはもう限界だった。

だが床に倒れ起き上がることにすら出来ない邦昌を、朱麗はまるで野良犬でも見るような目つきで見下ろしたのであった。

く……そう。

身体が動かない。

途中で止血はしたつもりだが、城の兵士を撒いて逃げるまでに大量の血と体力を消耗した。

奥歯を噛み締めただけで、すべての力を失ってしまいそうになる。石畳の床にうつ伏せになったまま、錆びた鉄の味の混じる唾液を力なく吐き出し、邦昌は女の顔を辛うじて睨み上げた。

「おやおや、死に損ないのくせに態度は一人前だねえ。それが生みの敬うべき母親に対する目かい。あたしはそんな風に育てた覚えはないよ」

育てた……だと？

この女のしていたことは「飼育」だ。

逆らえぬように大切な物を奪い、己の使役し易いよう躰け、自由を奪い意思さえも蹂躪する。貧しくとも、我が子同然の愛情を持って叱り抱き締めてくれた育ての親とは違う。

そしてその小さな幸せを壊した者を、どうして母親などと呼べようか。

「本当なら、天刑必至の不始末だよ。だが、不肖者でもあんたはあたしの大事な一人息子だ。祖王様がね、あたしに慶頂の城をくれるって言うんだよ、すごいだろう？ 間もなく大きな城が入るからねえ。だから、こんなところでへたばってる場合じゃないんだよ。お前にはまだ、働いてもらわなきゃならないんだからね」

ねえ、私の子。

陰湿で驕慢な響きが耳鳴りのする耳朵にまとわりつく。

頭の中で、その笑い声が悲鳴に変わるのを、断末魔の叫びになるのを今まで何度も聞いた。

姿形もわからないただの肉塊になるまで、返り血を浴びながら何度も何度も剣で突き刺して殺した。

辺りが血の海になるまで、世界が赤く染まるまで

考えるたびに身体中の血汐が、獰猛な獣のように暴れまわる。憎しみや怨嗟を餌にして。

それは今も同じだ。

「う……ぐうっ……!!」  
嘔吐感を催して、邦昌は込み上げたものを吐き出した。  
ぬるりとした赤黒い液体が、石畳を濡らした。

「苦しいのかい？ 邦昌」

煽り立てるような冷酷な囁きに、邦昌は耐えるしかなかった。  
濁った心音が胸を圧迫するように叩く。これが止まれば、すべて  
が終わってしまう。

だがまだ戦える。

まだ、戦わねばならない。

幸せだった日々を、取り戻すために。

敷き詰められた石畳の隙間を伝って、己の体内に流れていた赤い  
水が流れていく。部屋中を憎悪で満たしていくように

「すぐに手当てをしておやり 次の仕事に間に合うようにね……。  
我が王が覇者の座を取り戻す時が来たんだよ、いずれ側近になるお  
前が馳せ参じなくてどうする。 蝴蝶のことはその後どうにでも出来  
ることだ。 ああ、楽しくなりそうだねえ」

朱麗の声が幻聴のようにゆらめく。

これから何が起きるのか、脳裏を過ぎって消えた。

男達に支えられて、邦昌は引きずられるようにして立ち上がった。

淋茗……

血濡れた床を虚ろな瞳に映しながら、邦昌はかすかにその名を呟い

た。

「 いったい、どうしたんでしょう陛下」

茶を淹れる為に前傾していた姿勢をふつと度々浮かせては、桔久が何度めかの同じ疑問を口にする。

「朝議がこんなに長引くなんて……。でも、珍しいことじゃないですわ。今日は特別大きな審議が持ち上がっているのかもしれないし、あ、明日の分もまとめて談義しているのかも。それとも」

たった二杯の茶を注ぐのに、いつもの倍の時間は費やしているのではないだろうか。土瓶を持ったまま桔久は首を左右前後に忙しく傾げ、暫らくの後何か思いついたように頭を跳ね上げた。

「もしかしてお節介な誅易將軍あたりが、また妙な画策をして陛下を引き止めてらっしゃるのかも！」

良い着想を得た時のような会心顔で桔久が振り返る。窓辺の卓で刺繍をしていた瑚蝶は、妙に晴れやかなその様子に微笑を送った。「少し落ち着いたら、桔久。心配しすぎよ。政務がたて込んでいらつしゃるんでしょう。一国の主が何時も自由に動き回れる暇がある方が不思議なくらいよ。それよりも、早く注いでしまわないと、せつかくの白花茶が渋くなってしまわよ」

手の中の土瓶を見下ろし「ご、ごめんなさい！」と顔を赤らめて謝ると、桔久は漸く茶を注ぎ終えた。

慌てた様子の中で目笑し、続きをしようと瑚蝶は手元に視線を落した。だが蝶の模様が浮かび上がるはずの刺繍布は、針が刺さったまま、無地のままであるのに気がついた。

劉王は昨日の昼間ほんの一時顔を見せたが、「また夜に来る」と言い残して立ち去ったきり、そのまま現れなかった。そして翌日、間もなく日も昇りきろうという今の時間になっても何の音沙汰もないままだった。

たった一日よ。たった一日会わないだけで不安になるなんて。

今まで一日二日顔を合わせないことなど何度もあったはずだ。皇帝が多忙なのは、万人周知の事実ではないか。

催促を呼びかけているような白い布を、瑚蝶は見つめた。

割り切れていない自分がいる。こうして、他のことが手につかぬほどに。

だが、自分は劉王の妻ではない。  
どうこう口出しをする権利など、持つてはいないのだ。

「お待たせしました。ただいま、饅頭をお持ちしますね」

瑚蝶の前と向かいの席に湯気のたつ茶碗を置き、桔久が菓子盆を取りに深紅と白の官女服の裾を翻していく。

もしかしたら、桔久が過剰に朝議のことに気を揉んでいるのは、心に燻るこの憂いを感じ取ったからなのかもしれない。

平静を装っている気でいて、知らぬ間に顔色に映し出されてしまっていたのだろうか。

「……でも、なんだか少し城の中が騒がしい気がするんです」

小さな白い饅頭が幾つか載った盆を卓の中央に据え、桔久は向かい側に座って俯いた。

「外朝が忙しないのは常時では？」

茶を一口飲み、瑚蝶は窓の外に広がる清朗なる虚空を映す眩しい湖を眺めた。

紅紫宮には湖上の閨房の他に、五つの房がある。どの房も庭院が見渡せるように設計され、しかも角度が違えば景観も変わるのだから飽きることがない。今いるのは、水苑の南側に位置する部屋であった。「それはそうなんですが……今朝、武翔殿の側を通りかかったら、重装姿の武官が沢山……。絳乎軍は常時訓練では軽装のはずです。まるでこれから戦にでも行くような物々しい雰囲気でしたわ。三省六部の官吏達も、昨日の夕刻あたりから外朝内を行ったり来たり落ち着かない様子で」

外朝が……？　まるで気がつかなかった。

深刻そうな桔久の表情に、瑚蝶の中にも不安感が浮上する。新しい住居となったこの紅紫宮は、西内朝でも最奥に位置し外朝からは遮断された空間だ。他の殿下にも妃もいないこの場所には、桔久以外足を運んでくる女官はほとんどなく、外の騒擾が嘘のように昼夜揺るがぬ静寂が満ちている。

そうであるのは、皇帝が政務を民心をと多事多忙な日常を離れ妃と過ごす私的な空間であるからなのだが、故に公事を持ち込むことは禁じられている。

つまり、妃には政情や国情に問題が生じても情報は滅多におりてこないというわけだ。

翠遙宮にいた時は、城の変化にもう少し敏感だったはずだ。

身を置く状況が変わっただけで、こつとも違うものなのか。遠征軍の帰還遅延に関係があるんじゃないかって、他の者が言うていたんですが……でも」

桔久はその先を躊躇って視線を移ろわせ、ぽつりと言った。

「……一昨日の夜のこともありますし……不安で」

「桔久」

「わたし……っ、心配なんです。また瑚蝶様が狙われるようなことがあつたらと」

声を詰まらせながら、桔久は母親とはぐれた小さな子供のように両目を潤ませた。

首にかすかに残る痕が一瞬疼いたような気がした。

桔久にはすべてを話した。邦昌のこと、叔母のこと、劉王との会話　いつでも素直に感情を表す大きな瞳は終始見開かれたままだったが、桔久は瑚蝶の話す以上のことを追求したりはしなかった。

だが邦昌の行動に対し、何も感じていないはずはないと瑚蝶はわかっていった。顔を合わせれば口喧嘩ばかりしていたが、桔久は邦昌を兄のように慕っていた。けれど本意を秘匿するのは、ひとえに主人である瑚蝶の心情を思いやつてのことだろう。

「私は大丈夫よ」

瑚蝶は優艶に微笑んだ。

「もうあんなことはないわ　心配しなくていいのよ。……邦昌のこと、自らの意志であのような謀逆をするとは思えない。そう信じたいわ。城のことも、劉王の采配に任せましょう。あの方は道楽的で軽躁なところもあるけれど、……信じてもいい方よ。さあ、お茶が冷めてしまつわよ。饅頭もお上がりなさい、あなたの大好物でしょう」

ね、と語りかければ、瞬きを数回繰り返して涙を押し戻し、桔久は「はい」と頷き茶碗を取った。

怖れがないわけではない。

だが、その小さな身体で精一杯の情愛を向けてくれる目の前の少女を、もう二度と悲しませたくはない。『毅然とあれ』父王の教示が、今出来ることだと瑚蝶は思った。

だが、劉王が姿を見せないことと外朝の騒々しさとは何か関係があるのだろうか。

卓の端に折りたたんである華麗な牡丹が咲いた手巾に蝴蝶は目線を置いた。

予定通りならば、今夜は黎青の妹姫の誕生祝が愾麟の王城で開かれるはずである。だが、その贈り物は今だ残されたままだ。訪問は中止されたのであろうか。

だめだわ。考えてもきりがないことばかり。

もどかしさを小さな溜め息に変えて、蝴蝶は気を取り直そうとした。だが、向かいに座る桔久の手が饅頭を持ったまま再び止まっているのが目に入った。

「桔久？ まだ何か心配事があるの？」

「あ、えっ？」

呆つと卓の一点を見つめていた桔久は、呼ばれてはっとしたように顔を上げた。

「いつもなら両手で頬張っているじゃないの。あなたらしくないわ」  
甘い菓子を目の前にすると、桔久はいつも真っ先に出すものだ。まるで幸福な夢でも見ているように綻ぶ顔を見るのが蝴蝶は好きだったが、今日はその笑顔がない。

「あ……えつと、ご、ごめんなさい」

「遠慮しないで全部話してごらんなさい」

ちらり、と上目遣いで蝴蝶を見、桔久は饅頭を持ったまま何か重大な申告をする前のように、大きく深呼吸した。

「……小鳳の姿が見えないんです」  
シャオフワン

小鳳。それは、最年少で秘書省省令に就いた若き俊英 東鳳仙のことである。桔久は毎日のように内朝の庭院に通い、鳳仙と会うようになっていた。

「昨日、いつもの庭院で待っていたんですけど……現れなくて。今日も待ってたけど、やっぱり来なくて。それまでは毎日、小鳳が先に来て待っていてくれたのに。『ただの雑用係だから』って言うってたけど、本当は無理をして時間を作っていたんでしょか。どこの省部でも下役官吏は激務に追われて席をあたためる暇もないと

聞きますし……。それともわたし、嫌われるようなことをしたのでしょうか」

雑用係。

鳳仙は自分のことをそう桔久に伝えたのか。謙遜するにしても随分な過小評価に、瑚蝶は呆気にとられた。

鳳仙は思春期の複雑な心境から、桔久に素性を明かすのを躊躇っているのだ。だから桔久はただの一官吏だと思っている。確かに冴えた物腰ではあるが素顔は純情な少年である鳳仙が、高官の佩玉を下げているとは想像しがたい。

「桔久、本当はそのことが一番気掛かりだったのね」

「えっ!!」

「そういえば最近、彼の話ばかりしているものね」

「そ、そんなこと……あっ！こ、この饅頭おいしいですねっ」

耳まで真っ赤に染めて、桔久は手に持っていた饅頭に慌ててかぶりついた。瑚蝶はくすくすと笑った。

「恥かしがることはないわ。好きなのね、小鳳が」

「ここここ、瑚蝶様何をつ！ごほごほ……っ！」

よほど慌てたのか、饅頭を喉に詰まらせて桔久は今度は目を白黒させる。そして茶碗の中身を一気に飲み干した。

「……自分でもよくわかりません……でも、明日も明後日も待つてみようと思います。それでも来なかったら、探しに行きます。やっぱり……何かあったなら気になるので。待つだけでは解決しませんから」

一呼吸して落ち着きを取り戻した後、桔久は先ほどの杞憂を一新する破顔を見せた。

待つだけでは。

瑚蝶は己にその言葉を重ねた。

同じだ、今の気持ちと。

権利はない、術はないと決め付けても不安が消えることはないだろう。だったら、思うままに行動すればいい。

見えないふりをして、真実は一つなのだから。

会いたい。

その気持ちを認めることは、愚かなことではないのではないか。体面を気にしては、いつまでたっても変わることも変えることも出来ない。

今までとは違う　もう逃げるのはおしまいになくは。

「明日は来るわ、きっと」

ほんの少しの勇気さえあればいい。

膝の上の真綿色の刺繍地を蝴蝶はそつと指先で触れた。

そして針をとれば、胸裏をかすめたのは、微風に楚々と揺れ咲く

淡い董の花であった。

【式拾六】 幸福の在処

白鷺が羽を落すように、はらりと木蓮の花が地面に零れ落ちる。

春の始まりを呼び起こした優柔な芳香も終わりに近付き、庭院に気紛れに流離うばかりとなっていた。

木蓮の花が終われば、みずみずしい緑の育まれる季節になる。そうして、緑樹が梢を集めて碧潭の如く輝く頃、今度は槐えんじゅの甘く清涼な香りが夏を運んでくる。

梓宮の庭の季節は、そうして彩りを変えながら巡りゆく。三度季節を重ねて、蝴蝶は漸くその変化を辿れるようになった。

紅紫宮の花たちと心が通うようになるまでにはきつと、また時間が必要となるのだろうか。

移りゆく光風に長い髪をあそばせ穏やかに包まれるのを心地よく受け止めながら、蝴蝶は焔心殿へと上がって行った。

桔久の言っていた通り、殿下の回廊には官吏達があくせく動いている姿が見受けられた。学者肌の文官達は普段は各々の房に閉じこもっているのが常で、焔心殿は人口密度に反して人がなく静かな場所、というのが蝴蝶の見解であった。だが今日は様子が違っている。いつもはなだらかな時間が流れている焔心殿の空気は、人々の往来で気ぜわしく変わっていた。

確かに、少し変ね……。

長い後衣をわずかに石床に滑らせながら、蝴蝶は回廊を進み出す。そして近くにいた青年官吏に、秘書省の令官執務室は何処かと尋ねた。すると、蝴蝶の存在に気付いた官吏達は立ち話や移動を一端止めて、道を開きつつ頭を垂れた。

それは蝴蝶の纏う、劉王に贈られた美しい唐衣のせいだろう。

鮮麗な深朱を基調とし、銀糸の刺繍をふんだんにあしらった美しい衣。この貴色を身につけることを許されるのは、皇帝と　その傍らにと望まれた者のみ。

少々うるたえた様子で「この奥です」と青年官吏に教えられ、礼を言つて瑚蝶は回廊を歩き出した。

たった一枚の着物に人を傳かせる力があるとは奇異なことだ。単なる身を飾る為の衣装ではないということ、思い知らされる。

だが、望んで引き受けた重圧だと瑚蝶は己に言い聞かせる。周りなど忘れて己の気持ちに、従えばいい

注がれる視線を分けながら、ゆつたりとした足取りで瑚蝶は官吏達の間を歩き過ぎた。そして朱塗りの二枚戸の前に辿り着くと、呼び鈴を鳴らした。

「どうぞ」

扉の向うから返つてきた若い声に安堵を覚え、瑚蝶は扉を開いた。

まあ。

房の中に足を踏み入れようとして、瑚蝶は呆氣にとられた。

室内は、足の踏み場にも困るほどの散らかりようだった。入り口付近から、書物の塔が幾つも高さを違えて奥へと立ち並んでいる。

隙間もないほど詰め込まれた書棚が四方の壁を覆うその部屋の奥に、ぽつりと几案があった。卓上も書状や書物の束で埋まっている。その向うに、来訪者に目を向ける暇もないらしく、蛇のように長い書と顔突き合わせている若い官吏の姿があった。

「まるで府庫のようですね」

瑚蝶の声に、眉間の皺をぴんと伸ばして少年官吏は顔を跳ね上げた。

「こ……瑚蝶様!?　　うわあっ!!」

少年が立ち上がった勢いで、卓上の料紙や書簡の束がばらばらと崩れ落ちた。泡を食って慌てて下敷きになった巻き状を引っ張り出

そつとする様子に、瑚蝶は思わず吹き出した。

「これではどこに何があるのかわからないでしょう。少し整理が必要ですね」

埃の舞う床に落ちた書状を拾い始めた瑚蝶を「わわわ！ 手が汚れますからそのままっ！」と止めて、齢十七の秘書省令・東鳳仙は落ちた書類を拾いつつ、几案の上の物を大慌てでかき集めた。

「い、今お茶を……あ！ それより椅子ですね！ 椅子……」

よほど焦ったのか耳まで赤く染めて、鳳仙は辺りを見回した。だがどの椅子の上も荷物で埋まっている現実を見て、面目なさそうに後頭部を掻いた。

「お……お見苦しいところをお見せして……。就任して間もないのにこの有様では、手一杯であるのが一目瞭然ですね」

成人前を示す垂髪を揺らし、「ははは……」と決まり悪そうに鳳仙は笑った。そして傍にあつた椅子から書物を床に下ろし、瑚蝶に勧めた。

「熱心な証拠ですね。秘書省は言わば皇帝代理人、法令詔勅を最後の篩いにかける大事な役所。お忙しいのは当然ですわ」

籐椅子に腰掛け、瑚蝶も鳳仙に着座を促す。茶器の在りかを探そうとしていた少年は、はにかみながら几案についた。

「いえ……肩書きは聞こえがいいですが、本領は雑務係と大差はないんです。私のところへ回ってくるのは審査を要する詔書よりも、各部首が溜め込んだ書類の閲覧や整理ばかりですから。秘書省は役所というよりも蔵という印象の方が強いようです……でも他省の事情を垣間見れるいい機会でもあつたりと僕には有益な業務ではあるのですが、御覧の通り片付ける間もなく」

肩からずり落ちた外套を引き寄せて気恥ずかしそうに鳳仙は俯いた。その様子に、瑚蝶の中の小さな疑問の糸が解けた。

「それで桔久にあんな風におっしゃったのね」

「え？」

桔久の名に、顔を上げた鳳仙の両目がわずかに見開かれる。

「ただの雑用係だと、そう桔久に言ったそうですわね。本当のことは、隠しておくつもりですか？」

「あ……」  
定まらない表情で、鳳仙は俯いた。「う、嘘をついたのは申し訳ないと思っていました……でも言えなくて」

「それで気まづくなつて、昨日も今日も約束を反故にしたと？」  
「ち、違います！」

蝴蝶がわざと少し責めるような口振りをすれば、鳳仙はうろたえながら首を左右に勢いよく振った。

「誤解しないでください！ 昨日と今日は執務が立てこんでいますて仕方なく……。でも……どこで嘘が露呈してしまうか、危惧していたのは事実です。本当のことを知ったら、彼女は僕を恐れて、二度と話をしてくれないのではないかと思つて」

「身分の差ということ？」  
畳んだ書状を几案の端に寄せ、鳳仙は肯定を示すように肩で大きく息をした。

「……ここでは、位の高さや家名が大きな意味を持ちます。確かに、満足な仕事をするには大切なことの一つだと僕も思います。けれど、真に心を開きたい相手の前では障害にもなり得る。迷いも確かにあつたのです。彼女を傷つけたくない、でも、周りの目も気になつてしまう……僕はまだまだ小さな器ですね」

自嘲気味に、鳳仙が小さく笑った。

高々と積みあがる書物を蝴蝶は見た。

普通ならばまだ一官吏として出仕したてであってもいい年での長官職任命は、鳳仙にとってかなりの重圧になっているのだろう。前途有為と信望厚いとはいえ、有能な古参官吏達が鳳仙に向ける目も厳しいはずである。統率権を預かる以上、子供だからという理由で言い逃れは出来ないからだ。

要塞のように築かれた塔は、鳳仙の焦りを物語っているように見え

た。地歩を固めるのに必死なのであろう。

「その杞憂はわかります。でも、少なくとも桔久は人を肩書きで判断するような子ではありませんわ。それよりも、貴方がこのまま姿を見せない方が彼女を傷つけてしまうのでは？……ひどく心配していましたわよ」

「桔久殿が？」

「大切なのは、貴方様がどうしたいかですわ。周りがどう見るかではなく。官吏としてではなく、貴方自身として何を望んでいるのか。現実の重みに、ご自分のお心を忘れないでくださいまし」

大切なものを、見失わないように

鳳仙向けながら、しかしまるで自分に言い聞かせているようだ。瑚蝶は思った。

瑚蝶に諭されるとは思っていなかったのだらう。鳳仙は目をぱちくりとして喫驚を示していたが、やがて「はい」と素直に頷いた。

「……心配して、いらしてくださいさっただんですね」

ふわりと微笑んで、瑚蝶は立ち上がった。

「私はただ、桔久の悲しむ顔を見たくなかつただけですわ。妹のように思っている子です、何かあつたらいくら鳳仙様でも承知しません、と釘を刺しに来たのです」

そしてやんわりと脅し文句を口にすれば、「すす、すみません」と鳳仙は椅子から腰を跳ね上げて直立した。

「反省なさっているのなら、会って安心させてあげてくださいね」微笑ましい未来図を思い浮かべながら辞して、房を出るため瑚蝶は書物の林を戻ろうとした。

だがその時、閉めたはずの扉の一枚が開いているのに気が付いた。「ここで辛抱強く待っても、俺の心配はしてくれぬのだらうな」

開いた扉にもたれていた長身の男の顔が、瑚蝶へ向いた。清爽な切れ長の瞳が、かすかに細められる。

あ……。

鳳仙と会話をしている最中も、一時足りとも瑚蝶の頭を離れなかったその姿がそこにあった。

「陛下……」

器用に本柱を分けながら、劉王は瑚蝶の傍へとやってきた。朱襟が利いた白の籠袍姿の、薄らかな笑みを載せた端正な面差しを見上げた途端、瑚蝶はたまらなく懐かしさと安堵を覚えた。

「用足しに来て、探すつもりでいた蝶も見つかるとは運がいいな」隣りに立つ温もりがふいに瑚蝶を包み込む。その胸に飛び込みたい衝動をおさえて、瑚蝶は自分を見下ろす双黒に尋ねた。

「……朝議は終わりましたの？」

「中休めだ。昨夕から紫芳の間に繋がれたままで、さすがに息が詰まりそうになってな。隙をみて逃げてきた」

少し疲労感を漂わせた微笑を見せ、劉王は鳳仙に視線を移した。「三省六部の長が出揃うと、皆弁舌をふるいたがって白熱し通しだな。貴殿もどうだ。年や経験の深浅で、立場を決めることはな

い。物言わぬ知識に埋もれているより、生きた答弁も必要だろう。

東夷公おやまのもいることだしな」

「ご冗談を」鳳仙はきつぱりと首を横に振った。

「まだ僕にはあの中に入る勇氣はありません。……身内が高官故の眷顧と思われても癪です。与えられた仕事を満足にこなせるようになってから、参入させて頂く所存です。それが私のけじめです」

「フ、見かけによらず豪気だな」

「任に就いた以上、見くびられたくはないので。それよりも陛下  
こちらを」

溫柔な見かけに反する強毅な態度で返し、鳳仙は几案の端に寄せ

た書状の一つをとり劉王に差し出した。

「ああ、ご苦労だった」

それを受け取り、劉王は裏に捺された送り主の印璽を確かめる。青い印璽だ。どこかで見覚えがあると瑚蝶が思案していると、劉王は書状を開きもせず懐へ仕舞い込んだ。

「お顔色がすぐれないご様子。少し、お休みになられたほうがいいのでは？」

控えめに眉をひそめ、鳳仙がそう進言する。

「そうだな」

溜め息まじりに答えた劉王の顔色は、確かに少し青白く見えた。

「ちょうど一眠りしに行こうと思っていたところだ。寝心地のいい、膝枕を借りようかと」

劉王が横目で瑚蝶をちらりと見下ろした。その一瞥を受けて、瑚蝶は「膝枕」が自分なのだとということを感じた。不本意にも、顔がほんのり熱くなったのを感じた。

「さて、呼び戻される前に隠れるとするか。行くぞ、瑚蝶」

「えっ……あ、はい」

劉王が踵を返す。足早に遠ざかっていく後姿を追うべく、笑いを堪えた様子の鳳仙と気まずい一礼を交わし瑚蝶は房を出た。

「劉王」

瑚蝶が呼び止めようとした時には、劉王はすでに木蓮の庭に下り、西内朝への回廊へと向かっていた。

「劉王！」

小走りで追いながら詰るようにもう一度呼べば、回廊へ上がったところで身勝手な男は振り返った。

「どうした。　　なんだ、怒っているのか？」

瑚蝶の顔を見るなり、劉王はからかうように言った。

「突然現れて一人ですたすと　ご自分の都合で振り回さないでください」

「仕方あるまい。わずかな休息だ、少しでも時間が惜しい」

「だからって」

瑚蝶はそこで言葉に詰まった。

違う、こんなことが言いたいのではない。

だが素直な気持ちは奥へ奥へと隠れたがって、言葉を見失わせる。……しばらく忙しくなりそうだな。こうして言葉を交わせる時間も少なくなる」

俯いた瑚蝶の髪に、そっと劉王の指が触れる。だが顔を上げた時にはもう、回廊を歩き出していた。

「……何かあったんですの？　城の中が騒がしいのは、なぜなのですか？」

後を追いながら、瑚蝶は劉王の背中を見つめた。

「除目や政策施行の段取りに手落ちがあつてな、修正に追われているだけだ。案ずるな。たいしたことではないが　手間がかかる」

「今夜は……珪香姫の祝宴では」

「　ああ。姫には申し訳ないが、愼麟行きは取り止めだ。もうすでにその旨を伝えるべく早馬を放つてある。手を煩わせたのに、済まぬな」

首だけわずかに後ろに反らせ、劉王が詫びを入れた。手巾の刺繍のことを言っているのである。

妙だ、と瑚蝶は思った。幾ら政務に追われているからとはいえ、わざわざ訪問を中止にするとは。

拙いが愛らしい珪香姫の敬愛の情に対し、彼女を喜ばせるため、誕生日の祝宴には必ず劉王自ら足を運んでいるという。少なくともここ三年はそうであった。今更政務を理由に持ち出すことが、瑚蝶には疑問だった。

何か隠している……。

だが単に問うたところで、国一つ背負うその背中は振り向きはしないだろう。

物悲しさが瑚蝶の胸を占めた。

何も出来ないのか。

これでは、今までと同じだ　ただ理想郷のような離殿でぬくぬくと守られているだけでは

「陛下」

前に回りこみ、瑚蝶は劉王の動きを止めた。

「……わかってはいます、私の力では何も出来ないことは。貴方様の背負う荷を引き受けることが出来ぬことは　でも」

庭のあちこちで芽吹く緑が、微風にさらさらと靡いた。蒼天を過ぎる雲影が、回廊に濃い影を落していく。

「もう……置き去りにしないでください。一人で抱え込むのではなく、私に貴方様の荷をわけてください。少しでも支えに……お側に、いたいです」

劉王の表情の変化を見届ける前に、瑚蝶は視線を石床に落した。精一杯を口にしたつもりだった。

雲の影が去り、再び日輪が顔を出す。劉王の手の平が、瑚蝶の右頬を包んだ。

「出来ることならあるさ」  
大きな温かい手の平に支えられ、瑚蝶はゆっくりと顔を上げた。真摯な眼差しがそこにあつた。

「もう俺を突き放さぬことだ。城を出るなどという酔狂な真似もしてくれるな。それから　一つ重要なことを話す。お前の答えが聞きたい。お前にしか答えられぬことだ」

「は……い。……覚悟は出来ております」

劉王の手が頬から離れた。粗略さの欠片も見当たらないきり、と張り詰めた声音に、瑚蝶は身構えた。だがそんな瑚蝶の前で、劉王はまるで臣下がするように突然跪いたのだった。

「劉……王？」

啞然とする瑚蝶の左手を、劉王はおもむろに取った。

「西遥<sup>シヤウシヨウ</sup>では思い人に愛を乞う際、このように振舞う風習があるという。黎青の母君に昔聞いた」

「りゅ、劉王、誰か来たら……！」

からかうにしては冗談がすぎている、こんな見晴らしのいい長廊で。周囲を気にしながら手を引き込めようとするが、劉王は離さない。

「見られたなら、その者を証人にすればいい。確かな瞬間になる瑚蝶」

恐怖や悪寒とは違う震えが、劉王の息の触れる指先から走り抜けた。

「甘言や睦言の類は苦手だ。気の利いた言い回しも出来ん。だがこれだけは言わねばならん　だから率直に言おう」

掴んだ瑚蝶の左手の指先に、劉王は口付けた。

「我が妻となりて、生涯傍にあらんことを。一段落したら、婚儀を挙げよう　皆の前で。二人きりでもいい、これからを共に生きよう」

……今、何と？

掴もうとする前に、言葉とは消えてしまふ。

幻聴ではないのだろうか。焦がれる気持ち<sup>キモチ</sup>が幻を具現させ、一時の夢を与えてくれているのではないだろうか。

「率直に答えてくれ。あの夜のこと<sup>コト</sup>が気の迷いだったというならそ

れでも構わぬ。だが俺は身命を賭してお前の前途を守ろう。それだけには変わらぬ。廟王に誓った通りに」

口付けた指先に、劉王が額を寄せる。祈りを捧げているように。

「貴方は、ずるいですわ……いつも、いつも」

落涙が、重なる手を濡らした。

「私の答えが一つだと、知っているはずなのに」

目の前が霞んでいく。何も見えなくなる前に、伝えなくては。

「断言は出来ぬ。俺とて只の人よ。この耳で聞いた言葉を信じたい」  
手をとったまま、劉王が立ち上がった。

「お傍に……いさせてください。離宮で待つのではなく、もっと貴方の近くに」

引き寄せられるように、瑚蝶は劉王の腕の中へ飛び込んだ。

広い胸に顔を埋める。

願った通りに、温かな腕が瑚蝶の背を抱きしめた。

優しく、しかし強く。

春日に守られた回廊の時間が、静かに止まる。

この腕の中で幸福の本当の意味を知っていくのだと、瑚蝶は静かに涙に濡れた瞳を閉じた。

赤く、染まる。

足元も、目の前も。狂気の声に、塞がれていく。

「兄上……」

血濡れた手を、青年は必死に伸ばす。  
天を摩るように恐れと聳える巨大な扉が、翳む視界の中でゆっく  
りと閉じられていく。

「兄上えー……っ！」

絶望の叫喚を打ち消すように、破壊を知らせる重低音が轟いた。  
目の前で、扉は固く閉ざされた。

「……たすものが……」

虚空を掴んだ拳で、青年は血海に横たわる太刀の柄を握り締めた。

「わ……たすものが……っ！」

光を忘れたその瞳に宿っているのは、もはや修羅だけであった。

## 【式拾七】 叛心

『貴方を守る。例え冷酷な殺戮者となろうとも、この命の限り』

闇が切り開かれた時、阿樽あくれの目にまず映ったのは冷たい石床であった。

渴いた咳が押し出されたと同時に、呼吸を思い出す。意識は妙にはっきりしていた。

そうだ、後ろから殴られて……。

うつ伏せになっていた上半身を両腕を支えに持ち上げれば、ずきりと鋭い痛みが後頭部に走った。

おそらく剣の柄での一撃だったのだろう。激烈な衝撃だったのを覚えている。

背後から起き上がった兵の存在を察知出来ぬほど、放心していたのだ。

形振り構わず剣を振るい、次々に襲い掛かってくる兵士たちを叩き潰したが、すべてを斬り捨てることは出来なかった。慣れ親しんだあの、青銅色の甲冑が何故自分に襲い掛かってくるのか。激しい動揺が阿樽を怯ませた。

ここは、どこだ……。

無数の手に掴まれたように四肢のあちこちが痛み出したのを堪え、阿樽は起き上がった。

静寂に満ちた周囲に目を走らせれば答えはすぐに見つかった。

正面に影を並べて揃い立つ鉄格子を睨みつけ、阿樽は奥歯を噛み締めた。

「く……そ……っ」

意識を失ったと同時に手放したはずの怒気が舞い戻り、唐突に膨れ上がった。

「くそうツ……！！ ふざけやがって！！」

突き破る勢いで鉄棒に掴みかかり、両拳で殴りつける。鈍い金属音が石室に反響し、檻の向うに広がる暗黒に吸い込まれるように消えた。

辺りに人気がないならば、どこにも届くはずはない。

地下牢獄は罪人の嘆きや苦悶が漏れぬよう、石壁は厚く回廊は暗闇に塗り潰されるほど長い。無明の深淵のようなものと阿搏は知っていた。

「こんなところで立ち往生してる場合かよ……！！」

頑強な鉄柵は阿搏の殴打にもびくともしない。腰に手を伸ばしたが、剣はおろか剣帯すら着けていなかった。

「この間にも兄上はっ……」

心が焦燥に囚われる。

赤黒い染みが無数に飛び散る己の夜着を見下ろし、阿搏は唇を噛み締めた。

あれからどのくらいたったのかはわからない。

だが城に異変が起こったのは、まだ薄らかな夜の帳が降りていた未明のことだった。

血相を変えた番兵が阿搏の臥床へ飛び込んで来たのだ。

内紛だ、と

枕元の太刀を取り、阿搏は夜着のまま部屋を飛び出した。

そしてそこで見たものは 自城の兵士達が殺し合う姿だった。

暁闇の中に、血飛沫が迸る。

何かに憑かれたように男達は喚声を上げ、同胞達を斬り捨て血溜

りに沈めていく。

おぞましい光景だった。

まるで夜の秘めたる狂気が牙を剥き、悪夢を具現化させているように。青藍の毛氈の敷かれた回廊には、死屍が累々と続いていた。

なぜ城を守るはずの者達が蜂起したのか。

なぜ主であるはずの自分に刃を向けるのか、わからなかった。

だが考えている暇はなかった。襲い掛かる逆徒の攻撃を振り切り、阿樽は玉座の間に急いだ。

王の寝間は玉座の裏にある。急務に備え、先代王が後宮のある奥宮から移したのだ。

だが、阿樽が辿り着いた時にはすでに扉は破られた後だった。

そして広間に押し寄せていたのは 見慣れぬ黒い甲冑の軍勢だった。

その中から進み出てきた一人の男が阿樽を見て何かを叫んだ。

目を、疑った。

にやり、と笑った男の左右から青銅と黒の鎧の群れが濁流のように阿樽へと雪崩れ込む。

血濡れた剣の柄を握りしめた。

身体中が熱くなり、目の前が赤く染まり、闇雲に剣を振るうことしか思い浮かばなかった。

そして、

目の前で、扉は固く閉ざされたのだ

「兄上……っ」

おそらく兄の吉京はあの中に囚われているのだらう。  
教育顧問の愁走海や他の侍臣らの安否もわからない。

どうすればいいのだ!!

逼塞したこの状況では、わずかばかりの冷静さも流水の如く流れ出ていく。

「くそッ!!」

立ち塞がる格子をもう一度殴りつけ、阿搏は石室の壁を力任せに蹴り飛ばした。

「これはこれは、威勢のいいことすな」

不意に聞こえた声に、阿搏ははっとして鉄格子を振り返った。

少し先の間の中、右手の方から松明の明りと幾つかの足音がやってくる。やがて四方の壁を 伝って忍び寄る足音は檻の前で止み、松明の炎が掲げられた。

「まだ半刻もたっていないというのに、お早いお目覚めですな。さすが剛強なお方だ」

揺らめく一對の明りの間から進み出てきた一人の男を、阿搏は苛烈なまでの目顔で睨みつけた。

「列氏……!!」

酷薄な薄笑みを浮かべて鉄格子の前に立っているのは、兄の片腕であり、臣下の中で最も信頼を得ているはずの男だった。

「貴様……!! 仮にも宰相の身で一体これは何の真似だッ!!」

鉄棒の隙間から腕を突き入れ、阿搏は最高位を示す官服の胸倉を掴んだ。

男の両脇を固める黒い甲冑の男達が、阿搏を引き離し戟の先を向けてくる。男がそれを制止した。

「やれ、一番上等な石牢を選んだのですが、寝心地が今ひとつでし

「たかな？」

「ふ……ざけるなッ！ 答える列氏！！ 父代からの忠臣であるはずのお前が、なぜ不義を働くッ！！」

体勢を立て直し、格子を乱暴に掴む。その向うに立つ豊かな黒い口髭を携えた初老の偉丈夫は、嘲笑めいた笑いをふつと漏らした。

「……確かに私は先帝に忠義を誓い、西嶺に尽くして参りました。この国と身命尽きるまで共にあらんと」

「じゃあこれが貴様の忠誠の証だとも？ 　　ふざけるな！！  
ここから出せ！！」

獰猛な獣の如き勢いで鉄柵を揺り動かし阿樽は叫んだ。再び戟の先が、鉄格子の合間から阿樽に狙いを定める。

「それは出来かねます。殿下には暫しここでお待ち頂かなくては。  
最後の時が来るまで」

「な……に！？」

「数日の内に我が国の精鋭軍と祖軍が愾麟きりん、統とうの関の門を開くでしょう。病から国王は乱心、二国への不信感から同盟を破棄し祖軍と手を組み宣戦布告。しかしその罪責に耐えかねて皇太子殿下は国王を殺め、ご自分も命を絶たれた」

「な……にを言っている」

驚愕が憤りに勝る。格子に手をかけたまま、阿樽は駭然と列氏を見た。左右に立つ兵士の黒い甲冑が視界の端に映り込む。三国どの国の軍の物ではない異色　　広間を埋め尽くしていたあの軍勢はまさか

「祖、だと……祖と通じていたのか……！ 貴様、国を乗っ取るつもりか！！」

「“再生”と言って頂きたい。新しい王を迎え、本来の西嶺を取り戻すのですよ。嘗ての軍事大国としての姿を」

「血迷ったか列氏……！！ 何を言っているのかわかっているのか！！」

「気は確かにございます」

色をなした阿搏の怒号を浴びながら、列氏は少しも居を乱さずに冷静に答えを繰り出す。口調は以前と変わらず丁寧極まりないが、どこか傲慢な響きがあった。

「すべては国の御為なのですよ、皇太子殿下。嘗て我が国は大陸一の軍事国家でありました。長きに渡り夷国と恐れられてきた祖の鎮圧を成し遂げたのも、鋼の兵団と異名をとった我が軍とそれを率いる勇君があつてこそその功績。お父上は実に優れた統率者でございました。このお方ならば天下も掴めると　しかしその大志は仕舞い込まれ、今となつては見る影もない。同盟という困いの中で安逸とし、軍も縮小、山賊討伐にも手こずるようになるとはまさに強国の恥。これは単に指導者の劣故。　織弱な王の細腕では舵取りは無理なのです」

「兄上を愚弄する気がッ！！　兄上の尽力で西嶺は泰平無事に治まつているんだ！　それが不満だとしても言つのか！！」

爪が手の平に食い込むほど強く阿搏は格子を握りしめた。今すぐ目の前の忒臣の首を押し折りたい衝動が激しく身躯を駆け巡った。

「安寧がいかに危険なものなのか、貴方様はご存知ないのです。力ある者こそが生き残り、弱者は滅びる。これが世の常。脆弱な王に行く末を託し滅びる日を待つなど誰が望みましようか。我が国の強靱さを存分に他国に知らしめ、真の泰平をもたらす新たな君子が必要なのです」

「だから蛮族に自国を売るだとッ！！　……先の戦でなぜ祖が滅びたと思う！　侵略と破壊しか知らぬ愚者だったからだ！　それが過ちだと気付けなかったからだ！　なのに貴様は西嶺にその愚か者になれと言つのか！　侵略で得た平穩など誰も望みはしない！」

「お言葉ですが皇太子殿下、何も私だけの意思ではないのですよ」

「何……！？」

「多くの者が意を同じくしているのです。貴方様も御覧になったでしょう、その結果を」

脳裏に鮮血に染まつた城内が甦る。

あれは悪夢だ。夜の残した幻だ。振り切るように、阿搏は頭を横に振った。

「皆が……兄上を廃することに賛同したと……？ ほざくな！ 高潔な西嶮の臣が自らの意志で売国奴になるわけがない！ 慙死に値する行為だツ！ どうやって籠絡した！」

「ほほほ……実に容易きことでしたよ。なに、それなりの代償を示せばいいだけのこと。国防を賄う兵の大半は俸禄目当ての傭兵、喜び勇んで手の裏を返しましたぞ。軍兵も同じこと、欲の前では人心など一溜まりも無い」

列氏が口角を引き上げた。徳と叡智を映していたはずの男の顔には、醜い欲心の影が浮かび上がっていた。

『買身です』

その時思い出したのは、いつかの愁走海の言葉。自らを金銭と引き換えに売り、国賊となる者達がいると

阿搏の中の途切れた疑念の糸が、一本に繋がった。身体中の血が沸き立つように全身がかつと熱くなった。

「貴様が買身の糸を引いていたのか……そんな金財をどこで……！ 国庫は兄上が自ら所管しているはずだ！」

「……国帑には手をつけておりませぬ。先々必要となるものですか。祖の徒党共が張蛾一族と名乗り山賊に身をやつしたか、真の理由がおわかりですか？ 安嶺山、行路山、魯神山、それらには昔豊かな金の鉾脈筋がありました。もう枯れ果てたと判断され閉鎖されましたが、新たに発見された筋がありました。少しずつ祖王のおわす慶頂へ運ばれていたのです」

闇の画紙の上で松明の炎が慄くように大きな波を描いた。阿搏は目を見開いた。

「張蛾は囷か……？ 私利を肥す間の……」

それでは自分は何をしてきたのだ 阿搏は愕然とした。

ただの兵糧目当ての賊軍、駆逐すればすべて済む。そう思っていた。だがそれでは思う壺だったということか。

「諸侯や他の重臣達も……買収したということか!？」

「残念ながら、退嬰の風に吹かれた老輩共には最早何の価値もありません。討ち捨てるが良策。特に愁走海のような一刻者には賛同を求めても無駄というもの。国王とともに処刑せよとの新君の仰せです。反する者達も皆同様だと」

総意での革新を祖王は求めている、と愉悦を貼り付けたまま列氏は言う。おそらくそれは“侵略者”の汚名を拭きたいが為。背信を是としなかつた者達を掃討し征服を正当化する。

「欲念の走狗に成り下がったか、列氏!! これ以上の暴虐は許さん! 兄上に手をかけたら……まともな死に方は出来ないと思え!」

「ご自分の立場をご覧になって言葉を選んだ方がよろしいですよ、皇太子殿下。もうそう呼ぶこともなくなりませんが。実に惜しい強腕をお持ちだが、その首は邪魔でしてね。貴方は二国への離反を苦に王に殉ずるのでございます。そして新生軍が新たな歴史を切り開く」

ほざくな!!

声にならなかつた。両手ががたがたと震える。恐れからではない。心臓から一部も残らず溶かし尽くされそうなほど熱くどろどろとした、かつで感じたことのない感情<sup>もの</sup>だった。

いくら面罵しようが反駁しようが無駄なことに思えた。どれほど罵詈雑言を叩きつけようと、対峙する現実を打ち砕けるわけではない。

硬質な鉄格子の感触が急に手の平に貼りついてくる。臍を噛む思いに、阿搏は唇をきつく噛み締めた。

「私を恨んでおいででしょうな。なぜ裏切ったのかと。人の心

とは所詮、囚われるのを嫌うものなのです。欲するものなしではね。貧弱な王と粗暴な皇子、今の西嶮には、何も無い」

左右を囲む兵士に戟を引かせ、阿樽に向かって列氏は端然とした一礼を見せた。

「では皇太子殿下、次に会う時が今生の別れとなりましようが、それまでごゆるりと最後の時をお過ごしくださいませ」

渴いた口内に血の味が滲んだ。

「列氏……ッ」

松明の明りが遠ざかっていく。阿樽はさすがのような思いでその名を呼んだ。

かつて常に父の傍らにあり、先帝の葬儀で最後まで棺の前を離れなかった男。同じように兄を支えてくれると疑いもしなかったその男の名を

だが引き止められるほどの力は、阿樽の声にはもうなかった。

やがて足音は、完全に遠く消えた。

「暫らく、城を留守にする」

しばしの沈黙の後に夜の静寂しじまを破った声に、瑚蝶は髪を梳いていた手を止めた。

「暫らく……とは？」

櫛を置き、鏡台から窓辺を振り返る。長椅子に凭れて、劉王は月光の映る水苑の水面を眺めていた。燭台のない窓辺は、密かな月の灯で仄かに明るかった。

「数日かひと月か……定かではないが、愼麟を經由して西嶮へ行く」「ひと月？」瑚蝶は籐の腰掛けから立ち上がった。

「黎青様と阿樽様をご訪問なさるだけならば、ひと月もかからないのでは？」

黎青も阿樽も、劉王を訪問する際にはせいぜい数日を費やすだけだ。彼らには慣れた道程だということもあるが、突飛な日数に瑚蝶は動揺した。

「少し気になることがあつてな。処理に時間がかかるやもしれん」「気になることは？」

言下に問い、瑚蝶は劉王のいる長椅子に近付いた。ゆっくりと瑚蝶に視線を移し、夜着姿の劉王は椅子から身を起こした。

「心配するな、事が済めばすぐに戻る」

唇の端を緩く引き上げ、弱く笑う。月明かりのせいか、劉王の様子は淡い幽光に似てどこか悄然として見えた。

「……はぐらかすのですね」

大切なことはいつも。

誰よりも近くにいることを許されても、踏み入れさせない領域を劉王は作る。

「瑚蝶」

両手を握り締めて俯きかけた瑚蝶に、劉王が手を差し延べる。黙つたまま、瑚蝶は躊躇いがちにその手の内へ歩を進めた。

「そんな顔をするな」

表情を曇らせた瑚蝶に、劉王はくすりと笑う。そして左手を取り手の甲に口付けると、もう片方の手で瑚蝶の腰を引き寄せた。

「確かではないことを、当て推量で口に出したくなくてな。ひと月と言ったのは万が一、の場合だ。そんなことは恐らくはない、安心してしろ」

劉王の胸に顔を埋めるように抱き締められたまま、瑚蝶は首を左右に揺すった。

「隠し事をされて、安心など出来ません」

心配をかけないため、そう思っているのだろう。けれどその気持ちしが結局は不安を招くのだと、わかって欲しい。

「置き去りにしないと、約束したではありませんか」

拗ねた子供のように小さく呟けば、劉王の手がそっと瑚蝶の髪を撫でた。

「……するわけがないだろう。やっと手に入れたんだ。黎青から便りが来た。阿樽の元へ供をしてくれないかと」

瑚蝶ははつと顔を上げた。先日、鳳仙が劉王に渡した書状の印璽あれは愼麟の王家の物だと思い出したのだ。

「……阿樽様に何か？」

「詳しいことは書かれていなかった。だから早急に向かうことにした」

端的に劉王が述べる。何か他に含意があるような気配がして、瑚蝶はじつと切れ長の双眸を見つめた。

「何か悪いことでは……ないのですか」

「そうではないさ。世話焼きは黎青の性分でな、過剰な心配をしているだけだ。黎青は阿樽の母親のような気でいるからな」

だから心配するな、と言われ、瑚蝶は言及を止めた。納得したわけではなかったが、疑いを深めたくもなかった。

「我が儘皇子の説教が済んだら、すぐに戻るさ。俺とて長期間の拘束は本意じゃない」

瑚蝶の額に口付けを落とすと、劉王は抱き締める腕にわずかに力を込めた。徐々に一つに重なる温もりは、不思議と瑚蝶の憂いを散らしていく。

「……では一つだけお許しを」

「うん？」

「乗馬の手ほどきを受けたいのです」

劉王がふ、と息を漏らしたのに、瑚蝶は顔を顰めて持ち上げた。

「私、笑われるようなことは言っておりませんわ」

「いつも必死にしがみついているくせに、と思つてな。ククク……まあよい、好きにしろ。若い白馬をやるう」

笑いを噛み殺す劉王を、きつと瑚蝶は睨む。

「見くびらないでくださいまし！　すぐに乗りこなしてみせますわ」  
そしてつん、と反らそうとした瑚蝶の顎を劉王の指が引き止めた。  
「熟達されても困るな。簡単に逃げ出せるようになったら、今度は俺が置いてけぼりを食らう」

ふわりと穏やかに劉王が微笑む。月光だけが頼りの視界の中でも、その表情は鮮明に浮かび上がる。

「……それなら、早く戻ってくださいまし。そうでないと、追いかけていきますわよ」

合図をするように、瑚蝶は劉王の頬に手を伸ばした。

「それもまた厄介だな」

劉王の顔が近付き、その唇が瑚蝶のものに触れた。最初は優しく、次第に深く

このまま。

夜が明けなければいいのに。

折り重なって長椅子に横たわりながら、瑚蝶は劉王の首にしがみついた。

こうしていなければ、失くしてしまいそうに思えて……

応えるように、劉王の抱擁に激しさがこもっていく。

恍惚とする意識の中で、一度だけリン、とかすかな夜光虫の羽音を瑚蝶は聞いた気がした。

## 【式拾八】 壮途

「西侍郎！！」

呼び声に、蓉洵は足を止めて振り返った。

小鳥の羽音のような足音を響かせて、一人の少年が回廊を駆けてくる。翡翠色の外套が肩からずり落ちるのを引きとめながら懸命に走って来る幼なじみの様子に、蓉洵は思わず目を細めた。

「行くのですね」

目の前に辿り着くと肩で大きく息をしながら、若き秘書省令・東鳳仙は紅潮した面で装甲姿の西蓉洵を見上げた。

「どうして僕に一言も言ってくれないのです？」

たいした距離を走ってきたわけではないのに、鳳仙の息遣いは荒い。華奢な体には一回り大きい外套のせいだろう。内勤の高位官吏達の着る上着は、壮麗な装飾が施されている分ずしりと重みがあるのだ。「肩が凝って仕方がない」と着用拒否され筆筒の中で眠っている父親の外套を蓉洵は思い出した。

「おいおい、大丈夫か？ そう大事でもないし、必要ないと思ったのさ。長期遠征というわけでもない。ちょっとした小火の始末にいいだけで」

「小火？」 惘然とした表情で、鳳仙が繰り返した。

「些細な事態に禁軍である絳平軍が都の外に派遣され、副将の貴方が指揮を執る必要が？ そんな適当な言葉で誤魔化さないでください」

乱れた息遣いを治め、きりと鳳仙は眉を吊り上げた。まだ幼気なさの色濃い面立ちには似合わぬ鋭い詰問に、蓉洵は回廊の天井を仰いだ。

「……本当なのですね、成庚の関が落ちたというのは。边境の一関とはいえ、飛騰軍の部隊が破られるなんて」

高揚しかけた鳳仙の音が、徐々に消沈していく。若さに似合わぬ深い溜め息がその口から漏れた。

「……心配はいらないさ」不安を抱えると項垂れる癖のある鳳仙の頭を軽く叩くように撫で、蓉洵は言った。

「敵軍の侵入は食い止めている。でなければとつくに攻め込まれて  
いるだろう。南藍世なんらんせいがいるんだ、そう容易く破られたりはしない。  
あいつはしぶとく、しつこい」

お前も知っているだろう、と蓉洵はもう一人の幼友達の名を挙げた。

四候の一人南聖候の嫡男であり、地方警備強化の為派遣される駐泊禁軍である左飛膳軍ひえんの指揮官である南藍世は、いずれ誅易と並ぶのではと危ぶまれるほどの剛力の熱血漢だ。

だが戦闘になると驚くほど冷静沈着で、守りを重んじた戦術に長ける緻密な策士でもある。実戦の多い駐泊軍の指揮官に抜擢されたのも、熟慮断行型の姿勢と才幹故である。

「……西嶺の軍勢だというのは本当なのですか」

だが頼もしい知己の話題を出しても、鳳仙の顔色は浮かない。その胸に巢食う不安が大いに蓉洵を見つめる双眸に映り込んでいた。

「……まだ断定は出来ない」  
そうとだけ蓉洵は返答した。

今回の出動の名目は“皇帝の警護”である。本意は軍部の極秘事項だ。だが風聞は密かに城内に広まっていた。

西嶺が反旗を翻し、侵攻してきたと

「戦に……なるのですか」

昇り始めた朝陽の差し込む回廊に、影のように暗然とした鳳仙の  
眩きが落ちた。

両肩から滑り落ちた双鬢が、俯いた頬に垂れかかる。外套の襟元をぎゅっと握りしめた手は、小さく震えているようだった。

「そうならぬように行くのさ」蓉洵はもう一度、鳳仙の頭に手を伸ばした。

「誰も争いなど望んじやあいない。そんな悒鬱な顔はよせ。この大兄に任せておけば心配ない。杞憂だったと笑える結末を持ち帰ってやるさ」

くしゃりと鳳仙の髪を掻き撫でた。むっとした様子で鳳仙が顔を上げた。

「……その自負心が不安なのですよ。昔からそのおかげで散々迷惑して振り回されてきたんですから」

蓉洵の手を押し返し、鳳仙は乱れた髪を押さえながら蓉洵をきくと見据えた。

「はて、そうだったか？」

「そうです！ 野駆けだの川釣りだの僕の都合も聞かずに引つ張り回すわ、試験前夜に前祝だと色街に連れ出すわ……“ 人生の潤滑液になるから”なんてわけのわからないことを言って」

「お前は本の虫だったからな。色んなことを経験して見聞を広めた方がいいと思っただのさ」

「でも結局最後は、僕までお父上の説教を聞く羽目になって」

「……はは。まーあれだ、お前さんが一緒だと親父殿の雷も和らぐのさ」

じろりと睨んできた鳳仙の視線を受け流すように、蓉洵は回廊の外に広がる庭院の方を見る振りをした。

武人であり朝廷一の篤学の士と謳われる才人である蓉洵の父、西鄭候の説教はひとたび始まると恐ろしく長く辛辣だ。今となっても蓉洵にとっては最も苦手な存在である。

「とんだとばつちりでしたよ。明けの鳥が鳴くまで着座させられたこともありましたっけね」

「だけどお前さんが泣くと弱いんだよ、親父殿は。よくぼろぼろ泣いてたよな、シヤオホリ小花。別に悪かないのに、『ごめんなさい、ごめんなさい』て」

蓉洵の所為にしてしまえばいいものを、決してそうとは言わなかった。目の前の少年に幼い時分の思い出を重ねて、蓉洵はフツと笑い零した。

「む、昔の話です！ 過ぎたことを持ち出さないでくださいっ」

「何を言ってる。持ち出したのはそっちだろうが」

鳳仙の顔が夕暉のように赤く染まる。純真を絵に描いたような素直すぎる反応に、もっとからかってやりたくなる反面、蓉洵は安堵感を覚えていた。

変わらないな。

どんな時も清廉で正直で、透明で穢れを知らず。その純粹さに、毒言家の父も毒を度々中和されてしまったのだ。

「ひっ、人が真剣に話をしようと思ってるのにどうして貴方は」

「そうやってこころ百面相してた方がかわいいぞ、小花」

「真面目に聞いてくださいっ」

「おっとそろそろ行かんと。護衛隊長が遅れたんじゃ洒落にならんでな。また戻ったら聞いてやるよ」

「蓉洵！！」

じゃあな、と踵を返しかけた途端、鳳仙が焦ったように声を張り上げた。

さあ、と木々がさざめいた。清純な緑の香をのせた微風が二人の間を通り抜けていく。

「……僕に」

襟元にかけていた手を、鳳仙は胸の前でぐつと握り締めた。

「……僕に……何か出来るでしょうか」

真摯さの結晶のような眼差しが蓉洵に問い掛ける。

「貴方や父のように剣の腕も立たず、こうして大職を預かっている

というのに官吏としてはまだ未熟すぎて……。危急を知ってもこうして見送ることしか出来ず　武人の家に生まれたというのに、まるで役立たずな気がして」

双眸を伏せ、鳳仙が弱々しく笑う。その自嘲とともに細い肩が沈んだ。

鳳仙の父である東夷候は、嘗ては軍部を総べていた豪傑である。現役を退き総監として見守る立場となった今でも、一目置かれた存在だ。蓉洵の属する兵部他五部を統括する尚書省の長官でもある。

東家は元々武人を多く輩出してきた名家で、当主は代々禁軍の將軍職を預かってきた。

だが後裔であるにも関わらず武官を諦め文官の道を選んだことに、鳳仙は引け目を感じているのだった。

「俺も同じさ、小花」

本音を披瀝することが何よりも不得手で、強情つ張りな幼なじみに蓉洵は向き直った。

「俺も親父殿のような徳の高い有識者を目指す気にはなれなかった。よく言われたものだったな。“赤子の時分に取り違えたのでは”と俺たちは見事に家督にそぐわぬ気質に生まれついたからな。俺とてあるぞ、負い目を感じたことは。西家は格のある学者肌が揃い踏み系の系譜だからな」

学問は不得手ではない。そうでなければ兵部侍郎まで成り上がりはしない。だが、机案に腰を落ち着けるといことが己には不似合いだと蓉洵は思っていた。

「……でも貴方は文にも武にも長ける。それ故選ぶことが出来たのです。けれど僕は……机案にかじりつくことしか知りません。皆がっかりさせまいと必死でしたが、この他に選ぶ道がなかったことが不甲斐なくて」

父親たちにとっては冗談事のもりだった。

だが鳳仙にとっては重い一言であったのだ。東夷地方現当主の嫡男であり名跡を継ぐ身でありながら、父のようにはなれないと悟っ

ていたから。

「……お前は真面目だな」

思わず蓉洵の目尻が下がる。

いや、純朴というべきか。

いつになく心細そうに、すがるような目の鳳仙に、蓉洵はまるで幼子を宥めるような気分になる。

「俺はもともと我欲が強いんだ。それ故、どちらの名声も欲しいのさ。だがお前が内なかにいるなら、両天にかける必要もないと思ってる。お前は文に俺は武に。それで釣り合いはとれるじゃないか。人には在るべき場所というものがあるんだ、小花。それは皆同じわけではない。己が望み、己を望む場所のことだ。そこに、その者の真価はある。親父殿の受け売りだな」

悪戯っぽく蓉洵は片目を瞑ってみせる。

「親父殿は俺の身の振り方に関してとはとやかく言わなかった。ただ立志を貫けと。己の道は他人ひとが開くものではない、他人ひとが決めるものでもない。己で決める。心を白く保ち、天分を示す声を聞け、とな。お前の父君も口出しはしなかったろう？ だから今のお前があるんじゃないか。梓宮こしにいるのは、お前が望み、お前を望む者がいたからではないのか？ 恥の念を持つ必要などない。堂々と志した道を進めばいい」

俺はそう思う、とくくれば、鳳仙は心底意外そうに目を瞠った。

まともな答えは期待していなかった、という顔だ。

「お前はいい官吏になるよ、鳳仙」

柄でないことをした気まずさに負け、蓉洵は鳳仙に背を見せ進路を向いた。

回廊の外に広がる庭院が、陽光を受けて徐々に照り輝き始める。瑞々しく力強い気配が両側から起き上がっていくのが肌で感じ取れるようだった。

「お前はそのままでもいい」

清らかでそれ故脆く、けれど決して崩れ落ちることはない

「こうして見送りがいた方が心強くもあるしな」

前を向くことしか知らぬそのひたむきさは、いずれ多くの人々の心に響くようになるだろう。己にとってそうだったように。

その廉潔さは、統にとってなくてはならぬものになるだろう。今はまだ、己の価値に気付くことない小さな花でも

「西侍郎」

歩き出した蓉洵を、改まった鳳仙の声がもう一度引き止めた。

「ご武運を。調子に乗りすぎぬように」  
くすり、と蓉洵は笑んだ。

「一言余計な上、大げさだ。書を一冊読み終える間に戻ってくるよ。將軍に昇進せにやならんからな」

じゃあな、と後ろへ手を振り蓉洵は歩き出した。  
腰に佩いた太刀に軽く触れる。

そして唇をゆるりと引き上げ、己を待つ者たちのいる正殿前の横街の方角を見定めた。

蒼空から祝福の息吹のような微風が舞い降りた。  
赤の軍旗が手を振るように穏やかに翻る。

何十と積み上げられた威厳と誇りの証の上に現れた姿に、声が上がった。

それを合図に横街に集結した赤銅色の軍勢が二つに分かれ、路が開かれる。二分した戎装姿の兵士達が一斉に向き合う形をとった。

正殿前の高台からその様子を眺め、男はゆっくりと階段を降り始めた。

何百もの眼差しが、階下からその姿を見守っていた。光輝を放つ白銀の甲冑を纏い、一際生彩に満ちた威風堂々たる若き国王の姿を。石段を降りきり、劉王は己の為に開かれた道の前で立ち止まった。そしてすぐ横を振り向く。

その視線が後方に居る自分の方へ向けられているのに気付き、瑚蝶はゆっくりと前へ進み出た。

「お気をつけて」

眩しい日の輪を見上げるような気持ちで、瑚蝶は劉王を見上げた。蒼穹を背に、劉王が目を細め頷く。

その柔らかい笑みに、惜別の思いが胸を詰まらせる。気丈を手放しそつになりながら、瑚蝶は劉王を見つめた。

「お帰りをお待ちしています」

気持ちの翳りを懸命に隠す。劉王の手が瑚蝶の髪に触れた。

「一緒に行ってくれぬか」

「……え？」

予期せぬ言葉に目を睜ったその時、瑚蝶の髪にあった金の簪を劉王がそつと引き抜いた。

「代わりにな」

美しい蝶の細工の簪に、劉王はそつと口付け懐にしまった。

「留守の間、頼むぞ誅易<sup>ちゅうい</sup>」

瑚蝶の隣に立つ大柄の男が、「は」と頭を垂れた。小さく頷き、

劉王は眼差しの在り処を戻す。

「行ってくる」

繋がっていた見えない糸が離れた。劉王が兵士達の間を歩み出す。

どうか早く。

瑚蝶は両手を組み合わせ、祈りを捧げた。

どうか早く、お帰りになつて。

この不安が早く、消えてなくなるように

「今度はしくじるんじゃないよ……」

窓を閉め切った薄暗い部屋の片隅で、邦昌ほうしょうはその言葉を聞いていた。

「これで最後だからね」

蠟燭の炎の向うで、女の赤い唇が歪むように笑んだ。

まわりつく薄闇の中から、邦昌は女を睨みつけた。今にも燃え盛りそうな激しさを秘めた眼睛で。

「返事はどうしたい？」

顔がかつと熱くなった。塞がり切れていない腹の傷の痛みを邦昌はわし掴むように押さえた。

「……………わかつてるっ……………」

長椅子に横たわる女がにたり、と口を裂いた。

「いい子だね……………さすが、妾あたしの子だ」

燭台の炎が不気味に揺らめく。女が蛇のように目を細めた。

「いいかい？ 今度こそ蝴蝶を連れてくるんだよ……………妾あたしのところへね。あの子とは一度、きちんと話をしなくちゃあならないからね

「

クククク、と低く貪婪な含み笑いが室内に漂う。

どす黒いその響きに、邦晶は唇を噛み締めた。

## 【貳拾九】 絆

壁際に蹲るように座り、阿樽はなすすべもなくただ常闇を見つめていた。

どれほどの時間が経過したのだろうか。視界はすっかり漆黒の世界に慣れ、暗闇の動く様子まで見て取れるようになっていた。

闇は蠢動するのだ。何百何千の蟲が這いずり回っているように。途絶えることなくそれらは溢れ返り、大気を蝕んでいく。

虚しい抵抗にも疲れ静寂に深く馴染んだ体や目も、闇の触手に侵食されていくような気がした。いやもう始まっているのかもしれない。このまま二度と光に出会えず、じきに生きている心地さえしなくなるのだ

膝の間に顔を埋めて阿樽は固く目を閉じた。常時の己ならば浮かぶはずもない脆弱な考えだった。

兄上は……無事なのか。

確かめられないもどかしさが増していく。

何も、何もわからない。

その後ここを訪れたのは食事とはいえない粗末なものを運んできた兵士だけだ。だが問い掛ける間もなく腕を放り込んで兵士は去っていった。

列氏の立ち去った後、格子を破ろうと足掻いたが空手ではなす術はなかった。この手だけでは、この声だけでは無力でしかないこと

を阿樽は知った。

誇りも、強さも、権威も、己だけに天与された特別なものだと思  
っていた。容易く奪われるはずのないものだ。

だが今己の手には何がある？

目の前には何がある？

空は、無だ。

闇は、無だ。

常時傍にいる兄や家臣らは今はいない。燭台の灯りさえ傍にはな  
い。

孤独、というものを阿樽は初めて知った。

何百という賊の首を狩り、返り血を浴びても恐ろしいと思ったこ  
とはなかった。使命感に燃え、その熱が絶えることはなかった。

だがうずみ火さえ、今は見つからない。

煤と化し、飛び散ってしまった空の火床のように冷えきっていた。

どうすればいい。

こうして切齒扼腕している間にも、状況は深刻化していく。

祖は西嶮を利用して覇権を取り戻すつもりなのだ。統、愼麟の関  
門を襲撃し、二国に離反したと見せかけて

二国は歴史ある大国だ。そう容易く侵攻を許すことはないだろう。  
だが不測の奇襲に即応出来る兵力がどれほどあるものか。

ましてや西嶮の軍が完全に掌握されれば、祖は莫大な兵数を持つ  
ことになる。間に合わせの軍備では戦力は伯仲とはいかぬだろう。

だが、一度嚆矢こしが放たればもう戦いを止める手立てはない。

戦が始まる。

秩序は瓦解し、三国の王たちが築き上げてきた平穩は瓦礫の下敷  
きと成り果てる。

それこそ、阿搏のたった二本の腕ではどうにもならなくなるのだ。絶望に圧されるように、阿搏は体を抱え込んだ。

劉閃……黎青……。

二人のかけがえのない友の顔が浮かんでは過ぎていく。きつと救い出してくれる、などと願うのは愚考であろうか。

『 信じる 』

急に生前の父の言葉が耳の奥を掠めた。

『我々三国を繋ぐ絆は血よりも濃く、この命よりも永遠なる堅い契りだ。忘れるな、互いを信じることを さすればお前が困難に陥った時、この約束が必ずや救いとなってくれるだろう』

こんな風に都合よく思い出したのは、すがりつく希望を求めているからだろうか。

絆は永遠に受け継がれていくものだと言った。お前たちの中に息づいていくものだ。

だから信じて待てと？

強く望んでいるが、あさはかな夢に思えた。

目の前にあるものこそ、真実ではないか。

彼らもそれを信じて措置をとるだろう。

誰がその裏にある陰謀に気付くというのか。

永久に切れぬ糸など、本当にあるのだろうか。

どんなにきつく結んだ紐帯とて、いつかは解けてしまう。

見えぬものを信じるのは、足元の見えぬ闇の中を歩くようなものだ。

だが、今の阿樽には他にすがれるものはなかった。どんなに細く脆弱な糸だとしても、他に思い浮かべられる顔などなかった。

願いは一つだけ。  
たった一つだけ。

引き合う絆が生きているのなら、どうか応えてくれ。  
請えというなら、膝について祈ったっていい。

「兄上……」  
救いたいと切望するのは己の命ではない。失いたくないと願うのは、栄光や権威ではない。

この世にたった一人のかけがえのない家族。  
母を亡くし、父を亡くし、二人きりになったあの日。あの日、阿樽の中に固い決意が生まれたのだ。

兄を支え、守ることに身命を捧げると。  
淡雪のように繊細で儂く、春の芽吹きのように柔らかで温かい笑顔を守るのだと

気を確かに持て。

憔悴しかけている己を戒めるように、阿樽は体を抱え込む両腕に力を込めた。

考える。考え尽くせ。

体中に張り巡る神経やあらゆる機能を酷使してでも、ここから抜け出す方法を

目を閉じて意識を集中させようとしたその時だった。

「……！」

針で突かれたように阿樽ははっと両目を開けた。

何か、物音がした。

伏せていた面をふっと浮かせる。

カタン……カサ……

顔を跳ね上げ、阿樽は周囲に首を巡らせた。

「誰か……いるのか？」

深々と降るような静寂に向かつて、阿樽は問い掛けた。

「瑚蝶様、兼聞様がお見えになりました」

桔久が梓宮お抱えの漢人<sup>あやひと</sup>、兼聞の来訪を知らせにきたのは、劉王が部隊を率いて出立してから漸く半日たとうかという頃だった。

居房の窓辺に寄り添い春の盛りを見せる風光明媚な内苑を眺めていた瑚蝶は、侍女の声に房の入り口へと首を巡らせた。

「まあ、兼聞様。いらせられませ」

お茶を淹れて来ます、と立ち去った桔久と入れ替わりに戸口に姿を見せた老翁の姿に、瑚蝶は卓子から立ち上がった。

「ご機嫌麗しゅうございます、瑚蝶様。上質の綾が入りました故、ご献上させて頂きたく、ご尊顔拝しに参りました」

ゆつたりとした所作で跪座し、兼聞は瑚蝶に深々と拝礼した。

「兼聞様、そのように畏らず……どうかいつも通りに接してくださいませ」

あまりに慇懃な挨拶に蝴蝶が戸惑いを見せると、豊かな銀髯を携えた仙人のような風情の男はにこやかに面を上げた。

「そうはいきませぬ、未来の皇后陛下の御前でございます故。

ほほ、これは深朱がなんとお似合いになることか。統の貴色は“永代の旭陽”を意味する尊き紅にございます。皇帝の栄華と光輝を称える英雄色も、蝴蝶様が纏うと優しく温かなお色味になりますな」

深い朱色を貴重とした蝴蝶の衣を見て、兼聞が喜色を浮かべて頷く。溫柔な人柄がにじみ出たその表情に、蝴蝶の気持ちもやんわりと和んだ。

「はてさて、珠玉よりも美しい正妃様にお気に召して頂ける逸品があるかはわかりませぬが――まずはお目通りをお許し願えますかな」兼聞の合図に従って、背後から蓋つきの籐籠を抱えた少年が進み出た。窓辺近くの円卓に運ばせると、兼聞がその蓋を取った。

「いかがでしょうか」

春花を映したかのような、ふんわりと優しい色彩の波が蝴蝶の視界に溢れた。

「なんて綺麗な色……。兼聞様の綾布はいつも、桃源郷にいるような心地にさせてくれますわね。見ているだけで幸せになるような」

「ありがとうございます。最上の褒め言葉にございます」

感嘆の溜め息を零した蝴蝶に、兼聞が頭を垂れた。

「蝴蝶様の為に誂えたものにございます。どうぞお手にとって出来る程をお確かめくださいませ」

明けの明星が残る頃の、幽明の入り混じる空に似た青紫の薄布を、蝴蝶はそつと掬い上げた。ふわりと肩に回しかけ、その感触を確かめる。幼子の肌のような滑らかな触り心地がしっくりと手に馴染んでいく。

「柔らかくて、風に抱かれていますみたい。とっても気に入りましたわ。ありがとうございます、兼聞様。――それとも陛下に言うべきかしら」

兼聞が白眉に隠れそうな小さな目をわずかに瞋る。だがすぐに細

めて、ほほほと銀鬚を揺らした。

「ばれておりましたか。陛下からのご拜命だと。いやはや、さりげない訪問を心がけたつもりでしたが、見破られてしまいましたな」

「劉王が留守の間に兼聞様がいらっしやることは今まで一度もありませんでしたもの。それに、あの方のお考えが近頃よくわかるんです」

まるで内証の悪戯を見つけたように楽しくなって、瑚蝶はくすりと笑った。兼聞に椅子を勧め、自らも再び腰を下ろした。

「少しでもお気が紛れるようにとのご配慮でございますよう」

「でも出立からやつと半日というところですよ。もう私が寂しさを持て余しているとも思ったのかしら」

自惚れてるわ、と続けようとして瑚蝶はちりり、と走ったわずかな胸の痛みに気付いた。

「ほほほ、陛下は瑚蝶様のことばかりで仕方がないのでございますよ。ましてやご自分が留守となれば、杞憂が晴れぬのでしよう。五日に一度お伺いするようにと仰せつかっております」

「まあ、呆れた」

そんな素振りは一向に見せぬくせに。まるで子離れ出来ない親のようだ。

瑚蝶はくすくすと笑った。だが同時に泣きたいような気持ちが募ってきて、慌てて押し伏せた。

「殿方は」

薄布を巻いた肩から腕にかけて、瑚蝶はゆっくりと指を滑らせた。

「美しいものを与えておけば、女は満足だと思っただらっしゃるのかしら」

指の動きに合わせて視線を下げる。籐籠の中の、煌びやかに染めた薄雲のような綾が目映った。

「側にいたくとも居れない時の手立てでございますな。何時だって

愛する者のことは気がかり故……何か慰めを考えずにはいられない  
のでしよう。せめてご自分の思いを置いていかれたいのですよ」

「……物などでは間に合わないこともあるのに」

おのずと唇から零れ落ちた言葉に、瑚蝶ははっとして顔を上げた。  
言わずに過ごそうと思つたことを、うつかり口走つてしまったのだ。  
「いえ、兼閨様のご来訪はとても嬉しいのです。こうして美しい綾  
を頂けるのも……」

「わかつておりますよ。陛下がお傍にすることが何よりでございます  
しよう。私めの綾など足元にも及ばぬ、至高の贈り物ですな」

「け、兼閨様」

茶目つ氣たつぷりに片目を瞑つて見せた老士に、氣恥ずかしくな  
つて瑚蝶は俯いた。

「こうしてお心を割いて頂けるだけで、感謝しなければなら  
ないのです……私が今生きていられるのは、あの方のおかげなのですから  
でもそれすらまだ満足に伝えられていない。……我儘を言える立場  
ではありません……でも」

思いのこもつた贈り物は心を満たしてくれる。だが、それも一時  
だ。

増えれば増えるほど、待つ時間の長さを思い知るようになるだ  
らう。

王に愛された者だけに与えられる風雅な宮の佳景も、慰めになら  
なくなるだろう。

この身をいかに華やかに着飾ろうと、心に衣はかけられぬ。時間  
がたつほどに募りゆく恋しさは誤魔化せない。

氣丈であれと自分に言い聞かせるたびに、身が細っていくような  
気がした。刻々と過ぎてゆく時間に切り刻まれていくように。

「やはり求めてしまう私は……我儘なのでしょうね」

本当に、いつからこんなに弱くなったのだろう。

愛する気持ちが増えていくほどに、苦しくなる。  
あの時思わず言ってしまったそうだった。

簪ではなく、私を連れて行って・・・と。

「別離も天の采配とお思いなされ」

穏やかな兼聞の声が瑚蝶を離愁から引き戻す。

「遠く離れて想いあうことも、お二人の絆を深める偉大な時間となるでしょう。お二人の絆は、統の未来を担うもの。そして他の者たちにとって希望の光なのです。まだ若い二つの心が固く結ばれ、揺るがされることがないようにと天が取り計らったことに違いありません。どんな艱難にあっても、乗り越えられるようにと」  
にっこりと兼聞は微笑んだ。

「そのような沈んだ顔をなさいますな。三年もかけてやっと引き寄せた瑚蝶様のお心を、陛下がお離しになるはずがありません。お父君に似て、陛下も一途なお方でございますから」

瑚蝶は驚いて目の前の見目柔らかな老夫を見た。求めていた物が目の前に差し出されたような気分だった。

城に上がるのは数えても年に数回あるかないかだというのに、兼聞はいつたいどこまで知っているというのだろう。先帝の代より知遇されているという理由は、もしかしたら綾織りの腕だけではないのかもしれない。

だが人選は間違っではない。

今はこうして 励ましてくれる者が、瑚蝶には必要だった。

「ありがとうございます、兼聞様」

どこにいても繋がっている。それを信じよう。

それがまず出来なければ、何も始まらない。

「お茶をお持ちしましたよ。わあ、また今日は一段と素敵で

すねっ！ 窓から見える景色を染めたみたい！」

茶器を持った桔久が弾んだ足取りで入ってきた。ぱっと大きく輝いた目に、瑚蝶と兼聞は顔を見合わせて目笑した。

窓から忍び込んだ飛花が、籠の綾の上にふわりと舞い降りた。

## 【参拾】 宣告

「……どうしてここにいてはいけないの？ あたし、行きたくない」

微風に揺れる浅黄色の花園で、黎青の袍の袖を握り締めて幼い少女は頑なに何度も頭を横に振った。

薄黄色の小さな花で作られた花冠が、花びらを零して少女の髪を離れた。

地に膝をついてそれをそつと拾い上げると、黎青は自分とよく似た面差しの少女の顔を苦笑しながら覗き込んだ。

「我儘を言ってはいけないよ、珪香。母様や姉様たちも一緒だし、ほんの少しの辛抱だから」

母親譲りである絹糸のような白銀色の髪を撫でながらやんわりと宥めるが、十歳になったばかりの末姫はついに泪粒を大きな薄青色の瞳からぼろぼろと零した。

「いやよ、離れのお城は寂しいもの。それに父様と兄様が一緒じゃなくちゃいやいやいや！」

花冠を頭に載せようとした途端、わつと火のついたように珪香が泣き出した。突然庭院に響いた鳴き声に慌てて駆け寄ろうとした侍女に首を横に振って見せ、黎青は幼い体を腕の中に引き寄せた。

「よしよし、どうしたんだ？ いつもはごねたりしないじゃないか。僕と父上は遅れるだけだ、いつものことだろう。用が済んだらすぐに行くよ。それまでタリムや楊鈴と一緒に遊んでくれる」

お気に入りの従者や今も後ろに控えている侍女の名を挙げるも、黎青の肩に顔を埋めて珪香はいいやいやと首を振り続ける。

「兄様を困らせないでおくれ。ほんの少しの間だよ」

今度は首にしがみつきわんわんと泣く妹の背を、黎青は困惑気味にさする。為政が絡むと父王よりも能弁で上手と言われる黎青も、無垢で愛らしい妹姫のことになると忽ち要領を忘れてしまうのだっ

た。

『城の女たちを暫く離宮へ移す』

そう取り決めたのは父である愼麟皇帝・牙王<sup>がおう</sup>だ。そして「理由を適当につけて妹たちを説き伏せる」と命じたのも。

上の二人の妹たちには先に話をつけた。幼い珪香が同じように聞き分けてくれぬことはわかっていたが、なんとか説き伏せなければならなかった。

「天風<sup>てんかせ</sup>が吹く時期はいつも離宮に行くだろう？ 今年は少し早いけれど、占師が予兆があったと言うんだ。急がないと、どこか知らない場所に連れ去られてしまうよ。天風は子供を攫うのが大好きなんだ。特に泣き虫の女の子がね。大きな声で泣いていると、聞こえてしまうかもしれない」

終わりの方は声をひそめて、不吉さを漂わせながら黎青は言った。天風とは春の終わりに草原に吹き荒れる旋風のこと、時折竜巻のような破壊力を伴い嵐を引き起こす。愼麟の王都キタイの周辺は丘陵に囲まれているが、その向うには広大な平原が広がっている。そこで生まれた天風は時折王都に被害をもらたすこともあり、そのため時期になると、都や周辺部の民たちは一時的に被害の及ばぬ場所に避難することがあった。王族にとってはそれが風光明媚な璃山<sup>りさん</sup>の麓にある離宮であった。

それを聞いた途端、群れ咲く黄花を揺らそうかというほど大きかった珪香の泣き声が急に弱まった。

「それに母様に聞こえてしまったら、大好きな花蜜飴ももらえなくなってしまうよ。いいのかい？」

しゃくりあげていた肩がぴたりと動きを止めた。

「……泣いてないわ」

涙を溜めた赤い目で、珪香が顔を上げた。泣くのを堪えているせいで、木の実を食べる栗鼠<sup>りす</sup>のように頬を膨らませて唇を引き結んで

いる。

時折隊商が持ち込む紫雲英の蜜飴は珪香の好物だ。三度の食事よりも欲しがる菓子を口に出来なくなつては大変と思つたのだらう。

「よし、いい子だ」

花蜜飴の絶大な効果に黎青は笑つた。

「……でも約束して？」

上目遣いになり、珪香が黎青の髪を一房取つて軽く引いた。

何を訴えているのか黎青はすぐに気付いた。髪を引かれるまま顔を近づけ、こつんと額を合わせる。

「すぐ来てくれるつて。一緒に果樹園をお散歩して。花梨のお花も咲くのよ」

「……いいよ」

「本当に約束よ。兄様が天風にさらわれたらいやなもの」

「わかつた。約束するよ」

互いの体温を重ね合わせたまま、目を閉じる。それは母が子供たちに教えてくれた呪い<sup>まじな</sup>だった。約束を交わす時、叱る時、慰める時、謝る時、こうして互いの額を合わせ祈るように目を閉じる。すると不思議なほど気持ち<sup>まじな</sup>が和らいでいくのだ。

「本当ね？ やぶつたら、おしおきよ」

微かな花の香りが鼻先を撫でた。母に似せた澄ました声音を残して、小さなぬくもりが離れた。

黎青はそつと瞼を開けた。

侍女の元へ走り寄り、珪香が振り向いた。

侍女と手を繋ぎ小さな手を振る姿に黎青も同じように手を振り返して、花園の向うへ消えていくのを見送つた。

「天風と蜜飴、ねえ……」

ふいに背後から聞こえたにやついた声に、黎青は表情を強張らせた。

「お前も、すっかりいい兄貴になってきたなあ、黎青？」

瞬時に振り向き、斜め上を見上げる。

中庭を一望出来るよう、振り仰いで見上げる位置に張り巡らされた回廊の欄干に、男が一人腰掛けていた。

褐色の肌に、逞しい体躯。伸びた口髭に洗いざらしのようなぼさぼさの黒髪。清潔とは間違っても言えぬ、下手をすれば野盗か壠族と見紛ういでたちに、急に頭痛を覚えて黎青はこめかみを押さえた。

「……父上……いつからそこに？」

黒い髭の間から、と齒を覗かせると、「よっ」と一声上げて男は黎青の頭上を走る回廊から飛び降りた。殆ど音もなく、男は優雅ともとれる端然とした動作で静かに着地した。

「レンキに閨房ねむらを追い出されてな」

速やかに背筋を張って立ち上がり、男はがしがしと後頭部を掻いた。ついでに大あくびをして呑気に伸びなど始めたその放埒さに、黎青は嘆息した。

「……当たり前ですよ」

己よりも頭一つ分高い場所にある壮年の男  
愾麟皇帝・牙王きりん がおうの

顔を、黎青はうんざりと見上げた。

「蝶よ華よと育てられた深窓の姫君である母上の前にそんな格好で現れたら、閉めだされるに決まっているでしょう。もう少し立場をわきまえて下さい。朝っぱらからまたどこへ行っていたのです？」

装いも、素行も。

四十も半ばに差し掛かったというのに若々しい精彩に満ちた実父を、ひんやりとした目然で黎青は眺め下ろした。

身につけている袖なしの短衣は、まるで野良仕事を終えた農夫の

ように泥まみれだ。よく見れば、顔や髪にも乾いた土がこびりついている。

一体どこをほつつき歩いて来たのか。

身綺麗にすればそれなりに精悍な面貌であり迫のある風体なのが、本人はまるで見かけのことに無関心なのであった。

「お前、細君レンキにますます似てきたなあ……顔だけじゃなく言動も。

いや、数里先の村落で争いがあつてな。ついでに牛も暴れ出す始末で、その収拾に」

「わざわざ国王自ら出向いたと？ 集落の揉め事の采配は部長に任せるべきだと、何度も申し上げたはずでしょう、父上。我が国ではそれが掟の一つです」

多数の部族や遊牧民族が混在する懐麟では、集落間の争いが絶え間ない。その為、古代草原の有力者である長たちと王は“掟”を定めた。それは今日でも草原に生きる者たちの暗黙の法として重んじられている。部族間の紛争は部族同士で解決することなど、基本中の基本事項だ。この国の者ならば誰もが知っている常識である。

「俺が手を貸したのは牛の一件だけだぞ」

掟は破っていない、と牙王が拗ねた子供のように口を曲げる。遮るように、黎青は咳払いを一つした。

「ともかく！ こんな時に玉座を空けるような真似はしないでください。数刻だとしてもです。わかっているんですか？ 間もなく劉閃が……統王が到着するのです」

「迎える準備は万端だろ。レンキが献立だの寝間の支度だのあれこれ指示してたぞ」

「劉閃は物見遊山に来るものではありません！」

微妙に噛み合わない会話に苛立ちが弾け、黎青は語調を荒げた。

だが気色ばんだ息子の様子にもまるで動じず、牙王は眠たそうに無精髭をさすった。

「そうせかせかするなよ。落ち着けて」

「落ち着け？ いつ戦が始まるとも知れぬ状況で悠長に構えていら

れますか！」

「……戦なんて起きねえよ。ちょいと一関つつかれたからって、すぐに悪い方へ持つていくもんじゃねえ」

「なっ……！ あれは明らかかな侵略行為ですよ！ まさか見て見ぬ振りをするとでも!?」

黎青は駭然とした。

北のカハルの関が攻撃を受けたとの報せがあった時も、牙王は顔色一つ崩さなかった。侵略者が何者なのかを聞いた時も

妙だった。普段ならば自ら乗り込んで行くほどの血気盛んな偉丈夫であるのに、不気味なほど冷静だった。王としての自覚をやっと持ったのかと安堵した部分もあったのだが、無関心すぎると反感を抱きもした。

「ちゃんと鎮圧の要請は出しただろう。バイカル部は本来なら後方部隊だが、先鋒隊としても十分信頼の置ける実力がある。すぐに決着をつけちまうだろうよ。王府こうちにや被害は及ばんさ」

語尾を欠伸の中に溶かすと、牙王はじゃあ一眠りするわ、と言って黎青に背を向けた。

「お待ちください、父上！」

自室の方へ歩き出した牙王の前に回りこみ、黎青は行く手を塞いだ。

「他人事のように片付けなさい！ 何故、動揺の色もないのです……！ 相手は西嶺だというのですよ！ 彼らが我々を裏切り侵略を開始したことが事実ならば、然るべき手段をとらねばならない。わかっているのですか!?」

真面目に取り合おうとせぬ父王の態度に憤りがふつふつと増していく。追い抜けぬままになった上背の差を、黎青は挑みかけるように見上げた。

「まずは“事情”を知るのが先決だ」

だるさを纏っていた牙王の声音が一変した。強靱な鞭のように引き締まった響きだった。

「指揮官を生け捕りにしろと命じてある。拷器にかけてでも吐かせろ、とな。それまで苦言を放つのは待て」

己と似通うところのない野性的な面差しの中の、ぼんやりとしていた漆黒の目にたちまち生気が舞い戻っていく。顔付きまでも変わっていく。そう、“王の顔”に。

「……待たずとも」常時は情性の下に隠している本領を見せ始めた男を見据えたまま、黎青は腰帯に右手を当てた。

「真実は　もうここにあるのではありませんか？」

腰帯の内側に手を滑り込ませ、中に忍ばせておいたものを引き抜く。顔の横で掲げて見せれば、牙王のきりと引かれた太い眉がわずかに反応を示した。

「我が国と統、西嶺の間で同盟が締結された時、三国にはそれぞれ“盟約の証”が渡された。西嶺には正義を意味する青銅の短剣が、統には泰平を意味する赤銅の盾が、そして盟主である我が国には、均衡を意味する白銀の天秤が　これは西嶺が保有しているはずの、その短剣でしょう」

「……お前、勝手に机案を漁ったな？」

低く唸るように言っただけで、牙王はがしがしと髪の毛を掻き回した。

「申し訳ありません。けれど、王印を預け、四六時中座を空けているのはどなたです？　机案に積まれた書状の間に挟まれているのを見つけたのですよ。布に包まれて。これを見つけないければ、僕は見当違いをすることでした。　何故僕に黙っていたのですか……！」

くるりと手の内で柄を持ち直し、黎青は牙王に青銅の短剣の切っ先を向けた。

だがそこに剣先はなかった。短剣の刃は中頃ほどで折れていたのだ。

「僕に、この意味がわからないとでも？」

牙王は黙っている。問責や強諫きょうかんに遇うほど冷静さを見せつける食

えない男に折れた剣を突きつけたまま、黎青は続けた。

「剣と盾は同じ重さで作られていると聞いたことがあります。天秤が釣り合うように。けれど折れた剣を載せれば天秤は傾く。つまり、釣り合いがとれなくなる。不均衡は、秩序の乱れを意味している。……これは西嶺からの警鐘ですね？ 均衡を保てぬ事態が起きた、そのことを知らせようとしたんだ」

しかもこんな粗雑な方法をとったところからすると、猶予を許さない危局にあるのではないのか

阿搏の身が心配だった。何か嫌な予感がする。

そう感じたからこそ、黎青の気は立つ一方だった。

「これでも焦眉の問題だと、認めてはもらえないのですか？」

朝の微睡みを抜けて上昇し始めた暖気を凍らせてしまいそうなほど、黎青の声音が峻烈さを極めた。牙王が咎めるように眉頭を寄せ、口を開きかけた。

「どうか」

返答の余地を奪い取り黎青は畳み掛けた。青い狂焰を宿した双眸には、静かなる殺気が渾々と渦巻き始めていた。

「どうか僕に軍の指揮権を与えてください。大過となる前に、西嶺の門を破るのです」

「……誰か、いるのか？」

静かに蠢く漆黒の空間に向かって、阿搏は呼びかけた。

四方に目線を走らせるとともに、息を潜めて耳を澄ます。

気のせいか……？

確かに何か物音がしたような気がしたのだ。

鼠でもいるのか……

階上のかすかな音さえ届かない地下牢を騒がせるのは、自分かそれくらいだろう。

浮上しかけた期待を払い落として、阿樽は力なく自嘲の笑みを零した。

だが、かき集めた意識を放散させようとしたその時、またかすかな物音が耳に飛び込んだ。

「誰だっ」

思わず声を張り上げ、臨戦体勢をとる。  
すると反響した阿樽の怒声に答える音があった。

「だ……れ……かいるの……？」

か細い女の声だった。左手の壁の方を振り向く。くぐもって幻聴かと思うほど小さいが、確かにこちらから聞こえた。

どこから聞こえる？

ごつごつと荒い石壁を両手でまさぐっていく。やがて己の腹の高さあたりの位置にある、小さな割れ目のようなものを探り当てた。

それは片手が入るくらいの穴だった。ここに繋獄されていた者が開けたのだろうか。

覗き込もうとするが、漆黒に塞がれて隣の牢と繋がっているのはわからない。だが間違いなく声は聞こえたのだ。穴のある位置に身をかがめ、阿樽は呼びかけた。

「そこにいるのか？」

壁に耳を押し当て、返事を待つ。するとややあって、拙い応答があった。

「……は……い。あなたは……だれ……？」

繋がっている。

まさか隣の牢に同じように囚われている者がいたとは。しかもま

だ少女のようである。阿樽はもう一度穴を覗き込んだ。

「オレは……阿樽という。聞こえるか？ あんたの、名は？ 年は？」

阿樽の声に力が戻っていく。出口を示す指標の欠片を見つけたような心地だった。

「わたしは……淋茗<sup>りんめい</sup>……年は、十五……です。ここは……どこ……？」

質問を受け入れ返される小さな答えは、どこか気力に乏しく虚ろだ。今にも掻き消えてしまいそうだった。

「ここは西嶮の城の地下牢だ。いつからそこにいる？」

「……わからない……」苦しげに闇の向うで声が歪む。「ずっと……眠っていたみたいで……気付いたらここに……」  
なるほどな。

きつと阿樽がここに放り込まれる前に、薬でも盛られたのだろう。それもかなりの量を。でなければ、とつくに阿樽の起こした騒擾で目を醒ましているはずだ。

「あんたは……祖の者か？」

姿の見えない少女を求めて、阿樽は闇の穴に懸命に目をこらした。「はい。祖王の……側におりました……けれど、望んだわけではありません。母の言うままに……でも、もういやになって……」

「逃げ出そうとして捕らえられた？」

「……はい……」

「祖王と一緒に来ているのか？」

「……わかり、ません……でも、おそらく……」

「あんたは」

続けようとして、阿樽はそこで言葉を切った。震える小さな声が、すすり泣きに変わったのに気付いた。

「なぜ……こんな、恐ろしいことに……わたし……わたしも、死ぬの……？」

静寂にぼつぼつと染み出してきた哀咽に、阿樽は壁についていた

手をぐつと握り締めた。

「この子は何も知らない……。」

かすかに見えかけた光が薄れていく。だが、手繰り寄せたこの細い糸を手放してはいけない気がした。

「大丈夫だ、これ以上……犠牲を出させやしない。戦いなど、起こさせやしない」

一言ずつ噛み締めながら阿搏は言った。手放しかけた意力をもう一度体内にかき集める。

「あなたは……いったい、だれなの……？」

涙声で少女が問う。

「……誰でもない」今の己に相応しい言葉を阿搏は選んだ。

「何もかも失つて、今ここにいる。だから何者でもない。だがこの国を……大切なものを守るために、戦うつもりだ」

「どうやって……？ 誰も……助けにこないわきつと」

「何か方法があるはずだ。なあ、この穴に腕が通るか」

「……え？」

阿搏は己の右腕を穴の中に差し込んだ。腕の中頃まではなんとか入る。だがそれ以上は無理そうだった。

「声が聞こえるってことは繋がってるんだ。もしかしたら届くかもしれない。そうだ、あんた簪か何かつけてるか？」

「あ……はい、真鍮のを……」

「それをオレに渡してくれ。大丈夫だ、オレは祖王よりはマシなやつだから。あんたをそこから必ず助けてやる」

一度腕を抜き、力強く言って返事を待つ。

躊躇しているのか少女の応答はない。だが、少しして慎重な息遣いが聞こえた。

「腕は……通るみたい……これで、いいのですか？」

「よし、出来るだけ奥まで伸ばしてくれ」

そう告げて、阿搏は穴に腕を進めた。だがざらざらした岩肌の他に指先には何の感触も当たらない。やはり肘の辺りまでしか穴には

入らなかった。

「ち、これ以上通らねえ……仕方ない、いちかばちかだ。簀を奥に向かって投げてくれ。出来る限り強く」

「は、はい……っ」

かしちゃん、という小さな金属音がした。もう一度腕を差し入れる。すると、中指の先に岩肌とは違う、細く尖った感触があった。

「く……っ」

足を踏ん張り、腕を押し込む。指先を伸ばしその先端を、阿搏は懸命に手繰り寄せた。

やった……！

手の中に太い針金のような無機質な感触。だがその刹那、石室に低い落雷のような重低音が響いた。

扉の音だ。

簀を掴んだ手を阿搏は穴から引き抜いた。沓音が階段を降りてくる。意識のないふりをして……！

少女に向かって声量を落として口早に言い、阿搏は腰帯に簀を差し込んだ。そしてもとい壁際に戻って蹲る。階段を降りきった足音が近付いてくる。床や天井に反響して徐々に大きく高くなるにつれ、人数は二人だと推測出来た。

好機、到来か……？

石壁に完全に背を這わせて隙間を詰め、阿搏は暗黒に浮かぶ鉄格子のかすかな輪郭を見据えた。

硬質な歩行音とともに、暗闇を押し分けてぼんやりとした明りが

近付いてくる。照らされた頑強な鉄柵に沿って視線を上げていけば、半ばほどのところで二本の松明の炎と行き合った。

眩しさに阿樽は目を細めた。黒い甲冑を着た二人の兵士が格子の向うに並ぶ。

「出る」

兵士の一人が阿樽に向かって言い放った。

錠の外れる音がして、格子戸が錆びついた鳴き声を上げて開いた。

「将軍がお呼びだ。これから広間で、国王の処刑が執り行われる」

【参拾】 宣 告（後書き）

いつも遅くなつて本当に申し訳ありません。

スローペースが続いてますが、途中で投げ出したりはしませんので引き続きよろしくお願い致します

【参拾巻】 再会（前書き）

再開が大幅に遅れまして本当に申し訳ありませんでした！  
また頑張りますので、宜しくお願いいたします！

【参拾巻】 再会

風の色が変わった。

切れ切れの雲が蒼穹を駆けていく。

さつきまで晴れていたのに。

淀み始めた空を蝴蝶は見上げた。

陽春の麗らかさを奪い取るように日は翳り、重い雲が立ち込めていく。瞬く間に辺りは鉛色の薄闇の中に沈んだ。

「……雨になるのかしら」

春の天気は変わりやすい。

不穩に移ろう運命のように。不安に彷徨う心で出来ているように。天の機嫌が悪化しないうちにと、蝴蝶は足を速めた。

梓宮しきみやうの東内朝は、普段は人の出入りのない閑散とした場所である。そこにあるのは紅紫宮のような壮麗な宮殿ではない。歴代の皇帝を祀る、大廟たいひやうと呼ばれる王墓である。

大廟まで続く林道を蝴蝶は一人歩いていた。

鬱蒼と広がる樹林は王宮の一角であるということを忘れさせるほどに奥行き深い。陽光は厚い雲に遮られ、ざわめきのない森閑とした空気が厳粛な重みをまとっていた。

大廟に足を踏み入れるのは初めてのことだった。

今までならばきつと、近づいただけで門番に櫛を突きたてられていたに違いない。神と崇められる天子が眠る墓は、近親である王族以外は立ち入れない神聖な区域であるからだ。

『城の中を自由に歩きまわれるようにしておいた。退屈せぬようにな』

出発の前の晩、劉王は瑚蝶にそう言った。どういうことかは深く追求しなかったが、その言葉は本当だった。

瑚蝶が姿を示しただけで、東内朝の門は当然のように開かれた。主を迎え入れるかのように、易々と。

受け入れられた気がした。

今まで心が通うことはないと思っていたこの梓宮に。大きく開かれた門の先に続く緑樹に守られた白砂の道を見て、瑚蝶ははつきりと今の己の存在を意識した。

緑匂い立つ樹冠の下をくぐり抜けると、視界が開け広大な空間に出た。

そこは緑芝の上に玉石の道と小川が流れる美しい庭院だった。

立ち並ぶ白亜の石堂を囲んで幾筋もの水路は引かれており、それらは中央に向かって流れている。懐に導くように清流を集めて佇むのは、一際大きな霊廟だ。

白い道は中央の廟へと続いている。歩調を崩さず、ゆっくりと瑚蝶は歩みを進めた。

石棺のある台座に上がる階段の前で、瑚蝶は跪き霊廟を見上げた。

「ここが、劉王のお父君の……。」

白き殿堂の臥床で眠るのは、劉晋清輝りゅうしんせいき 諡号は昇公しょうこう。統の泰平の基盤を築き上げ、今も賢君と慕われる劉王の父親である。

お会いすることは出来なかった。

昇公が崩御したのは瑚蝶が梓宮に来て間もなくだった。

盛大な葬儀が執り行われ、多くの者たちが先帝の早逝を惜しんだ。だが瑚蝶にはどうでもいいことだった。己の身を切り裂かれるような悲しみの方が英君の死よりも勝っていたからだ。

すべてを失い、絶望の中で何も見えなかった。周りにあるものすべてを憎んだ。何も知らずに

「今さら……。」

しやらり、と金の耳飾りを揺らして、瑚蝶は頭を垂れた。

「お目にかかれるような立場ではないことはわかっています。けれど……どうしてもお会いしたくて」

胸の前で瑚蝶は両手を組み合わせた。

「どうか、あの方を守ってくださいませ。無事に……戻ってこられるよう」

閑寂の中に身を浸し、祈りを捧げる。

さらさらと穏やかに流れる水音を引き込んで心を静謐に保ち、瑚蝶は面を上げた。

「不思議にお思いでしょう、私がここへ来たことを」

この場所へ足を踏み入れるには決心が必要だった。こうして膝を折り、

「お許しを、いただきたくて。陛下の　大切な御子のお側にいるために」

清らかで透明な小川に彷徨い行く雲影が映る。梢がさやさやと囁き合うようにそよぐ。

「……私は愚かでした」

返事はないと知りながら、白い石棺に向かって瑚蝶は胸懐を開き始める。

「あのお方がたった一人で抱えてきた苦しみに気づいてあげることが出来なかった。それどころか、罪のないあの方を憎み、責め、傷つけてばかりいたのです。……私を守るために真実を胸に隠し、黙って受け止めてくれていた優しさを傲慢だと思い込み　三年もあの方のお側にいて、何も見えていなかったのです」

切なさがせり上がる。組み合わせた両手の指に、瑚蝶はぐっと力をこめた。

「……あの方は私に命をくださいました。本当ならとっくに果てていたかもしれない命を。今度は私がお返しする番でございます。どうか　どうか私に劉王を守らせてください。あの方の傍らでともに生き、支えとなることをお許してください」

悔いることよりも、これからを見つめたい。

亡国の姫君ではなく、抜け殻だったこれまでの己ではなく、劉王の妻として、彼を愛する者として生きたい。それが今の自分に出るること。

「感謝しております、陛下……父の志を認めてくださったこと、そして劉王に巡り逢わせてくださったこと。何よりの私の宝でございます」

どうかお見守り下さい。

願いと決意をこめて瞑目する。そうして暫く跪いたまま、瑚蝶は黙祷を捧げた。

だが次第に変化し始めた大気の様子を感じ取って、空に目を向ける。

荒れそうだわ……。

雲脚が速い。緑陰を渡る風が唸り出す。

不穏な気配を孕む空模様、瑚蝶は引き返そうと立ち上がった。

「瑚蝶」

背後からの呼び声に、両肩が跳ね上がった。

後ろに流れた長い黒髪を追うように振り返る。白砂の長い道の始まりに、一人の青年が佇んでいた。

「……邦昌……？」

驚駭で声が掠れた。

青年の髪を結わえる綾紐の先端が風に舞う。かつては鮮やかな朱であったそれは今は漆黒に変わっていた。

「無事だったのね……！」

駆け寄ろうとした瑚蝶から、邦昌が目を逸らす。拒絶を示すその拳動に、瑚蝶は歩を止めた。

「邦昌……。あなた、いったいどこにいたの？」

もどかしい距離を挟んだまま、瑚蝶は疑問を口に出す。

俯いたまま、邦昌は腹の辺りを押さえた。

「……お前が気にすることじゃないさ」

ぼつり、と邦昌が呟く。力のないその響きに、瑚蝶は未だ劉王の与えた傷が癒えきっていないことを悟る。

「……まだ完治していないのね。辛そうだわ」

そう案じた瑚蝶に、邦昌はフツと嘲りを零す。

「なぜ気に掛ける？ オレはお前を 皇帝を裏切った大逆者だぞ」

「……ではなぜここに？ 断罪されるために来たのではないのですよう？」

その問いに、邦昌の頭が浮き上がる。

青白くやつれかかった顔には、疲弊の色と失意の影が色濃く映っていた。

「お前を連れていくためだ、瑚蝶。それがオレの……使命なんだ」

白い道の上から廟園の青芝へと邦昌が踏み入る。

「朱麗に命じられたのね」

一歩引きたい衝動を抑えて、瑚蝶は両足を踏みとどめた。

「私を連れ出して……それでどうなるというの？ 争いを誘うような愚劣な行いを続けて何になるの？」

「あの女の目的はいつだって一つ、私利のためだけだ。お前を祖王に献上すれば、さらなる増益に繋がると思っている。それにお前は統王の後になる身だ。政治的にも利用価値は高い。皇帝の急所とも言えるからな」

「冗談じゃないわ。私はここを動かさない。醜悪な利己心のためなどに利用されたりしない……！」

劉王が帰ってくるまで。

たった一人で出来ることなどたかが知れている。だから一つだけでもいい せめて一つだけでも貫くのだ。そのためにこの場所に

来たのだから。

大地との繋がりをさらに強めるように、瑚蝶は踏み下ろしている両足に力を込めた。

「あの方が戻るのをここで待つと決めたの。それが私の使命だわ」  
迷いのない気持ち突きつけるように、毅然と邦昌を見据えて言い放つ。強い言葉は力となる。気持ちが真つ直ぐ先に伸びていくような気がした。

「待つだけ無駄だと言ったら？」

邦昌が卑屈に口元を歪めた。

「……なんですって？」

「間もなく戦が始まる。もう一度覇権を手にするために、祖が宣戦布告する」

風の向きが唐突に変わる。

激しくなぶられ、枝葉が狂い踊るように騒ぐ。まるで邦昌の言葉に恐慄したかのように。

「どういう……こと？」正面から吹きつけた一陣に従って、瑚蝶の髪が後ろになびいた。

「三国へ戦いを挑むというの？ そんな無謀な」

「……三国ならな。西崙は祖の手の内にある」

「え？」

「すでに城は陥ちた。内応者の手引きによって西崙軍は買収されたんだ。間もなく国王の処刑をもって、祖王が支配権を掌握する。そうなれば祖は莫大な勢力を有することになる。二国を相手に戦端を開くことも可能 大陸全土を巻き込む大戦に発展するだろう」

西崙が、攻め落とされた？

衝撃的な通告に瑚蝶は愕然とした。

西崙に向かうと、劉王はそう言った。阿搏あくれに会いにいくと。

突然の出立、騒然とし始めた城内、瑚蝶の脳裏でばらばらだった

無数の破片が引き合い始める。

「異変を察知して劉王は西嶮へ…………？」

劉王は阿樽の身を案じているようだった。

城が祖軍に占拠されたとなれば、国王や皇太子である阿樽は囚われた可能性が高い。無二の友の危機を知り、劉王は軍を動かす決意をしたのではないか。

帰還の時期を濁したのも、戦を予期したからではないのか

劉王。

愛しいその面影が遠のいていくような気がして、瑚蝶ははっと目を睜った。

「西嶮の変事を二国はまだ明確には把握していない。漠然とした不審感は抱いているだろうがな。だがそれこそ、祖の思惑通りというわけだ」

邦昌の洞穴のような黒い双眸に暗い影がゆらいだ。

「…………阿樽様は無事なの？ 祖は何を企んでいるというの」

「今のところはな。皇太子の存在は脅威ではあるが、走狗としても万一時の切り札としても活用性はある。そうすぐには殺さないだろうよ。…………だが祖の目的は無血征服じゃない。望んでいるのは血を血で洗う争乱 祖王にとって戦は感興をそそる遊戯の一つなんだ」  
殺戮と破壊、かつて祖は暴虐さを振りかざし大陸の覇者として君臨した。降伏や和平には応じず、無理無体な武力行使で次々に小国を撃ち滅ぼし多くの命を奪った。

その無慈悲な席卷は大陸に今だ癒えきらぬ多くの傷跡を与えた。ようやく安寧によって塞がりかけた恐怖の記憶を再び呼び起こそうというのか。

「戦が遊戯ですって？ 狂ってる…………！ 殺し合いが起きるのよ！  
それが常理だと？」

「争いは自然な成り行きだ。いつの世も人は奪い奪われ生きてきた。

それがあるがままのこの世の姿だ。否定出来るのか、瑚蝶。お前の故郷も、この国も、そうして成立ってきた。お前の陛下だって殺し合いの道具を持つてる。誰だって一歩間違えば殺戮者なんだよ」

「劉王は無駄な血を流すことなど選ばない！ 滅ぼしあうことよりも民を守り平和を維持する方法をお考えになるわ」

「どうか」歪んだ笑みが邦昌の目元にまで広がる。

「何かを守るためには戦わねばならない。その対象が多ければ多いほど、守りきるための堅塁を築く力を示せなければならない。この動乱の時代、無力なものは滅びるのみ。力ある者だけが生き残るんだ。剣をとる者たちは皆それを知っている。お前がここで何を嘆こうが、統も愾麟も決断せざるを得なくなるはずだ」

「……そんなのわからないわ。知ったようなことを言わないで」

「知ってるから言ってるのさ。 教えてやるよ」

「皆さんで生気をなくした目が瑚蝶を見つめる。まるで見知らぬ人間と対峙しているようであった。」

「祖王の狙いは三国の間に亀裂を入れることだ。そのためにまず西嶮を狙った」

どうしてだと思う？と邦昌が誘いかける。

悪質めいた問いに、血の気が奪われていくのを瑚蝶は感じた。

「……玉座を奪い、西嶮軍を掌握するため……その兵力を利用する気なのね……！」

西嶮はかつて大陸一の軍事大国であった。三国同盟締結後縮小されたとはいえ、戦備に優れるその軍力を取り込めば、攻撃を仕掛けるのは容易になる。覇権を失ったとはいえ祖が今だ城一つ落とせる兵力を保持しているのなら。そこに西嶮軍が加われば二国に対し伯仲の勢力となりかねない。

「そう、勘がいいな。手始めに祖王は統と愾麟の辺境関を襲撃させた。自軍に西嶮兵を装わせ、火種を作るために」

なんてこと……！

喉の奥で詰まりそうになった呼吸を瑚蝶はなんとか押し出した。

「強固な結び目を解こうとしても簡単にはいかない。ならばじりじりと炙って焦がしきろうってわけだ。牙鳳城で何が起きていようと悟られねば理由などいくらでもつけられる。謀反気を疑わせ二国を扇動し、西嶮皇帝の処刑をもって秩序は消失する。気づいた頃には手遅れというわけだ」

知らせなきや。

西嶮が、阿樽の身が危険だと。

今だかつて見たことのない大禍の炎の幻影が瑚蝶の目の前に立ち昇った。

劉王に、知らせなくては………！

ふらりと体が傾ぐように前に出る。

ひとたび口火が切られれば、戦禍は防げなくなる。多くの犠牲をともなう戦乱が始まってしまふ。

「無駄だよ」

衝動的に駆け出そうとしていた瑚蝶を、邦昌の一声が押し止めた。

「国王の処刑までもう時間がない。今更早馬を放つても手遅れだ。

それにお前が動いたところで何が出来る？ 剣も持てぬお前が」

なにもないだろう。

邦昌の口元の笑みが消える。

無関心なほど冷めた言い振りに、胸が塞がりそうな苦しさを覚えて瑚蝶は叫んだ。

「どうして！？ どうして平気でいられるの、邦昌………！ 西嶮や

この国がどうなってもいいというの！？ このまま戦いが始まれば何もかもが失われてしまふのよ………！ この梓宮にいる間、あなた

はずつとどうなってもいいと、そんな残酷な気持ちでいたの!？」

「オレにはどうすることも出来ない。すでに大きな流れは動き出しているんだからな。もう止められない」

「わからないわ……! まだ決め付けないで。確かに私にはあなたや劉王のように戦う力はないわ。でも武器を操るだけが強さじゃない。何も出来ないわけじゃないわ。私にしか出来ない道の切り開き方もある」

「へえ……… いったいどうするっていうんだ?」

腰帯に差してある短剣の柄に邦昌が手を置いた。

そう、私にも出来ることがある。

それは一か八か、乾坤一擲けんこんいつてきの賭けとなる。

激しい風の揺さぶりの中で蝴蝶は真っ直ぐに邦昌を見据えた。背後に庇う石棺に心の内でそつと祈り、毅然と背筋を伸ばす。

「朱麗のところ連れて行って」

かすかに邦昌の表情が動いた。漆黒の髪の間から覗く双眸に驚きの色が映りこむ。

「……… 一緒に行くわ、あなたと」

【三拾貳】 永 訣（前書き）

またまた大変遅くなり申し訳ありません……  
久しぶりの更新、よろしくお願ひします。

【三拾貳】 永訣

「さつさと跪け！」

背中を蹴られ、阿樽は床の上に両膝をついた。

後手に縛られ連れてこられたのは、黒の戦装束に支配された謁見の間だった。

前屈みに折れた上半身を起こし、壇上を見上げる。西嶺皇帝のみに許されているはずの玉座には、この崩壊をもたらした侵略者が居座っていた。

「どうかの？ 新たな王に見えた気分は」

漂着した藻屑の塊のような黒髭の間から、祖王が口腔をのぞかせて嗤う。金色の甲冑の下で、膨れた巨腹が醜く揺れ動いた。

「言葉もないか。まさかそのようなぼろ布のような粗末な姿で玉座の前で膝をつくとは、思っていなかっただろうからの」

血痕と埃でまみれた夜着姿の阿樽を、祖王がせせら笑う。絶望に冷まされていた頭に血気が甦り、阿樽は罵声を飛ばした。

「鬼畜め！ さつさとその台座から降りろ……！ 貴様に似あいなのは、薄汚い豚小屋だ……！」

「口をお慎みください」

進み出た列氏が、剣先を阿樽の喉元に向けた。

「新王の温情で貴方様の首は繋がっておられるのですよ。まだわかっただらうしやらないようですね」

「黙れ、売国奴が！！ この戒めを解いたら、真つ先にお前から殺してやる……！」

「勢いは立派ですがな。しかしもうここに貴方の味方はいないのですよ、阿樽様。あるのは物言わぬ屍ばかりです。あの者たちのように」

玉座の脇に置かれた布がかかった台を列氏が指さす。近くにいた兵士が、赤黒い染みがついたその覆いを取り払った。

「あ……っ」

衝撃的な光景に阿搏は瞬きを忘れた。

台座の上に載っていたのは 兄の側近たちの生首だった。切断された切り口は目をそむけたくなるほど粗雑で、残忍だった。死の瞬間を留めた彼らの顔にはどれも苦悶の表情が張り付いており、それらは壮絶な最期を物語っていた。

「理解していただけましたかな？ もう以前の西嶮は滅びたのです」

皇帝を守るはずの者たちの変わり果てた姿に、阿搏は愕然とした。「そして貴方と、もう一つの首を最後に、新しく再生されるのですよ」

列氏の合図で、玉座の後ろを塞いでいる青の帳が上がった。謁見の間の裏には王の寝所がある。その奥から出て来たのは、

「兄上……！」

連行してきた若い男を兵士が祖王の足元へ引きずり倒す。阿搏の頭の中が一瞬真っ白に染まった。

「阿搏……」

自分と同じように後ろ手で縛られた状態で、吉京が弱弱しく顔をあげた。血の気を完全に失った蒼白顔に、阿搏は兄の異変を悟った。「兄上、お身体の具合が……！ ちくしょう、早く薬を……！ 縄を解きやがれッ！」

縄を引き千切ろうと阿搏はもがいた。吉京は心臓に病を抱えているのだ。大きな発作が起きれば命に関わる。吉京の顔色を見ればその危険が迫っていることは一目瞭然だった。

「こんな状況下でも兄上を思いやるとは、美しき兄弟愛ですな阿搏殿下。ご心配なさらなくても、陛下にはすぐに楽になって頂けますよ」

巨大な太刀を持った大柄な兵士が黒い軍勢の中から歩み出た。

曲線を描く銀色の刃が鈍く光る。重量感のある大剣の先が青白い兄の顔の傍に突き立てられた。

「やめろッ!!」

立ち上がるうとした阿搏を祖の兵が押さえつける。無理やり床に沈められた時、祖王の手が動いた。

「よい、離してやれ。腹からとのこれが最後の逢瀬なれば、つもる話もあるじやろう。近うへ寄せてやれ、しばしの時間をやろうぞ」  
大太刀を持つ巨漢が吉京の背を掴み、玉座の下へ引きずり下ろした。

「あにうえっ！」

青い毛氈の上を膝でにじり寄り、阿搏は蛾のような色をした兄の顔を覗き込んだ。

「阿搏……無事か」

「オレのことなど……！ 兄上、苦しいのですか！？ ちくしよ  
う、発作がいま起きたりしたら！」

途切れ途切れ、苦しげに息をもらす吉京の姿に、阿搏は唇を噛んだ。己の不甲斐なさを痛感する。どんなことがあっても守り抜くと決めた人が目の前で苦しんでいるのに、背中をさすってやることも出来ないなんて。

両手さえ自由になれば。

だが力づくで解けるほどやわな封じではない。石牢で淋苔という少女から渡された簪も帯の中に差し込んだままだ。

「兄上、必ず、必ずお助けします。この命に代えてでも」

今自分に出来ることを必死に考えながら、阿搏はこの世でたった一人の肉親である兄を励ます。だが顔を床につけたまま、吉京は首を横に振るのだった。

「……兄上？」

「もう私に政をするのは無理なのだ……阿搏。だから、私を救おうなどとは考えるな」

虫の鳴くように細く消えていきそうな声が紡いだ言葉に、阿搏は

目を剥いた。

「何を……どうして諦めるのです……！　まだ、まだ我が国は終わ  
ったわけではありません」

「そうでは……ない……」

ぎこちなく、吉京がその細い面を持ち上げた。

「私は……この身体だ。自分の城が侵略されたというのに、抵抗一  
つ……出来ない。情けないと思わないか……今ほど私は、この身の  
脆弱さを呪ったことはないよ。このような事態を招いたのは……私  
の所為だ。私の罪だ」

阿搏は耳を疑った。

病弱な身体であっても、この人が今まで弱音を吐いたことがあっ  
ただろうか。どんな困苦にあっても、常に冷静さを失わず凜然と立  
ち向かう、見識を備えた王ではなかったか。

「このまま捨て置かれ……てもじきに私の命は尽きるだろう。そう  
いう宿命なのだ……だからもう惜しむことは……ない。この命で、  
出来ることを、最後にしようと思っ……思う」

「最後？　なんです、最後って……」  
兄を叱咤しようとして、自分の声が震えているのに阿搏は気づい  
た。

この命で出来ること　吉京はすべてが自分の責任だと、ここで  
果てるつもりなのだ。

激しい動揺が阿搏を襲った。そんな弟に、吉京がふわりと微笑ん  
だ。

「どうして……どうして笑うのです、そんな」

迷いも恐れもない、無垢な顔で　それはすべてを受け入れる覚  
悟を決めた者の顔であった。

「阿搏……お前には苦勞をかけ通しだったな」

「兄上」

「お前はいつも、動けぬ私のために碎身してくれた……。誰になん  
と言われようと、私の盾となってくれた」

「兄上、やめてください……！」

こみあげるものを阿搏は奥歯を噛みしめて懸命に耐えた。歯がちかちと鳴っている。こんな時こそ毅然としていなければならぬのに、顔が歪んでいく。

「阿搏」

四面楚歌の絶望の中で、吉京の声がたった一つ、子守唄のように優しく響く。

「ありがとう……こんな私の支えになってくれて。お前は私の影でいたつもりだっただろうが、私にとっては……光だったよ。お前は王にふさわしい男だ。生き延びてこの国を、民を守れ。お前なら……きつと出来る」

聞きたくない、そんな言葉。

「……いやだ、出来ません」両膝を見下ろして、阿搏はいやだと繰り返した。

「オレには無理だ。貴方がいなければ……っ」

「阿搏、愁は生きている」

吉京が声を細め囁いた。それは先王の代より教育顧問を務め、阿搏にもっとも近い存在である家臣の名だった。

「信頼できる者たちとどこかへ落ち延びたはずだ……おそらく、お前を救う算段をしているだろう。もしもの時はそうしろ、と云っている。それに……お前にはかけがえのない友がいる。彼らがきつと導いてくれる。信じる、絆を……そして己を」

「ですが兄上……っ！」

納得するものか。

阿搏はただただ首を横に振り続ける。だがさすがのように見上げて、兄の瞳は小さな揺らぎ一つ浮かべてはくれない。その目はこちらを見ていても、意識は自分の追いつけない遠い場所に行ってしまうようだった。もはや自分の声は届かないのだと悟った瞬間、

途方もない虚しさが阿搏の胸にこみ上げた。

「永の別れは済んだかの」

玉座からの声を振り返り、吉京が静かな口調で告げた。

「……北の王よ、いまわに一つだけ我が願いを聞かれよ」

「ほう、命乞いか？」

「我が身で民らが救われるのならば、喜んで差し出そう。この期に及んで迷いなどありはせぬ……。だがこれ以上、無駄な血を流したくはない。私の首と引き換えに、阿搏の命を」

「ははははは！」祖王が哄笑した。

「何もかも呈してまで弟を救いたいか！ 皇太子には我が眷属が大分世話になったからのう。その礼にふさわしい制裁を同朋らは熱望しておる。だが、そうじゃの。貴方きほうがわしの足もとへ跪いて乞うというのであれば、慈悲を与えようぞ」

病魔にむしばまれた細い体がゆらりと立ち上がる。阿搏は瞠目した。

「あにうえっ………！」

よるめきながら吉京は玉座への階を上っていく。そして金色で飾り立てた不浄者の足下に跪いた。

「よい眺めじゃの。これが大陸最強と謳われた大国の王の末路か。憐れなことよ」

下卑た愉悦を浮かべ、祖王は吉京の衣の裾を踏みつけた。

「貴様——っ！！」

手縄を引きちぎらんばかりに激昂した阿搏に、兵が飛びかかる。容赦なく床上に叩きつけられ、呻きが漏れた。

畜生……畜生……っ！

抗う体は抑え込まれ、自由なのはこの目とこの声だけ。だが立ち上がらなければいけない。大切な人のために。

この身体も、この命も、そのために存在するのだ

兄のもとへ、曲刀を持った男が近づいていく。阿搏の目の前で、残刻にも時はゆっくりと、確実に進もうとしていた。

「やめる……兄上……っ」

吉京は振り返らない。己の運命を受け入れた背中へ、濁りのない水鏡のように清らかに見えた。

「他に何か言い残すことがありかな？ 西嶮最後の王よ」

裁定を握る祖王の手が脇息から浮き上がる。

「……私の命をたてば、あなたの望みは果たされるのだろう」 従容たる声色で、吉京が顔をあげた。

「だが、覚えておかれよ 掠奪と破壊では、王の証は得られぬ。

この国の真なる統治者とはなれぬ。我々の歴史は滅びようと、この誇り高き地はあなたを受け入れはしない」

阿搏に聞かせたのとは打って変わった、張りのある声が広間に朗々と響いた。

「その意味がわかるだろう、阿搏」

振り返った吉京は、これ以上にないくらい穏やかな微笑みを称えていた。

「お前ならば。……忘れるな、お前は一人ではない」

いつでも、そばにいるよ。

幼い頃枕もとで母が弾いてくれた、琴の音色が阿搏の耳元で甦った。

何もかもが傍にあった、あの頃。

優しい母の微笑みと、隣りで眠る兄のぬくもり。逞しい父の手のひら。

美しく儂い旋律は、幸福の象徴であった。

一本、また一本と琴線を失っても、その調べはまだ生き続けている。今日この日まで――

「あに……っえ」

愛しむような眼差しが離れていった刹那、吐息のようにかすかな、最後の音が消えた。

「首をはねよ」

黒髭の間から祖王が宣告した。

「いや……だ。あにっえ」

捨てられた子供のように阿樽は喘いだ。両目が熱くなり視界がぼやけていく。

こんなに。

こんなに近くにいるのに。どうして、届いてはくれない

黒兵らが祖王の前に大きな幕を張る。阿樽に背を向けた吉京が首を垂れ、男が大鎌のような剣を振り上げた。

「やめる……！ やめるおーっ！」

ザンッ！

渾身の力を振り絞って叫んだ阿樽の目の前で、唸りを上げる刃は無情にも振り下ろされた。

掲げられた幕に血しぶきが飛び散る。吉京の体が左に傾ぎ、かすかな音とともに倒れた。

「あ……、ああ……」

鮮血の花の散った帳を払い、祖王が立ち上がる。血だまりに歩み寄り、中から吉京の首を拾い上げた。

『そばにいるよ』

「うあああああああ…… ああっ!!」

己の半身を失ったかのような痛みが阿樽を切り裂いた。

兄の笑顔が、声が、思い出が、走馬燈のように目の前を通り過ぎていく。

横たわる吉京の身体は、もう動かない。

流れ出る液体が、青い毛氈を汚していく。

歓声が広間を埋め尽くした。

【幕間】風の褥「前篇」(前書き)

「風の褥しとね」と読みます。まだ邦昌が梓宮にいた頃、彼が何を思い感じていたのか：それを描いたお話です。

【幕間】風の禱「前篇」

真紅に染まっっていく草原を駆け抜ける影があった。

疾風のごとく草穂を薙ぎ、粲然と燃える夕暉を割くように横切っ  
ていく。

緩みなく、迷いなく、ただひたすらに。

もっと速く。

切り開かれた風の咆哮が長く大きく伸びていく。それでも足りな  
い 二本の足でさらに強く大地を蹴った。

もっと、もっと速く。

大気に溶けて跡形もなく消え去るまで。

果てしなく自由な、

風になるまで

\* \* \* \*

「せいっー！」

夜明けの滲む空を、激しくぶつかり合う金属音が突き抜ける。

二つの白刃が重なり合っては離れ、角度を変えてまたぶつかり合

う。鈍い煌めきが、曙光に薄められていく夜の名残の中で弾けた。  
「やあつ！」

気概に満ちた一喝とともに、一際力強い一刃が振り下ろされた。焦りに押されたその一閃を、青年は上身をしなやかに後ろに傾いで交わす。唇が、かすかな笑みを含んだ。

「……はっ！」

髪を結う朱紐が背で翻る。

空を切って怯んだ相手の剣を俊敏に打ち返し狙いを定めると、青年は相手の懐めがけて飛び込んだ。

「そこまで！！」

終了を告げる声に、邦昌は相手の顎ぎりぎりに突きつけていた剣先を引いた。懐を離れ、軽く後方へ跳躍する。

石像のように固まっていた兵士が、へなへなとその場に座り込んだ。  
「やれやれ、情けないな」

抜け殻のように放心しているその様を、制止の声を投げた男が冷やかに見下ろす。

「精強精鋭を誇る絳乎軍の武人ともあろう者がこのざまか。殺気をもたない相手に斬りこまれて腰を抜かしているようでは、実戦で使い物にならない。例え武科挙を上位及第したとて、盾にもなれぬ兵なぞ我が軍には必要ない。やる気がないなら去ね」

「せ、西准将、私は……！」

「言い訳は聞かぬ。未遂とはいえ脱走を企てたのは紛れもない事実。武人として天子の御為に身命を投げ打つ不退転の覚悟がないのなら、今すぐ兵舎を出て行け。目障りだ」

凍てつくほどに厳しいその声に、言葉を飲み込んで兵士がびくりと震え上がった。男はさらに追い討ちをかける。

「わかつてると思うが、脱走は沈河ちんがの刑に値する大罪だ。本来ならばこのようなことは許されないが、今なら見逃してやる。誅易将

軍に見つからなかっただけ幸運だと思え。さあ、俺の気が変わらないうちにさっさと行け。これ以上ぐずぐずする気なら 処断を下す」

男の手が腰に佩いた大太刀に伸びる。鞘からわずかに覗いた刀身に、兵士は腰を抜かしたまま飛び上がった。

「ひ、ひいつ！ ももも申し訳ありませんーっ！！」

己の剣を放り出し、百足のように手足をばたばたと動かしながら兵士は必死に逃げの体勢になる。そして慌てて立ち上がると、兵舎のある武翔殿とは逆方向に向かって転がるように走り去っていった。

「おー、こわ。さすが鬼の副将軍。これで今年の武進士の脱落、三人目ですな」

無様な後姿を見送りながら、邦昌はひゅっつと短く口笛を吹いた。「まったくゆゆしきことだな。最精鋭を誇る禁軍にあんな軟弱者めらがいようとは！ 根性も糞もねえ！ しかもなんだあの無様な逃げ方は！ 槍でも放てば一撃で死ぬぞ。せめて最後くらい、訓練成果を見せやがれっ」

途中から人が変わったような激越ぶりで、蓉洵が罵声を叩きつける。それに驚いたか見事に転倒しつつ、たった七日で脱走を企てた兵士は明け闇の中に消えて行った。

「口調、変わってますよ。あれらが噂の“斡旋組”ってやつですか？」

普段は見事に覆い隠している蓉洵の裏の顔に邦昌は声を殺して笑いつつ、邦昌は兵士が取り落としつつあった太刀を拾い上げた。

「ああ。金を積んでの裏口入軍たあい度胸だぜ。入るとこまではうまくやったんだろうが、武器も満足に持てずに上官吏との友誼だけ深めようなんざ、愚者の極み！ 身の程知らずで浅ましい魂胆だ。無能な輩を誰が出世させるか！ 軍は社交場じゃねえんだ！ そういふ賄賂の通り道があるのも問題だがなっ」

邦昌が投げてよこした太刀をひったくるように掴み、蓉洵が力任せにぶんと振る。白みゆく月が映る空に剣の唸りが抜けた。

「だったら皇帝陛下に建言しては？　こんな風に逃げるのを待つて叩くよりも手っ取り早いですよ」

武官や文官になるためには、その登竜門である科擧を通らねばならない。だが近年、科擧を取り仕切る礼部内で不正が横行しているという噂があつた。金品を受け取り落第者を及第させる不届きな官吏がいるというのだ。

「おいおい」

俗めいた笑みが蓉洵の口元に浮き上がる。

「きれいに片付いちまつたら、俺の愉しみがなくなるだろう？　それに人手を頼つてばかりの生ぬるい奴は大っ嫌いでね。自分の手で潰していかないと気が済まん」

「うわー悪趣味」

ははは、と蓉洵が笑う。

禁軍副將軍そして兵部侍郎という高官の仮面の下の屈折ぶりに、邦昌は思わず拍手を送る。その不正合格者を確実に一人ずつ潰していくのが近頃の蓉洵の密かな楽しみだった。品行方正を気取っているせいで溜まつた鬱憤を、ここぞとばかりに晴らしているのだ。

「西副將軍、あなたこそ立派な皇帝の“影”になれますよ。オレなんかよりずっとふさわしい、ね」

「笑止。残念ながら俺は表舞台の方が似合う性質でね。見てわかるだろう。それに三年も一人の女の尻を追いかけ回して、今だ手に入られぬような情けない皇帝の側仕えはご免だな。しかも飄々としおつて食えぬし、生意気ときた。お前さんを尊敬するよ。しかしどうして武官にならずに皇帝の影なんぞになった？　誅易將軍が欲しがっているのは知っているだろう。お前の力量ならすぐにも上に昇れる」

どうだ、と蓉洵が問いかけるのに、邦昌は天を仰いだ。

「……残念ながら、オレは日陰の仕事が向いてるんですよ。そういう宿命なんです」

朝靄をかき分けて、朝陽が地上へと降り注ぐ。目を細め、邦昌は

散光を受け止めた。

「その年でもう決めつけるのか？ 諦めるのはまだ早いぞ。どんな道にもいつかは陽が差すんだ」

どんな道も

邦昌はふっと小さく笑った。

「まあ、気が向いたらいつでも相談に乗るぞ。今朝は助かった、礼を言っ」

抜き身の太刀を肩に担ぎ、蓉洵は秋波を送るがごとく片目を瞑って見せた。家柄、名声、実力、ともに兼ね備えたこの若き副将軍目当てに「幹旋」を使う武官志望者が実に多いことを、邦昌は裏事情で知っている。

「いいえ。いつでも、どうぞ」

髪を結う朱紐が朝風に浮き上がる。

兵舎に戻る蓉洵の後姿を見送り、邦昌はいつもの場所へと駆け出した。

統王家の歴代皇帝が眠る廟は、梓宮しきゆうの東内朝にある。常緑樹の林の奥にあるその場所は、王族しか立ち入れぬ禁苑だ。

本来ならば城の食客など近付くことすらできない。だがその神聖な場所に毎朝参るのが、邦昌の日課だった。

もちろん門兵のいる入口から入ることはできない。だが生い茂る樹木がうまく死角を作ってくれる東内朝に入り込むのは、案外容易であった。

「よ、つと」

大木の枝を渡りつぎ、邦昌は廟苑へと降り立った。

早朝の閑寂の中、英霊を祀る白亜の堂はいつものように静かに並

んでいた。ここに来るのは人気のない早朝と決めていた。厳しい寒さが和らぎ、ようやく緑の芽吹き始めた地面を邦昌は歩きだす。

王たちの霊殿を囲む庭はまだ冬枯れの景色だ。だが春になればそれは美しい情景になる。天上の風景を想像して造られたと、城の誰かが言っていた。

「お早うございます、……陛下」

中心部に建つ、まだ新しい霊廟の前で邦昌は膝を折った。

深く頭を垂れて一礼し、顔を上げる。中央に安置された壮麗な装飾の石棺を見上げ、邦昌は微笑した。

劉晋清輝、諡号は昇公。

賢君と謳われた統の前皇帝にして、現皇帝・劉閃長恭の父君。それがこの廟に眠る者の名だ。

そして邦昌にとっては、命の恩人とも言える人物であった。

「今日は少し遅くなりました。ちよつと予定外の仕事がありました。石棺に向かつて話しかける。答えはもらえぬと知りながら。」

「……夜明けの時刻が少しずつ早くなってきましたね。もうすぐまた……春がきます」

新しい始まりが。

暖かく優しい風が吹く時が。

そして

「貴方がいなくなつてから、三度目の春です」

小さな希望が芽生えた季節が

都から遠く離れた村で邦昌は育った。

人世から切り離されたかのような辺境の小さな集落で、痩せた土地とわずかな家畜の恩恵で細々と命をつないでいる、そんな貧しい場所だった。

腹がいっぱいになった日は一日もなかった。だが自分や小さな妹を必死で育ててくれる両親を前に、そんなことを言えるはずがない。とにかく懸命に家族四人で生きてきた。

だが邦昌が十一の時、大きな干ばつで村のある地方一帯が飢饉に陥った。

貯えはわずかしがなく、年貢どころか明日の食糧さえも危うい状況だった。一人、また一人と村人が死に、皆痩せ細っていく。衰弱して立ち上がれなくなった父親のかわりに邦昌は乾いてひび割れた畑を耕した。だが無駄な抵抗だった。まるで墓穴でも掘っているような虚しい抵抗であった。

ところがある日、村に役人たちがやってきた。

年貢の取り立てだ、このまま入れたら皆殺しにされてしまう。鋤を投げ捨て邦昌は馬に乗った役人たちの前に飛び出して叫んだ。

『僕を売ってください。ここにはもう、あげられるものは何もありません。僕を売ってお金にしてください。殺してばらばらにしたってかまいません。だから皆を殺さないで』

お願いします。お願いします。

皆を、村を守らなければ。空腹でふらつくのをこらえて、ぶるぶる震えながら懇願し続けた。必死だった。

やがて先頭の白馬から若い男が降り、邦昌の前に立った。恐怖が全身に降り注いだ。殺されると思った。だが男はしゃがみ込み、邦昌と視線を同じにして微笑んだのだ。

『安心しろ。我々はお前たちから奪うために来たのではない』

今でも鮮明に思い出せる、切れ長の涼やかな瞳。強く憧れを抱いた、精悍な風貌。

『よく頑張ったな、強い心だ』

大きな手が邦昌の頭を撫でた。

『人を救おうという気持ちは尊いものだ。だが守りたいものがあるならば、どんな絶望にも耐え、強くならねばならん。皆が大切か？』  
男の問いかけに、力いっぱい邦昌は頷いた。

『では必死に生きる。誰にも負けぬ強さを持てるよう。さあ、これを食べ』

そう言っつて男が差し出したのは大きな桃だった。今までに見たことのないくらい見事な。

受け取った途端、目から涙が溢れた。

その感触が、何よりも尊く、そして重く感じた。

今自分が「生きているのだ」と邦昌は初めて実感した。

「生きたい」そう強く願った。

苦しみに疲弊し何もかも諦めかけていた心に、小さな「希望」<sup>ひかり</sup>が芽生えたのだった。

「……あの時貴方がくださった希望を俺は忘れません」

救援物資を運んできた皇帝直属の救済軍のおかげで村は救われた。その後荒地でも育つ作物栽培の指南もあつて、以前よりは暮らしは豊かになった。

「同じ官吏になればいつか、貴方に礼を言う機会もあるだろうと……都へ来た時はそのくらいの気持ちだったんだ。でもまさか、あの人が皇帝陛下だったとは想定外でしたよ」

武科拳を突破し、彼と再会したのは玉座の前だった。叙任式、皇帝の前に跪座し「面をあげよ」と声がかけられた直後「あっ」と声を発して青くなった邦昌に、「あの時の官吏」はわずかに目を見張った。

『あの村の子か。桃は美味かったか？』

「貴方は覚えていてくれましたね……あんな些細なことを。うれし

かった」

だから、この人のために一生を捧げようと、力の限りこの人のために戦おうと　そう誓った。

「でも、俺は……」

突如清らかな思い出に覆いかぶさってきた黒い靄に、邦昌は唇を噛んだ。

希望を掴んだはずの己の両手を見る。血濡れた剣を握る幻影が浮かび上がり、彼の人の声は遠のいていく。

「俺は……貴方を欺いた、ただの裏切り者だ」

夜の残像を払いのけ、今日が始まる。

罪跡と悔悟で汚れた昨日を残し、

そしてまた新たな後悔を刻むために

「邦昌、来たのかい？」

蠟燭の明かりの中に浮かび上がる臙脂の緞帳を邦昌は開いた。

「待っていたよ。首尾はどうだい？」

羽根扇をゆるやかに動かしながら、長椅子の上から中年の女が尋ねてくる。肉塊のように肥えた身体の上にある、弛んだ女の顔を邦昌は睨み据えた。

「……特に。あんたののぞむような変化はない。うまく馴染んでるわ」

血のように赤い紅を塗った、女の濡れた唇が弓形に歪んだ。

「そうかい。上出来だよ。まさか梓宮（すしのみや）のやつらも、お前が謀反者だとは思わないだろうねえ」

けらけらと笑う白粉にまみれた醜い貌を睨んだまま、邦昌は拳を握りしめた。

「……今日呼んだ理由はなんだ。さつさと用件を言え」

都から数里離れた街の商家を、女は仮住まいとして所有している。いつものように白高の都で伝令と密会し、ここへ来るようにと邦昌は言われたのだった。

「おや、冷たいねえ。母親ならば、時々は子供の顔を見たいと思うもんだらう。ねえ、邦昌。お前は私の実の息子なんだから」

言うな。

邦昌の目の奥で過去のさまざまな出来事が火花のように弾けた。

父と母と妹と、貧しくとも幸せであった日々と、それが突如として壊れた日のことが。

すべて壊されたのだ　この女、朱麗しゅれいに。

「ふざけるな。あんたはオレと妹を捨てた……！　母親なんかじゃない……！」

身体中で渦巻く怒りが声を震わせる。獣が見せるような本能的な怒りが邦昌の中に沸き起こった。

「ちゃんと迎えに言っただろう。我が子だからねえ」邦昌の怒気をあおりたてるように朱麗の笑い声が高く、大きく響き渡る。

「そして母のために働かせてやっているだろう」

「お前は！」

燭台の炎の影が薄暗い部屋の中で揺れた。両拳の中では収まりきれない激しい感情が邦昌を凌駕する。

「貴様は淋茗を、妹を無理矢理奪った！　そしてあの子を人質にオレ脅したんだっ……！」

育ててくれた両親が本当の親ではないことを邦昌は知っていた。

六歳の時に二つの妹と見知らぬ場所に捨て置かれたことも、覚え

ている。歩けなくなった妹を背負い、山の中を彷徨った。木の皮や草を食べて飢えをしのいで何日も。そして力尽き倒れていたところを救ってくれたのが両親だった。

自分がどこから来て何者なのか、邦昌にはよくわかっていなかった。大きな家に住んでいたが、部屋は物置のようなどころだったし、食事も粗末だった。親だという者からも優しくされた記憶はなく、まだ小さな妹を抱えていつも家の隅で隠れるようにして座っていた。家とは、親とは、そういう無機質なものだと思っていた。守ってくれるのではなく、冷めた目で傍観しているだけのものだ。

だが夫婦は違っていた。貧しくはあっても精一杯愛情を注いでくれた。何も覚えていない妹は本当の両親だと慕い、自分もそう思っていた。

「オレと淋茗の父さんと母さんはあの人たちだけだ……！ お前の気紛れで捨てられたオレたちを育ててくれた！ お前がオレたちに何をしてくれた？ 何もかも壊しにきただけだろう！」

何もなくとも、苦しい生活だとも、幸せだった。愛してくれる人がいたから。

血の繋がりになど関係ないと、彼らは教えてくれた。人にとって、心が繋がっていることが一番強い絆なのだと。

だが十六の時、突然朱麗が現れ絆は断ち切られてしまった。

母親だと名乗るこの女は、わずかな謝礼金を父母に渡し十一になったばかりの淋茗を連れ去った。他国の王への貢ぎ物にするために

村を焼き討ちにすると脅され、父母は抵抗出来なかった。

そして邦昌も取引を迫られた。

『妹が大切かい？ 父と母が大切かい？ じゃああたしの言うことをお聞き。うまくいったら、妹を解放してやるよ』

「それが“母親”だと？ ふざけるな！！ 自分の地位と名誉のた

めにオレたちを犠牲にするつもりなんだろう！ その腐り切った欲望のために……！」

十七の年、武科拳を受け宮城に上がった。それが朱麗の目論見の一つだった。

『どうして武官にならなかった？』

蓉洵や他の者たちは口を揃えて言う。その度に、何故だと自分自身に問いたくなる。

「おだまりよ、邦昌。淋茗もお前も、あたしのおかげで生き延びられたんだろう。あの粗末な村が生き残れているのも、あたしの援助のおかげじゃないか。恩を返してもらうのは当たり前だろう？」

それにその働きが功を奏せば、お前たちの故郷が甦るんだよ。忘れるんじゃないよ、お前たちの母国は統じやない。偉大なる蔣炎様の御座す祖の国なのだから。すべては祖王様の御為さ」

朱麗が仕える祖王の密偵として統王に取り入り、内情を探ること。それが邦昌に与えられた命令だった。捲土重来を目論む祖王の手から妹を救うため、そして父母のため、それが邦昌の選んだ道。己の志操を捨てとらねばならなかった唯一の方法だった。

「祖王様はあたしに約束してくれたんだよ。統から我が領地、廟を奪回してくださいと。あたしを虐げ追放したあの忌々しい場所を、あたしのものにしていいってね。素晴らしいだろう！」

巨体をのけ反らせ、あはははと朱麗が狂ったように嗤う。脇台には白磁の酒壺が何本も置かれている。随分と深酒をしているのだろう。邦昌からの情報と淋茗の献上で、祖王より巨額を巻き上げ華奢な生活を送る朱麗の日常は、墮落し切ったものになっていた。

暮蛙のように長椅子でひっくり返る姿には、かつて廟国の公主だった面影も気品もない。

邦昌の目には俗悪で醜怪な欲の亡者にしか見えなかった。

「喜びな、邦昌。我が王が三国を制したら、あたしの財産が戻ってきたら、新しい国を造りあんたは王になれるんだよ。そうすれば妹を呼び戻し幸せに暮らせる。だからいいかい、このまま梓宮でう

まくやるんだよ……。もうすぐ計画は実行される。それまでよく見張っておいで。劉王と、あたしのかわいい姪こむすぶをね」

「……仕事はやるさ。だがお前のためじゃない。オレの家族のためだ……！」

憎悪を込めて吐き捨て、邦昌は踵を返した。そのまま女の高笑いで汚染された空気を振り切り部屋を出る。

「旦那、そんな短気じゃあ身が持たねえよ」

回廊の柱に寄り掛かり短刀の先で爪の垢を掘っていた番兵が、邦昌を見て嫌味に笑った。石廊にたむろしている他の男たちも、へへとうすら笑う。

山賊崩れの落戸どもが屋敷では番兵として雇われていた。やつらはすべて祖の残党だ。母国の崩壊後は張餓一族と名乗る賊徒となり、各地の村や町で略奪や殺戮を行ってきた極悪非道の一団だ。忠誠心などまるでなく、金次第でどうにでも転がる卑小な連中だった。

「黙れ、下賤が」

柱に凭れる男から短刀をもぎ取り、邦昌は左袖を捲り躊躇いなく自分の腕を斬り付けた。

石床に血がぱたりと滴り落ちる。周囲がおお、とざわめいた。

「おお、怖え怖え」

ヒヒヒと男が引きつり笑う。

血のついた刃を回廊の向こうに広がる中苑に投げ捨て、邦昌は歩きだした。

目覚めを繰り返す大地、生まれ変わる風。

時は移ろい行き、月の形も、黄昏の色も 何一つ同じものはない。

なのに、どうして、同じなのだ。

忘れえぬ記憶と

この鮮やかな憎悪、

そして、広がり続ける心の空隙は

## 【幕間】風の禱「後篇」

「邦昌、いるか」

呼び声に、邦昌は休を取っていた木の上で目を開いた。

枝葉のしなりをばねに、くるりと宙で一回転し地表へ降りる。待ち構えていた主の足元で膝を折り、彼の脊先に留めた視線をくつと持ち上げた。

「居眠りしていたわけでもなさそうだな」

見上げた先で、精悍な美貌を持つ男が切れ長の黒い双眸を細めた。

劉閃長恭、統の若き皇帝 親しい者は彼を劉王と呼ぶ。

「北の都からの風に呼ばれまして。……陛下にとって損にはならぬかと」

に、と邦昌は口の端を引き上げてみせた。

”北の都” それはかつて大陸の北部一帯の霸権を握っていた夷国を指す言葉。先の戦いで敗北し、統を含む三国の監視下にある祖の動きを探るのが、劉王の影としての邦昌の役目 己の背任を隠匿するのには何よりも相応しい任務だった。

「盛大な歓迎だったか？」

「それほどでも」と首を揺すって袍の袖をまくり、邦昌は未だ血の滲む生々しい傷跡を劉王に示した。

「血……？」

劉王の背後から遠巻きに様子を眺めていた少女が、ぼつりと呟いた。年の頃は邦昌と同じ、二十ほど。澄んだ大きな瞳に紅の薔薇の蕾のような唇、輝くつややかな長い黒髪を持つ美しい少女だ。はっ

とその目を見開き邦昌の元へと駆け寄ると、少女は傷ついた腕を取り上げた。

「どうしたというのですか、これは!」

「ああ、大丈夫さ、こんなの舐めときゃ」

「治りません!」

隠すように袖を下ろしかけた邦昌の腕を、少女は素早く掴んで声を張り上げた。可憐な顔立ちとは裏腹のその剣幕に邦昌は面食らう。

「劉王! 邦昌に今度は何をさせてきたのです!」

「あんな、瑚蝶……!」

「あなたは黙ってて!」

至極の宝玉のようだと思われ、城で寝るそやされている美姫にきつと睨まれ、邦昌は閉口した。

”こちよう”

その名を口にするたび、小さな棘がちくりと胸に突き刺さる。己の目的のための犠牲者となるその名前を

「……誰ぞやの余計事が出たな」

劉王にひとしきり文句を浴びせて、瑚蝶は邦昌の腕をぐいと引いた。

「私の部屋で手当てをします。逃がしませんわよ」

振り払う間もなく、ずるずると引つ張られていく。

「え、ちよ……!」

劉王を振り返るが、声を押し殺しながら笑っている。助ける気はないらしいと諦め、邦昌は黙って瑚蝶の居室へと連行されていった。

\* \* \*

「いってえっつ!」

寝台の上で邦昌は飛び上がった。引つ込めようとしたその腕をぐいと引き寄せて、瑚蝶が呆れ顔で白い包帯を巻いていく。

「そのくらいで何を。皇帝の隠密を務める男が」

眉を寄せ、邦昌はぐつと息を呑んだ。

気を抜いた途端、痛みが一気に押し寄せた。思ったよりも深く傷つけていたのだろう。間抜けさに自嘲して、手当に専心している瑚蝶を見た。

「……あのな、念のため言っておくけど、これのことはオレがただしくじっただけで」

「わかっています」

「へ？」

きつぱりと頷いた瑚蝶に、邦昌は眉をひそめた。

「いいですよ、あの方に何を言っても同じことなのだから。どんな空言を言っても、咎めの言葉は返ってこない……」

瑚蝶の表情が翳る。

胸にしまっている多くの深い哀しみが儂げな美貌に浮かび上がる。

自国を失い、瑚蝶はこの城にいる。

あの女によって仕組まれたことだとも知らず。

劉王が家族を殺し国を滅ぼしたのだと憎み、心を閉ざしている。

朱麗が実の叔母であり自分を狙っていることも、

その懐から放たれた毒蛇が目の前にいることも、何も知らないで。

「……お前さんも酔狂なこった」

瑚蝶は劉王に惹かれている。強く、強く。

でもそれは禁忌だと、必死に押し殺している。今にも壊れそうな硝子の籠の中で、傷つかぬように自分を守っている。

だがこの少女の運命もまた、あの女に翻弄され汚されていくのだ。

そしてこの手が、彼女の無垢な思いを引き裂くのだ

ザアッ

歯を食いしばって邦昌は走り出した。

枯れ野を蹴散らし、沈みゆく陽に向かって疾駆する。黄昏がゆっくりと空を金朱色へ塗り変えていく。

背後に聳える梓宮の影が、足元から消える場所を目指して。

遠く、遠く、遠く　速く。

『今までと同じ平穏な暮らしが手に入れば、人びとは満足なのでしょ』

花の香りを載せた風の中で蝴蝶が言った言葉が、脳裏に流れてくる。

『でも私はどうなのです。何を与えられても望むものはもう戻ってこない！　いつまで苦しめばいいの？　なぜ私だけ？　なぜこんなに空虚な気持ちでいっぱいなのです！』

はっとした蝴蝶の顔に、自分が重なった。

同じ、同じなのだ。

空虚さにとりつかれているのは。

自分が叫んだのかとろたえた。激しく揺さぶられた。

知っている、この苦しみを。なのに

これ以上奪おうとしている。

遠くの雲の隙間から伸びる赤光の階が、槍のように大地に突き刺さり地平線を燃え上がらせる。目を焼かれそうなほど激しく紅く、まるで戦火のように。その中を邦昌はひたすら走り続けた。逃げてしまいたい。この身体に染みついた裏切りのにおいが消えるまで。

汗ばんだ額を夕風がさらう。

短く切れる息を吐き出しながら、錆びたように黒ずんでいく天を仰いだ。

なぜ……！

こんな姿で生きなければならない？

泣きじゃくる妹の姿が見える。自分を呼ぶ声が聞こえる。

助けたい。救ってやりたい。でも

何かを得るためには、なぜ何かを失わねばならぬのか。

「……………」

まだ短い草の中に邦昌は崩れるように倒れ込んだ。

荒い呼吸を繰り返すたびに、冷たい土の匂いが鼻腔を満たす。

『強くなれ。大切なものを守れるように』

そうありたかった。

清く真つ直ぐな心で先王あのかたの坐す場所を見上げたかった。

もう今は、その言葉を懐かしむ資格さえ自分にはない。  
裏切るために側にいるのだから。

何かを守れても、かわりに多くのものを傷つけてしまう。

本当はもう、あの人の眠る場所に行くことさえ 浅ましいこと  
なのだ。

風になりたい。

自由な風に

なにもかもなくなればいい。

この身体も。絡み合う思いも。

目を閉じて、胎児のように邦昌は身体を丸めて抱え込んだ。

夜が明け、朝がくる。

闇から光へと世界が導かれていく。

昨日の傷跡は乾いて黒ずみ、

再び赤い傷跡が増えていく

霧のように柔らかな朝陽が静寂の庭院に降り注ぐ。膝を折り邦昌  
は白い墓碑を見上げた。

数え切れないくらいこうして眺め、語りかけてきた。

だが本当は間違っていることもわかっていて。葛藤を抱えて毎朝この場所へ来ていた。

「……陛下」

声は、聞こえない。何も響いては来ない。

もうこれで、ここに来るのは最後にすべきかもしれない。だが大きな迷いが邦昌にのしかかる。

この場所は小さな安らぎであり、本当の自分でいられる唯一の場所だった。本当は失いたくはない。でも

包帯布の巻かれた己の腕を邦昌は見下ろした。

「ほう、先客がいたか」

涼やかな声音に、邦昌は背後を振り返った。

霊廟への小道の始まりから若い男が歩いてくる。紫の地に銀系の龍が走る美しい袍を纏った高貴な姿に、邦昌は目を細めた。

「……劉王」

しまった、と邦昌は後悔した。

「まさかお前がいるとは思わなかった」

切れ長の双眸がふっと笑みを含む。香の匂いがふわりと漂った。

「……申し訳ありません、王族しか許されぬ場所に不法に侵入を。言い訳はしません」

小さく息をつき、邦昌は両手を上げた。

劉王が時折朝議の後にここへ訪れることを邦昌は知っていた。だからいつもその前に立ち去るようにしていたのだが。

「いいさ。どうせ普段は俺しか来ない場所だ。父も目新しい顔があったほうが喜ぶだろう」

咎める気配もなくすたすたと墓前に向かい、劉王は丁寧な一礼をした。

「……極刑では？」

探るように邦昌は劉王の整った横顔を見た。

「墓荒らしに来たわけではないだろう？ ただ死者を悼みに来ただけなら、何の問題もない」

好きなだけいればいい、と言われて邦昌は呆気にとられる。

変わった人だ。

だが、似ている。顔形ではなく、物腰や声や取り巻く空気。そういった要素が劉王は昇公によく似ている。そ

「父が好きだったか？」

「え？」

劉王が邦昌を見た。

「お前は父に、思い入れがあるように見えただが。地方視察の際に会ったことがあると言っていたな」

唐突な質問に浮き上がりそうになった動揺を、邦昌は押し戻した。「……ええ、一度だけ。オレの村に救援物資を送ってくださった時に」

見透かすような劉王の目に囚われるのを避けて、邦昌は白い墓碑に視線を向けた。

「黙って玉座にいるような人ではなかったからな。常に己の眼でこの国や民を見ようとしていた」  
廟の前で劉王が膝を折った。

なぜそんな話をするのだろう。

昇公とのことはほとんど人に話したことはない。どこで耳にしたのか。

時々劉王にはすべてを覚られているのではないか、と思うことがある。本当は何もかもお見通しで、わざとそ知らぬふりをしているのではないかと。

感情の機微を決して見せてはならぬ。自らに暗示をかけ、傍らに身を置いても心は切り離してきた。

だが時折戸惑うことがある。

この若き王の中に宿る懐かしい面影が、ふいに甦る瞬間に。

「今朝は土産を持ってきましたよ、父上」

袖の下から劉王は一本の枝を取り出した。

「……それは？」

紫衣の背中越しに、劉王の手元が見えた。花の枝のようだった。だが小さな蕾がいくつつかっているだけで、供え物には貧相な一品だ。

「李花だ。父はどうしてか、蕾が一番好きでな。咲いた花の落ちるさまを見ると心が痛むなどと感傷的なことを」

くすりと笑って劉王はその枝を、そつと墓前に手向けた。

李花。

甘く軽やかな芳香が鼻先を過ぎた。あの日の記憶が戻ってくる。

「……桃をくださいました」

ぼつりと言葉がもれた。

朝風が、始まりの陽を呼び起こす。庭院を囲む木々の輪郭が、その光を受けてゆっくりと輝き出した。

「好きでした、とても……あの方が」

とても。

あの温かく大きな手が。

……変えようのない真実。これだけは、偽りの言葉で飾りたくはない。

例えこの身に流れる血が黒く濁ってしまったとしても、無様な最期をとげたとしても、きれいな結晶のまま残したい。本当の“自分”が生きた証として。

「……それでここに。また声が聞こえるのではないかと思って。でもまさか、オレのような下賤の者に陛下のお声が聞こえるわけはないです」

何を話しているのだろう。馬鹿だ。だが溢れそうになる。

「そうか？」

立ち上がり、劉王が天を仰いだ。

「では、この風に聞いてみるといい」

「……風？」

劉王追って邦昌も視線を上げた。頭上から降りる微風が前髪を揺らす。やさしくつえばむように。

「実を言うと、父の亡骸はあの墓の下にはない」

劉王が靈堂を顧みる。邦昌はわずかに目を見張った。

「あるのは遺品だけだ。焼却して遺骨は白高の丘から捲いた。都を一望できる場所に」というのが父の最期の願いだったのでな。異例のことだったが

鳥のさえずりが明け空を渡っていく。両翼を大きく広げて自由に飛び回る。

「風になりたいと、父は言っていた。この大地に吹く風となって見守り続けたいと」

人々が安らかに眠れるように、健やかに生きられるように。

「そうして望みは叶った。どこを回遊しているのかはわからないが、時々ここにも来る」

そんな気がするだけだが、と劉王は口元に薄く笑みを浮かべ、「先に戻る」と言って来た道を歩き始めた。

風に、なりたい。

自由な風に――

遠ざかる沓音を聞きながら、邦昌は空から目を離せずにいた。

陛下……。

本当にここにいるなら。目を閉じて、息を吸い込んだ。

オレの声が……聞こえますか？

吹き付けた一陣の風に、邦昌ははっと目を開いた。

四肢を通り抜け再び空へと昇って行く。

真っ直ぐに両腕を伸ばし旋廻していた鳥が、煽られて舞い上がる。天上を目指して、高く高く。

この大きな殻を突き破り、新しい世界へ向かうために。

邦昌の胸が熱くなる。

慣れない苦い味が喉の奥からこみ上げた。

今はまだ、汚れたまま生きていく。

でももし、赦される日がくるなら。

震える唇を、邦昌は噛み締めた。

その慈しみ深き風に包まれて、眠ることが出来るでしょうか。

あなたの声をもう一度

聞くことが出来るでしょうか。

やがて果てしなく澄んだ蒼穹の彼方へ、小さな鳥の影は吸い込まれていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3172a/>

---

春夢槿花

2011年9月9日16時59分発行